

# Labyrinth of the Violet

白波恵

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

貴方はどうして生きたいのですか？

貴方はどうして死にたくないのですか？

理由を教えてください

生きていく願いを見つけて

この作品は、lobotomy corporation及びlibrary of ruinaの二次創作品です

オリジナルキャラクターはもちろん、オリジナル設定が多く存在し、多少の原作改編もあります

それでもいい、と長い目で見て下さる方のみ閲覧して下さいと幸いです

ハーメルンにおける処女作ですので、まだまだ使いこなせていないので、次第にクオリティを上げていきたいです

Twitter↓@siranamiki

アカウント新しくしました

The right mistion, The fate of	72
the only mistake III	68
The right mistion, The fate of	64
the only mistake I	64
The right mistion, The fate of	58
in dubious pro reo V	58
in dubious pro reo IV	53
in dubious pro reo III	50
in dubious pro reo II	46
in dubious pro reo I	42
lobotomy corporation	
violet zero X	40
violet zero IX	36
violet zero VIII	30
violet zero VII	24
violet zero VI	20
violet zero V	17
violet zero IV	12
violet zero III	9
violet zero II	4
violet zero I	1
violet zero	

目次

the only mistake XVI	The right mistake XV	The right mistake XIV	The right mistake XIII	The right mistake XII	The right mistake XI	The right mistake X	The right mistake IX	The right mistake VIII	The right mistake VII	The right mistake VI	The right mistake V	The right mistake IV	The right mistake IV
150	144	139	132	128	121	112	106	101	97	92	85	78	78

R a i n y	R a i n y	R a i n y	R a i n y	R a i n y	W h i t e	C o n t i n u a t i o n	C o n t i n u a t i o n	C o n t i n u a t i o n	C o n t i n u a t i o n	C o n t i n u a t i o n	C o n t i n u a t i o n	C o n t i n u a t i o n	C o n t i n u a t i o n	C o n t i n u a t i o n	C o n t i n u a t i o n	V i o l e n c e	t h e	T h e	t h e	T h e	t h e	T h e	t h e	T h e	
b l u e	b l u e	b l u e	b l u e	b l u e	n o i s e	a t i o n	a t i o n	a t i o n	a t i o n	a t i o n	a t i o n	a t i o n	a t i o n	a t i o n	a t i o n	C i t y	m i s t a k e	r i g h t	o n l y	r i g h t	o n l y	r i g h t	o n l y	r i g h t	
V	I V	III	II	I	I												II X	m i s s i o n	m i s t a k e	m i s t a k e	m i s t a k e	m i s s i o n	m i s t a k e	m i s s i o n	
271	265	258	251	244	239	232	226	219	214	207	201	196	190	184	179		172		166		160		153		

N i g h t m a r e  o f  t h e  s u n s e t VIII	N i g h t m a r e  o f  t h e  s u n s e t VII	N i g h t m a r e  o f  t h e  s u n s e t VI	N i g h t m a r e  o f  t h e  s u n s e t V	N i g h t m a r e  o f  t h e  s u n s e t IV	N i g h t m a r e  o f  t h e  s u n s e t III	N i g h t m a r e  o f  t h e  s u n s e t II	N i g h t m a r e  o f  t h e  s u n s e t I	W h i t e  n o i s e III	B l o o d  f o o t p r i n t s II	B l o o d  f o o t p r i n t s I	1 7 , s  A d v e n t u r e I V	1 7 , s  A d v e n t u r e III	1 7 , s  A d v e n t u r e II	1 7 , s  A d v e n t u r e I	W h i t e  n o i s e II	R a i n y  b l u e VI
360	354	348	342	337	334	329	324	321	315	310	303	297	292	287	283	277

Violet zero I

××××年××月××日

都市・裏路地・23区

酷い雨が降りしきる日だった

一切星なんて見えないだろうと落胆していた

今日が数十年に一度の流星群の日だなんて話を聞いたのはいつだったか

星を見る、ただそんななんてことない楽しみの為に一週間やりたくもない仕事をしてきた

彼女はいつもこうだった

不運という呪いと共に生きてきた

ただ普通の幸福を享受することさえ困難なこの都市の中で、ささいな楽しみを日常の頼りにすることが生きる活力だったのだ

しかし、今夜は雨なのだ

到底星なんて見えやしない

彼女は傘も差さず、黒いコートのフードの隙間から曇天の空を見上げた

もうすぐ夜が来る

雨は強くなるばかり

体温は奪われるが、体の汚れは落ちていく

深い水底のような瞳に映る灰色が、突如として変色する

視界に広がる灰色に、青が現れた

しかしそれは、空の鮮やかな青ではなく、エナメル式の傘の青

その青が現れてから、冷たい雨の雫は体に打たれない

「どうしたんだい」

彼女は隣を見た

美しいヒトがそこには存在していた

灰色の空と街に映える、穏やかな草原のような髪

男とも女ともわからない整った顔立ち

声もまた、性別の区別がつかない透き通った音だった

「こんな雨の中、傘も差さずに女の子一人…」

「ここは裏路地だ、危ないよ」

人間とは思えない美しさに目を奪われた彼女は、重い唇を開いた

「貴方の方が危ないよ」

私はフィクサーだからいいけど、見たところ貴方はいいところで働いてるようだし

すりやリンチならまだいいけど、行方不明になってレストランのメニューになりたくないなら早く裏路地から出て行った方がいい

「ここは裏路地でも一番危ない区域だから…」

「優しいんだね」

忠告をした彼女の言葉を聞いて、美しいヒトは微笑んだ

微笑むだけで、その場から動こうとしない

「…私が言った意味、わかってる…?」

「ここが危険なのは理解しているよ」

現に、ここに来てから17回襲われた

けどうち6回は追い返したし、11回は相手の方を気絶させたよ

別に彼らの生死に興味はないから、命を奪う必要もないしね」

彼女はその言葉に耳を疑った

見るからに穏やかそうな美人が、その艶やかな唇からあまりにも物騒な発言をしていることに驚いているし、なにより17回もの危険を撥ね退けているという主張が、にわかには信じられないのだ

「…何のために、私に傘を？」

「君が雨に濡れていたから…という理由だけなら、君にこの想いをわかってもらえたかもしれないのにね」

美しいヒトは一通の手紙を差し出した

「君指名での依頼だ、来てくれないかい」

「…どこに？あなたは誰…?」

彼女に傘を差しだした美しいヒトは、彼女の手を取る  
冷え切ったその手を、自分のぬくもりで溶かすように



「僕の名は——…君を、ずっと探していた」  
理不尽な世界に切に生きる彼女と、突然現れた謎の美しいヒト  
星の見えないある雨の日に、私達の母と父は出会ったのだ

## Violet zero II

xxxx年xx月xx日

都市・裏路地・5区

深夜2時47分

一つのビルの上に、二人は立っていた

一人は黒いコートを靡かせた女の子

もう一人は白い白衣を着た美しいヒト

彼女たちが出会ったあの日の記憶は、もう二年も前だった

「この仕事には慣れた？」

美しいヒトが彼女に問いかける

「それ、毎月聞いているよね」

彼女が缶コーヒーに口をつける

寒い冬空の下、都市はまだ起きている

さすがに建物も次第に眠っていく頃に、二人はようやく会話ができる

「心配なんだ

「彼」は危険人物だからね、僕も命じられたとはいえ、君に危険を及ぼしたくないし…」

「まあ、「黒い森のスマイルの魔女」がほんとに存在していたのは驚いたけどさ…それでも、福利厚生がついていて、衣食住も確保できていて、仕事内容も相応にハードだけど…割に合っていていい仕事だと思うよ

都市にこんな職場があるなんてね、翼になればいいのに」

「うまい話には裏がある、というだろうか？」

「アンタ、私に対してだけやけに心配性だね？」

「当然だろう、恋人なんだから」

美しいヒトのその言葉に、彼女は照れ臭そうにコーヒーをすすった  
彼女と出会ったあの日から、美しいヒトは彼女の事を気にかけていた

業務内容こそ違えど、時間があれば彼女の元に向かつては対話を望

んだ

見目の良さも去ることながら、彼女が惹かれたのはその優しさと、相手から向けられる純粋な好意が理由だった

出会って五ヶ月が経つ頃には、どちらともなく恋人としての関係が築かれていた

「君には、幸福に生きてほしい」

美しいヒトはそう呟いた

美しいヒトは、今までに何度か言っていた

いざとなったら、君を逃がすと

どこに？と彼女が問うても答えは返って来た試しがない

彼女はその言葉に、胸を締め付けた

「…それ、貴方は自分の事を考えてないよね」

美しいヒトは彼女を見た

深海のような瞳、夜空のような髪

どこまでも暗闇に染まる深い青が、切なそうな顔で見つめてきた

「貴方はいつもそう、自分の事は後回しにして私の事ばかり…」

私は、貴方も幸せになってほしい

こんな世界でも、幸せにはなれる

現に私は今幸せだよ、貴方との日々が今までの人生の中で一番色鮮

やかに染まってるから

気が付いたら都市で生きていた、モノクロの毎日

それが、貴方のお陰で色づいたの

だから…だから、私は…」

いつからか、彼女の眼には雨が浮かんでいた

頬を伝い、雨が流れる

そんな彼女を見て、美しいヒトは彼女を抱きしめた

彼女の優しさに、小さな子供のような切実な願いに、愛しさを感じたのだ

「…君に、言わないといけない」

「なにを…？」

「僕の秘密」

抱き合ったまま、美しいヒトは話し始める

「驚くかもしれないし、気味悪がるかもしれない

それでも、こうして君に伝えようとするのは…君が、こんな僕でも受け入れてくれると信じているから

ずっと、ずっと昔から…」

「…」

美しいヒトは一度、彼女から身を離した

そして、改めて真っ直ぐ彼女に向き合った

「…：僕は、人間じゃない

元々、外郭に廃棄されていた人体型の兵器だ

昔、企業が作り出した代物でね

人に擬態して人以上の力で破壊を招く…戦争用の道具だった

けれど、目に見つかり、頭によって外郭へと追放された

長い時、再起不能のまま放置されていた」

淡々と語るその姿勢が、真実を物語る

人間離れしている美しさは、人間ではなく作られたものだから

出会ったあの日、23区の襲撃を尽く撥ね退けたのは、兵器として

の強さ所以だろうか

「ある日、「彼」が僕の前に現れたんだ

スマイレの魔女…彼は僕にこういった

「麗しの泥人形、君を幸福にしてあげよう」と

そして、どうやったのかは知らないけれど…僕は人間の体になった

こうやって、君に触れても君を温められるのは、人としての体温が

あるからなんだ」

呆然とする彼女の頬を、美しいヒトは包み込んだ

彼女の頬から伝わる温度は、確かにぬくもりがあった

「僕は君を探していた

君は憶えていないだろうけど、そんなことはさして重要じゃない

こうやって、ここで君を見つけたら、そして「また」愛し合うこ

とができる…それだけが重要だから…」

なぜ美しいヒトは彼女に初めから愛情を向けているのか

なぜ美しいヒトは彼女を探していたのか

そんなことは関係のない話であった

美しいヒトは、自身の懐から小さな箱を取り出した

彼女のような、深い青の箱

「いつまで続くか分からない、安息の明日が保証されている世界なんてないんだ

それは、君自身が望んだことだから」

今、貴方はどこを見ているんだろう

遠い星の向こうを見ているようなその瞳に射抜かれて、彼女は眼を逸らせずにいる

「だから、やりたいことは早くやっておきたい

…ねえ、——…

僕と、結婚してくれませんか」

青い箱の蓋が開かれる

その中には、花の形に彫られたシルバーリングが収納されていた  
信じられないような告白の連続に、彼女の頭は正常に機能しなくなった

聴きたいことは山ほどあった

どこから来たのか、どこで生まれたのか、どうやって育ったのか、家族はいるのか

沢山あったはずなのに、全部どうでもよくなってしまった

彼女の瞳は、月の光に照らされ、透き通った緑に反射している

そんな宝石のような瞳に、再び雨が零れた

理屈なんか、全部無視してしまおう

今、この気持ちだけを伝えよう

そうして、彼女は唇を開いた

「……………はい…」

絞りだしたその声は、あまりにもか弱くて

大きな喜びが隠されている

美しいヒトは銀色の指輪を丁寧に取り出しては、彼女の左手を取り、その細い薬指に指輪を通した

指輪がつけられたのを見守る二人は、再び互いを見つめ…そのまま、二人の距離はゼロになる  
星が瞬くある夜に、私達の父と母は結ばれたのだ

# Violet zero III

xxxx年xx月xx日

外郭・研究所

清潔さが伺える白い空間が広がり、せわしなく人々が行き交っている

多くの者達は白衣に身を包んだ研究員のようないでたちをしており、中には今ではもう見かける事のない患者服を着た者、果てには子供まで見受けられる

「皆働きの者だな、よほどの研究がどれほどの期待を背負っているか目に見えるね

そうは思わないか？」

彼女の隣に、灰色の髪を靡かせる女性が現れる

紫色の瞳が彼女を捉えている

「…スマイレの魔女」

「その呼び名はやめてくれよ、僕はただのヴァイオレット

ヴィオラって呼んでと、何年も前から言い続けているだろ？」

年若い娘のような見た目をしているヴィオラと名乗る女性は、数年前に彼女を雇った張本人

別名、スマイレの魔女

都市でもその名を語ることにすら憚られ、協会からは都市の星と指定されている

ヴィオラは彼女の伴侶を機械体から人間へと変え、都市に移動し様々な「仕事」をしているらしい

一日経つごとに膨大な金がヴィオラの元を集められていることから、「スマイレの魔女の財産」の噂まで人々の間で飛び交う

そんなヴィオラは、今とある研究に協力していた

「あ、ヴィオラ！もう、来てたんなら言っつてよ！お茶くらい出したのに」

「や、カルメン、相変わらず元気そうで何より

「アレ、使えそう?」

「まだ実用化には厳しいわね…とりあえず並の精神力じゃ直視さえ厳しいから、まずはその解決を…」

「そうか…掘り出し物だし、僕には必要ないから、君達がうまく活用してくれよ」

ヴィオラの元に一人の女性が駆け寄ってきた

カルメン、と呼ばれた女性は、彼女を見るや否や飛び切り明るい笑顔で声をかけてきた

「初めまして!私がカルメン、貴方が————さんの奥さんの…」

「奥さん?は、はい、そうです…」

奥さん、と呼ばれた彼女は顔を赤くし、小さく頷いた

「カルメン、彼女をアイツの部屋に案内してやって

一ヶ月も旦那に会えず仕舞いで寂しかったろうから

僕はアイン達にも挨拶してくるよ」

「わかったわ、さあ…こっちよ」  
ヴィオラはその場を立ち去り、カルメンは彼女をロビーから奥の職員寮棟へと案内する

「何ヶ月ですか?」

廊下を歩きながら、カルメンは彼女に問いかけた

「…七ヶ月です」

大きくなったお腹を撫でながら、彼女は答えた

時折、腹の内側から蹴り上げるような力が感じられる

「そっか…あと三ヶ月くらいですかね!」

生まれたら抱かせてくださいね!」

朗らかな笑顔でそう言うカルメンに、彼女は控えめに笑い返した

しばらく談笑を交えながら歩き続けると、後方から駆けてくる足音が聞こえてくる

その音に振り返ると、彼女のパートナーである美しいヒトが少し息を切らしながら駆けつけてきていた

「…!来るなら連絡を…」

「スマイレの魔女…ヴィオラが、どうせならあの涼しい顔を驚かせよ



うって」

いたずらっぽく笑う彼女を見て、安心したように顔を歪ませた美しいヒトは、そのまま彼女を優しく抱きしめた

「二ヶ月、お疲れ様

まだ研究は始まったばかりでしょう？」

「うん、まだスタートラインに立ったばかりだ

…君の方こそ、体は大丈夫？検査は…」

「母子ともに良好だよ

「ここは医療設備も整ってるから、私もここに住まわせてもらうから」

抱き合ったまま会話を続けている中、隣からほんの少しだけ咳払いが聞こえた

「じゃあ私は研究室の方に行くから…ごゆっくり」

そう言い残して、カルメンはその場から立ち去った

彼女は途端に恥ずかしくなり、真っ赤な顔のまま手を引かれ、愛しいヒトの部屋へと連れられた

私達の父と母のもとに、星が宿ったのだ

# Violet zero IV

xxxx年xx月xx日

外郭・研究所

「はい、どうぞ」

「ありがとう」

彼女の出産予定日が一ヶ月後に差し迫っていた頃、研究所では未知の物質：コギトの研究に取り組まれていた

彼女の愛するヒトも、ヴィオラの命によりその研究の一端を担っている

当のヴィオラは、まるで分身しているかのようにあちこちで見かけ、研究を手伝っては彼女の世話もしていた

といっても、ヴィオラは食事を運んだり、彼女がどうしても食べれないときに点滴を入れたりしているくらいで、それ以外は伴侶がサポートに回っている

この日も、ヴィオラが調子のよさそうな彼女の為に朝食を持ってきていた

「あと一ヶ月か…いやあ、君を見つけてもう五年くらい経つと思うと、なんだか感慨深いな

用心棒として雇って、いつの間にか\_\_\_\_\_と付き合って結婚して…子供までできて」

妖しげな双眸が紫色に輝いている

パンをひと千切り口に放り込むと、彼女は思い切ってヴィオラに問いかけた

「あの…ヴィオラ」

「なんだい」

「黒い森にいたっていうのは本当？」

その質問を聞いたヴィオラは、彼女に微笑みかける

しかし、その瞳は笑みを感じられないほどに冷たかった

「どうしてそんなことを聞くの？」

「噂だから」

変な人やモラルのない人、人を人とも思わないような人は臆しもせず貴方の噂をするの

黒い森のスミレの魔女：人の血で人を焼き、人の不幸で人の幸福を売る、一目見ただけで今後の人生は魔女の操り人形になる…とかね」  
「…なにそれ、尾ひれつきまくりじゃん…そんなの、都市でもよくあるありきたりな話でしょ」

呆れ返ったヴィオラは椅子の背もたれに寄りかかっては、徐に口を開く

「黒い森にいたのはほんと

気が付いたら奥の奥、沼地にポツンと一人、一糸まとわぬ姿でいたよ

あくまで人の形でこの僕の意識が存在しているのを認識した段階での話だから、本当はもつと昔から発生していたのかもしれないけど…

後の噂は知らない」

簡単に答えてくれたヴィオラに驚きつつ、彼女はその話を聞き続けた

「小さな鳥、高い鳥、巨大な鳥に見つかったときは傑作だったよ

つつかれるわ吊られるわついでにばまれるわで大惨事

終いには終末の鳥に化けて潰されそうになるし…」

「え、そ、その後どうなったの…？」

「…知りたい？」

目を輝かせながら身を乗り出して続きをせがむ彼女を見て、ヴィオラはいたずらっぽく笑う

まるで、父親の冒険譚を寝物語に聞いている子どもようだった

ヴィオラが続きを話そうとすると、部屋の扉が開く音がした

「なんの話をしているんだい？」

入ってきたのは、この部屋の主であり彼女の伴侶である美しいヒトだった

「おっと、楽しいお話はおしまい、続きはまた今度ね」

ヴィオラは席を立ち、彼女に一言そう言つては、部屋の出入り口の方へ歩いていく

すれ違いざま、ヴィオラは美しいヒトへ小さな声で耳打ちをした

それを聞いた美しいヒトは表情を曇らせた

夫婦のみの空間となったその部屋の中、椅子に腰かける音が響く

「おかえり、夜通しなんて大変だね」

「君の負担に比べたらこれくらいなんてことないよ」

大きく膨らんだ彼女の腹を撫でる美しいヒトは、一度目を伏せ…次の瞬間にはいつもと同じような微笑みを向けた

「そろそろ、名前を決めようか」

「あ、そのことなんだけど…」

食事を食べ終えた彼女は、机の上にある一枚の紙に手を伸ばした

その小さな一枚の紙を、目の前に入り伴侶に手渡す

「私の名前はね、恵まれて育つ萌木のように、誰かに恵まれて…そして誰かを恵むようにつて想いから名付けられたの

だから…この子も、人に恵まれて、人を恵めるようになって欲しい

恵みの…雨

この子は、雨つて名前にしようと思う

…：…：どうか？変じやない？」

手渡された紙に書かれていたのは、「雨」という文字

二人が出会った時、二人を濡らしていた水の名前

恵みの雨、二人を結び付けたそれが、二人の繋がりの名だった

「…うん、とてもいい

素晴らしい名だよ」

「…そっか、嬉しい」

愛おしそうな表情をした二人は、新たに生まれようとしている命に手を触れる

「雨、雨…お母さんを困らせてはいけないよ」

「お父さんにたくさんわがままを言つて、素直で思いやりのある子に育つてね」

「都市は厳しい場所だけど、君なら大丈夫」

「私たちの子だもん、素敵な子に育つよ」

「……」

美しいヒトは、再び表情を曇らせた

そして、彼女に向き合い、口を開く

「…君に会えて、本当に良かったと思ってる」

「どうしたの、いきなり」

不思議そうに首を傾げる彼女を抱きしめては、愛おしい存在を閉じ込めるように腕を放さない

「僕の愛は変わらない」

どこに行っても、ずっと」

「…ねえ、本当に…どうしたの」

「愛しているよ…萌恵」

自分の名前を呼んだ愛する伴侶が、その瞬間だけ泣いているような声に聞こえた

彼女を…愛する妻である萌恵を抱きしめるその手から伝わる温度は、彼女よりも低く感じられた

この日、父と母は私達の名前を付けてくれた

そして

二人が触れ合ったのは、これが最後であったのだ

# Violet zero V

xxxx年xx月xx日

外郭・xxxx

暗い地下深く

足元さえ見えない場所に、彼は立つ

「もう時間切れだ」

暗闇に声が響く

「偽物の杯による祈願成就是制限時間制：最初に言ったこと

僕の力で都市を騙すことは出来ても、世界そのものはまだ掌握できていないんだ

わかるね？泥人形」

話しかけている者が手に持つ金色の杯が、灰となって散っていく

「あと一ヶ月だったのにね、お前の子供が生まれるの

いや、泥人形の子どもってどんなのよ、一応人間の形にはなってるみたいだけどね？

もうお前は二度と肉の体を得ることはない、多分ね

でも、そんな希望はあげないよ

知ってるだろ、お前は僕の事を

哀れな人形、こんな世界じゃなきや愛するあの女と共にいつまでも幸せに暮らしましたとき、めでたしめでたし…で済んだのにね」

彼は足元を見降ろして話し続ける

何かが蠢く

「自分の痕跡を残せて嬉しい？それとも、あの女をまた愛せて幸せ？

おめでどう、僕が用意した幸福を享受できて

お前は数年もの間、人間らしい喜びの時間を得られただろう

僕はお前自身には恨みはないけど…あの女は絶対許さないって決めるから」

ボロリ、と何かが崩れる音がした

彼の足元には、土が広がり始めた

「

言葉にならない声が響く

静かで、それでいて突き刺さるような地の底から響く地鳴りのような声

そんな声に、彼は何の感情も見せなかったその冷たい顔を歪ませ、どこまでも意地の悪い悪辣な笑みを表した

「く…ふ…あはは…あは、あつはははははははははは!!ははははははつ!!  
あつははははははははははははははははははははははははははははは!!」

空間中に笑い声が響く

そこが狭いのか広いのかは定かではない、しかし、その身の毛がよだつような笑い声は確かに空間全体を埋め尽くし、支配した

「ははは…は…は…そう、そうだよ…お前を人間にしたのは僕が勝手にやったこと！」

あの女に今まででより一層の絶望を与えるためのシナリオ、その展開のため、お前を勝手に人間にした

魔女、なんて異名はガラじゃないんだ

そう…詐欺師の方が性に合ってる

これからはプリンターとでも名乗ろうかな?なーんて…」

笑い尽くした彼は、再び足元を見やる

そして、愉快そうな笑みを消し去り、冷ややかな視線を向けた

「…なんだ、もう死んだのか

つまんな」

彼は衣類の下に崩れ落ちている土塊の中から、ひとつだけ摘まみ上げる

「さよなら、彼女の運命

今からお前の大切なあの女を…誠心誠意、ぶっ壊してやるから」



「そのために、僕はこの世界でも生まれたんだからね」

Violet zero VI

××××年××月××日

「ねえ、ヴィオラ…なんだか気持ちが悪いの  
足元もおぼつかなくて…」

「そうか…そろそろこの部屋で過ごすのも厳しそうだね  
病室へ移動しよう」

××××年××月××日

「ねえヴィオラ、あのヒトは…アイツはどこ…」

「今長期的な研究中なんだ、手が離せないし、君に危険を及ぼしたくな  
いから離れられないんだそうだ」

××××年××月××日

「頭が痛い、全身が痛い」

「内臓も、骨も、舌も」

「一番痛いのは眼の奥…熱いような冷たいような気がして…」

「そう…鎮痛剤を出そう、点滴するから…」

××××年××月××日

「眠れない…悪夢ばかり見るの」

「黒い蛇がこちらを見ていて…」

「けど、もうすぐ分娩間近なんだ、休めるときに休みなさい」

××××年××月××日

「痛い、痛い、痛い痛い痛い…！」

「おねがい、お願いヴィオラ…あのヒトに…会いたい…」

「…」

××××年××月××日

「わ…たし…たちの…子…」

「大丈夫、無事に産ませるさ」  
今は手術に集中して、麻酔を打つから…」

「おめでとう、無事に生まれたよ  
かわいい女の子じゃないか、これで…」

…萌恵？

…………ふ…………ふ…………

始まったね」

××××年××月××日

「研究の方はどうだい、アイン

」なかなかうまく進まなくて悩んでいると言ってたじゃないか

：そう、とうとう対人被験に移行したんだ

被験者は：エノク、というところあの小さな男の子：

：死んだのか

わかっていたことだろ？研究とはそういうものだ

：エノクと親しかったリサが研究所を出て行った：見つけた時にはもう死んでたんだ

死体が残ってたのなら、掃除屋じゃなかったのかな、それだけでラッキーだろう

カルメンが？気に病むことじゃ：だから言ったんだ、君みたいなお人好しじゃ耐えられないって

ああ、わかったよ、彼女の部屋に立ち寄ってみるよ」

「カルメン、いるんだろう

：カルメン？返事がないなら勝手に入らせてもらおうよ

女の子の部屋に無断で入る趣味はないんだけどなあ

ちゃんと片付けて：なんだこれ：荒れ放題じゃないか

なあカルメン、エノクが死んだからってそこまで気に病むことかな？

彼は外郭出身だったんだろう？ここに来たお陰で、あそこよりもマシな生活を送ってから死ねたのは、幸運だと考えて：

…おいおいカルメン、風呂場の電気調子悪いじゃん、ちゃんと  
言っ  
て取り替えなきゃ…

……カルメン？…何、してるの？」

「カルメンは浴槽で死んでた、嘘じゃないさ

手首を切って…そう、自殺だろう

やれやれ、都市の人々の病を治すと豪語してた彼女がああなっ  
ては  
本末転倒じゃないか

さて、アイン、ベンジャミン

これからどうする？研究を続ける？それとももう中止して、今の都  
市と共存する？

…君ならそう言うと思ったよ、アイン」

コギトの研究、実験は進んでいた  
少しずつ、少しずつ

カルメンの死後も、カルメンの意思を引き継ぐような形で、何人も  
人間がこの研究に取り組んだ

カルメンの死後、コギトの投与実験が再開された

しかし、エノクやカルメンの死を鑑みれば、誰もが進んで実験に参  
加しないのは明白だった

ただ、一人を除いて

×××年××月××日

外郭・研究所

「調子はどう？ ジェバンニ」

点滴のルートや心電図モニターのコードに繋がれたベッドの上  
ジェバンニと呼ばれた男は、問いかけてきた女性に返答をした

「まあまあだエリヤ、今日は比較的いいようだから  
左腕くらいなら動かせる」

エリヤ、という女性は笑顔を向け、バイタル値をバインダーに挟ん  
だ書類に書き込んでいく

コギトの研究、実験は進んでいた

ジェバンニの協力により、人体がどこまでコギトに耐えられるか、  
その使用可能容量のための実験が続いていた

普段は寝たきりのジェバンニだが、この日は調子が良さそうであっ  
た

ベッドのギャッジを上げ、本を読んでいる

「なんの本を読んでいるんですか？」

エリヤが問う

「さあ…ジャンルがよくわからない

切ない恋愛のようでもあり、憎悪にまみれた復習譚でもあり…」

「へえ、おもしろそう！ また今度私にも貸してね！」

朗らかな笑顔を見せたのち、エリヤは部屋を後にした

残ったのはジェバンニと、電子機械の規則的な音と、本のページを捲る音のみとなった

その本は、以前カルメンが薦めてきたものだった

カルメンとジェバンニは昔馴染みでもあった

だからだろう、カルメンを救うという言葉により、ジェバンニはこの実験に参加することを決めた

なにも感じず、なにも考えず…ジェバンニが虚無のまま本に書かれた文字列に目を通していき、不意に部屋の扉が開く音がした

遊びに来る友人がいるわけでもなければ、お見舞いに来るような家族もここにはいない

ジェバンニはエリヤが引き返してきたものだと思っていた

「どうしたんだエリヤ、なにか忘れ物でも…」

その声をかけながら視線を上げると、そこにいたのはやる気に満ち溢れた女性ではなく、小さな女の子だった

青緑の髪色をした、齢六歳前後の子供

その子はジェバンニのような患者服を着ており、ジェバンニを見ては驚いた様子で困り顔をする

「…」

ジェバンニは疑問に思った

彼は過去、このような子どもを見かけたことがないからだ

「…君、どこから来たの」

「…あつち…」

子どもは廊下奥へと指をさす

ジェバンニの病室へ通じる道は一本道なので、来た道を指しているだけだった

「…名前は何？」

「…レイン」

やはり、ジェバンニには聞き覚えの無い名前だった

新しく外郭から保護した子どもだろうか、だとしても今の研究所に子どもを保護する余裕なんてないはずだとジェバンニは考える

「レイン…俺はジエバンニ、よろしく…する必要もないとおもうが…」  
「じえ…ば…じえ…ジエニー」

「ジエバンニ」

レインという幼子は、ジエバンニの名前を聞くや否や、彼のベッド元までやってきた

「ジエニー、病気…？」

「だから…やれやれ」

病気じゃないけど、病気を治す研究をしてる

俺はそのお手伝いだ」

「お手伝い」

「そう、お手伝い」

「えらいねえ」

そう言われて、ジエバンニは困惑した

これは、偉いものなのか

確かに実験に進んで協力したが、カルメンが救われるためだと思っ  
て参加したに過ぎない

誰かに感謝はされたが、褒められるなんてなかった

この実験は、褒められるものではないからだ

「あのね、レインもね、毎日お手伝いしてるの」

「そう…」

…偉いな、君も」

ジエバンニは動く左手でレインの頭を撫でた

「えへへ」

嬉しそうに笑うレインを見て、ジエバンニも顔をほころばせる

「ジエニーはいつもここにいるの？」

「そうだ、いつもここにいる」

「…ひとりで？」

「ずっとじゃないが…まあほとんど一人だな」

「さみしくないの？」

「さみしい…というのはわからないな」

「…レインはね、いつもね、おかあさまといっしょなの」



おかあさま、というワードにジェバンニは納得する  
なるほど、この子は研究員の連れ子だろう、と

以前、研究員の伴侶である妊婦がいたことは知っているが、レインの年齢を鑑みてもその子供ではないだろう

「今日はね、おかあさまの後についてきたの！でもね、とちゅうでね、迷子になっちゃって…」

「…そしたら、ここに着いてしまったと」

その問いかけに、レインは小さく頷いた

ジェバンニはその小さな頭に、再び左手を載せる

優しく撫でられたことで安心したのか、レインは泣き出してしま

「うう…ひぐつ…」

「な、泣くな泣くな…えつと…」

どうにかレインを泣き止まそうとジェバンニは辺りを見渡す

趣味があるわけでもなければ、拘りがあるわけでもない

殺風景な部屋の中、子どもを楽しませられるものなんて置いていなかった

「…」

ジェバンニは考えた

子どもを引き取ってもらうために人を呼ぶのではなく、子どもを泣き止ませる方法を

ジェバンニはそこで、自身の膝の上に置いていたものに目をやった

先ほどまで読んでいた本

それは言わばカルメンの最期の贈り物でもあり、形見のようでもあった

まだ読んでる途中だし、結末も知らないが…ジェバンニは数秒悩んだ後、その本のページを一枚破り取った

そして、丁寧に折りたたみ…一つの形を作り出す

「ほら見てみる、犬だ」

本のページで作った、折り紙の犬

ジェバンニはそれをレインに差し出す

するとレインは泣き止み、目を輝かせる

「ワンちゃん…」

「ほかにも…手裏剣、花、船…」

ジェバンニはどんどん折り紙の作品を生み出していった

丁寧に折っているからか、綺麗に形作られていくそれらは、まるで芸術作品のようだった

「わあ…！すごい！ジェニーすごい！」

「まあな」

しばらくして、気が付けばジェバンニはレインに折り紙を教えていた

何度も失敗しながら、ようやく一個目の紙飛行機が完成した時…部屋の扉が再び開く音がした

「レイン」

入ってきたのは、灰色の髪と紫の瞳が特徴的な女性

「…」

ジェバンニは、その女性が何度かカルメンと話していたのを見ていた

「おかあさま！」

レインは紙飛行機を持ったまま、おかあさまと呼んだ相手の元へ駆け寄る

「もう、ダメじゃないか、勝手に研究所内をうろついたら…」

「ご、ごめんなさい…」

「…ヴァイオレット、アンタの子だったのか」

ジェバンニはレインを抱え上げた女性…ヴァイオレット、もとい  
ヴィオラへと声をかけた

「…そうだよ、ジェバンニ」

いつもいつもコギトを打たれて…苦労様

帰るよ、レイン」

ヴィオラは労いの気持ちなんて一切感じられないその言葉を吐き出しては、そのまま踵を返して部屋から出て行く

その肩から顔を覗かせ、レインが手を振る

「じゃあねージェニーー…またね！」

無邪気な笑顔を見送ると、その影は自動的に閉じた扉により遮られ  
た

「…また」

ジェバンニは、見えなくなってから左手を小さく振っていた

# Violet zero VIII

xxxx年xx月xx日

外郭・研究所・地下収容所

薄暗い廊下、両壁には厳重なロックが課されている扉が並んでいる  
そんな道を、ヴィオラは歩き進む

右手では小さな子ども：レインの手を引いている

レインは見慣れない空間に怯えながら、引かれるままにヴィオラに  
ついていく

そうして辿り着いたのは、とある一室

数十センチの強化アクリルガラス越しから、その中が伺える

照明は破壊され、黒い何かが蠢いている

太く、長い尾：まるで蛇のような躯体が、廊下よりも更に暗い空間  
に収容されている

ヴィオラはその収容室の扉横のキーボードにパスコードを打ち込  
んでいき、指紋認証と虹彩認証を済ませる

すると、扉のロックが外れる音がする

「レイン、ここに待ってなさい」

「…大丈夫？」

レインはガラスの向こうに見える存在を危惧して、ヴィオラの心配  
をする

そんなレインに優しく微笑みかけ、ヴィオラはレインの頭を撫でる

「大丈夫、僕は強いんだよ」

ヴィオラはレインから手を離し、扉奥へ進んでいく

扉の奥、二つ目の扉のロックも解除し、ようやく中へ足を踏み入れ  
た

ヴィオラは収容室の隅に蠢く大きな蛇の躯体と対峙する

部屋の半分以上を占めるその躯体から、白い肌が這いずり出てくる  
それは若い女の姿を象っているが、？せこけた細い上半身に繋がる

ように、下半身は蛇の躯体となっていた

「ウ…ああ…ああ…」

か細い声が響く

胸辺りまで垂らされる黒い髪の間隙から、淀んだ深い青の双眸が覗く

「まだ人のままでいようと抗ってるの？」

さっすが、その根性化け物級だ

まあお前は化け物なんだけど…今の自分の姿、見てみなよ

まるでナーガのようだ

…あ、ナーガ知ってる？この世界にそんな情報存在してたっけ…」

ヴィオラは臆しもせず、いつものようにその女に話しかける

「…ヴィオ…ラ…どう…して…」

手の爪は？がれ、血を流しながらヴィオラの元へ這いずっていく

そんな女を、ヴィオラは冷ややかに見下した

「…どうして…どうして、かあ…いや、そっか、そうだよね

権能を持つ僕だからこそ、すべての世界から記憶同期させられるんだ

もんね

いいよ、教えてあげる」

ヴィオラは傍らに置いてある椅子に手をかけ、そこに腰かける

直前まで、そこには何もなかったのに

「ねえ、僕と君の繋がりがりって何だと思う？」

上司と部下？研究者と被験体？…そんな生易しいものじゃない

君は反吐が出そうなほどの善性者であり、最初の世界で人々を救っ

た英雄でもある

けど、僕はそんな君が世界に敷いた平和の犠牲者であり、復讐者

僕の君に対する憎悪は、どんなことになっても消え去らない

初期地点の僕が課せたデータ再起システム、七本ある権能のうち一

本を使い、どの世界でも僕は君に対する復讐心と世界を変革する目的

を同期させられる

何もかも忘れ、無視し、ただそこに在る世界を享受しながら生きる

こともできる…でも、やっぱり僕は僕なんだ

君への復讐も、完全なる理想郷を構築するという目的も、絶対的に

遂行させるという意思が芽生えるんだよ

この世界の僕は、権能一本に残った欠片の状態で生まれた

僕は本能的に、世界に散らばった権能を回収した

三本目の権能を沼地で回収した時に、小さな子どもの姿になった

今の姿は十代後半…最初の僕の全盛期だ、今僕の手元には四本の権能がある

権能は全部で七本、今回は七本全ての現界を確認している、どこに落ちてるかはわからないけどね

それをすべて回収することで、僕はこの世界のシステムや構造も自由に行ける

けど、四本集めるのも500…いや700年かけてるからね、そんな悠長してられないし…

そんな時、ようやくお前を見つけた

僕の運命、憎悪の相手、何度生まれ変わってもどんなことがあっても必ず絶望に突き落としてやる…そう決めた対象

お前を見つけた時、とても高揚したよ…ああ、またお前が泣き喚ぎ悲鳴を上げ狂ったように絶叫する様子を見られるんだ…とね

そこで僕は一つの計画を立てた！お前への復讐と理想郷構築を兼ねたとおきのプランをね

その為のキーが…お前の子どもだ

二ヶ月前に産んだ、お前とあの泥人形の子ども」

椅子に座りながら、ヴィオラは途切れることなく語り続ける  
女はそれを聞きながら、本能で理解していた

ああ、彼は正しく魔女なのだと

「泥人形に人間の肉体を与え、お前と結ばせる…お前たちは運命、だからね

そうしてできた子どもを使い、理想郷構築計画の基盤とする

…ねえ、出産三ヶ月前から僕がお前に運んでた食事…あれ、ただの食事じゃないんだよ

ここで研究してるコギト…あれを少量ずつ混入させてる

毎日少しずつ量を増やしながらね

最初の方は特に問題なかっただろ？けど三週間ほど前から体調に



める

上機嫌な笑顔を浮かべながら収容室を出ようとしたところで、何かを思い出したように足を止めた

「あーそうそう、お前、旦那に会いたがってたよね

いいよ、会わせてあげる」

ヴィオラは女の方に向き直し、そういうや否や白い白衣のポケットから何かを取り出した

そして、それを女の方へ投げ捨てる

女の前に投げ捨てられたそれは、床に落ちた衝撃で少し形が崩れてしまった

土塊のようなそれは、小さな細長い棒のようで、人の指の形でもあった

「……………あ……………あ……………」

その土塊には、土で汚れていながらも銀色に輝く指輪が嵌められていた

その指輪は、女が左手の薬指につけているものと同じ

星の降るあの夜、愛するひとから愛の告白と同時に贈られた指輪であった

「……………ああああ……………」

ツツツツツ  
!!!!!!

蛇の女は劈くような悲鳴を上げ、涙を流した

その声を心地良さげに聞き、ヴィオラは扉を開く

収容室の外へ出ると、小さな衝撃が体にぶつかってきた

「ああ…レイン、ダメじゃないか、ちゃんと待っていないと」

衝撃の正体は収容室の外にいたレインがヴィオラに抱き着いてきたものだった

絶叫を繰り返していた女の叫び声が停止する

強化ガラスの向こうに見える小さな女の子を眺めている

青緑の髪と、端正な顔立ち

その顔は、記憶の中の愛するひととよく似ていた

なにより、ヴィオラが呼んだ「レイン」という名前



その意味が、彼女の中でその女の子の正体を決定づける

「あ……ああああ……あ、め……あめ……」

女はレインの方へと手を伸ばす

二ヶ月前に産まれたばかりの、 齡6歳の女の子へ

レインは怯えた様子でヴィオラの後ろに隠れる

人間離れた聴力が分厚い壁の向こうの会話を聞き取る

「おかあさま……あの人だあれ……怖い……」

レインはヴィオラの事を母と呼んでいる

それを聞いた女の思考が止まる

終末を眺めるかのように、その赤い瞳には何も映らない

ヴィオラは一瞬、この世のものとは思えない悪魔のような笑みを女

の方へと向け……何事もなくレインに向き合う

「アレはね、怖い怖い化け物だよ

あんなのでもちゃんと管理しないといけないからね、これも仕事だ

から」

「おかあさま、すごいねえ……でもね、無理しちやダメなんだよ」

「わかってるよ」

親し気な様子を見せながら、二人は収容室の前から離れていく

それを追うように女が動き出す

追い続けるようにガラスに這いつくばり、静止の利かない涙を流し続

けた

「……いや……いらない、で……かえして……かえして……」

かえして、かえしてえ……！わたしたちのこを、かえしてえええええ

え!!!」

それから女は、人間の形を失うその時まで、止むことなく絶望し叫

び続けた

Violet zero IX

××××年××月××日

「エリヤが無断で「ギト」を？」

あー…やる気に満ち溢れてる分、認めてほしかったんだろうね  
それで、どうしたのさ

全身出血してたんだろ？殺してあげた？懇願していただろう

…無視したあ…!?

…くっ…ふ…ふふ…

いや、いやあ…ね？君がそこまで冷淡な人格者だったとはね

いや？少し驚きはしたけど呆れも責めもしないさ

大事なのは、カルメンが残した目標を達成すること…だろう？」

××××年××月××日

「ガブリエル？あの生真面目な…様子がおかしい？そーいやそーうだね、空調設備が整ってるのにあんなに着込んで

あ、そうそう、なんか時々必死そうに肌を掻きむしってるんだよね  
なにかの病気かな…それこそ、新種の…感染症とか？

…そうだね、一度精密検査をした方がいい、僕も協力しよう

研究所の安全を守るためにもね」

××××年××月××日

「ねえ君、大丈夫？」

（なんだか様子が変わりだけど

僕でよければ相談にのろうか？

…勿論、構わないさ、僕は困ってる人を放っておけなくてね

君の名前は…ミシエル、かあ…かわいい名前だね、そんなに若いのにこの研究に参加するなんて、立派じゃないか

…ああ、そうだ

この研究は頭に背いている

僕も静止の声を聞き入れてもらえなくてね…困ってたんだ  
ただ、頭に通達しようにも僕じゃダメなんだ

君も僕の事は知ってるだろう？

僕よりも信用に足る者が、頭に通達するのがいいんだ

それは正しいことであり、そうした者がいい人、なんだからね…」

××××年××月××日

「やあ、よく眠れてるかい？ジエバンニ

…君の状況を見れば返答には想像がつくけど…

え？…レイン？

君、今自分がゴギトまみれでろくに眠れていないのに、一度会った  
だけの子どものこと心配してるの？

…ええ、僕ってそんなに信用されてないの？悲しいなあ

大丈夫だよ、ちゃんと元気さ

いつもお手伝い、してもらってるからね」

××××年××月××日

「ダニエル、毎日アブノーマリテイの收容お疲れ様

コーヒー、僕にも一杯くれよ

…ありがと、ダニエルの淹れるコーヒーは格別だからね

ふう…君みたいな恵まれた人材が、こんな危険な研究に参加してる  
なんて不思議な話だね

嫌味じゃないさ、純粋な感嘆だって

まあカルメンもアインもベンジャミンもだけどさ…皆賢いんだか  
ら生き方も賢くすればいいのに

…そ、ダニエルって案外理想主義なんだね

いや、貶すつもりも否定するつもりもない、僕だって理想主義な一  
面があるからね

理想の為に現実をどうするか…いつもそんな問答の繰り返し

問題があつて、それをどう解決するか…考え続けるのが、人生つてやつなんだろうさ」

××××年××月××日

「カーリー、頭はアイン達の方へ向かっている、ここで足止めされていたら皆の努力もカルメンの理想も水の泡だ

今すぐ彼らのところへ行つて、調律者に敵うのは君ぐらいなんだからここは任せてよ、あの黒い蛇は馬鹿みたいに強いけど他のアブノーマリテイも鎮圧してくれてるし…うまく利用するさ

それに、僕は黒い森のスミレの魔女なんだよ？ちよつとやそつとで死にやしないさ

「赤い霧、アイン達を守つてくれ  
頼んだよ」

××××年××月××日

「アイン、ベンジャミン、無事だったか

いやなに、僕も息災さ、なんとかね

生き延びるのは得意なんだ

蛇に片腕持たされてたけどくつついたし

ところで、聞かせてよ、「光の種シナリオ」ってやつ

…ふーん、そうか…

いや、何事も理想を描くことから始まるものだ、このシナリオも成し遂げられるのは君たちの努力次第…ってところかな

何なら、僕も一枚噛ませてもらうよ

僕の理想実現の為に

資金なら僕が用意するさ、なんせ一つの企業を立ち上げるんだ、頭金は馬鹿にならないだろ？

そこで金を出す条件、僕の「子供達」を君のところで働かせるんだただの職員よりかは危険な仕事にも冷静に対処できるし、腕もたつ…ただまだ試運転、トライアンドエラーの状況なんだ、だからこそ君のところで「テスト」させてくれ

君の描く「光の種シナリオ」にも有効活用できるだろうさ」

# Violet zero X

XXXX年XX月XX日

うたごえがきこえる

うたごえがきこえる

なつかしいような、あたらしいような、ふしぎなうた

「き

番

君 だ、や を げよ」

こえがきこえる

ぜったいてきで、ふへんてきで、わたしたちをしいするこえ

くらやみがはれる

あおいいろがみえる

ぼやけたせかいに、すみれがみえる

「母様、551番から580番までの製造は問題ありません

現在、脳の成熟過程に合わせ情報入力中です」

「うん、わかった

246番から301番までは休憩だ、三日後には120番から15

0番までがL社に入社するからね、テストデータ次第では製造方法を

再検討しないとだから」

「母様、491番から550番まで、正常に起床を始めました

母様からの指令を待機しています」

「わかった、今行くよ」

すみれはいつてしまう

のこったのは、おんなじかおのわたしたちだけ

「記憶同期は?」「二日後です」「その後母様からの最終調整を」「オリ

ジナルの容体は?」「コギトの浴槽にて休息中です」「歌が聞けないの

が残念です」「L社の方は」「反復75回目です」「まだ始まったばかり

だから、これからもっと時間がかかるだろうと母様が」「私達も次第に

改良体が作られるんでしょうね」「母様の理想のため」「私達の本能的

ため」「理想郷の現界には私達では不十分ですからね」

おなじこえ、おなじふく、おなじせたけにおなじなまえ  
わたしたちは、れいん

あまつぶのようにたくさんあって、これからももつとふえていく  
わたしたちにちがいはなくて

ちがうのはおりじなるだけ

それがわたしたちだから

いずれはわたしもうまれるのだ

かあさまのけんのうにより、とおかでおとなのくたいにせいじゆ  
くするから

うまれたら、かあさまのおやくにたつんだ

おなじわたしたちをつくって、いつかろぼとみーしやにゆうしや  
して、はんぷくがくりかえされるたびにつぎのわたしがにゆうしやす  
る

これはですと、かあさまのりそうをかなえるためのじゆんびだんか  
い

かあさまにつかいつぶされるのがわたしたち

それでいいの、それがわたしたち、れいんというそんざいであるの  
だから

ああ、なんだかねむくなつてきちやった

もうすこしやすんで、のうをそだてなきや

さいしんのきおくとどうきさせるために、ようりようをふやさな  
きや

うすいまぶたをとじれば、まっくらなせかい

うたごえがきこえる

うたごえがきこえる

なつかしいような、あたらしいような、ふしぎなうた

「きらきらひかる……おそらのほしよ……」

きこえる、きこえる、おりじなるのうた

わたしたちをおちつかせる、ねむりのうた

おやすみなさい、かあさま

またおはようをする、そのときまで

l o b o t o m y   c o r p o r a t i o n  
i n   d u b i o   p r o   r e o l

x x x x 年 x x 月 x x 日

都市の朝は早い

朝日が差せば人は目覚め、食事を取りながら今朝のニュース番組を見る者、新聞を読む者、仕事へ向かう者…それぞれのルーティーンは様々であるが、皆が同じ一日を始めようとしていた

しかし、巢の一角にある小さなアパートメントに、新たな生活を迎えるようとする者がいた

「晴れ渡った空のいい朝！ハムハムパンパンの特性サンドイッチ！記念すべき出勤一日目！

今日はいいい日に違いなーい！」

赤い髪を二つに下げた女性が、窓を開けては一日の始まりを祝福している

彼女の名はカレン

この日から大企業の翼の一つ、L社ことロボトミー社に勤務するところが決まっていた

「採用通知が届いたときは驚いたけど…お父さんもお母さんも喜んでいてくれたし、万々歳だよね

もう今日でこの家ともおさらばかあ…長かったような短かったような…」

カレンが勤務するのは、多くの支社を抱えるL社のなかでも、心臓ともいえる本社である

本社では職員は寮に入ることが定められており、今カレンが住んでいるアパートの一室も、本日限りで出払うことになっている

そのせいか、アパート内は人が生活するような痕跡は残っておらず、必要最低限の物しか置かれていない、殺風景な空間と化していた  
「…感傷に浸っている場合じゃないぞ、私



さて、ここは今朝のニュースを見ながらブレイクファストと洒落こみますか

ふふふ、優雅なキャリアウーマンみたい…

…？」

カレンは携帯端末を取り出し、画面に電源をいれる

するとそこに書かれていた数字を見て、しばらく静止する

携帯端末に表示されている数字は、8：12

これは現在時刻を表すものである

カレンは訝しむ顔で布団横の目覚まし時計を見やる

そこに表示されていたのは、7：12

携帯端末の時刻は、都市の時間として完全管理されているはずなの

で、正確性としては携帯端末の方が正しいはずである

つまり、カレンの目覚まし時計は一時間遅れていることである

彼女はもう一度考えた

L社の出勤時間は、午前八時半厳守だったはずだ

「……………出勤一日目から遅刻はダメだよね」

彼女は慌てて身支度をした

パジャマからスーツに着替え、ハムハムパンパンのサンドイッチを

片手に飛び出す

アパートの玄関フロアの受付に鍵を置き、「おばちゃん今まであり

がとう！」と半ば叫ぶようにお礼の言葉を告げ、アパートを飛び出

た

アパートからL社本社までバスで10分、しかしバス停に着いたと

ころで朝の通勤ラッシュに時間通りバスが運行するとも限らない

カレンは近道を駆使して走る

幸運だったのは、カレンのアパートがL社の巢内であったこと

お陰で裏路地を行かずに本社へ向かうことが出来る

走り続けること、10分

カレンは汗だくになりながらも、L社に着くことができた

「はぁ…はぁ…ぎ、ギリギリセーフ…」

カレンはおぼつく足取りでL社内に入り、エレベーターへと向かう

勤務する場所は地下にあるため、エレベーターで地下へ降り、タイムカードを押す必要がある

そこそこ広いエレベーター内に足を踏み入れたその瞬間、カレンの脳裏が突然フラッシュシユバツクする

瞬く間に視界の点滅が収まると、次に襲い掛かってくるのは膨大な疲労感だった

「っ……え、なに……」

彼女がエレベーターの壁に寄りかかると、間もなくエレベーターが停止し、その扉が開く

扉の向こうには、一人の人影が立っていた

「……?」

「貴方が新入社員のカレンさんですね

情報は共有済みです、まずはタイムカードを押してエージェント控え室へ

更衣室があるのでそこで指定されたE・G・Oを装備なさってください

灰色の髪をショートカットにし、紫の眼光を鋭く向けている女性  
黒と紫のハイセンスなコートに身を包み、同じカラーリングの大きな槍を背負っている

何より、その衣装に着られることなく着こなせるその凛々しい顔つきは、女性でも見惚れそうなほど整っていた

「……」

「……聞いていますか?」

「あつ、は、はい!すみません、今すぐ!」

カレンは慌ててエレベーターを降りるも、少しふらついてしまう

「あ……」

一度壁に手をつき、頭を振る

意識がはつきりし、体の倦怠感も次第におさまっていく

「大丈夫ですか?」

エレベーターで上がってくるとなると比較的長い時間エレベーター内にいましたでしょうし、無理なさらず……」

「あ、いえいえ！大丈夫です！ありがとうございます！」

カレンは朗らかな笑顔を女性の方へと向けた後、エレベーターから続いていく廊下を駆け足で進んでいった

出勤時間に間に合うよう慌てていたせいで、その違和感に気が付かないまま

なんとか出勤時間ギリギリにタイムカードを通し、更衣室まで辿り着いたカレンは、自分のネームプレートが差し込まれているロッカーを開く

そこには、どこか個性的なコスチュームと武器が収納されており、カレンはそれをまじまじと見つめる

「懺悔…この装備達の名前？なんだかマニアック…私に何を懺悔しろって？」

床に着いた傷をそのままにして出てきちゃったこととか？」

「独り言もいいですが、早くなさってください」

新入社員に向けてのブリーフィングがあるんです

アンジェラ様からの社内放送までに終わらせないといいけませんので」

のんびりと独り言を呟くカレンに声をかけたのは、先程エレベーター前にてカレンを出迎えていた女性だった

「ひゃっ!?す、すすすすみません！」

カレンはただでさえ新入社員の身でありながら初日から遅刻ギリギリの出勤をしたのだ、そこで更に遅れて他に迷惑をかけ続けるのは社会人としてカレンも危機感を覚えた

女性は更衣室の外でカレンを待っている

カレンは一分以内に着替えを済ませ、最後にロッカーの扉に設置されている鏡を見て身だしなみをチェックし、更衣室を出る

「終わりましたか、それでは所属チームのメインルームへ行きます

ついてきてください」

カレンが更衣室から出てくるのを確認すると、女性は速やかに移動を始めた

カレンはその後に続き歩き出す

目的地に向かう最中、カレンは静かな空気に耐えきれず、女性に質問を繰り返す

「あの…貴方は？私の上司さん…なんででしょうか」

その質問に数秒の間を作った後、女性は返答した

「私はレイン、安全チーム所属のエージェント兼チーフです

貴方の上司であり先輩…そういう認識で差支えありません」

レインと名乗った女性はカレンの方を見ることもなく淡々と告げる

「レインさん、ですね

私は…」

「カレン、26歳、158cm、51kg

R社単内の一般家庭出身、父母の三人家族で兄弟はいない

父は不動産会社の経営社長、母は秘書

年収670…単の不動産ならまあまあですね」

レインは抑揚のない声でサラサラとカレンの個人情報口頭で述べていく

カレンはそれに対し驚愕し、一旦足を止めてしまう

「な、なんでそんなこと…!?!」

「全て履歴書に記載されていますよ、自分で書いたことを覚えていないのですか?..」

それを聞いてカレンは一度安堵したと共に、別の疑問を浮かべる

「それって…レインさんは私の履歴書を全部把握している、ということですか?..」

「はい」

その疑問に対し、レインは短く肯定の返答をする

そんな話をしていくうちに、廊下から広い空間へ辿り着く

そこは緑に統一された空間であり、バラのオブジェクトが飾られている

「ここが安全チームのメインルームです

皆さん、お待たせしました、ブリーフィングを始めましょう」

案内されたメインルームにはカレンやレインのように風変わりな服を装備し、武器を持っている職員が二人ほどと、スーツのみの職員が二人いた

「こちらはカレン、新入社員です」

カレン、二人は出勤三日目のロイドとカウレスです」

紹介されたのは装備をしている二人の男性

青い髪の長身がロイド、黒髪で体格がいいのがカウレスだった

「そして…ロイド、ネツアクさんは？」

「来てません、またさぼってるか二日酔いじゃないすか」

「…」

ネツアク、という人名にカレンは首を傾げる

レインは無表情は変わらないが、どこか呆れ返ったような冷たい眼差しをしているようだった

「はあ…構いません、なんだかんだ始業には来ますから

本日は新しいアブノーマリテイが来ます、個別番号はF—01—8

7

この作業にはカレン、貴方に行ってもらいます」

名指しで初の仕事を言い渡され、カレンはびくりと肩を振るわせるしかし、意気込むように拳を握り締めては、明るい声色で返答する

「はい！頑張ります！」

アブノーマリテイ、という存在については新入社員研修時に資料から知識を得ている

彼らは人ではない化け物達であり、社はそんなアブノーマリテイ達を管理し、彼らからエネルギーを生み出しているのだ

彼らアブノーマリテイに行う管理作業は四つ

本能、洞察、愛着、抑圧である

「始業には管理人から作業内容が通達されるでしょう

他ロイドとカウレスはいつものようにO—03—60とT—01

—54の管理を

これでブリーフィングを終わります」

レインがそう言い渡した時、メインルームに設置されているスピーカーから音声流れる

『社員の皆さん、おはようございます

今日も皆さんの働きに期待しています』

放送はそれだけ告げ、終了する

優しそうな女性の声だった

「今がこの会社のほとんどを管轄する上級AI、アンジエラ様です  
さあ皆さん、これから管理人からの指示があるので聞き逃さず業務  
に集中するように」

レインの鶴の一声を境に、職員達は己の業務に取り掛かり始めた

「レインさんレインさん」

そんなとき、カレンがレインに小さく声をかける

「なんですか」

「あのスーツの人達は…?」

カレンは紹介されていないスーツ姿の職員を指す

「彼らはオフィサー、アブノーマリテイの管理作業に割り振られてい  
ない雑務係のようなものです

深くはお気になさらず」

「はあ…」

オフィサー、と呼ばれた職員も、メインルームを出たり入ったり忙  
しなく働いている

『カレン、F-01-87の洞察作業を』

スピーカーからは、先程と同じ女性の声が響く

「あ、呼ばれましたね

行ってきます!」

カレンはレインにそう言い、メインルームを出た

薄暗く生臭い廊下に顔を顰めながら、収容室に到達し…その扉に手  
をかけた

重い扉は、エージエントの社員証を電子ロックキーボードのカメラに翳し、各アブノーマリティの識別番号を入力することで開錠する

カレンはその開錠手順を踏み、扉を開く

その厚い扉の向こうにいたのは、大きな案山子

肘関節から先は垂れ下がり、顔は傘で見えやしない

ただ佇んでいる、それだけで異様な雰囲気を感じ取れる

「…」

初めてアブノーマリティと対峙するカレンにとっては、緊張感で収容室が満たされているように錯覚した

ただでさえこのアブノーマリティは人より大きく、圧倒的な存在感を放っているのだ

カレンは唾を飲み込みながら、作業手順の資料を確認し、洞察作業を開始した

収容室の清潔管理、音響確認、照明点検…収容室の環境整備を行うにあたり、カレンは黙々と作業を進める

しかし、作業中に視線を感じる

視線の主は、言わずもなわかりきっていた

案山子

それが、見えない目でカレンを見ている

目なんてないかもしれない、しかし視線はカレンを突き刺している  
彼女が視線を逸らす度、案山子はカレンの方を真正面に向き直している

カレンの中に恐怖が芽生える

早く作業を終わらせようと、カレンは残りの確認作業を手早く進めた

「どうでしたか、初めてのアブノーマリティは」

一日が終わり、カレンはぐったりとした様子で更衣室に入る



初日だけであの案山子の管理を五回も指示され、カレンは消沈している

そんな時、レインが更衣室に入ってきてカレンに話を振りかけた

「お、おつかれさまです！」

そうですね…あの案山子、ずっと私を見てる気がして…怖かったです

初めての事ばかりなのもあって過去一疲れました…」

「そうですか、明日も仕事はあります、今日は早く休むことを推奨します」

レインはカレンの二つ隣のロッカーを開き、装備を脱いでいく

カレンがシャツのボタンを締めた時、ちらりと見えた

上がキャミソールだけになったレインの右上腕に、何かが刻まれている

五枚の花弁の小さな花のロゴの入れ墨と、その上に「vol. 1. 0-575」と文字が書かれている

「…それ、なんですか？」

カレンは気になってしまい、気が付けば口から質問が零れた

レインはそれを聞き、ちらりと右上腕を見てから、シャツを着ながら答える

「ただの識別番号です

お気になさらず」

デリケートな質問かもしれないのに質問してしまった後悔と、返答してもらえたことの小さな喜びがカレンの心の中に入り混じる

しかし、カレンはそのを聞き、脳内にさらに疑問を浮かべる

(識別番号って…なんの?)

カレンは思う、まるで商品番号のようだ…と

しかし今日の前にいるレインは真正正銘の人間だった

人の技術が発展した世界で、人の形をしているのは人間だけのはずだ

都市には頭が定めたルール、規律があり、都市の人々はそれを守ることで都市は社会を築けている

いくつもある規律のうち、「人工知能の倫理改正案」というものがあり、それは「人工知能は人間を模した外見にしてはいけない」というものである

レインの脈打つ肌は機械の物とは思えないし、人間より機械的な物言いをしているのは、単に堅苦しい性分なのかもしれない

だからこそ、カレンはレインの腕に刻まれた番号が気になって仕方がなかった

しかし、社員寮に帰ってきたときには、カレンは疲労からかそのままベッドになだれ込むように横になった後、深い眠りについてしまった

翌朝

時間が遅れている時計の時刻を直すこともなく、カレンは再び八時十分に起床した

昨晩はシャワーも浴びずにスーツのまま寝てしまっていたこともあり、彼女は朝からピンチとなったのだが、それはこの物語にはほぼ必要のない一幕なので割愛しよう

カレンが予備に用意していたスーツを着て自室を出て社員寮の廊下を走っていると、男子棟へ通じるエレベーターから青い髪の男性が現れる

「あ…うす」

愛嬌の無い男、昨日レインが紹介した安全チームの先輩、ロイドである

「おはようございます！ロイド先輩！」

カレンはロイドに対し、姿勢を正して頭を下げ挨拶をした

挨拶や礼儀は社会の基本、それは両親に教え込まれたものだった

「…はよっす

あー…カレン、だったっすね

朝っぱらから元気っすね」

「元気というか、焦りというか…

もう8時15分です、早く出勤しないと…」

「そーいや、新入社員だったっすね

…その、なんすか…ガラじゃないんすけど、先輩として一つアドバイスというか、忠告なんすけど…」

ロイドはバツが悪そうに眉を顰めては頭を掻き、大きくため息をついてから覚悟を決めたようにカレンに向き合う

「安全チームのチーフ…レインについてなんすけど

あんまり信頼しない方がいいっす」

そのロイドの言葉に、カレンは首を傾げる

「なんでですか？確かに少し…とつつきにくいというか…お堅そうで

すけど、いい人ですよ

「昨日も初対面の私に対して、よく気にかけて下さいましたし」

「そうじゃないっす」

「なんというか…俺、言葉にするのは得意じゃないんすけど」

「あの人、俺と同期なんす」

「同じ日に入社して…そんな時、アンジェラ様と話してるのを見たんす  
会話も少し聞いたんすけど…」  
「施行575回」  
「パターンRで実施します」  
「互いに良き実施内容であることを…」  
とか、よくわかんないこと  
と言ってたっす

「あの方は、普通のエージェントとかじゃなくて…」

「言い表しがたい違和感を抱えるように、ロイドは歯切れ悪く話す」

「カレンはそれを聞きながらも、レインを庇うようになんとかロイドの勘違いであるように反論する」

「でもそれは、レインさんが信用に値しない理由にはなりませんよね…?」

「それだけじゃないんすよ」

「俺、元々コントロールチームで、カウレスは情報チームなんすよ  
安全チームに配属されたのは、君が来る前日っす」

「元々は別の職員三人が安全チームにいたんすけど…」

「え、安全チームには今レインさんを始め、ロイドさんにカウレスさん、そして私…」

「前の三人はどこへ行かれたのですか？」

「ロイドは思い出すのも苦痛のように顔を顰めながら答える」

「…退職したっす」

「…退職?」

「死んだんすよ、この会社で」

「ここでは社員が死ぬと「退社」って扱いになるんす  
強制的に退社させられることもあれば、誰一人ここから出たことは  
ない…」

「来るもの拒まず、去る者には死、なんすよ」

「その話は決して簡単に告げられるものではなかった」

しかし、簡単に死という事が告げられるのは、この会社だからだろうか

昨日管理したアブノーマリテイ

アレに限らず、ここにいるのは人間とは程遠くかけ離れた存在であり、何よりも人間に近い存在なのだ

都市の人間、さらには巢の人間にとつてはあまりにも未知

未知とは一番の恐怖、それはカレンも昨日の仕事で痛感していた

未知の存在、アブノーマリテイ

以前自分が配属されている安全チームにいた先輩たちは、そんな未知に殺されたのだろうか

「話が逸れたんすけど…その退社理由は無論、収容違反したアブノーマリテイに殺されたつす

けど、そんな時…これは他の職員づてで聞いたんすけど…

…レインが、収容違反したアブノーマリテイを鎮圧した折に、安全チームの職員を囮にしたとか…」

「…囮？」

「その日はついてなかったつす、別のアブノーマリテイも収容違反をして…安全チームは二体のアブノーマリテイに挟まれたつす

そんな時、レインは残る二人の職員をアブノーマリテイの餌にして背後に回り込んで、アブノーマリテイを鎮圧したつす

二体のアブノーマリテイに挟まれた職員は…一人は重傷、もう一人はパニックになり…二人ともその後死んだつす」

自分が来る前の惨劇を語られ、カレンは半ば放心していた

「その…レインは、自分の命優先で他人を足蹴にする…そんな風に見えた、つて知人は言ってたつす

…誰しも自分の命が大事なのはそうなんすけど、レインには…必死そうじゃなくて、それが当たり前のように…

死んだ職員に追悼することも嘆くこともせず、次の瞬間には通常業務に戻ったというか…

並の人の精神力じゃない、というか…」

「何の話をしているんですか？」

ロイドが夢中になって話しているその時に、別の声が割って入る  
二人が声の方へと振り向くと、そこには安全チームチーフ：レイン  
が立っていた

「れ、レインさん……！」

「……」

「もう出勤時間をとうに過ぎています」

カレンに関しては昨日の今日でこれですか？」

カレンが携帯端末を確認すると、時刻は8時31分と表示されてい  
た

「悪い、レイン」

俺が悪絡みしたんす、カレンは俺に付き合ってくれただけで……

だから俺はともかくカレンの遅刻は見逃してやってほしいんす

これでもこいつは急いでたんす、そんな時に俺が長話しちまって……」

「なりません、どのような理由であれ、遅刻は遅刻

そんなに話がしたいのなら早く出勤して控え室でお話しされれば  
よろしいじゃないですか」

正論の槍にカレンとロイドが突き刺されている中、奇妙な音が響い  
てくる

「まあ落ち着けよ、そうかつかすんな

遅刻なんて、この会社じゃかわいいもんだろ？」

音の正体は機械音、箱型のロボットが三人の前に現れ、仲裁をし始  
めたのだ

「ネツアクさん」

「ネツアク……さん」

レインとロイドが揃って箱の名を呼ぶ

「……これが、昨日レインさんが言っていた……」

深緑色の長方形の箱

鉄でできた手足が付いており、箱の端には目のようなレンズらしき  
ものが見受けられる

(「これ……ロボット?」

まさか、AI?)

このご時世、機械が人間より上の立場になるのは何もおかしいことではなかった

さらには、AIは人型であることを禁じられているため、このような箱型のAIなのだろう

「新入りか…残念だな、こんなところで働くことになって

まあ今から走ればアンジェラからのお咎めもないだろう」

「ネツアクさん、貴方がそんなだから社員に示しが…」

「業務開始には間に合えば問題ないだろう？」

「ここではどんだん人が死んでくんだ、少しくらい平穏な時間が多くたってバチは当たらないだろうさ」

言い合いをするネツアクとレインをよそに、ロイドはカレンに向け「早く行こう」とジェスチャーし、二人は駆け足でその場を後にする後ろからレインの「あ、ちよつと！」という大きな声が聞こえていたが、二人は振り向かず本社へと向かった

(…施行、575回…)

カレンは先程聞いた言葉に引つかかっていた

その数字に、既視感を覚えたのだ

(…まさかね)

杞憂である、と首を振り深く考えないことにした

そのまま二人は、仲良く安全チームメインルームに到達した

業務開始直前にはレインに冷たい眼差しで説教されたのは、割愛する

「…ふう」

出勤二日目、安全チームのメインルームで待機しているカレンはため息をついた

結局遅刻は覆らなかったし、レインにはお小言を言われてしまう始末

それでも「社会人たる者、規律や時間も守らねばなりません…今後の改善に期待しています」と優しめに諭されたのだ

カレンにはやはり、ロイドが言っていたことが何かの間違いのよう感じてしまう

しかし、ひとつ引つかかることがある

ロイドが言っていた「施行575回」、その575の数字

それは偶然にも、昨日見たレインの右前腕の入れ墨の後半ナンバーと一致しているのだ

これは果たして偶然なのか

偶然じゃなかったら一体何なのだろうか

「…あれ、そういえば」

カレンは昨日の朝、レインが言っていた言葉を思い出す

「大丈夫ですか？」

エレベーターで上がってくると比較的長い時間エレベーター内にいましたでしようし、無理なさらず…」

エレベーターで上がってくる

カレンは入社したばかりで、本社に来て地下へと降りる為にエレベーターで下っていたはずだ

「…いや、聞き間違いかも…昨日の事だし、急いでだし、一言一句正確に覚えるほど私賢くないし」

一度自覚した違和感は、波のように次から次へと襲い掛かる



…もし、もしロイドの言っていたことが正しかったら  
レインはこの会社の上級A I、アンジェラとなにか個人的な繋がり  
がある？

パターンといい互いに良き実施内容といい…なにかの実験的な物  
言いであるのが気にかかる

カレンの頭の中で、疑問が次々溢れ、頭の中をぐるぐる回る  
そんな時だった

「カレン」

声をかけられた

レインだった

「大丈夫ですか？ 顔色が悪い様子ですが」

「どうやら深く考えすぎていたせいか顔に出ていたらしい

「体調が優れないのなら早退を勧めます、仕事に関わりますので」

「あ…いえ！ 大丈夫です！ 心配をおかけしてすみません！」

「…そうですか」

カレンは深く考えるのをやめ、気丈に振舞った

そんな時、カレンに管理指示が通達される

『カレン、F-01-87の洞察作業を』

昨日と同じ、案山子の管理だった

「あ、呼ばれました！ では行つてきます！」

カレンはレインに手を振りながらメインルームを後にする

エレベーターに乗り、下に降りれば案山子の収容室だ

カレンは昨日のように収容室に入り、昨日のように洞察作業を始めた

「…今日もガン見、ですか…」

視線を一瞬でも逸らせば、案山子はカレンの方に向き直っている

恐怖こそあるも、昨日よりは落ち着いている

「…そんなに見つめられても、私はあなたに何もあげられません」

そんなことをぼやいているうちに、洞察作業が完了した

作業結果は良好、カレンは気分が良くなって軽い足取りでメイン  
ルームへと戻った

「ただいま帰りました〜!」

そういうと、いの一番にレインの「おかえりなさい」が返ってくるやはり、カレンにはレインが危険人物には思えないのだ

そう感じた時、メインルームに緊急警報が鳴り響く

メインルームだけじゃない、緊急警報は社内全体に広がっていた

『F-01-87が収容違反した』

スピーカーから流れたのは、今朝遭遇した箱型AI、ネットアクの声だった

アブノーマリテイが収容違反：収容室を脱走したという旨の内容である

「F-01-87…案山子!？」

カレンは混乱する

彼女は何も作業を失敗していない、作業結果も良好だった

それにも関わらず、案山子は収容違反を起こしてしまっている

『安全チーム、レイン、カウレス、カレン

情報チーム、クラウド、ココ、サナ

鎮圧命令です』

続いて放送されたのは、管理人からアンジェラづつで通達された鎮圧命令だった

「行きましょう」

先だってレインがメインルームから駆けだす

「新入り、管理作業時もそうだが、鎮圧時は特に気を引き締めろ」

カウレスがカレンと共にメインルームから案山子の元へと向かう際、その声をかけてくれた

「は、はい」

他チームの職員も駆けつけ、エレベーターで下へと降りていく

案山子の収容室がある廊下、そこには確かに収容違反した案山子が立っていた

しかしその風貌は収容室にいた時とかなり違っている

傘で見えなかった頭は上半分が砕けており、体は案山子とは思えないほど滑らかに動いている

それこそ、関節なんてないかのよう

「……」

すでに廊下に転がっている人間の体を見て、カレンは吐き気を覚えた

彼らはオフィサーだったもの

とうに一ミリも動かないただの肉と骨の集合体だ

「カレン！ シャキツとしろー」

カウレスの叫びに、意識がハッキリとする

カレンの目前に案山子が歩み寄り、その凶器的な手を振りかざしている

避けないと、そう頭では理解しても体は動かない

赤く汚れた鍬の爪がカレンの頭上に落ちてくる

「……」

キーン、という甲高い金属音が響く

カレンの目の前には案山子の鍬……その鍬の爪を防ぐように黒と紫の槍が横から伸びている

「れ……レインさん……」

「無事ですね、よろしい」

槍の持ち主であるレインが、横から案山子の攻撃を防いでいた

そのままレインは案山子の手を撥ね退け、巨体の死角を潜り抜け案山子を槍で攻撃する

その身軽さ、戦闘の強さは他のエージェントよりも頭一つ抜けている

「……」

カレンは歯を食いしばった

自分はレインに助けられたのだ

先程まで彼女を疑っていたのがバカバカしく感じた

カレンは手に持つ武器を握り締めた

職員が装備する防護服と武器、それはE・G・Oと呼ばれるアブ

ノーマリテイから抽出した特殊な装備である

カレンが身に着けているのは「懺悔」

機能こそ弱いが汎用性の高いE・G・Oである

カレンはレインを疑ったことに小さく懺悔し、案山子に向かってその武器を振りかざす

複数人の職員の攻撃により、案山子は次第に動きが弱まっていく  
その時、案山子の口のような箇所から何かが伸びていく

それは長い触手のように蠢き、先端を傘のように広げ、レインの元へ伸びていく

「レインさんー!」

カレンは叫んだ

あれは何かまずい、カレンの直感がそう言っていた

その触手の傘がレインの目前まで迫ったとき

レインは一歩踏み出し、カレンの元へ瞬く間に迫り

「えっ」

そのままカレンの服を掴み、案山子の触手へと投げた

「レインさ…」

「さよなら」

たった四文字

眉ひとつ動かさず、レインは案山子にカレンを差し向ける

案山子の触手がカレンに伸び、傘がカレンの頭にまとわりつく

カレンは状況を理解できないまま、その感触を認識し…次の瞬間、

頭に何かが貫通した

「い…あああああっ?!」

頭に刺さったものは管状の物か、カレンの頭の中から何かが吸い出されている

「いやあっ!やだああああ!!やめてっ!吸わないでっ!!やだ…やだああああ!!」

プシュ、プシュと血が隙間から噴き出る

「たすけてえええ!だれか、おか、おかあさん!おとうさああああ!!」

股の下が温かくなる

もう何も見えない

何も聞こえない

カレンという人間であることすら自覚できない

彼女の脳は、全て吸い出されてしまったのだから

The right mission, The failure of the only mistake I

静寂のみがその場を支配する

縦に真つ二つに裂かれた案山子は血を吹かせることもなければ、事切れることもなく蠢いている

やがては塵と化し、その場から消え去っていく

その場の誰もが動けずにいた

ただ一人：手に持つ槍で案山子を割いた張本人、レインを除いて「鎮圧完了です、皆さん、管理業務に戻りましょう」

いつもの変わらない無表情が、その場にいるエージェント達に底知れぬ恐怖を抱かせる

「…お前：チーフ！お前、今自分がしたことわかってんのか!？」

お前は自分の部下一人身代わりにしたんだぞ！お前、部下を殺したようなもんじゃないか！」

カウレスが怯えた目のまま、レインの胸倉に掴みかかる

怒りとも呼べず、嘆きとも言えない、彼がぶつけるのはただ「どうして」という疑念だけである

レインは案山子による攻撃に対し、カレンを案山子の方へ投げたことでカレンが代わりに案山子により殺された

案山子はカレンの脳を吸い出し、満足げに活発になった

脳を吸い切ったその一瞬の隙を尽き、レインは案山子を切り裂いたのだ

「レインさん、貴方この間もそうでしたよね…?」

貴方の部下三人、貴方が囮にして殺しましたよね!？」

他チームの職員も声を上げる

恐怖に歪んだ顔は変わらないが、それでも震える声を必死に絞り出す

レインは自分に掴みかかったカウレスを見上げる

カウレスはその瞳を見て、脊髄に氷の針を何本も刺されたような錯覚に陥る

レインの紫の瞳は、虹彩こそ美しいが…瞳孔はあらゆるものを吸い込んでしまいそうな奈落を思わせるほどに深く、暗かった

「…皆さんがそこまで気楽なものだったとは、残念です

ここはロボトミー社、都市を支える翼の一つ

故に、生半可な覚悟では全滅してしまいます

アブノーマリテイの管理は危険が伴う、皆さんここに就職なさつて、それは一番理解していただけますよね

今更死人が出て、なぜそこまで騒げるのですか」

「お前…カレンを殺す前に、カレンを助けていただろ！なのになんて…」

カウレスが胸に抱える疑問をぶつける

それに対し、レインはさも当然のように答える

「なんで…？」

私の存命に役立たないうちから勝手に死なれたら勿体ないでしよう？」

その言葉に、カウレスも、他チームのエージェント達も絶句する

勿体ない、たったそれだけでカレンという一人の職員は生死を扱われたのだ

レインは緩んだカウレスの手を解き、防護服の襟を直しながらエージェント達の間を通り抜け、メインルームに戻る

メインルームにいたのは、ロイドのみだった

「…やったんすね」

「何がですか？」

「…いや、なんも言わねつす…」

ここは、そういう場所だし…裏路地に比べたらここはいいところつすから」

ロイドは視線を伏せ、暗い顔を見せながらそう呟いた

「賢明な判断です」

レインはその後も通常の業務を行った

それは他の職員も同様であるのだが、数名のエージェント達はわだかまりを感じたまま、一日の業務は終了した

その日の終わりに、レインは更衣を終えスーツ姿で管理業務施設内を歩いていた

コントロールチーム管轄のO―03―03・たった一つの罪と何百もの善、F―04―83・妖精の祭典、F―05―52・蓋の空いたウエルチアース、O―09―95・輝く腕輪

情報チーム管轄のO―01―12・オールドレイ、T―02―99・空虚な夢、O―02―98・ポーキュバス、T―09―77・熱望する心臓

安全チーム管轄のO―03―60・宇宙の欠片、T―01―54・捨てられた殺人者、T―09―85・何でも変えて差し上げます、F―01―87・知恵を欲する案山子

夜の散歩にはあまりにも物騒で物々しい社内で、レインは右上腕を撫でた

「…情報更新、記憶送信

母様、レイン初期型575は本日も己が機能を全うしました」

まるで祈りのようなその言葉

今まで無表情だった彼女の顔が僅かに歪み、聖女のような微笑みを浮かべた

「…」

レインは一通り社内を徘徊し、その日の情報を更新させる

レインという人間は、いわばコピー人間である

オリジナルの「レイン」という人間から、肉と骨の細胞を抽出し、「母様」の血液のDNAと組み合わせ作り出されたクローン体

それが彼女の正体である

クローン達はこのL社の「周期」ごとに新たな個体が送られてくる現在、反復575回目

これからも続くと予想されているこの繰り返しは、ひとつのシナリオを完遂するための地獄だ



ここでクローン達は周期ごとの情報を取り入れ、「本社」へ送信し今も製造運用段階のクローン達と同期

その情報を基に、「母様」はクローン体に改良を施していく  
その目的は子供達であるクローンにも知らされてはいない

それでもクローン達は「母様」の言うことに従順でいるのだ

もともとそういうふうなシステムが施されていることもあるが、クローン達には母と慕う魔女しかないのだ

「…帰りましょう」

レイン575は社員寮の方へと戻っていく

明日も彼女は、母の命令と自分の本能のまま働くのだろう

オリジナルに課せられたとある実験により強化された本能

生存本能に従い、他の命を踏み躪り続けるのだ

The right mission, The failure of the only mistake II

本社業務棟から社員寮へと続く廊下にて  
その箱は倒れていた

「…」

レイン575はただただそれを見下ろし…もとい、見下している  
レイン575は一瞬箱を足で蹴ろうかと真面目に悩んだのだが、その発想を理性で取り消し、普通に手で触れ揺さぶった  
「ネツアクさん、こんなところで休まないでください

ちゃんとセフィラ用の休憩室、あるでしょう」

廊下で倒れていたのは、レイン575の上司であるAI、ネツアクであった

「んあ…ああ…寝てたのか…?」

「寝ていました、廊下では通行の邪魔です」

ネツアクは体を起こし、壁に凭れ掛かるように座る

「…また一人、使ったんだな」

ネツアクの言葉に、レイン575は淡々と答える

「はい、何か問題でも?」

都市では人間の命など紙きれより軽いものです、私は彼女に紙切れよりも価値のある有効活用をしただけです

カレン、あの職員のお陰で私は生きています」

「はは、ここじゃお前みたいな奴が一番強いんだろうな」

レイン575はその手に一つの小瓶が握られているのを目にする

「…機械が麻薬ですか」

「何かおかしいか?」

まあ、アンジュエラには止められたがな」

「いえ、特に問題はありません

ネツアクさんが使い物にならなくなっても、機械は交換が利きます

からね」

ネツアクが持っていたのは、緑の液体が入っていた薬品瓶

これはアブノーマリテイ達から抽出されるエネルギーの一種、エンケファリンであった

それは接種者に多幸福感を与えると同時に、幻視や幻聴といった幻覚症状を引き起こす麻薬品でもある

「この仕事はまともじゃやってられないからな

凄惨な現実から逃れたい奴が多いだろ」

「貴方もその一人だと?」

「そうだ、俺は生きていたくないからな

こんな、人の命を任せられる仕事になんて就きたくなかったよ」

緑の眼のようなレンズが、苦しそうに濁った気がした

その言葉は、ネツアクにとっての本心なんだろう

わざわざ?をつく必要などないから

しかし、だからこそレイン575は疑問に思う

「なぜ…生きてたくないのですか

それは、死にたいということですか?」

ネツアクの願い

それは、レイン575にとって一番理解のできないものだった

「ああ、そうだな

もう長いことまともに眠れていないからな…長く、長く…眠り続けたいもんだ」

「それが死ぬこと、だと?」

今生きていて、どうして生を手放したいと思うんですか…理解できません」

レインというクローン体達は、ただコピーされただけではない

ある薬品によりその潜在的な生命としての欲求が極限まで引き上げられたもの

生存本能が最大にまで解放されているクローン体の一人であるレイン575にとって、「死にたい」という願いは到底理解のできないものだった

それを訴えるレイン575に対し、ネツアクは静かに声を発声させる

「じゃあ聞くが…」

アンタは、どうしてそこまで生きたいんだ？」

疑問を返され、レイン575は硬直する

「…生きるのは生物としての基本的な欲求です

そこに、理由などは不必要ではありませんか」

「アンタは別に自分がかわいいからとか死ねない理由とかがあるわけじゃないだろうな

俺達と同じで、替えも利く

ただ、生きる事が行動理念なんだろうが…生きる理由も目標もないそれって、死ぬのとどう違うんだ？」

生きる理由

生きる目標

それが、生きることに必要な条件なのか

否、そんなことはないはずだ

生きることに条件も資格も理由も必要ない

しかし…目指すものもなくただ生きる、それは果たして生きるということなのか

「もしかしたら、死んだ先もこの都市と変わらない世界なのかもしれないな

もしかしたらここよりずっと悪いかもしれないし、ここよりもずっといいかもしれない

死んだ後の事なんて誰にもわかりやしなさいさ

けど、少なくとも、今の俺にとってはこんな地獄から解放されてまともにゆっくり眠るほうが幸せなんだ

アンタはどうだ？

他人の命を足蹴にしてまで生きることには執着する理由や目標はあるか？

誰かを言い訳にしない、アンタ自身の気持ちだ

アンタも、誰かのコピーなんだろうが…今生きてるアンタは、れっ

きとした個人だろう」

「…私は、私達は、母様の子です

母様により生み出された、その母様の命に準じるのは自明の理です  
その母様が「L社で生き延びろ」と命じているのですから、設計さ  
れた生存本能を頼りに生き続けるのになんの問題があるのですか」

予想だにしていなかったネツアクの話

その言葉に対し、レイン575は無意識に感情的になっていた

「コピー元の性分か？案外気が短いよな、アンタ

…話過ぎたな

ふあ…んじや、また明日な」

ネツアクは立ち上がり、社員寮とは別方向へと歩き出す

「…そういや」

しかし、ふと足を止めては先程までネツアクがいた場所から視線を  
外さないレイン575の方へ振り返る

その横顔はいつもの涼しい顔に見えながら、どこか不穏な様子だっ  
た

「アンタと俺、どこかで…」

…いや、やっぱりなんでもない、忘れてくれ」

言おうとしたことを取り消し、ネツアクは立ち去る

機械がいなくなつてから、レイン575はそちらを見やった

「…生きること、理由も目標も…必要、ないでしょう

生き延びることは、生命の基本的欲求なんですから…」

彼女はこの時、この会話を他愛もなかったの問答とした

そのまま記憶保存をし、後日データを送るために頭の隅に追いやつ  
た

しかし、この問答こそ、レイン575の「人生」を大きく変える事  
となるのだ

The right mission, The failure of the only mistake III

翌日

「異動になったんす」

ロイドはそれだけ言い、安全チームから教育チームの方へ向かう既に報告は受けているだろうが、一応の礼儀としてロイドはレインに挨拶をした

「…」

しかし、いつもなら「そうですか、頑張ってください」といった淡々とした返事が返ってくるはずなのに、この時のレインはいつもと違どこか遠くを眺めるように意識が集中していなかった

「…どうしたんすか、チーフ」

「知らね」

カウレスに聞いてみるも、カウレスは心底どうでもいいように冷たい返答をする

ロイドは深く追求せず、ブリーフィングに間に合うために急ぎ足で教育チームのメインルームへと向かう

「ロイドさん、ですな」

はじめまして、私は教育チームのセフィラ、ホドです

貴方以外のエージェント達は皆新入社員だから、早速だけどリーダーをお願いしますね」

教育チームのセフィラは、女の声をした茶色の箱のロボットだった頭についているアンテナのようなものを眺めながらロイドはぼんやりと返事をする

「はあ…いつすけど」

「ホド」

数名のエージェントとセフィラがいる教育チームメインルームに、美しい女性が現れる

背が高く、タイトスカートのスーツの上に白衣を着ており、そのスタイルの良さは一目見ただけで誰もが息を？んだ

顔の造形も、切れ長の瞳や困り眉、どのパーツをとっても崩れることなく秀麗であった

長い空色の髪も、一本一本が絹のように細やかで、まるで人間離れしているようだった

「アンジェラ…いらっしやい」

ホドが嬉しそうに彼女の名前を呼ぶ

アンジェラ

セフィラよりも高位な、この会社の総管轄AIの名であった

「皆さん、こうやって対面するのは初めてですね

入社試験や研修説明会では立体通信でしたから

改めまして、私はロボトミー社を管理する管理人の補佐AI、アンジェラです」

アンジェラは柔らかい微笑みを向け、金色の瞳をエージェント達に向ける

「本日からここも管理人の指示により運用が始まります

搬入されてきた新たなアブノーマリティの管理、頑張ってください

ホド、皆さんのバイタルチェックや精神汚染度の管理、お願いしますね」

「はー…

それでは皆さん、業務を開始しましょう」

アンジェラはエージェント達に激励を送り、そのままメインルームから立ち去っていく

（人工知能の倫理改正案ガン無視じゃないか…）

ロイドは都市の規律事項の一つを思い浮かべながらも、会社とはそういうもんだと割り切った

（いつか爪…最悪調律者に襲撃されたら諦めるしかねえな…）

無気力そうな姿勢のまま、ロイドは後輩エージェント達に適当な仕事の説明を行う

そこで、メインルームのスピーカーからアンジェラの声が響き出す

『ロイド、F-03-05の本能作業を』

ロイドを指名した管理作業の通達だ

「新しいアブノーマリテイっすか…」

んじゃ、行つてくるっす」

ロイドはメインルームを出、エレベーターに乗り込んでアブノーマリテイの収容室を目指す

新たに収容されたアブノーマリテイの収容室…その扉の窓をロイドは覗き込む

しかし、そこには何もない

文字通り、何にもないのだ

収容室の内装もなく、アブノーマリテイの姿も見えない

窓の向こうから黒い塗料でも塗りたくられたかのように、窓は真っ黒に染まっていた

「…ここで死んだら、社員寮に隠してるエロ本燃やしてほしいっすね…」

ロイドは覚悟を決め、扉を開錠する

収容室の中に入ると、そこは普通の収容室であった

先程の窓から覗いた光景とは違い、何ら変わりのない空間

そこに、それは存在していた

黒い水槽

鉄格子に囲まれた水槽の中に、黒い液体がいっぱいになって置いてある

「…これが、新しいアブノーマリテイっすか…」

ロイドが観察していると、小さな声が聞こえる

「…い…のお…」

その声は、下の方から聞こえる

ロイドが視線を下げると、水槽内に小さな球が沈んでいる

「…本体はこっちっすか？」

ロイドは膝を曲げ、しゃがみこんでそれを注視する

それは、美しいターコイズブルーの瞳の眼球だった

「あ、はじめまして、そうです、私がおアブノーマリテイです」



「あ、これはご丁寧にどうもっす

…じゃないんすよ！普通に会話して挨拶できるアブノーマリテイなんているんすか！しかも目玉が！」

「ま、まあ世の中いろんなアブノーマリテイがいるから…」

ロイドは驚いて仰け反り、眼球を見つめる

眼球は水槽の中を転がりながら、ロイドに話しかける

「私の情報はいずれ解放されるでしょう

あ、まずは作業ですよね」

あまりにも慣れすぎているそのアブノーマリテイの言動にロイドは拍子抜けするも…仕事を思い出し、本能作業を開始する

作業結果は…

「…PEが五つ…当然悪いっすね…

本能作業は好かないっすか」

「あんまり…あ、でもそんなに気に病むことじゃないですよ、大丈夫です

私、ここの職員さんを害するつもりは全然なくて…むしろ、何もしないことが一番職員さんにとって安全なの、わかってますから」

職員に対し気に掛けるアブノーマリテイ

異様な存在に訝しみながら、ロイドは退室する

(…なんだったんだ、あのアブノーマリテイ)

あまりにも友好的過ぎるアブノーマリテイ

作業は悪かったのに、ロイドにはあまりダメージが入らなかった

攻撃属性はPALE、今の装備じゃまともに耐えきれない希少な属性であったのにも関わらず、だ

メインルームに戻り、しばらく回復に専念していると、再びロイドに通達が届く

『ロイド、F-03-05の洞察作業を』

「…馬車馬のように働けと」

しかし、この判断は正しいこともロイドは理解している

情報の少ないアブノーマリテイの情報を集めるのには、繰り返し作業を行うしかない

しかし、攻撃属性がPALEであるのは判明している以上、体力や耐久力のない新入社員にさせては簡単に死んでしまうだろう

ロイドは重い腰を上げ、再び収容室へと向かう

「あれ、おかえりなさい」

「えと…ただいまっす」

ロイドはF―03―05の作業を行う

「根源分類はF、童話…伝承や神話といった部類っすか

タイプ03の宗教から見ても、そういう物語といたところから発生したんすか」

「うん、まあ…私の大元からするとそうなのかな

如何せん、辛くて苦しくて悲しくて…次に目を覚ましたら、こんな形になってたから」

「信仰されている存在なんすかね」

「どうだろう、もしかしたら恐れられているものかも」

「自分の事なのに、なんか他人事見たいっすね」

「ははは…なんで私がこんな形なのかは、私も知らないから…」

洞察作業、次いでは愛着作業も完了する

洞察作業は普通結果、愛着作業はギリギリ普通結果となっていた

「残るは抑圧作業をして…その結果から良い管理方法を模索するんすかね」

ロイドがメインルームに戻ってくると、ホドから資料を手渡される

「PEが31貯まったので、管理人が基本情報を開放してくれました」

「あ…どもっす」

ロイドは資料を受け取り、一通り目を通す

「F―03―05、無の世界蛇

クリフトカウンターは5

攻撃タイプはPALEの5く7

E―Boxeの容量は35

気分範囲はともかく…

危険レベル…ALEPHって…」

ALEPH

それは、L社が規定したアブノーマリテイの危険度ランクの最高位である

危険レベルはZAYIN、TETH、HE、WAW、ALEPHの順で高くなっていく

F—03—05：無の世界蛇は、その最高位の危険度であるのだ

「…一見すると危険そうに見えないが、注意が必要ってことっすね」

ロイドに管理指示が通達される

無の世界蛇に、抑圧作業

ロイドは腰を上げ、収容室へ向かう

相変わらず扉の窓は真っ黒だが、ロイドは構うことなく開錠する

「今日だけで四回目ね

何か私の事がわかった？」

目が、ロイドを出迎える

鉄の折に閉じ込められた眼球が

ロイドは壁に凭れ掛かりながら語り掛ける

「アンタの名がわかったっす

無の世界蛇：それがアンタの名前っすね」

それを聞いた無の世界蛇は、その美しい瞳に影を宿す

「…世界蛇…ああ…そっか…」

私：空の星になれなかつたんだ」

不可思議なことを呟いては、時折そのターコイズブルーの瞳を赤く

変色させている

暫くの沈黙の後、無の世界蛇は先程と変わらない様子に戻る

「作業をしようか」

ロイドを促すように話しかける無の世界蛇に、ロイドは複雑な気持ちになりながら作業に取り掛かる

(…なんか…コイツ…

…人間、みたいだな…)

その違和感に囚われつつ、ロイドは私情を割り切り、仕事に取り掛かった

The right mission, The fate of the only mistake IV

同日

レイン575は、朝から思い悩んでいた

昨夜の問答について、考えを巡らせていた

「…」

「アンタは、どうしてそこまで生きたいんだ？」

ネツアクから問われた言葉が、頭の中で堂々巡りを繰り返していた  
「どうして…」

理由なんて考えたことはなかった

目標なんて考えたことはなかった

何がしたいだとか、こうありたいだとか、そんな思想はない

生まれる前から、彼女達は魔女の子どもであり、道具なのだから

「…」

「…あ、あの…」

隣から声をかけられる

今日入ったばかりの新入社員だった

「ち、鎮圧指令です…捨てられた殺人者の…」

「…わかりました」

指示アナウンスを聞き逃すほど、今のレイン575は心ここにあらずといった様子であった

レイン575は槍を手に持ち、メインルームを飛び出す

収容室へ続く廊下に、収容違反をした捨てられた殺人者がいる

「う、うわあああー」

そこに、襲われそうな新入社員がもう一人

レイン575は足に力を籠め、一気に跳躍し、捨てられた殺人者の背後を取り、その槍で貫いた

「…！」

「全く…手を煩わせないでいただきたいですね」

捨てられた殺人者は塵となり、やがては収容室に戻っていた

「…無事ですか」

「え、あ、は、はい！」

尻もちをついていた職員は立ち上がり、勢いよく頭を下げた

「ありがとうございます！助かりました！」

「…礼を言われるほどでは…」

「何かお礼させてください！あ、俺、オーウエンつていいいます！自己紹介聞いてなかったっばいんで」

「…安全チームチーフのレインです」

勢いのある新人に気押されながらも、レインは脳内の情報を探っていく

(オーウエン…巢の大学卒業生でそのまま社に入社…)

「そうだ！今日晩飯どうっすか！…この社員食堂の飯うまいって聞いたんですよ！カウレス先輩から！」

「いえ、私は…」

「チーフは何が好きですか！俺はやっぱカツ丼！大学受験も入社試験もカツ丼で乗り切ったんですよ！」

「…」

勢いがありすぎて話を聞いていない青年の話聞きながら、レイン575はメインルームに戻っていく

先程死にそうになっていたのにこの切り替わりには、正直レイン575も驚いていた

やがてその日の業務を終え、レインは更衣を終え控え室へ出てくる

「あー！レインさ〜ん！」

犬のように元気なオーウエンが彼女に駆け寄ってきた

「約束っす！晩飯行きましょう！」

「…」

レイン575はその日の終わりに社内を巡回し、情報を更新しては

母達の元へ送るといふ仕事が残っている

しかしオーウエンの誘いを断れば問い詰められそうだし、社内の方へ戻るのを見られては更に面倒なことになりそうだと判断したレイン575は、彼に引つ張られるまま社員食堂へと連れられる

「レインさんは何が好きなんすか」

「…好物はありません、嫌いなものも

食事とは生きる為のエネルギー摂取、バランスよく健康に良ければ何でも…」

「え！なんですかそれ！つまんなくないですか！」

オーウエンの遠慮もクソもない率直な返しにレイン575は少しむかつきながらも、冷静に返答を返す

「はい？」

面白くする必要なんてありますか？」

「ありますよ！せっかく生きてるんですから！」

都市の生活って息苦しいけど、嫌なことだけじゃ気が滅入りますから

好きなもん増やして幸せに浸れるときは多くあつた方がいいんです

好きも嫌いもない人生なんて、生きてる！って感じしないじゃないですか

あ、食券機の使い方がわかります？」

能天気かと思えば、唐突に哲学を語りだすオーウエンに、レイン5

75は驚愕する

「…好きなものがあつた方が、人生の質が潤う…ということですか」

「ああそうそう！そういうことです！」

「ここもおっかなびつくりなところですからね、飯くらい好きなもん食って「さあ明日も頑張ろう！」って、生きる気力にもなりますから！」

生きる気力

人生の質

そういうものは知らなかった

生きること、ただそればかり念頭に置いていた  
どう生きるかは、生きる理由や目標に繋がる

「…好きなもの」

必要最低限以上のこと

それこそ、彼女の求める「生きること」をより良い方向に導くのだ

「…気になるものはあります」

「お、なんですか?」

レイン575は一つのスイッチを指さした

そこには、「ニンニク増し増しネギ増量豚骨ラーメンチャーハン定食餃子三人前付き」と書かれていた

「レインさんワイルドっすね! いいんですか女の子がそんなもん食つて!」

「いけませんか?」

「いや! むしろチョコ痺れるっす! それで行きましょう!」

俺もメガ盛り行きます!」

オーウエンは二枚の食券を購入し、カウンターへ提出する

「今は混んでますから、先に席に行きましょう」

オーウエンについていくまま二人席に到着し、レイン575は椅子に腰かける

暫くすると、オーウエンが受け取っていたブザーが鳴り、オーウエンは食事を取りに行く

「…好きなもの」

食事は栄養、睡眠は休息

どちらも生存には欠かせない要素であり、三大欲求のうちの二つに数えられる

彼女達は、必要最低限の物のみで生きてきた

無駄なく、効率よく、生き続けられればいい

故に好き嫌いなんてものはなかった

しかし、好きと嫌い、以上も以下も、人間にとっての娯楽となる

趣味、好物、幸福…それらプラスの要素が、生きることによりよくしてくれるのだ

より幸せに生きたい

生存本能の先にある幸福的欲求は、誰もが持つものなんだろう  
しかし、コピーされたレイン達にそんなもの持ち合わせていない  
いつまでも生存本能のみで、成長を促されていない

レイン達の母は、彼女達を道具として見ているし、子供達もそれが  
当たり前としていたのだ

(私にとっての幸せとは、なんでしよう)

彼女の中に、昨日とは違った疑問が浮かぶ

それに対する答えはすぐには提示されなかった

「お待たせしました！さあ熱いうちに！」

オーウエンが運んできたトレイには湯気が立ち上る大盛りのラ  
ーメン定食とカツ丼

レイン575の前にはラーメン定食が置かれる

「美味そうですね！いっただきまーす！」

オーウエンは箸を持って大きなカツを食べ始める

「…いただきます」

食するときの挨拶なんて教わらなかった

見よう見まねで呟き、チャーシューとメンマとネギに隠れた麺を探  
り出し、数本啜る

「…濃厚なスープの味に麺が絡みつき、コクがありつつあっさりとし  
ていますね

油が強いことは否めませんが」

「お、レインさんツウっすか」

一口、また一口とラーメンを口に含め、咀嚼し、飲み込んでいく  
その勢いはオーウエンも目を見張るほどだった

「…レインさん、今日は本当にありがとうございました」

半分ほど食べ進んだところで、オーウエンは静かに感謝の意を表す  
る

「…何度も言いますが、お礼を言われるほどではありません  
私は」

貴方の命を使い捨てる為に助けたのだから



そう続けようとするも、オーウエンにより遮られる

「俺、やんちゃ坊主だったんすよ、親にも迷惑かけっぱなしで…

巢の大学は両親が必死に金集めてくれて入れてくれたんです

俺、そんな両親に親孝行したくて…頑張つてL社の新入社員枠取つたんです！

その報告したら、両親泣きながら喜んでくれて…

ここで稼いだ金で、両親連れてワープ列車で旅行行くのが夢なんですよ！

だから、今生きてるのがほんとにありがたいです」

オーウエンは気恥ずかしそうに頬を掻き、食事を再開した

レイン575はそれを聞き、箸を止めた

(…生きる目標)

明確な目標を語られ、レイン575は悩みだす

(…私には、そんなもの…)

夢はあるだろうか

子供として母の役に立つこと、彼のいう親孝行と似たようなものならあるのだ

しかし、それは生まれる前から施された教育、義務感に過ぎない

オーウエンのように、自分でこうしたいと決めたことではないのだ

「アンタは別に自分がかわいいからとか死ねない理由とかがあるわけじゃないだろうな

俺達と同じで、替えも利く

ただ、生きる事が行動理念なんだろうが…生きる理由も目標もないそれって、死ぬのとどう違うんだ？」

母は彼女に生き続けることを命じた

もし、何もなまま生きることが死んでいるのと同義ならば…

「…ええ、なんだかむかつきますね」

「え、俺なんかまずいこと言いましたか!?すみません！」

レイン575は改造クローンではあるが、れっきとした人間である

それなのに、機械にここまで言われっぱなしなのも癪に障るのだ  
丸一日遅れてふつつつと湧き上がる苛立ちに任せるように、レイン  
575はラーメン定食を勢いよく食べだす

餃子もチャーハンも、スープさえ飲み切ったとき、オーウェンは呆  
然としていた

そして、机を手で叩き立ち上がる

「…あのすました機械面に必ずや目にももの見せてやります」

こうして彼女は決心した

必ず、生きる理由や目標…生きるための意味を見出し、自分自身の  
願いを見つげ出すと

The right mission, The failure of the only mistake

レイン575は考える

まず自分がすべきこと

自分の好きなものを見つけること

単純な話、喜んだり嬉しかったり、幸福と感じる感情を得られればいいのだ

しかし、物事はそう単純ではない

今まで何も感じずに仕事をしてきた身としては、何に対し自分が喜びを得るのかがわからないのだ

試しに歌を歌ってみた

「きらきら光る、お空の星よ…」

「おい、アイツなんか変なもんでも食ったのか？」

「昨日大盛りラーメン定食を食べました、それはもう綺麗に」

結果、若干心配された

次に簡単な遊びをした

「じゃんけんですか、いいですよ」

結果、惨敗した

更には体操をしてみた

「待ってください！今の動きどうやったんですか!？」

「こう、空中でばーんって！壁上りましたよ！」

結果、他職員に好評だった

レイン575の好きなもの探しは、三日間続いた

「いろいろ試しましたが、何も感じませんね…」

試練やアブノーマリテイを鎮圧しながら、その合間に様々なことを行った

茶道、書道、ヨガにマラソンに絵画、楽器はピアノが少し上手かった

しかし、そのどれもに何も感じなかった

その日は待機時間に読書してみた

「ジャンルがよくわかりませんね

切ない恋愛のようでもあり、憎悪にまみれた復習譚でもあり…」

オーウェンが薦めてくれた一冊だったが、不思議な物語だった

不思議な能力を持つ女の子が、美しい人型兵器と契約して戦争に参加するもの、というストーリーである

「ただいまです！殺人者の作業も慣れてきましたね！」

「おかえりなさい」

「あ、読んでくれてるんですね、それ」

作業から戻ってきたオーウェンがレイン575の手元を覗き込む

本はもう終盤に差し掛かっていた

「面白くないっすか、それ」

「…何も感じません

化け物と称された人間の女の子と、古代の英雄である人型兵器の恋愛劇がメインなのでしょうが…なぜこんなにも互いにめんどくさいのでしょうか

「こんなにこじれている恋愛が、皆さんはお好きなのですか？」

「もどかしいけどそこがいいんですよ！最後は報われなまま死別しちゃったけど、でもヒロインはそのおかげで目指すべき願いを見つかるんですから」

目指すべき願い

物語の中の女の子は、苦悩し悩みながらも自分の為の願いを見つけ出すのだ

その有様は、正しく「人間らしい」とも言えるだろう

「…」

レイン575は、物語の中の主人公が少し「羨ましい」と感じた彼女は恋をして、その相手がいたから自分の進むべき先を見出したのだ

自分にはそんな相手はいない

自分に変革を齎してくれるような相手は

「お、堂々とサボりか？」

：なんだ、読書か、勤勉だな

俺は仕事中にでもビールを飲めるように交渉中だ」

そこに現れたのは、ネツアクだった

「ネツアク様、お疲れ様です！」

「定期バイタルチェックの時間だ

：アンタ、ここ最近なんか変だよな

調子悪いのか？」

ネツアクはレイン575の手元を覗き込んではその言い、バイタル  
チェックをする

「：体温、脈、血圧どれも正常だな」

「ネツアクさんには関係ありません」

「本なんて長いこと読んでないな

ちよつと貸してくれ」

ネツアクの要望に、レイン575は渋々本を差し出した

すると、ネツアクがほんの1ページを破り、それを折り出したのだ

「あー！俺の本！」

「後で弁償する

ここをこうして：どうだ、見てみる」

ネツアクが本のページで折ったのは、犬だった

「折り紙の犬じゃないですか！めちやくちや綺麗ですけど！」

昔から折り紙は得意だったんだ

まあすることなくてこれやりこんだら上手くなったってだけだが」

「うまいけど人の私物でやらないでください！」

「だから後で弁償するからああああ揺らすな揺らすな戻す：！」

オーウエンは嘆きながらネツアクに怒りをぶつけるようにネツア  
クの体を掴み揺らす

その間にネツアクの手から折り紙の犬が床へ零れ落ちる

レイン575はそれを拾い上げ、まじまじと眺めた

「……………？」

その時、彼女の脳裏に何かが掠めた

ほの暗い記憶、ベットのの上に凭れ掛かる緑髪の男性の姿

「ほら見てみる、犬だ」

本の一ページで作った折り紙の犬を差し出してくるその姿に、身に覚えはなくても見覚えがあった

(これは…オリジナルの…?)

レイン達のコピー元、オリジナルのレインの記憶がレイン575の頭の中に浮かんできたのだ

それが本のページで折られた犬がきっかけで呼び覚まされたのだろうか、普段は脳の奥にある同期記憶が想起されたことにより、レイン575は予想外の記憶に少し戸惑う

「…ジエニー…?」

小さく呟いたその名は、オリジナルが呼んでいたその緑の男性の渾名

幼い少女時代の記憶故か、本名はハッキリ思い出せない  
それでも、その名を呼ぶと何故か安心してしまっている

「…お前…今、なんて…?」

その呟きを聞いたネットアクがオーウエンを押さえつけながら聞いてくる

まるで小さな衝撃を受けているように少し狼狽えながら

「え…いえ、とくにこれといったものではない」

その時、施設内にブザーが鳴り響く

『黎明、紫の試練です』

手の空いている者たちは鎮圧を行ってください』

アンジェラ経由の管理人通達指令の放送に、レイン575は犬の折り紙を懐に仕舞い駆け出していく

ネットアクはメインルームに取り残されたまま、セフィラ用のサブモニタールームへ戻っていく

自分の中の昔の記憶、自分の元となった人間の記憶を思い出しながら

「…まさか、な」

その日の仕事終わり

最近レイン575は、オーウエンやそれ以外の職員と夕食をとることが習慣となりつつあった

「最近俺も実力がついてきたと思うんすよ！

黎明の試練もラクシヨー！みたいな？」

「じゃあもう一人で殲滅できるか」

「え、そ、それはちよつと…」

今も、レイン575の向かいの席でオーウエンとカウレスが食事をとりながら談笑している

カウレスはレイン575がいることで心底嫌がっていたのだが、オーウエンが半ば無理やり連れてきた

「お前まだランクⅡだろ、調子に乗ってると犬死するぞ」

「もうⅢです！今日になりました！カウレス先輩はランクⅣですっけ」

「何とか生き延びてな」

レイン575は大盛りのビビムネンミョンを啜りながら聞き流す

「レインさんはずっとⅤですよね、さっすが」

「そいつは来た時からⅤだよ

俺とロイド…あー今は教育チームの奴な、そいつとコイツ、三人同期なんだ

最初は全員最低ランクから始まる、中には特別講習を受け少し高いランクで入社する奴もいるが…そんなのとは違う

コイツは最初っからランクⅤ

なーにが自制だ、なにが正義だ、好き勝手な奴なのによ…」

「先輩、相変わらずレインさんに対してだけ嫌に刺々しいですよね…でもやつぱ尊敬します！」

輝く瞳で眺められながらも、レイン575は構わず麺を啜り続けた「そーいやレインさん、ネツアク様の折り紙、どうしたんですか？」

「…それなら…」

食事を終えたレイン575はスーツのポケットから折り紙の犬を

取り出す

折り目も角も綺麗な犬を見て、レイン575は考える

「…あの本数の足りていない鉄の指でも折れたんです、私にもできません」

「え？」

「オーウエン、本を出してください」

「また破るんですか!? もう勘弁してください!」

「一ページ破られたのなら二ページ破られても変わらないでしょう」

「そういう問題じゃないです!」

小さな悶着がありながらも、最後は上司命令という職権乱用によりレイン575は紙を得た

そして、ネツアクが折った犬を解体しながら同じものを折っていく「ここは…こうですか」

「いやちがいますって、そこは折り目です…あーそっちは谷折り!」

五分ほど苦戦したのち、レイン575作の犬が出来た

しかし、それはネツアクの物よりも歪で、紙は皺だらけになった不格好な犬もどきだった

「…正確な手順を踏まえられていなかったからです、もう一枚」  
「え」

オーウエンから更に紙を搾り取りながらレイン575は折り続ける

三匹の犬の兄弟が出来たが、いずれもへんてこな形になっていた

「…何故、何故ですか」

あの箱ができるというのになぜ私にはできないのですか!」

「うわっ、びっくりするっすね」

レイン575が怒りのあまり立ち上がると、その後ろにはロイドがいた

「あ…すみません」

「よ、ロイド」

最近調子どうだ」

「アブノーマリティの管理に大忙しっすよ、試練もあるし…」



まあ抑圧作業専門アブノーマリテイのお陰で足は速くなっただんすけど

「…ところでその三つのゴミ、なんなんすか」

ロイドはレイン575の前の机に置かれた折り紙達を指しながらそう言った

その言葉にカウレスは吹き出し、オーウエンは青ざめる

それを作った張本人、レイン575は

「…これは、犬です！」

「へぶっ!？」

頬を膨らませ、怒りをいっぱいに表示しながらロイドの左頬を拳で殴り、その場を早足で立ち去った

「…え、俺、なんか変なこと言っただつすか」

「…ロイドさんって、結構無神経だったりするんですね

モテませんよ」

「余計なお世話っす」

The right mission, The failure of the only mistake VI

自身の寮室に戻ったレイン575はスーツを脱ぎハンガーにかけ、シャツと下着のままベッドにダイブする

少し肌寒いが、寒いのは慣れている

そんなことより、今日あったことを振り返る

折り紙が折れない

戦闘もできるが、楽器はピアノだけ

そのほかはてんでダメなのだ

感覚的な音楽の才能は持ち合わせていないのだろうが、それ以上の原因がある

「…今周期、19日

今までの中では突出して長いですね

そろそろメンテナンスが必要でしょうか…こんなに長丁場になるとは

初期型ですし、あまり長く稼働することは想定していなかったから…」

うつぶせになりながら、レイン575は自身の手を見つめる

指先は時々電流が走るように痺れ、思うように動かない時がある

レイン575は完全なクローン体である

しかし、完全であるために不完全な体にされている

定期メンテナンス、肉体の整備が必要なのだ

母がそう設計したのかもしれないし、そうじゃないのかもしれない以前、「完全版の人間複製技術は昔とある企業に特許を売った」といつていたのを記憶している

人間の技術力はすさまじく、本来なら何十年と使える道具を作ることまでできる

しかし、それでは売れないからあえてすぐ壊れるものを生み出すのだ

どちらにせよ、メンテナンスせずそのまま動けば、あと十日あまりだろう

戦闘など過剰な動きを繰り返せば、七日と行ったところだ

「情報データ送信も怠ってしまっていますね…いけません、母様に情報を送ってパターン解析と改良に繋げないといけないのに」

体を起こし、ベッドの上からあるものを見つける

スーツのポケットから顔を出している、ネツアクの折った犬

解体と折り直しを繰り返したため、とうにクシヤクシヤに皺だらけで不格好だった

「…母様の子ともあろう私が、折り紙さえ折れないなんて恥です

ゴミといわれた屈辱もありますし」

あのAIにできるのに自分にはできない

その事実がレイン575の闘争心に火をつける

レイン575はベッドから降り、必要最低限の物しかない部屋を往來する

机の引き出しやクローゼットにしまっている予備の紙を出しては、机上で折り紙を折り始める

度々タブレットを開いては折り方の検索をして

「…で、できました…！」

一時間後、ネツアクの犬に負けない完璧できれいな犬が完成した

「わ、私にかかればこんなもの…」

…犬ごときで得意げになってはまた笑われるでしょうか」

レイン575は更に調べる

船、花、動物…目に入ったものはすぐ折り始めた

不器用な指先で、繊細に折っていく

何度も何度も失敗し、その度にむくれながら折り続ける

やがて、目覚ましの音で意識を取り戻した頃には時刻は朝6時

いつの間にか机で寝ていたのだが、その机の上には様々な折り紙達  
が並んでいる

数本のペンしか置かれていない机上が、いつになく賑やかだった

「…まあ、及第点でしょう」

椅子に座って寝ていたためか、体が少し痛む

レイン575は体を伸ばし、シャワーを浴びようと椅子から立ち上がった

そして…自分の背後に広がる、紙のゴミ野原を見渡した

「…はあ」

一度ため息をつき、まずは掃除から、と思い直した

「これレインさんが折ったんですか!?全部!?すごいじゃないですか！」

「ええ、まあ、はい」

その日の始業前、レイン575は折った折り紙達を他職員に見せていた

「昨日の犬とは大違い…頑張りましたね、レインさん…!」

「私にかかればこのくらい…」

「折り紙ごときで得意げになってもな」

褒めちぎるオーウエンとは違い、カウレスは鼻で笑う

そんなカウレスにむかついたレインは彼の脛を半分の力で蹴りつける

「ふああ…おはよーさん」

そんな中、メインルームにネツアクが入ってくる

「おはようございますネツアクさん、セフィラなら始業十分前に来てください」

そしてこれを見て下さい、どうです」

自慢げにネツアクに折り紙を見せるレイン575に対し、ネツアクは生気の抜けた顔でそれを眺める

「…へえ、いろいろ作ったんだな」

「どうです、この数はネツアクさんには無理でしょう」

「…そうだな、俺には無理だろうな」

頑張ったじゃないか」

その言葉に、レイン575は過去一番に満足そうな無表情を見せる

「当然です」

嬉しきからか頬は少し赤く染まっている

気分よく業務を始めようと準備していたレイン575に、オーウェンがこっそり耳打ちをする

「レインさん

レインさんの好きなものって、これですか？」

オーウェンは折り紙を指しながらそう言うも、レイン575は訝しげな表情で否定する

「そんなわけないでしょう、ネットアクさんにはできて私にはできないのが悔しくて…」

「じゃあ、レインさんはネットアク様が好きなんですか？」

どうやったらそう繋がるのか、不思議な思考回路に理解できないままレイン575は少し呆然とする

「…そんなの、あり得ませんよね」

「ネットアク様に対してやけに突っかかっているようなんで、好きなのかなあ、と

あとほら、さつき褒められてすごい嬉しそうだったし」

「…馬鹿な無駄口を叩かず、業務に専念しなさい」

レイン575は無理矢理話題を切り、オーウェンを追い払った

(…好き?)

好意なんてそんなもの、無いはず…)

オーウェンの言う好き、とはどんなものなのかはわからない

博愛、親愛、友愛、敬愛…恋愛

好意には様々なパターンがあるという知識こそあれ、レイン達には母に対する妄信的な愛しか備わっていない

故に、それ以外の好意なんてわかるはずもないし、第一ネットアクに対してはただのダメ上司としか見ていない

それ以上もそれ以下もない、はずだった

(…必要以上に突っかかっているのは事実ですが、それは…)  
単純に、腹が立つだけ

そのはずだ

「じゃあレイン、今日もほどほどにがんばれよ」

始業と共にサブモニタールームへ向かうネツアクに声をかけられ、レイン575の心臓が少しばかり強く鼓動した

先程褒められた時と同じように頬が少し暖かくなる

心拍数がいつもの平均より上がっている

「…そんなはず、ないのに…」

レイン575は事実を認められない

認めるには状況情報が少なすぎるから

「…」

あの本に書いてあったヒロインの心情を思い出す

その相手を思い浮かべるだけで、胸が締め付けられるように苦しく、発熱したように熱くなる

その相手を見るだけで、全てに満足してしまいそうで、それでいてずっと見ていたいという欲が浮かんで

その相手と言葉を交わすだけで、その声に脳が溶かされてしまいそうになり、名前を呼ばれると…自分を認識されている事実に歓喜し、それ以上の幸福はないと思えるほど

そのヒロインはそれらの感情を…「恋」と呼んでいた

レイン575にはそんな過剰な苦しみも熱も満足感も欠乏感も茹る感覚も幸福感もない

それでも

「…こんなの、おかしいでしょう」

小さな異常だけは、自覚していた

The right mission, The fate of the only mistake VII

「よつす、世界蛇

今日もよろしくつす」

L社に勤めてから十日

ロイドは教育チームのチーフとして日々働き続けていた

その日もALEPHクラスのアブノーマリテイ、無の世界蛇の管理作業を始めようとしていた

「ロイド、いらっしやい」

無の世界蛇は檻に入れられた水槽の中に沈む目玉のアブノーマリテイ

他のアブノーマリテイとは違い理性的な人格を持ち、そのお陰か職員には警戒心をあまり与えない

しかし仮にもALEPHクラス、何が起こるかはわからない

その為ロイドはいつも警戒しながら管理作業を行っていた

「本当はお茶でも淹れられたらいいんだけど…ごめんなさい、手も何もないから…」

「いや、別に構わないっすけど」

数日間無の世界蛇の管理作業をしてわかったこと

性格は温厚で能動的、しかし受動的な部分が多いかもしれない

話を聞く限り、アブノーマリテイになる以前は都市のしがない一人の人間だったのだとか

愛し合った伴侶との間に子を儲けたが、とある魔女に伴侶を殺され自身にも薬を盛られた上に産んだ赤子も奪われたという話だ

（魔女というと…都市にスマイレの魔女という女が住み着いてるとい噂があったな…）

その魔女が原因なのかはわからないが、それに絶望し再び意識がハッキリした時にはこの収容室にいたという

そしてもう一つ、無の世界蛇が何故その名、その形であるかの由来も作業を進めるごとに明確化していった

「私の魂は、大昔の神話の怪物の生まれ変わり…みたいなものなの  
大根源、世界蛇…ミズガルズの大蛇、別名ヨルムンガンド

人類の世界、人間が住む島を囲つてもなお長く巨大な蛇の体、神さえ殺す毒の息…普段は海の底で眠っている大蛇

その魂が私の「目」に宿ったの」

「目…？」

「この世界に生まれるよりずっと前…前世、みたいなものかな  
その影響で、私の目はいつも世界の流れを見ていた

因果律というのは知ってる？」

「原因と結果、つすよね」

「世界は因果律で成り立ってるし、切っても切り離せないものなの  
私の目は、その因果律を切り取るものだった

左目は過程を消して未来を引き寄せるし、右目は過去の原因を取り除いて今を変えるものだった」

「…それ、やばいもんつすね

特異点に匹敵する代物つすよ」

「でも本来それを得る前に私は死ぬはずだった

命を、魂を挽き繋いでくれた…だから私は死なずにその力を得た  
私には有り余る力なの、だから…この世界で生まれてからは、その能力は眠り続けていたの

でも、魔女の仕業で…魔女が私を怪物にするために、眠ってた蛇が目覚ましたの

分かたれた魂、もう一人の私であり、ヨルムンガンドそのもの…  
だからね、気を付けて

私を…信じないで」

無の世界蛇はロイドにそう忠告する

抑圧作業を好むのは、怪物である自分を抑える為だろう

そのほかにも、多くの管理方法が判明した

まず、本能作業を行うと高確率でクリフオートカウンターが減少する



次に、レベルⅡ以上の非常事態が発生するとクリフトカウンターが減少する

更に施設全体の職員が五人以上短時間にパニック、または死亡するとクリフトカウンターが減少する

クリフトカウンターが0になった無の世界蛇は最後に作業を行った職員に「寄生」し、第三の目になって施設内を徘徊する

その際にアブノーマリテイや試練に遭遇すると無の世界蛇は鎮圧の補助を行ってくれる

しかし、寄生中の職員は素早くなる代わりに精神力が低下し、パニックに陥りやすくなり、もし寄生された職員が死亡すれば無の世界蛇は攻撃形態に移行し、誰かれ構わず攻撃することとなる

最後に、自制ランクⅢ以上または正義ランクⅢ以上の職員が作業を終えると、クリフトカウンターが増加するというものだった

クリフトカウンターは最大5、ロイドは条件が揃っているため無の世界蛇のクリフトカウンターはいつも5状態にキープされている

「…思ったんですけど、この「5」って数字はなんか関係あるんすか？」

「え、どうして？」

「いや…アブノーマリテイのナンバーもF—03—05って、最後が5だし…管理方法も5つ

なんか、「5」ばかり揃ってるもんなんで…」

「…多分、最初の私がそうだったように、私の魂がその数字だと定められてたりして

カバラ神秘術…運命数…ソウルナンバーって言った方が分かり易いかな

…そういえば、彼と出会ったのも五日だったな…」

「5の運命数…」

ロイドはなんとなくそんなことを覚えながら、変わらない管理作業を続けた

一方、安全チームでは

「…」

「…なんだ」

昼休憩に酒を持ち込んできたネットアクに対しひとしきり説教した後なぜか箱の正面を見つめ続けるレイン575がいた

「…やっぱりただの箱ですね」

「なんなんだ一体…俺が他の何に見えるんだ」

「あえて言うなら酔っ払いダメ上司かと」

「お、その通りだな」

「あ！昼飯はピザですか！」

安全チームの名の通り、これでもかという風に安全そうな空気が流れていた

The right mission, The failure of the only mistake VIII

21日目

「レインさん！おはようございます！」

レイン575が出勤し控え室や更衣室の清掃をしていると、オーウエンが出勤してくる

「おはようございますオーウエン」

「いやあいつも早いっすね！レインさんより先に出勤しようとしても必ず誰よりも早くいるんですもん」

「早寝早起きが健康の秘訣、正確な睡眠時間の確保は生命維持にも関係しますから」

「さすがです！あ、俺も着替えて掃除手伝います！」

「助かります」

オーウエンが更衣を終え掃除を手伝い始め数分後、数人の職員の出勤と共にカウレスが出勤する

「おはようございますカウレス先輩！」

「おはようございます」

「はよ、オーウエン」

カウレスはレイン575を無視し更衣室に向かう

大半の職員がメインルームに移動したところ、ロイドが出勤する

「ふぁ…ねみ…」

これがいつもの朝だった

最近では管理人の的確な指示からか、職員の犠牲も少なく仕事が進んでいる

しかし、馴染み始めたこの日々も、いずれは崩れ去るのだ

その日も、エネルギーは順調に溜まっていった

アブノーマリテイの管理作業も滞りなく、しかし職員も管理人も一

切気を抜かず業務に励んでいた

「今日も何もなく終われそうですね」

「気を抜くなオーウエン、業務終了アナウンスが放送されるまでは油断できないからな」

カウレスが警戒心を促し、オーウエンは気を引き締める

「…」

二人は管理作業に向かうが、レイン575は待機しながら予想する（今日の最大試練は白昼…同期された情報からすれば、深紅、緑青、碧、紫…

戦力的な問題でいえば碧…掃除屋が厄介ですが、面倒なのが…）

そう思考していたタイミングを見計らってか、施設内にアラートが鳴り響く

『白昼、深紅の試練です』

手の空いている者たちは鎮圧を行ってください』

「…私の予測能力が優秀なのか、単に嫌な予感が当たってしまったのか…」

レイン575はメインルームを駆け出し、試練が現れた教育チーム管轄の廊下へ走る

その廊下には、肉を繋がれたような四足獣がエージェントの一人を襲っていた

レイン575はそのまま走り、職員の背後で跳躍しては試練の背に槍を突き刺した

「レインさん…!」

「そのまま攻撃を続けて下さい、幸いこの一体のみのようですから」  
レイン575は暴れる試練背に乗ったまま槍を深く刺していく

「レイン！加勢する!」

管理作業を終えたロイドが駆けつけ、手に持つライフル型E・G・Oで試練を攻撃する

他の職員も次々集まり、試練は雄叫びをあげ倒れた

「よし、これでいっちょよ上がりつすね

なんだ、ラクショー…!」

「まだですー！」

鎮圧完了と思っていたロイド達にレイン575は注意を呼び掛ける

この周期で白昼の試練を体験するのは初めてであり、職員も管理人も知らずにいた

知っていたとすれば…アンジェラと、共有しているレイン達のみ  
ブザーが鳴り響く

『知恵を欲する案山子が脱走した』

施設全体に告げられる、ネツアクの音声

施設内のアブノーマリテイが、脱走しているのだ

「な、なんでつすか…」

「白昼の深紅の試練は、鎮圧と同時に黎明の小さなピエロを生み出します

ピエロの能力はご存知ですよね、アブノーマリテイのクリフトカウスターを減少させるんです

アブノーマリテイは避け、早くピエロの鎮圧を！」

レイン575の鶴の一声によりエージェント達はピエロの鎮圧にあたる

(ピエロ自体はそれほど耐久力はないですが、少しばかりすばしっこいですから…皆さんで袋叩きにすれば大丈夫でしょう)

レイン575は来た道を引き返し安全チームの廊下に辿り着く

その先に、案山子がオフィサーの脳を吸い出している光景が広がっていた

「…大人しくしていればいいものを」

レイン575は槍を構えながら案山子に歩み寄っていく

案山子はレイン575を視認すると、ゆらりと歩み寄ってくる

レイン575は姿勢を低くし案山子の横をすり抜ける

鍬の爪が振るわれ、槍でそれを受け流しては壁を走り背後を取る  
「取った」

槍を突き出し、案山子の胴体に突き刺す

案山子は口元から触手を出し、レイン575の脳を吸い出そうと伸

ばしてくる

その傘が届くよりも先に、レイン575は槍を横に振り、案山子の胴体は真つ二つに分かれる

そのまま案山子は倒れ、消えていく

「…はあっ…」

レイン575は息を吐き、その場に膝をつく

安全チームから教育チームまで走って往復し、瞬発的なスピードで案山子を鎮圧したはいいものの、メンテナンスが必要な今の彼女には少しばかり負荷の多い動きだった

その為、スタミナが切れかけているのだ

その時、イヤホン型の無線通信機から内線が入る

「…どうですか、ピエロ達は鎮圧…」

『やられた』

通信機からは、ロイドの声が響く

『ポーキュバスな収容室のクリフオートカウンターが減らされた

もうクリフオートカウンターは0だ』

そうロイドが告げた時、施設内のスピーカーからも放送が流れる

『ポーキュバスが脱走しました』

『ロイド、レイン、カウレス、ココ、ポーキュバスな鎮圧作業を行ってください』

情報チームのセフィラ、イエソドの声が流れ、次いでアンジエラが通達する

状況を把握したレイン575はため息を堪え、無線に応答する

「わかりました、とりあえずロイド、合流しましょう

貴方の持っているE・G・O、PALE属性ですよね？ポーキュバスに有効ですから貴方を中心に…」

ポーキュバスを鎮圧する作戦を伝え、自身も移動しようと重い脚を動かし立ち上がる

その瞬間、背後に気配を感じた

「……………」

ゆっくり振り返ると、赤い顔に緑の長い胴体…ポーキュバスがそこ

にいた

「キュ」

「…っ」

一瞬で現状を理解したレイン575は震える手先で槍を構えるが、ポーキュバスの尾が先にレイン575の体を払う

そのままレイン575は廊下奥まで吹き飛び、レイン575は体勢を立て直そうとするも体に力が入らず起き上がれることが出来なかった

「はあっ…はあっ…」

レイン575が着ているE・G・Oはwhiteダメージに弱く、ポーキュバスの攻撃属性はwhite属性…相性が悪いことも相まって、レイン575は相当のダメージが蓄積してしまっていた  
「キュッ」

ポーキュバスは嬉しそうに尾を振り、レイン575に近づいていく  
レイン575は過去一番、命の危険を感じた

しかし、今状況を打破できる策もなければ盾もない  
体がまだ動かないため、逃げることもままならない

(…ここまで…でしようか…)

レイン575は過去を振り返る

カプセル内で生まれ育ち、他の自分たちの記憶を同期し続ける日々  
母こそすべてであり、母に日々教育を施される日々  
生まれてくる自分達を育て記憶共有する日々

この会社、575回目の周期に入り他人の命を使い生き延びる日々  
多くの記憶があったと思う

そこに何の感情もなければ、悲しさもない  
死に対して、何の感情もない

生きること执着していただけ  
ポーキュバスの尾が目前まで迫る  
レイン575は静かに目を閉じた

The right mission, The fate of the only mistake IX

備えている異常も衝撃も襲ってこないことに対し不思議に感じた  
レイン575はゆっくり目を開ける

薄暗い照明に照らされた廊下、せせら笑うアブノーマリテイ

ポーキュバスと自身の間に立つ、男の姿

「あー…へへ、鼻から血い出てきましたね…頭あっちい…

あ、レインさん大丈夫ですか？」

鼻から血を垂らす、オーウエンだった

「…貴方、なにを」

「え？強い上司を死なせるわけにはいかないでしょ

…というか単純に、体が勝手に動いただけです

よかった、前助けてもらった恩返しができる」

オーウエンの顔は血が上り少しづつ赤く染まり、頭の血管も浮き出てきている

やがてところどころ血管が破裂し顔のいたるところから血が流れ出す

「へへっ…これがハイってヤツですかねえ…

あ、レインさん、最期に謝礼させてください」

「ま、待ちなさい…今すぐ治療を」

「俺、レインさんに会えてほんとよかったです！あん時助けていただいたこともそうですけど、それ以外でもほんとお世話になりました

今まで、ありがとうございました！」



オーウエンの目の角膜が充血し、血が溢れてくる

レイン575は言い表せない焦燥感に襲われながら目の前で絶えず変化していく後輩を眺めることしかできない

「いってえ…頭がすっげえ痛え…けどそれが気分良く感じてくるのがこのアブノーマリテイの力なんですかね」

オーウエンの頭の毛細血管までもが膨張している

彼の手足は震え、息は激しくなってきた

「は…ははははは…！なんですかこれ、すっげえ気持ちいい…！これがポーキュバスの棘…？俺もう死んじゃうのにこんな気持ちよくなっちゃっていいんですかね…！」

マジやっべえ…俺、逝<sup>イッ</sup>っちゃいますわ…そんじゃあレインさん…

また、どつかで会えるといいですね」

その言葉を皮切りに、オーウエンの頭は爆発した

爆風でオーウエンの脳の欠片と血飛沫が飛び散り、目玉が床に転がり落ちる

その血と脳はレイン575にも降りかかる

レイン575は目の前で破裂したオーウエンの返り血を頭から浴び、垂れ流れるその血を指で掬い上げる

頬にくっついた脳の欠片はじんわりと生温かった

「…オーウエン…？」

目の前で立っていた男の頭部の上半分は無く、口の端が不気味に吊り上がっている

そのままオーウエンだった男の肉体は床に倒れ伏し、無くなった頭の断面から血が噴き出し流れる

この男が身を挺しレイン575を庇ったことにより、レイン575は死ぬことはなく今現に生きている

「…」

先程まで親しげに話しかけてきていた男が、今やただの物体でしかない

「……………」

その時レイン575の中には虚無しかなかった

過去、他の職員を盾にし生き延びていた時と同じように違う虚無  
それを感じた時、彼女の目の前は真っ黒に染まった

「生まれてきておめでとう

君たちは僕の子供達だ、歓迎するよ

君達に課するのは二つ

まずは僕の命令には従順でいること

どんな命もYESで答え従うこと

僕は君達の母…だからね

君達がしっかり言いつけを守っていれば君達を生かすし、面倒も見  
るし、褒めてもあげよう

そしてもう一つは…君達の本能に付き従うこと

都市の人間を救うために活用するはずの薬…その力はすごいね

都市という巨大な世界に従おうと自我を殺す人間達、それらの自我  
を目覚めさせる光の種…より人間らしい人間として希望を持って明  
日をゆく

原料は劇薬だからこそその薬

でも、使いようによっては毒にもなる

君達のオリジナルについては記憶同期済みだよね？

彼女には毒を食ってもらってる

母親の胎内にいる頃からその毒を体の中に入れてるんだ

それは産まれてからも同様、今も毒の風呂の中で寝ているよ

その「毒」により、人間の自我よりももっと先…生物としての原始的な欲求を目覚めさせる

それが君達にも引き継がれている、「生存本能」…それに従い、生き続けるんだ

君達が行くロボトミー社、あそこは都市よりはマシだけど君達と似た存在…兄弟みたいな怪物たちがウヨウヨいるからね、君達の身体能力でもどうしようもないことだつて起きるだろう

そんな時はね、身代わりを使えばいい

他の職員を使って生き延びればいいんだよ

僕は君達がどんなことがあつても生き続けることを求めている

生き続ければ生き続けるほどいい

他の何を犠牲にしても生き続けるという欲求…僕の命令信号の次に、その生存本能を大事にするんだよ」

「……フ……チー………イン……」

…レイン！いい加減にしろ！」

彼女の意識が浮上する

生まれたばかりの頃、母から告げられたことを思い出していた

母の命令に従うこと  
生存本能に従うこと

今なぜそれを思い出したのかはわからなかった  
ただ、手首を強く掴まれているのは理解できた

振り返ると、レイン575の手首を掴んでいたのはカウレスだった

「…カウレス…？ どうし…」

「お前…やりすぎだ」

そう言われ、レイン575は正面に向き直す

足元には、無残に細切れにされた何かがあった

それは未だ動き続け、震えていた

それ以外にも、自身がいた廊下の壁や床はところどころ切り刻まれ  
崩れている

「…これは」

「ポーキュバス…ではあるが、ここまでする必要はない

鎮圧はとつくにできてるだろ」

「…わたしが、これを？」

「お前…何も覚えてないのか？」

ポーキュバスだった欠片たちは消え去っていく

やがては再び収容室内に戻るだろう

レイン575は手から力が抜け、持っていた槍を落とす

それをきっかけに、レイン575の体全体から力が抜け、彼女はへ  
たり込んでしまう

『本日の業務を終了します』

皆さん、お疲れさまでした』

就業のアナウンスが無機質に響く

仕事が終わったのだ

「一応聞いておくが、お前がオーウェンを盾にしたのか？」

カウレスはレイン575を見下ろしながら聞いてくる

レイン575は辺りを見渡す

数メートル先に、死体があるのを見た

それは、ついさつきまで一緒に仕事をしていた後輩のものだった

「…オーウエンが…私の前に立ち…ポーキュバスの棘を受け…」

「…もう、いい」

報告書は…ネツアクにでも任せておけ

上がるぞ」

カウレスはレイン575の腕を抱え、彼女を立ち上がらせる

やがて、数名の職員が清掃に取り掛かる

「あ…」

清掃職員が大きな袋の中に、頭の無い男の死体を詰め込む

カウレスは無理矢理レイン575の腕を引いて、メインルームへと連れて行った

The right mission, The failure of the only mistake X

業務を終えたし社内

レイン575は数日ぶりに母への現状報告を終え、安全チームのメインルームの端に蹲っていた

「…」

レイン575は考えていた

今日起こったこと…自身の後輩が、自ら身を挺してアブノーマリテイから彼女を庇ったのだ

今までの事を振り返れば、レイン575は他者の命を土台にして生き残ることには何の躊躇いも後悔もなかった

それはどのレインも同じで、過去574人のレイン達も同様に周期を生き残ってきたし、この先のレイン達もそうだろう

しかし、レイン575は今、確実に異例の感情を抱いていた  
それらの名を知らないレイン575には、その感情がどうい

なものかを理解することが出来ずにいた

理解できず、頭の中で延々と繰り返すあの瞬間の記憶

風船のように破裂した頭

降りかかる血と脳の欠片

その感触がまとわりつき、レイン575に更に不快感を与える

心臓が痛む

呼吸が速く荒くなり、汗が次々と流れる

何度も体験したはずなのに、新しい感覚に混乱する

ただ小さく震えるしかなかったレイン575の元に、ひとつの影が  
忍び寄る

「よお」

ショートカットの後ろ髪から露になっっているうなじに、何か冷たいものを当てられる

レイン575は突然の冷感にびくりと跳ね上がったのは、声のした方を見上げた

「…ネツアクさん」

そこには、深い緑色の箱…もとい、ネツアクが両手に缶を持って立っていた

「こんな時間にこんなところで会うなんて奇遇だな

ほら、一日の終わりに締めとこうぜ」

そう言いながら、ネツアクはレイン575に缶ビールを差し出した

「…結構です

…気分では…ないので」

「…楽になりたいなら、こっちもありだぜ」

レイン575が断ると、ネツアクは次に緑の薬品の入ったアンプルを取り出した

「…ビールの方を頂きます」

「ほいよ」

レイン575は薬品ではなく缶ビールを選び、受け取る

ネツアクは少し間を空けてはレイン575の隣に座り、缶を開け口のような注ぎ口にビールを流し込む

「…っはあく、やっぱこれだな」

「……何しに来たのですか

ただの晩酌で、こんなところに来るわけないでしょう」

ビールを堪能するネツアクに、レイン575は質問する

ネツアクは少しの沈黙の後、ゆっくり話し出す

「お前、精神汚染度が急激に高くなってたからな」

「そんなはず…」

「自分のバイタル状況は分かるだろ、お前なら

レイン、お前はオーウェンが自分を庇って目の前で死んだことにショックを受けてんだよ」

ゆっくり、淡々と、でもどこか感情の籠った声色で…ネツアクはレインの状況を語った

「今まで他の職員を犠牲に生き延びてたお前が、まさかこうなるとは

思ってたなかったんだが…まあ、死んだ人間は…普通は生き返らねえよな」

「…」

「けどこう考えてもみろ、こんな最悪な職場から解放されたんだ、幸せじゃないか？」

「彼は、いつか両親を旅行に連れて行きたいと言っていました」

「…そうか、それじゃ未練ありありだな」

レイン575は、未開封の缶ビールを眺めたままぽつりと呟く

「私は、母様の命令通りに生き延びてきました

誰であろうと盾にして、囹にして、その命を踏み台にして今日まで生きてきた

でも…今日、オーウエンが自ら私を庇ってくれたこと…その事実が私の頭の中で氾濫し酷く突き刺さるのです

…どうして今になって彼の死がこれほどにまで私に影響を及ぼしているのか…いえ、まずまずの問題として、なぜ彼は私なんかを庇ったのでしょうか

私は、彼が自分の命を差し出すほどの人間ではありません

自分がしてきた行いが返ってくるならまだしも…こんなの…」

目の奥が熱くなるのを感じたレイン575は、再び膝に顔をうずくめる

ネットアクは一本の缶ビールを飲み切り、若干酩酊した頭を冷やすように話し出した

「そりゃあ…アイツはお前が好きだったんだろうさ」

「………いま、なんて…?」

「それが尊敬か友情かはわからないが…お前はアイツから好かれてた、じゃなきゃあそこまで普通絡んでこないだろ

お前を庇ったのがそれを裏付けている

処世術だけじゃあんなことできやしねえ

お前は好かれてた、だから守られた」

好いていた

オーウエンがレイン575を、だ



その事実を今になって知ったレイン575は、驚愕した顔を上げ、視界が滲む感覚を覚えた

「…っこれ、は…」

「なんだ、涙も知らないのか」

「情報は…インプットされていますが…これが…?」

「悲しい時、嬉しい時、怒った時…感情が高ぶると人間は涙を流す

人間たる証拠だ」

「っ…なんですか…止まりませんっ…」

レイン575は溢れる涙を拭うも、涙は止まることを知らず次々と流れていく

次第に息もしづらくなり、メインルームに嗚咽が響く

「止める必要はない、今は業務時間外だ

泣いた方がスッキリするっていうからな

…お前は泣くことも知らない子どもなんだ、今くらい思いつきり泣いとけ」

ネツアクの嫌になるほど優しい声に促され、レイン575の瞳からは更に大粒の涙が溢れてくる

「う…ひ…うう…あああ…」

「…」

レイン575は泣いた

短い人生の中で、初めて涙を流した

初めての感情ばかりなのに、それが胸の内で混ざり合いぐちゃぐちゃになる

それを流し去るように泣いた

自分を慕ってくれた後輩を、失ってしまった

自分を庇って死んだ彼の笑顔を思い出す

「レインさんは何が好きなんすか」

初めて会った日に、彼が聞いてきた

あの時は何も好きではなかったし、嫌いではなかった

でも、今は

「つ私も…オーウエンのこと…好きだったんだと思います…」

「…そうか」

「失って…初めて気づきました…彼がどれほど貴重な存在なのか…」

私を慕ってくれて、食事に誘ってくれたり、好きなもの探しに協力してくれたり…」

「そうだな」

レイン575はゆっくりと自分の中の気持ちを整理するように話す

彼女は、好きなものを見つけていたのだ

しかしそれに気が付くことができていなかった

喪失感を経て、悲しみを抱き、初めて自覚したのだ

「…彼、また会いましょうと言ってくださいました」

「L社本社はT社の特異点を活用してるからな

職員は入社してから保管庫にデータ移行され、周期ごとに復帰…実質的なコンテニューだな

まあ職員も、俺を含めたセフィラ全員も…TT2プロトコルで記憶リセットだが…」

「私も、周期が変われば次の私にデータが移行します…」

記憶、知識、感情までもが…

それは確かに私ですが、同時に私ではないのです

…同じ私と彼は、もう二度と会うことは叶わないでしょう」

L社本社では、ひとつのシナリオを完成させるために何度も時を戻し、望む完結へと至れるようにやり直しを行っている

それを知っているのはアンジェラ含むセフィラ達と…外部協力者のスミレの魔女、そしてその子供達

しかしセフィラ達や職員は反復の度に記憶をリセットしている  
(全て知っているのは、母様と私達…そしてアンジェラだけ

管理人でさえ、TT2プロトコルで記憶を消しているから…)

改めて、過去のレイン達の記憶を想起する

多くの別れがあった

しかしそのどれもに、レイン達は何の感情も抱かずに生き延びて  
た

誰かの死に何かを感じるのは、レイン575が初めてだったのだ  
「…こんな苦しい思いをするのが、人間なのですか？」

「…そうだな

生まれて生きて、死んでいく

生き物はみんなそうだ、別れの無い人生なんて…あり得ない」

そう答えるネツアクの機械の顔は何も変わらない

それでも、レイン575から見たネツアクの横顔は、どこか悲しそ  
うな…寂しそうな顔をしていた

「どうりで…母様が初期設定しないはずです

こんな無駄な感情を抱いて誤動作を起こしてもすればいいません  
から」

「確かに無駄かもな

でも、悲しみも喜びも怒りも、感情つてのは生物たりえる要素だ

…俺もこんななりだが、多少は感情を覚えている、基となった人間  
がいるからな

何も感じないのは、機械だ

…そう考えると、俺もアンタもどっちつかずの外れもので、アブ  
ノーマリテイ達の方がよっぽど生き物らしいかもな」

「都市の生活って息苦しいけど、嫌なことだけじゃ気が滅入りますか  
ら

好きなもん増やして幸せに浸れるときは多くあった方がいいんで  
す

好きも嫌いもない人生なんて、生きてる！って感じしないじゃない  
ですか」

オーウエンの言葉を思い出す

無駄こそ人生を彩る必要要素、それを教えたのは他の誰でもない、  
オーウエンだった

「…私のように、ネツアクさんにも基となった人がいるのですね」  
「まあな、俺はその人物をモデルにして作られた

実物はこんな箱だが、管理人が通して見てる認知フィルター…あれを使うと、そのモデルになった人間と似た姿に反映されるんだ」

「人型のネツアクさん…想像できませんね」

「まあこんな箱だからな」

「…見て、みたいですよ」

小さく呟いた言葉に、ネツアクは少しの間沈黙する

「…人の体だったら、少しでもマシにアンタを慰められたのかもな」

「…いえ、そんなことはありません」

自嘲気味に呟いたネツアクの言葉を、レイン575は否定する

そして、少しぬるくなつた缶ビールの蓋を開ける

カシユ、という軽快な音が鳴り、レイン575は飲み口に口をつけてはそのまま官を持ち上げビールを一気に飲み干す

ネツアクはその光景に驚愕し、呆然と見つめる

「…つ…う、ゲホッ！ゲホ…こほっ」

「お、おいおい一気に飲んで大丈夫かよ」

「…つは…だい、じょうぶれす…」

呂律の回らない口調で答えては、口の端から垂れる噎せ戻したビールを手の甲で拭う

思考がぼんやりとなるような感覚、体が内側から火照るような感覚初めてのアルコールの苦みに顔を歪めつつ、空になった缶をネツア

クの目の前に突き出す

「もう一杯」

「いや、やめといた方が…」

…いや…わかった、今夜は俺の奢りだ」

そう言つては、ネツアクはメイソールームに大量の酒を運んでくる

二人でそれを飲み、ヤケ酒祭りに浸った

「……………」

赤い顔で死人のように静かに眠るレイン575に、ネツアクは引つ

張ってきたE・G・Oの上着をかぶせる

その周囲には、空になった缶や瓶が転がっていた

ネツアクはレイン575の寝顔を眺めながら静かに思い出ししていた

昔、彼の基となった人間の頃の記憶

幼馴染である女性が死に、その女性を助けられるという希望からとある実験に協力してた

その実験中に、一人の小さな女の子が部屋に迷い込んできたことがあった

ほんの僅かな時間、たった一時間にも満たないささやかなひととき彼の言う「好き」の部類であろう幼馴染を失った虚無感を僅かに満たしたその時間は、機械の体になった今でもふと思い出すほどにはネツアクの小さな幸福になっている

そして、今傍らにはその女の子に似た顔、同じ名前の職員が眠っている

「…なあ、機械になった俺が人間のように、人間であるはずのお前が機械的になったなんて…とんだ皮肉だよな、レイン」

呼びかけに返事はない

「お前は俺があ頃会った貧弱な被験体だっただなんて知らないだろうが…俺はお前を少しだけ知ってるんだぜ、驚きだろ」

折り紙を折ってやった時、女の子は泣くのを止め目を輝かせてはもっともっとと強請っていた

出会った時は、ただの普通の女の子だったのだ

それが今や、クローンの複製基として使われている

あの時、動かない体を無理に動かしてでも止めるべきだった

スマレの魔女、アレは人がいいように振舞っているがその性根はどこまでもどす黒い

彼の幼馴染が親しかったから深く追求しなかったが、彼は元からスマレの魔女を嫌っていた

そんな魔女が幼い女の子を連れて行くのを…ベッドの上の彼は見送ることしかできなかつた

「……ごめんな、レイン」

ネツアクは眠る彼女に謝る

その謝罪は、レイン575に向けてのものなのか、それとも彼女越しに基となった少女に向けたものかはわからない

他の誰かが犠牲にならないように、という崇高な目的で実験に名乗り出たわけではない

それでも、ただの女の子が凄惨な目に遭ったであろうと思うと、「あの時こうすればよかった」という後悔がとめどなく押し寄せてくる

「……ごめんな」

ネツアクの謝罪は、虚しくも広い空間に霧散していった

The right mission, The failure of the only mistake XI

## 22日目

「こんにやろお！何度収容違反すりや気が済むんすか！」

教育チームの廊下にて脱走したアブノーマリテイの鎮圧を行うロイドが叫ぶ

鎮圧対象はT-01-68、死んだ蝶の葬式

少々ややこしい管理方法の為か、何度も管理人が指示ミスを行っているのもあれば、職員の育成が行き届いていない理由もあり、頻繁にクリフトカウンターが減少してしまい収容違反を起こす

「しかもようやく抽出できたE・G・Oはどこの誰に着せたんすか管理人！」

半ば半ギレで管理人への不満を零しながら鎮圧を行うロイド

所持しているE・G・O武器はPALE属性のライフル、高威力かつ追加攻撃が付与される効果を放つ

アブノーマリテイの大半がPALE属性の攻撃に対し耐性が低いため、非常に強力なのだが

(やべえ、次攻撃食らったら死んじまう…！)

E・G・O防護服はPALE属性、RED属性に強い耐性を持つ黒いコートとスーツなのだが、BLACK属性には弱く、何よりWHIT属性性に対して脆弱なのである

死んだ蝶の葬式はWHIT属性の攻撃を放ち、ロイドの精神を侵していく

相性が悪いことこの上なく、どちらが先に落ちるかの拮抗した勝負を日頃繰り返している

「ロイドチーフ！加勢します！」

反対側の廊下の入り口から教育チームのエージェント達が駆け寄ってくる

その時、死んだ蝶の葬式が抱えていた棺を駆けつけたエージェント

達に向けた

「…まずい、引き返せ！」

ロイドはその攻撃にいち早く察知し、喚起を呼び掛ける  
突然の大声に驚いたエージェント達は立ち止まってしま  
うそうしている一瞬に、棺の蓋が開いていく

ロイドは早く死んだ蝶の葬式から部下たちを庇おうと駆け出すも、  
間に合わない

その時、ロイドの横を何かが通り過ぎる

白と黒のシルエット

飛び跳ねたモノクロは蝶の頭上から二丁の拳銃を撃ち放つ

「おやすみなさい、偽善者」

死んだ蝶の葬式はその銃撃を直撃した

死んだ蝶の葬式は開いた棺を横に倒しては浮かび上がり、自らその  
棺の中に入っていく

モノクロは地に降り立ち、ゆっくりと立ち上がる

「…対象鎮圧完了、皆さん無事ですね」

ロイドの方を振り向いたその紫の瞳は、冷やかさの中に小さなハ  
イライトを帯びている

「レイン…」

その人物は、新たなE・G・Oに身を包んだレインだった

「この新しいE・G・Oはなかなかですね、二属性の攻撃が繰り出せ  
ます

教育チームの皆さんもお疲れ様です、どうぞ管理作業にお戻りくだ  
さい

ロイド、精神汚染度が高いですのでメインルームにて回復なさって  
ください」

黒を基調としたシンプルなスーツ、白と黒の二丁拳銃、灰色の髪と  
合わさり退廃的な色合いになりながらもアメジストのような瞳がよ  
り一層際立っている

そんなレイン575が、死んだ蝶の葬式にトドメを刺したことでロ  
イドの窮地を救ったのだ



それだけでなく、レインはロイドの身を案じ回復に努めるよう言いつける始末

今までとは違う様子に、ロイドは固まっていた

「あー…えと…助けてくれたのはありがたいんですけど…なんでわざわざ教育チームにまで…」

「中央本部にヘルプに行っていたのですが、その帰りについてに…と  
いうのは建前で、単に貴方が危なそうだったので助けようかと」

「…俺をまだ利用してないから勿体ない、とかじゃなく…?」

「ああ、そのことですか」

はい、それについてですが…やめました、他の職員を肉壁にするの」

「…は、はあ…」

「……………えっ!?!」

普段と変わらない様子に見えるレインだが、言動が明らかに以前とは違っている

他の職員を肉壁にし自分は生き残ろうとする、機械的でありながら薄汚い人間と同じことをしていたレインは今やどこにも見当たらない

冷淡な瞳は、人間に似た光を宿している

「なんて言えばいいんでしょうか…これが俗に言うトラウマ、でしょうか」

もう、馴染みの人を目の前で失うのは嫌なので」

「…アンタがそんなこと言うなんて…」

「変ですか?…まあ、私も不思議な感覚です」

私にも変化は訪れるものなんですネ」

目を伏せながらそう語るレインは、昨日の事を思い出す

親しかった部下を失い、大きな傷を得た

その傷は、彼女に人間としての成長を促した

それがいいものなのか悪いものなのか、彼女自身には計り知れない  
しかし、レインはその傷を受け入れた

受け入れ、自身を変えた

「母様のいいつけも、他の誰かの命も守る…そう決めたのです」

「かあさ…お、おう…？」

「ですから勿論、貴方の命も可能な限りは助けます

貴方は特に、この会社の中で親しい方なので」

レインは力強く語り、ロイドを見据える

ロイドは呆然としたまま口を開く

「…俺とアンタが…親しい…？」

…それ、何かのジョークっすか…？」

「…ジョークではありません、本気ですが」

レインは真面目な面持ちでそう返すも、ロイドは信じられないと  
いった様子で可笑しそうに絶妙な顔をした

「……………はあああっ!?俺とアンタが!?いやいやいやあり得ねえっす  
わ!ほんとどうしたんすか!?へっ…ええええ!?!うっそでしよアンタ…  
ふっ、へ、はあ、はははは!

ないないないっすわ!アンタみたいな変人と仲良しとかありえ  
ねー!ひい、腹痛え…くつくつくっ…

せめてボンキュッボンなら喜んで仲良くしたんすけどねえ!アン  
ジエラ様ならともかく、アンタみたいなのがちくりんは…ふっ」

ロイドは馬鹿にしたように笑いながらレインの認識を否定する

更にはレインの平坦に近い体を値踏みし比較した

レインは再び凍てついた視線をロイドに向けた

「そうですか、では貴方は肉壁に活用してもいいんですね、わかりまし  
た」

「はっ?…あ、ちよ、すみませんすみませんマジ悪かったっすから!」

「貴方の寮室にあるいかがわしい本も他職員に公開します」

「本当に申し訳ございませんでした!!」

怒ったレインの容赦のない言葉にロイドは顔を青ざめ、立ち去ろう  
とするレインを必死に引き留める

レインは聞く耳持たず安全チームへ戻ろうと肩を掴むロイドの手  
を握りつぶす勢いで引き…がそうとする

その攻防は、管理作業を行おうとした他職員に止められるまで続い  
ていた

「そんなことがあったんだ」

「マジで参ったつすよ…あの人容赦ないんすから…」

「でも、デリカシーの無いことを言った君も悪いと思うな」

「…なんも言い返せねえ」

その日の終わり、ロイドは無の世界蛇の抑圧作業を行っていた

一日のうちに起きたことを語り合う、無の世界蛇とロイドはいつからかそんな関係になっていた

「その同期さんも、誰かが死ぬのは嫌だつて気が付けたんだね」

「まあ…でも、誰かの死に気を参らせるのは都市ではあんまりいいことではないつすけどね

確実に生きにくくなるつすよ」

「…ここではそうかもしれない

でも…いつか死が来るのは誰もが同じだからこそ、満足のいく人生、胸を張れる人生を歩むのが何より大切だと思うの」

「…胸を張れる人生、か…俺にはそんなのないつすね」

ロイドは無の世界蛇の内的情報をモニタリングするタブレットを操作しながら呟く

都市の汚い生き方を何度もしてきたロイドにとっては、レインの行いなど優しいものであり、今変わろうとしている彼女の状況がどれほど命取りになりかねないかも理解している

都市で生きるには、道徳は足枷になる

そんな足枷を自ら嵌めにいつているようなものなのだ

「早死にしても、自分を誇れるようになることつて…そんなに大事つすかね」

「いいことをした人ほど早く死んじゃうのは世の中の摂理だよね

悲しいけど、そうなるつてことは私も嫌というほど見てきた

…でも何が悲しいのかは、死ぬことじゃない

後悔を抱えたまま満足できずに未練に囚われることだよ」

「…」

無の世界蛇は水槽の底でゆくり転がり、ロイドに近づくと

その宝石のようなターコイズブルーは、この世の善性を敷き詰めたように優しく輝いている

「都市ではそんな生き方はすごく難しいよね

でも、そうあろうとする努力や過程はかけがえのないものになるよ  
…ロイド、君はいい人だから…私のようになってほしくないな」

タブレットの情報整理が終了する

抑圧作業が終了する

『本日の業務を終了します

皆さん、お疲れさまでした』

アンジェラの放送が響き、ロイドは仕事から上がろうと収容室を後にする

「さっきの話だけど…ロイド、本当はその同期ちゃんのこと好きなんじゃないの?」

去り際に無の世界蛇にそう聞かれ、ロイドは躓き扉に頭をぶつけた

「っ…てえ」

「…もしかして、本当に?」

あ…しかも、そっちの意味かな…?

あ、だ、だとしたらごめんね! 私他の人には言わないから! 最近作業しに来る新しい子に口を滑らせたりしないから!

「ちよつと黙っててくれねえっすか!? ちげーっすから! 俺の好みのタイプはボンキュッボンの年上なんで!」

「え、それはちよつと…人を見た目で判断するような人だったなんて…」

「引くなよ! っだー調子狂うな!!」

アブノーマリテイと他愛ないような会話を繰り広げた後、ロイドは今度こそ収容室の扉を開いて戻ろうとする

「あ、ねえ…最後に、その同期ちゃんの名前教えてくれない?」

その質問にロイドは数秒停止した後、ゆっくり口を開いた

「…レインっつー可愛げのない女っすよ」

それだけ言い残し、ロイドは収容室から出て行った

その後、収容室内に起きた変化に気が付かないまま

「…れい…ん…レイン…？」  
…まさ、か…いや…でも…  
r a i n…雨…  
…雨…？」

The right mission, The failure of the only mistake XII

24日目

レイン575はより一層努力した

持ち前の足の速さを活かし、あらゆる部署でも鎮圧作業に駆け付けた

22日、23日、24日：彼女の働きのお陰か、この三日間は死者が一人も出なかった

しかし、彼女はひそかに実感していた

自分の体が正常に機能しなくなってきた

食堂で食事を取ろうとしても、箸はうまく使えない

どうしても箸を落としてしまう

なので彼女はスプーン、あるいはフォークを用いて食事をする

それでも、握るには果実を潰すぐらいの力を籠めないとどうしても落としてしまうのだ

他にも、僅かな段差で躓くようになったり、机の角や椅子の足にぶつかったりする

レイン575、彼女の体は限界に近かった

メンテナンスを要する体で無理に動いていることもあり、想定よりも早い段階で全身の筋肉や関節、内臓機能が衰えてきていた

何度も母にメンテナンス及び修正申請を申し込んでいるも、返答が来ない

そのままレイン575は、24日目も業務を終えた

「カウレス、お疲れ様です」

「おう、お疲れさん」

レイン575の劇的な変化からか、あの日の惨状のこともあつてか、レイン575を毛嫌いしていたカウレスも今やそれなりに会話するようになっていた

「お疲れさん、なんとか今日も生き延びたか」

アルコールの匂いを撒き散らしながら労いの言葉をかけるのはネツアクだった

「ネツアクさん、お疲れ様です」

しかし業務中に飲酒とはいただけません」

「あー悪い悪い」

「悪いと思つてませんよね」

レイン575の変化により、安全チームは僅かに雰囲気は良くなつてきている

それを一番に理解していたのはレイン575でもネツアクでもなく…L社総管理AI、アンジェラだった

「…」

アンジェラは管理人のいないメインモニタールームで、監視カメラに映された光景を眺める

そこには、ネツアクに叱咤するレイン575が映っている

「…きつとこれでも、ダメなんでしょうか」

哀愁を浮かべた表情をしたアンジェラは、静かに視線を下ろす手に握られているのは、白い封筒

封筒の隅には、紫の花が描かれている

「お前もだいぶ変わったな、レイン」

「誰かさんに？み潰されたせいでしょうか」

「おいおい、俺のせいだっていうのか？お前が飲むつつたんだろ」

業務が終わり、管理棟と社員寮の間の廊下で会話するのがネツアクとレイン575の習慣となっていた

いつでも一杯のビールから二人の談話は始まる

「今度の新人はどうだ？」

「筋はいいです、成長速度も早いですし」

カウレスと協力して育成に専念すれば強力なエージェントになるでしょう」

「そうか」

その日の仕事の話も、他職員から聞いた面白い話も、なんだつて酒

の着になる

凄惨な日々を乗り越えるためのひととき、それは一人の声により遮られる

「レイン」

その場に現れたのは美しい機械、アンジエラだった

「アンジエラ：お疲れ様です」

「お疲れ様、調子はどう？」

「良好です」

…とは言い難いですが、問題ありません  
どうかしましたか？」

古い友人と話すような調子で二人は会話するも、アンジエラ表情は憂いている

アンジエラは白衣のポケットから一通の封筒をレイン575に差し出す

「…私に？」

「ええ」

貴方の…お母様から」

その言葉を聞いた途端、レイン575の目の色が変わる

慌てた様子で封筒を受け取っては、封筒に刻まれた紫の花の絵を見て歓喜の表情を浮かべる

「母様！母様からのお返事！…でもわざわざお手紙でなんて、どうして」

「母様…っていうと」

「…スマイレの魔女、ヴァイオレット」

「社と…Aと契約している女性ね」

ヴァイオレットのシルエットを脳裏に浮かべたネツアクは、拭い切れない不安に襲われる

「な、なあレイン…それ」

「ネツアクさん、本日はお疲れさまでした

ではまた明日、よろしくお願いします！

アンジエラも、失礼します！」



今までにないほど浮足立った声色でそう言ったレイン575は、ネツアクとアンジェラに向け頭を下げて駆け足で立ち去っていく  
その後ろ姿を止めることが出来ず、ネツアクはまた見送るだけとなった

レイン575は自身の寮室に戻るや否や、机の引き出しからハサミを取り出し、封筒の端を切り中から手紙を取り出す

高鳴る胸を鎮めるように深呼吸を繰り返しながら、期待の眼差しで母からの手紙を開いた

「初期型・レインvol. 1. 0—575へ

日々我が子としての務めを果たしているようで何よりです  
本題から言いますと、貴方を廃棄処分と認定します」

The right mission, The failure of the only mistake X  
III

「初期型・レインvol. 1. 0—575へ

日々我が子としての務めを果たしているようで何よりです

本題から言いますと、貴方を廃棄処分と認定します

理由は以下の通り

最近の貴方の変化によるものです

何が原因なのかは大体予想が付きますが、貴方は無駄な成長を遂げてしまった

好物だとか趣味だとかそんなものは新生人類型には必要ありません

無駄な要素を持つと効率的に稼働できないのは理解しているはずなのにこんなことになってしまって、僕は大変残念な限り

余計な感情を持ってしまったから、他者の死に動揺してしまうのです

貴方が送ってきた記憶情報のデータを共有した多くのレイン達がエラーを起こし、廃棄処分せざるを得ませんでした

この甚大な損害は、貴方というエラーの根源を絶たない限り償えませんが

575番、貴方はレインという一つの大きな体の細胞です

その細胞である貴方は外的要因により変化した病原です

悪性新生物：癌である貴方は早急に取り除かねばなりません

安心なさい、その周期はもうじき終わる

光の種シナリオ進行においても貴方は邪魔をしてしまっているから

何のために他者の命を踏み躪ってでも生き残れと命じているのか  
アブノーマリテイの特性は教えているはず

アブノーマリテイ達は人を殺せば殺すほどより多くのエネルギーを生み出し、そのエネルギーは光を生み出すために必須なんです  
光の種シナリオのために必要な条件、それを放棄した貴方に存在価値などありません

「反復575回の終了に乗じて、明日貴方を廃棄処分とします」

手紙を読み終えたレイン575は、静かに顔を上げる

先程の高揚も、記述されていることに対する絶望も伺えない

ただ：その口元は、笑顔を浮かべていた

「…ふ…ふ…ふ…ふ…」

次第に溢れてくる、笑い声

「あはは…あはははははは…」

手紙が手から滑り落ちていく

母からの直筆の命令式

廃棄処分、つまりは殺処分である

それを命じられたレイン575はその命令に抗えない

そう設計されているから

母からの命令は、何より優先されるべきもの

母から直接「死ぬ」と告げられたというのに…レイン575は、た

だ笑っていた

「あはっ、あっははははははは！はははは！ふふ、あはははは！」

声高らかに、足取り軽やかに

ゴミ袋に入れていた折り紙の残骸たちを両手いっぱい抱えて上に放り投げる

雪のように、雨のように

降りしきる紙の雫に囲まれながらレイン575は踊った

空虚と踊るワルツ、無音の演奏に身を預けながら笑い、歌った

きらきら光るお空の星、そんなものはこんな地下では見えやしない

目にすることなく、彼女の命は潰えるのだろうか

「はは…はは…ああ…はあ…」

数日前と同じように、紙の残骸が部屋を埋め尽くす

踊り、笑い疲れた彼女はベッドに倒れ込む

柔らかなマットレスと滑らかなシーツが彼女を受け止める

照明器具しか見当たらない天井を見上げ、レイン575は息を切らす

やがて、その口の端をにやりと吊り上げる

レイン575は、絶望していない

妄信する母に見捨てられてしまったが、それを受け入れるのもレインのクローン達だった

普通のクローン達なら、その命令を受け入れては淡々とし、翌日には自らアブノーマリティに命を捧げてエネルギー生産に貢献していただろう

しかし、レイン575は違うことを考えていた

クローン達の中で唯一、「自我」を手に入れた

同僚や後輩、上司たちとの関わりの中で育まれたレイン575だけの自我

芽生えだしたその存在、母の廃棄命令が決定打を打った

死を命じられて尚、レイン575は生きたいと思った

生存本能は母に否定されたにもかかわらず、彼女はただ「生きたい」と願った

理由や、目標を考える

まだ具体的に文章化できないけれど

浮かんだのは、ひとりのシルエット

死にたがりのだれか

「…えへへ…ええ、やることはハッキリしています」

レイン575は、晴れやかな顔をしている

悔やむことも嘆くこともなく、迷いのない決意に満ちた顔だった

レイン575は翌朝、出勤後にとある場所へと向かっていた

向かう先は、メインモニタールーム

管理人とアンジェラのいる空間だった

「失礼します、管理人」

扉をノックし、ノブに手をかける

開いた扉の先に、上等な椅子に座る一人の男性と、傍らに立つ麗しい機械

レイン75は一呼吸おいて室内に入る

「安全チームのレイン…こんな早くに、どうしたんだ？」

男性は漆黒の髪と金の瞳を見せ、こちらに問いかける男性、管理人

X

レイン575の記憶が彼の情報を引き出す

管理人X…それは、記憶を失ったアイン

アインとはレイン達の母の古い知り合いであり、光の種シナリオを遂行するために自身にも記憶消去施術を施した狂人

今はXとしてロボトミー本社を管理している

「管理人にお話があります」

レイン575はXを見据えてはそう告げ、続いて言葉を発していく

「今日の業務、私のE・G・Oは他の誰かに配置してください」

それを聞いたXもアンジェラも驚いたように目を見開いた

「…念のために聞いておくが、何故だ？君の生存率が下がるぞ」

「構いません、E・G・Oに余裕が生まれ、私以外の生存率が上がりま  
すでしょう」

「レイン、まさか…ヴァイオレットから…」

嫌な予感…というより、嫌な予測をしたのだろう、アンジェラが不安げな面持ちで聞いてくる

「…言いたいことは分かりますが、私は母様の命令に従って自らの安全を放棄するではありません」

確かに、私は母様に廃棄処分を命じられました

私が生き延びようと何をしたところで、母様は必ず介入し私を処分するでしょう

死が決定しているのなら、私に与えられた物は他に譲った方が効率がいい

私以外が生き延びやすくなるために、私のE・G・Oは他の職員に充てて下さい」

レイン575の力強い訴えに、Xは暫く表情を曇らせた後、深く溜息をついた

「…はあ

君の派遣元の社長の命令で君は今日「退社」してしまう…惜しい人材だが、回避する方法はないんだな？」

「回避は不可能です

母様の権能…不可視の力は絶大です」

「…なら、諦めよう

君の要求を呑もう、今日でお別れだ」

Xは頷き、アンジエラに指示をする

アンジエラは浮かない顔のまま、静かに指示通りE・G・Oの配置変更の処理を行う

「二週間、ありがとうございました管理人

…次も、その先も…頑張ってください」

レイン575はXとアンジエラに向かって深々と頭を下げた後、メインモニタールームを後にする

歩く足は、メンテナンスを必要とする不良品とは思えないほど軽く、頭の中は膨大な情報量を抱えているにも関わらず酷く冴えていた  
自分の所属する職場…安全チームのメインルームに着いた頃には、カウレスが出勤していた

「おう、レイン

遅かった…な…

…なんでE・G・Oを装備してねえんだ!?!」

カウレスはレイン575に気が付きそちらを見やった途端、血相を変えて駆け寄ってくる

「そういう気分です」

「笑えねえジョークをありがとさん、よりによってお前がE・G・Oを装備しないなんて…」

「袖が破れて修復中です、武器も壊れました」

「お前嘘つきのヘツクソだな!」

「朝から騒がしいぞ…いったいどうしたん…だ…」

カウレスの声を聞きつけてか、ネツアクがメインルームに入ってくる

ネツアクもカウレス同様、レイン575の普通のスーツと警棒のみの格好を見ては言葉を失った

「ああ、ネツアクさん

おはようございます」

「お前…E・G・Oはどうした」

「さあ、燃えたんじゃないんですかね」

「正直に言え」

普段の無気力な声とは違った、少しばかりの怒気を孕んだネツアクの声色に、レイン575は一度視線を逸らす

そんな時、メインルームに設置されているスピーカーから放送が流れる

『社員の皆さん、おはようございます』

今日も皆さんの働きに期待しています』

アンジェラの毎朝の社内放送を合図に、業務が開始する

「ああほら、もう業務が始まります

ネツアクさんも持ち場についてください」

レイン575は話をそらし、ネツアクをメインルームから追い出そうとネツアクを押し出す

「おい、まだ話は終わってね…」

ネツアクがメインルームから出されても尚レイン575に問いただそうとし振り向くと

「…では」

少し眉を顰めては何かを惜しむような表情をしたレイン575が見えた

レイン575が絞り出すような細かい声でそう告げたのを終いに、メインルームの扉が閉じる

取り残されたネツアクは、拭いきれない不安と疑念を抱えたままサブモニタールームへと向かう

「…くそっ…」

悔し気な声を零しては、鉄の拳を廊下の壁に打ち付ける  
そうして、25日目が始まった



The right mission, The failure of the only mistake X

#### IV

25日目

教育チーム

「ロイドチーフ：ちよつと、相談したいことが」

ロイドが資料ファイル（に隠したエロ本）を読んでいると、部下である職員の一人が困り顔で声をかけてきた

「どうしたんすか」

ロイドは目を向けることなく声だけで返答する

「その：無の世界蛇について、なんですけど」

無の世界蛇、と聞いたロイドはファイルを閉じては部下の話に耳を傾ける

「無の世界蛇がどうかしたんすか」

無の世界蛇は、教育チームに收容されているアブノーマリテイであり、ロイドも以前まで頻繁に管理作業を指示されていた

しかし、ここ三日ほどは他職員の教育の為に管理作業を譲り、ロイドは暫く無の世界蛇の様子を見ていなかった

「ええ、その：普段は真つ暗な水槽の中に姿を見せてくれるんですけど、最近はめつきり姿を見せてくれなくて」

「姿を見せない：？声は？呼びかけに応答するんすか？」

「それもないです」

エネルギーは生産できてるんで、水槽内にはいるにはいるんでしょうけど：：条件は揃っているのに、クリフォトカウンターも増えなくて

まずいんです、この三日間で日毎にクリフォトカウンターが減少してるんです」

「今何個っすか」

「あと：：二個」

「…もうちつと早く報告、相談するべきですよ」

「すみません」

部下からの報告にロイドは不安を感じた

（一体何が…様子を見に行きたいけど、勝手に収容室に入ったら怒られるし…）

本当は怒られるどころではなく、管理はあくまで仕事であるため、ロイドに勝手な行動はできない

しかし、チーフなりにできることはあり、セフィラを通して管理人へと報告することはできる

「ホド様、お時間いいですか」

ロイドは教育チームに備え付けられている通信機器から教育チームのセフィラ、ホドに呼びかける

『はい、どうしましたか？』

ホドはすぐに受け答えてくれた

「今他職員から聞いたんすけど…なんか、無の世界蛇の様子がおかしいらしいです」

一応、管理人に言っといてくれませんか」

『…わかりました、報告ありがとうございます、伝えておくれね』

スムーズに報告が終わるも、ロイドの不安は収まらないまま、次第に大きく膨らんでいく

無の世界蛇はALEPHクラス、何かあれば社内が壊滅する恐れもあるのだ

実際に脱走したことはないが、クリフォトカウンターが0になると脱走してしまい、状況によつては凶悪な怪物としての力を振るう事だろう

（…どうしたんだ、無の世界蛇）

ロイドの不安は、無の世界蛇の問題の他にも感じられていた

それは、自分の身近に危険な毒の塊が忍び寄ってくるような感覚だった

教育チームの収容室のひとつ

窓の外から見る室内は塗り潰したように真っ黒で、普段の室内は通常  
の収容室のままである

しかし今、収容室内は異様な暗さに包まれていた  
照明が消えているというレベルではない

数十センチ先が見えないような暗さ

普通の収容室とは違った雰囲気、職員はいない

それなのに、その空間に足音が響く

コツ、コツと

「あーあー暗い暗い、お前の根暗を表したような暗さだね

陰気でネガティブ、キノコが生えそうな…いや、海の底にキノコは  
生えないけど

あ、でもウミキノコって知ってる？あれキノコじゃなくてサンゴだ  
けど」

軽快な声が収容室内に響く

ヒールの足音が止み、声の主は立ち止まる

「ねえ、返事すらできないわけ？

ばーけもーのさん♡」

瞬く間に収容室内が照らされる

光の発生源は、床から突然生えた白い触手

声の主の左右に生えた二本の触手は生きているかのようになねり  
ながら発光している

光に照らされ見えだしたその姿は、灰色の長い髪をハーフアップに  
結び上げ、董色の瞳で目の前のものを見下す女性

都市の星と認定され、恐れられている人物

黒い森のスマイレの魔女…ヴァイオレット、通称ヴァイオラその人だっ  
た

「や、研究所崩壊日ぶり

あの時は僕の右腕を食い千切ってくれてありがとう」

そう言ってヴァイオラは本物の右腕をひらりと振る

その視線の先には、この収容室に収容されているアブノーマリティ  
檻の中の水槽、その中に沈んでいる目玉

「…何をしに来たの」

数日ぶりに水槽の暗闇から姿を現した眼球は、ターコイズブルーの瞳を赤く染め上げてヴィオラを見上げる

眼球のアブノーマリテイ：無の世界蛇は、明確な敵対心を見せながら静かに問うた

「やだなあ、怖い怖い」

その魔眼を向けなくてよ、今までみたいに消されるのはごめんなんだけど

…ま、今回はそうもできないでしょ

なんせ右目は僕の触手の中：潰したらお前の元に再生するし、ちやーんと大切に保存させてもらってるよ」

ヴィオラはそう言っては右の触手の先から一つの眼球を取り出す

それは無の世界蛇と同じ、ターコイズブルーの瞳をした眼球だった「何の用って聞いているんだけど」

「あはは、まあ安心しなよ」

今回のメインは、お前じゃない」

ヴィオラは眼球を触手内に仕舞うと、柔らかな微笑みを浮かべた次の瞬間、五本の触手が彼の周囲を囲み、赤い雫を滴らせていた触手の先端には、丸いボールのようなものが持ち上げられていた

「…え」

その正体は、L社内で働いている社員達の頭部だった

「…あ…え…」

頭部が五つ、無の世界蛇の前に落とされる

血が広がっていく

赤い湖に、ヴィオラは足を踏み入れる

「お前は今回、舞台装置に徹してもらおうよ」

社内に放送が響き出す

『非常事態レベルII、非常事態レベルII』

職員の皆さんは警戒を』

その放送が流れると同時に、無の世界蛇の水槽にヒビが入り、檻が壊れだす

「あ…ああ…だめ…だめだめだめ…死なせちゃダメ…絶対に…」

水槽が崩壊し、黒い水が溢れかえる

水はヴィオラの足を濡らし、流れる水に流されるように無の世界蛇は収容室から姿を消した

『無の世界蛇が脱走しました！管理人、早く探してください！』

収容違反した無の世界蛇は、最後に作業をした職員の元へ向かい、寄生する

しかし、ヴィオラが権能を用いて殺した者の中にその職員が含まれている

その場合、近くの職員に寄生する

運が悪ければ、精神力が低い職員に寄生する危険性もあるのだ

「さて…あともう一押しかな」

ヴィオラはそう呟き、収容室から立ち去る

静まり返った収容室には、もう誰もいない

The right mission, The failure of the only mistake XV

安全チーム

そこは未だ平然といつものように業務が続いていた

「カウレス、お疲れさまです」

「おう」

中央本部の応援業務を終えてきたカウレスがメインルームへと戻ってくる

時刻は10時37分、業務が終わるまでのノルマエネルギーが溜まるまではまだ時間がかかりそうだった

「次の指示があるまでは待機でしょう」

「そうだな、今んとこな」

「…お前は一日ここでじっとしてろよ、無駄に動き回るな、何かあったら逃げとけ」

「カウレスがそこまで言うなんて」

でも、この弱い装備でどこまでできるか試してみたいですね」

「お前、どんだけ戦闘狂なんだ…」

メインルームのベンチに腰掛けながら二人は会話を続けている

数日前までは険悪な関係だったのが？のように二人は打ち解けていた

「戦闘狂だなんて、ただ自分の性能を試してみたい気持ちがあるだけです

そうですね…呼称としてはアクティブモンスターなんてどうでしょう」

「そこまで話したレイン575に、カウレスは何も言わない

「…カウレス？」

不審に思ったレイン575は横にいるカウレスの方に視線を向け

る

プシュ

と小さな音を立てて何かが噴き出す

その僅かな飛沫がレイン575の頬に飛び散る

生温かいその感触には覚えがあった

この会社に来て何度も浴びたもの

その正体を確認するよりも前に、なぜそれが自分に降りかかったかを目の当たりにする

振り向いた先にいたカウレス…その体の首から上が消えているのだ

「……………」

そのまま首のないカウレスの体はバランスを崩し、ベンチから倒れ落ちる

「……………」

レイン575はカウレスだった死体を眺めたまま思考を可能な限り巡らせた

（なぜカウレスが？アブノーマリテイの能力？彼は本日中央本部の管理業務に行つて…その相手は0-06-20…情報通りなら「何も無い」ですが、その能力的に作業終了後の職員的首を刎ねる能力ではないはず

アブノーマリテイが収容違反を起こしたという通達もなければ試練だつて…では一体何が…

可能性があるとすれば…）

『非常事態レベルⅡ、非常事態レベルⅡ』

職員の皆さんは警戒を』

レイン575の思考を遮るように、大きなブザーの音と共にアンジェラのアナウンスが施設中に響く

（今の状況から察するに…死んだのはカウレスのみではないということですね

非常事態レベルⅡともなると…五人前後死亡、その周囲の職員も数名がパニックに陥っている可能性がありますね…）

ドクドクとカウレスの首の断面から血が流れていく

レイン575は直前まで会話していた同僚の遺体に顔を歪め、自身のスーツのジャケットを脱いで首を隠すように遺体の胸に掛ける

「…(ぐめんなさい)」

一筋の涙が流れる

レイン575は目元を拭っては、鋭い目つきで顔を上げた

「私の処分の為に、ここまでしますか…母様」

追い打ちをかけるように、また別のアナウンスが流れる

『無の世界蛇が脱走しました！管理人、早く探してください！』

その声は、教育チームのセフィラであるホドのものであった

(無の世界蛇…エンサイクロペディアは一読してはいますが、共有記憶には情報がありません…この周期に初めて登場したアブノーマリテイでしょうか)

職員に寄生するアブノーマリテイ…寄生された職員は素早くなる代わりに精神侵食耐性が低下するのですか

その職員を早く特定して保護しないと、もし精神力が低い職員に寄生していた場合今の状況に長く耐えられるとは思えません

寄生された職員が死亡した場合…無の世界蛇が攻撃態勢に移行する

無の世界蛇はALEPHクラス、攻撃属性はPALE属性…多くの職員はPALE属性に耐性がない、職員が全滅してしまう可能性が高い…

急がないと…！)

レイン575は立ち上がり、安全チームのメインルームを飛び出した

身軽な体で廊下を駆けていく

情報チームの廊下を駆けているとき、続けざまに放送が響く

『死んだ蝶の葬式が脱走しました！管理人、早く鎮圧を！』

「…!?!」

死んだ蝶の葬式が収容違反を起こした

それは恐らく偶発的なものではない



(死んだ蝶の攻撃で精神が崩壊した職員はそのまま眠るように死んでしまう：アブノーマリテイの特性を利用して連鎖的に無の世界蛇を暴れさせようと…)

…どうして、そこまで…)

レイン575は焦燥感を感じながら急ぎ足で教育チームへと向かった

一方、教育チームでは

「くそつ、深紅のクソピエロもいなければ作業もまだ行っていないのに、なんでクリフォトカウンターが減ったんすか…!」

収容違反を起こした死んだ蝶の葬式の鎮圧をロイドと他の職員数名が行っていた

「ロイドチーフ!グロッサが無の世界蛇に寄生されて…!」

「わあってるつすよ!畜生、マルコも突然首が消えて死んで、無の世界蛇は脱走して、死んだ蝶の葬式はなぜか出てきて!なんなんすか、誰かが仕込んだかのように最悪な方向に進んで…!」

とにかく、グロッサは退避つす!まだ入社して二日目なんすから…一刻も早く安全な場所に…!」

ロイドは背後にいる新人の部下に指示を出しながら死んだ蝶の葬式に応戦していた

背後にいる職員は既に恐怖と緊張に支配され、うまく足が動かせずにいる

「早く!走れ!」

「俺グロッサを安全な場所に連れて行きます!ほら、早く!」

もう一人のエージェントがグロッサと呼ばれた被寄生者の女性職員の手を引っ張る

死んだ蝶の葬式はグロッサを見ては、恭しくお辞儀をした

否:グロッサではなく、彼女の頬に寄生した無の世界蛇に

そして、死んだ蝶の葬式は棺桶を構えた

「…!」

「マズい!早く!!」

ロイドがそう叫び、退避する二人の職員はエレベーターの扉までのあと数歩というところまで走る

しかし、二人がエレベーターに乗り込むよりも早く、死んだ蝶の葬式の棺桶の蓋が開く

棺桶から無数の白い蝶が現れ、飛び出していく

その蝶達はそのまま波となり、ロイド達に襲い掛かった

「ツ……くっ……い！」

蝶の群れに？まれながら、ロイドは寸でのところで耐えきった

しかし、後ろでどさりと重いものが倒れる音がした

「……なんてこった……すね」

背後を振り向くと、そこには死んだ蝶の葬式により息絶えた二人の職員が倒れていた

やがて、女性職員の体が蠢き始める

女性職員の死体の背中が大きく膨らみ、皮膚と筋肉が裂け骨が砕かれていく

「……まるで……脱皮みたいだ」

女性職員の死体から、黒い躯体が膨らみ出てくる

やがて顔部分がロイドの前に現れた時、その巨大な躯体は廊下の端を埋め尽くし長い尾はエレベーターの扉を破り縦に続く空間に垂れ下がる

黒く巨大な、一匹の蛇

それは正しく、世界蛇と呼ぶに相応しい形だった

その体から煤のような影が滲み、蛇の顔の中央には一つの赤い眼球がロイドを見つめていた

「……はっ……ははは」

ALEPHクラスとして相応な怪物を目前としたロイドは、乾いた笑い声を零す

「……」

「ツツ!!」

脱皮した無の世界蛇は劈くような叫び声をあげ、その巨大な躯体をうねらせ動き出した

一面の黒が視界に広がった時、ロイドは小さく呟いた

「こんなことなら、アイツに告つときやよかつたつすね…」  
脳裏に浮かぶのは、仏頂面で紫の瞳が美しい機械的な同僚

「いつか死が来るのは誰もが同じだからこそ、満足のいく人生、胸を張れる人生を歩むのが何より大切だと思うの」

以前聞いた、無の世界蛇の言葉

それを語った怪物は、今は理性の欠片もない

…グシヤリ

肉と骨が圧迫により潰れる音が、黒い蛇の躯体の下から聞こえたよ  
うな気がした

そのまま無の世界蛇は這いずり進み、赤い跡を引き摺っていった

The right mission, The failure of the only mistake X  
VI

「…」

レイン575は呆然としていた

強い振動の発生場所、教育チームの廊下に辿り着いた時に見たものにただ驚愕していた

内側から何かが飛び出たようにもぬけの殻と化した職員

蝶に集られながら眠るように息絶えている職員

もはや原型を取り留めていないほどに擦り潰された職員

その惨状を目にしたレイン575は、手にした警棒を強く握りしめた

ひらり、と蝶が舞い寄ってくる

廊下の奥には、モノクロの蝶

死んだ蝶の葬式が立っている

「…そう、そういうことですか

無の世界蛇はただの蛇ではない、だから貴方は協力したんですね

根底にあるのは「救いたい」という正義感…同族のような存在なの

ですか

違ったのは、無の世界蛇には「理性」があった

理性により心の底で望んでいる欲求…救済欲を押し潰していた

アブノーマリティにはあるまじきことです…エンサイクロペディア

を見る限り元は人間だったようですが、よほど意志の強い方だった

のでしょう」

レイン575は警棒を振るい、死んだ蝶の葬式に歩み寄る

数歩の距離にまで近づいたところで、レイン575は死んだ蝶の葬式を見上げた

蝶の頭では表情は何えないが、まるで微笑んでいるように感じ取れ

る

「…ええ、そうですね、私達は似た者同士ですから

アブノーマリティは元よりその形である先天的なものと、とある物質により自我が解放され肉体が変化した後天的なもの

私達は同じ物質を活用して製造された複製人間：製造過程を見れば、私達は兄弟と見れるでしょう

ですが、私は…救済だろうと仕事だろうと、誰かを殺すのはもうやめたんです」

力強く睨みつけるレイン575に対し、死んだ蝶の葬式は手を顎辺りに寄せわざとらしく首を傾げる

「貴方には当然理解できないでしょう、私だって全てを理解しきれていませんから

だから相互理解など望みません、早く収容室にお帰りください」  
死んだ蝶の葬式は緩やかに腕を持ち上げ、指先を銃の形にして構える

そして撃ち放とうと指の先をレイン575の額に添えるも…その腕はボトリと床に落ちる

死んだ蝶の葬式の腕の一本は、肘関節を境目に切り落とされていた死んだ蝶の葬式が訝しむ間に、もう一本の腕も切り落とされる

レイン575は警棒を振るう

切り終えた腕を廊下の端に蹴り飛ばし、再び死んだ蝶の葬式をそのただの警棒で切り刻もうと足を踏み出した

「メラビアンの方則って知ってる？知ってるよね、最高のAIなんだから

人の第一印象は出会って数秒以内に決まり、また視覚情報による印象が評価に大きく影響するという概念…

僕さ、初めてAに出会った時は「なんかパツとしない堅物だな」って思ったんだ

そんなAが、今や大事な女の遺志を引き継いで大層なことを成し遂げようと地獄生み続けている…

僕、そういうの嫌いなんだよね

大衆の幸福の為に少しの犠牲が生まれるの

幸福を目指すなら、誰もが平等に地獄の大作進をするべきだって

そうは思わない？アンジェラ」

「L社本社、メインモニタールーム

一つの大画面の周囲に付属しているサブモニター、その手前にテーブルと上質な革製の椅子

それに座りながら画面を眺めているのは管理人：ではなく、灰色の髪と紫の瞳の女

くるくると椅子に座り遊びながらその女は、背後にいる機械に問いかけた

「…こんな事態を引き起こしてしまって、一体どういうつもりですか…ヴァイオレット」

アンジェラは黄金の瞳を董に向ける

その表情は、苦痛を覆い隠すように険しかった

「どういうって…アンジェラ自身もわかってるんじゃない？今回も駄目だって

575番…ありや不良品だ、廃棄しないと

でもアレがしでかした損害は大きい、光の種シナリオに外れてしまったからね

だからもういつそ、廃棄処分も兼ねて徹底的にエラーを起こしてしまおうかって！」

無邪気に笑うヴィオラは、横に蠢く触手を撫でる

その足元には、男の死体が転がっている

「せっかくあの女が収容されてるんだから…自分の手で、自分の子供もどきを殺すのも一興だよね

あはは、ポップコーン持ってくれば良かった、いい喜劇が見れそう」手を叩きながらモニターに向き直すヴィオラは、愉快そうに笑い愉しんでいる

アンジェラはただその後ろ姿を見つめ続けることしかできなかつた

The right mission, The failure of the only mistake X  
VII

中央本部メインルーム

「ひ、きやあああ!!」

一人のオフィサーが悲鳴を上げた後に虫のように潰される  
多くの職員がパニックに陥る

七人が挽き潰され、五人が喰われた

「うわあああーだれ、がッ」

一人、二人、大きな蛇に殺されていく

逃げ惑う者、泣き喚く者、恐怖に狂わされる者

赤い眼が職員を捉える

たったそれだけで、多くの職員が息絶える

「ひ……あ……」

絶望に染まった職員が、世界蛇の前で崩れ落ちる

無の世界蛇は唯一の目をそちらに向け、その口を大きく開き黒い口の奥を覗かせた

凶悪な牙が、職員に突き立てられる

「ひっ……きやああっ!!」

職員が食い潰されそうになったその瞬間、人影が現れる

ボロボロになった警棒が、無の世界蛇の牙を砕く

「っ……大丈夫ですか!？」

全身擦り傷だらけのレイン575が、数匹の蝶をまといながら駆けつけたのだ

「あ……れ……レインチーフ……」

牙を砕かれた無の世界蛇は大きく身を振らせながら後退する

レイン575は息を切らしながら警棒を握り直す

「無事なら一旦引いてください、そして動ける全職員に通達を

管理業務を続行、今日のエネルギーノルマを達成してください、と」  
「え…な、何言ってるんですか…ALEPHクラスのアブノーマリ  
ティが収容違反をしている中、いつものように働けと…!？」

あとその蝶何!？」

「だからこそです、下手にALEPHクラスを相手取って職員が全滅  
してしまう前に、今日の業務を終えれば生き残れます

私がああ蛇を引き付けているうちに各自が行動してくれば、今日  
を終え完全隔離システムによりアブノーマリティは再収容されます

一人でも多く助かりたいのならはこの手しかありません、あとこの  
蝶は少し小競り合いを…ああ鬱陶しい!」

顔の周りをくるくる飛び回る蝶を手で払いながら他職員に指示を  
していく

無の世界蛇は黒い炭のような涎を垂らしながら、レイン575を睨  
みつける

「先程から管理人の指示がありません、伝達機器の故障か、管理人自身  
に何かがあつたようです

勝手な行動は許されませんが、今私達が自分で考えて自分で動かな  
いと、生き残ることすらできません」

「レインチーフ…」

「もし責任問題となれば、私がすべてを請け負います

再度言います、生き残りたいなら今日の業務を終えることです  
私たちに残された生存方法はそれしかありません」

レイン575はそう言い捨てた後、ヒビの入った警棒を構え、無の  
世界蛇の元へ駆け出す

巨大な蛇は長い尾を打ち付けてはレイン575を潰そうとするも、  
レイン575はそれよりも早く駆け回る

L社職員の中でも随一の足の速さを誇るレイン575だが、そもそ  
ものサイズ差が圧倒的過ぎるのだ

無の世界蛇が細い瞳孔を狭め、レイン575に焦点を合わせる  
「そう簡単に捉えられません…!」

レイン575は膝に力を籠め、一気に横へ跳ねる



すると無の世界蛇の大きな体の陰に隠れるようにレイン575の体が赤い瞳から外れる

そのまま無の世界蛇の死角から跳躍し、無の世界蛇の頸椎部に警棒を突き付ける

「ッ!!」

耳が引き裂かれそうな絶叫が無の世界蛇の虚空の体内から発せられる

「早く行ってください!……ここには近づかないように!」

「……」

指示された職員は反対方向へ走り、出会った職員達にレイン575の言伝を伝え広めた

イヤホン型の無線通信機を活用し、同部門の職員やセフィラと連携を取りながら、またはすれ違った他部門の職員に口頭伝達しながら管理業務は再開されていく

その変化は、メインモニタールームでも確認された

「へえ、考えたね、575番

でも、硬くなって動かしづらい関節や筋肉でどこまで蛇とやりあえるのかな」

優雅に紅茶を飲みながらモニターを観察するヴィオラ

その背後に立つアンジェラは、物音を立てないよう慎重に懐に手を忍ばせては、隠し持っていた拳銃を手取る

「やめたほうがいいよ、それは賢明な判断じゃない」

そんなアンジェラの行動を、ヴィオラはモニター方面にもいたまま静止を呼び掛ける

「僕は君の事は気に入っているんだ、愚かな行動をして無様にスクラップになってほしくない」

瞬く間にアンジェラの額に触手の先端が触れる

一ミリでもその拳銃を引き出せば、体感時間が100倍遅いアンジェラにも意識が遅れるほどの刹那の間に機械の体は破壊されるだろう

アンジエラは神経システムが底冷えするような感覚に見舞われては、拳銃を懐の奥に戻す

「うん、いい子だ」

顔を向けることなく、ヴィオラは微笑んだ

「いッ…くう…!」

尾にはじかれ、レイン575の体は壁に叩きつけられる

肺の中の空気が一瞬にして吐き出され、呼吸がままならない

無の世界蛇と戦いだして、五分が経過した

警棒は砕かれ、武器としては更に心許ない

レイン575の頭からは血が流れ、平衡感覚が正常に機能しない

ふらつきながらも、レイン575は立ち上がった

「はあ…はあ…まだ…まだです…」

武器が使い物にならなくなっても、レイン575にはまだ四肢も口もある

噛みついてでも、レイン575は立ち向かうことを諦めない

他の職員が必死になって管理業務を行っている間の時間稼ぎ…囧

役として、レイン575は折れそうな脚を奮い立たせる

無の世界蛇の瞳が、ゆるりとレイン575を捉える

回避しようと体を動かすも、膝が折れて倒れてしまう

(あの瞳の攻撃…この装備では対応しきれません…動いて…動け、私の体…!)

今日機能停止してもいい、でもまだ…まだ、今日の業務が終わるまで…皆さんの生存が確定するまで…!)

無の世界蛇の瞳孔が細くなる

死の視線が向けられる

レイン575が絶望を感じた、そんな時

「何一人で頑張りすぎてんのよ!」

レイン575の体が引っ張られ、無の世界蛇の視界から外れる

そのまま瓦礫の陰に連れ込まれ、レイン575は座らされる

「…貴方は…情報チームの…」

レイン575を助けたのは、一人の女性職員だった

「そう、ココです！今や情報チームチーフにまで登りつめたのよ！」

「…じゃなくて、貴方なんで初期装備でALEPHアブノーマリテイとあそこまでやりあってるのよ、化け物なの？」

「皆さんがアブノーマリテイ達を管理しエネルギーを生産している間、時間稼ぎを…はっ、ではなく！無の世界蛇を足止めしないと！」

レイン575が状況を思い出し瓦礫の陰から飛び出そうとすると、ココがレイン575の襟を掴み引き戻す

「ぐえっ」

「馬鹿ね貴方、そんなにボロボロになってまで貴方一人無理しなくていいの

ほら」

ココが瓦礫の隙間から、無の世界蛇を指す

厳密には、その足元

「無の世界蛇はWHITE属性、BLACK属性の攻撃に弱い！WHITE、BLACK属性のE・G・O武器所有者を中心に攻撃しろ！」

「あの巨大な体は動きが遅い！冷静に見極めれば簡単に避けられるはずだ！」

「目の攻撃は瞳孔が細くなればPALE属性攻撃が繰り出される合図です！目は一つしかないので視界は狭いはず、視界から外れれば問題ありません！」

ココが指した先には、何人もの職員が無の世界蛇の鎮圧に取り掛かっている様子が伺える

それを見たレイン575は呆然とし、ココが得意げに鼻を鳴らす

「今日、教育チームのロイド君がホド様に無の世界蛇に注意するよう言っただらしくてね

そこからセフィラ伝に各職員達に忠告が回ったの

おかげで皆、無の世界蛇が収容違反を起こす前に一通りエンサイクロペディアに目を通していたのよ

だからああやって冷静に対処できている

リスクは高いけど、時間をかければ鎮圧だってできるかもね！」  
「…ロイドが…いいえ、そうではなく！では業務の方は!? エネルギー生産は…」

「そっちも滞りなく

最低限の人数で回っているわ

あと10分もすれば今日のノルマは達成されるって」

ココは無邪気に笑いながら手でVサインを作る

「ハイパースペックの貴方一人で頑張らなくなつて、私達も日々強くなっているんだから、ちよつとは頼つてよ

ここでALEPHのアブノーマリティを鎮圧できれば、職員達の自信にもつながって更に成長できるはず、そうでしょ？」

ココは銃を構えながらそう告げると、瓦礫の向こうへ飛び出した  
「貴方が変わったから、私達も変わったの

世界蛇の首、取ってきてあげるから！」

果敢に走り出したココは瓦礫の山を踏み越え、高く飛び出し無の世界蛇の瞳に向かい銃を撃ち放った

その銃は、今朝レイン575が手放したE・G・Oの二丁拳銃であつた

WHITE、BLACK属性の銃撃を目に受けた無の世界蛇は施設全体を震わせるような悲鳴を上げ、尾をいたるところに叩きつける

そのダメージを逃さず、戦闘職員達は無の世界蛇を畳みかける

その光景を見ていたレイン575は、形容しがたい感情から胸の辺りを強く掴んだ

「…皆さん…」

レイン575の数日間の変化は無駄ではなかった

誰かの命を守ると行動したからこそ、その行動はレイン575に返ってきたのだ

今も、恐怖に抗いながら武器を手に立ち向かう職員達を見て、レイン575は視界を滲ませていた

「…ああ、いけません…泣いている場合では

私、こんなに涙脆かつたのでしょうか」

暫く息を整え、回復した後自分も加勢しよう

そう考えていた矢先、レイン575の片耳につけているイヤホン型の小型通信機から内線が入る

『…イン…レイン…い…』

回線が上手く繋がりにくい状態ではあるが、少しづつハッキリ聞き取れるようになってくる音声

それは、自分の所属チームのセフィラ、ネツアクの声だった

「ネツアクさん！今管理人はどうなっています!?!先程から指示放送が…」

『レイン、マズいことになった』

焦燥感が、耳元から伝わってくる

嫌な予感レイン575の頭の中で膨れ上がり、破裂する

今すぐに耳を引きちぎって、次の言葉を聞かないようにしようと思った

それでもレイン575は嫌に耳にこびりつく心臓の音と一緒に、ネツアクの言葉を聞いていた

『たった今、「何もない」が脱走した』

The right mission, The failure of the only mistake  
VIII

『まだ処分モードだが、管理人には繋がらないから期待できない  
どこにいるかは確認できている、安全チームの上階廊下だ  
あそこにはまだ宇宙の欠片、捨てられた殺人者の作業中の職員がい  
る

タイミング的に鉢合う可能性が高い』

その通信を聞きながら、レイン575は走っていた

中央本部の広いメインルームから、情報チームを抜けた先の安全  
チーム区域に向かって

『どうこうしろという指示は出せない、俺にそんな責任は負えない

だが、俺は死んでいく職員を見るのはもう散々だ

…こんなことを言うのも、本当は気が引けるんだが…

職員の身柄を確保し、即行離脱しろ

今のお前に頼むのは申し訳ないが、お前の足が頼りなんだ』

もう呼吸の苦しさすら感じなくなっていた

脚の痺れどころか、感覚すらない

一刻でも早く、職員を助けないと

ただそのことしか頭になかった

走り抜けた先に、安全チームのメインルームへ辿り着いた

「っ…っ…」

浅い呼吸を続けながら、レイン575は破損した警棒を投げ捨てた  
そのままメインルーム内に設置されているベンチの傍に近づいて  
いく

そして、ベンチの陰に跪く

「…借ります」

首のない死体、二人の同僚のうちの一人

その死体が手にしていた刀のE・G・Oを抜き取り、片手に抱えた

まま再び飛び出していく

そのままエレベーターに乗り、メインルームの上階にある廊下へと向かう

「あ、今終わり？」

「そうそう、とにかくエネルギーを生産しろってお達しだからさ」

隣並びの収容室から同じタイミングで出てきた安全チームの職員二人は、軽い調子で話している

「なんか教育チームのほうでアブノーマリテイが二体収容違反したんだって」

「レインチーフが駆け出していったんだよね…さつきからまともにアナウンスもないし、大丈夫かな」

「とにかく、エネルギーを生産しまくって今日の業務を終えさせるんだ  
だ

「さあ次々やってこ…」

二人が時間を置き、再び収容室に入ろうとした時…廊下の奥に人影が見えた

「あれ、誰だ？」

人影はエージェントのようで、俯いているようで薄暗い廊下の端にいるせいで表情が伺えない

「…あ、確か中央本部の職員さんだったはず」

「中央本部って言うと、今ALEPHクラスのアブノーマリテイが暴れている場所じゃないか

「なあアンタ、今中央本部はどうなって…」

「一人がその職員に近づいては質問を投げかけた

「 I Love You 」

立ち尽くす職員が、そんな言葉を口にする

違和感に気が付いた安全チームの職員が足を止めた、その時

「危ない!!」

背後から聞こえた危険信号と、後ろに引かれる衝撃

安全チームの一人を後ろに追いやり、前に出たのはレイン575

だった

「っ…っ…っ…っ…」

そのまま後ろに押された職員は尻もちをつき、すぐさま正面に目を向ける

廊下の床に小さな機械が放り出され、一步遅れるようにポタリと血が滴る音がする

廊下奥に現れた職員の背には鋭い爪の生えた血色の無い腕が現れ、その前に立つレイン575から一滴一滴血が零れ落ちる

「き…きやあああつ!!」

「れ、レインチーフ…!」

「っ、大丈夫ですか、二人とも」

振り向いたレイン575の耳は引き裂かれ、三つに分かれている

その切り傷は頬にも伸びている

「す、すみません!俺のせいでお怪我を…」

「これくらい問題ありません、通信機を失ったのは痛手ですが…」

そう言った直後に、レイン575は刀を鞘から引き抜いて振りかぶる

凶悪な爪を持つ職員らしき者がレイン575に襲い掛かり、その刀の刃に飛びついた

それと同時に、職員もどきの顔が歪み奇妙な笑みを見せる

「あ　ア、I　love」

「職員の姿を模倣する「何もない」です、覚えておいてください」

レイン575が刀を握り直し押し払いのけると、何もないは後ろに飛び退きその姿を変化していく

まるで皮膚の裏側を纏うように自身の体をくるんでいき、次第に何も内の姿は大きな赤い繭へと変化した

「あ、あれは…」

「何もないは、職員の姿を模倣する他に三つの形態があります

第一形態は収容室内にいる時のあの姿、第二形態はこのように繭状になります

問題は第三形態ですが…動きも早く攻撃も強力だと聞き及んでい



ます

ですので、第三形態になる前に仕留められれば理想なのですが…それは不可能です、第三形態の何もないから逃げ切るのも」

繭を見据えながらそう解説するレイン575は、後ろにいる二人の職員に目を配る

二人とも怯えているが外傷はなく無事そのものであった

ひとまず安堵したレイン575はゆっくり息を吐き、背後の二人に声をかける

「お二人とも、ここは逃げて下さい」

情報チームのサブルームを迂回し、コントロールチームに収容されているアブノーマリティに管理作業を

エネルギー生産を続けて下さい」

「えっ…れ、レインチーフは…?」

「ここで何も無いの足止めをします、一緒には行けません

私は頑丈なのですぐにやられたりなどもしません」

「そ、そんな…いい、嫌です！レインチーフも一緒に…」

「甘えないでください

いいですか、私は無駄なこととはしません

自分の命も、他人の命も、全てにおいて有効活用するのみです

そうそう死ぬつもりはありませんが…今この場で一番重症なのは

私、一番足手まといになるのです

貴方たちが五体満足で生き残る方がこの会社のプラスになる、そう

判断したままでです」

悲痛な訴えをする職員に、レイン575は冷たく言い放つ

以前のような冷淡な視線を向け、何もないの繭に向き直す

「…早く行ってください」

静かな懇願に、二人の職員は涙を堪えながら何もないと逆方向に駆け出す

二人がエレベーターに乗り込んだのを確認したレイン575は、扉横に備え付けられている非常ボタンをカバーガラスごと殴りつける

緊急ブザーと共に、廊下の両端のエレベーターに通ずる扉が強固な

防壁により完全に封鎖される

「おい…おい、レイン！何やってるんだ！」

レイン575が廊下を緊急封鎖する様子を、ネツアクはサブモニタールームから画面越しに見ていた

ネツアクは「逃げろ」と言っていたが、レイン575はそれをあえて無視し、一人何もないと同じ空間に居残ったのである

「クソツ…聞こえないのか…おい、おい…！」

それがどれほど危険な状況なのか、誰もが理解していた  
だが

「どうしてそんなに感情的になっているの？ネツアク

めずらしいね、貴方がそんなに声を荒げるの」

「職員の死に悲観的な貴方なのは知っていますが、そこまで激情することですか？」

あの職員の判断は正しい、ただ逃げては必ず追ってきて職員達が皆殺しになってしまう

誰か一人でも囿にならないと、施設全体が機能崩壊してしまう可能性が高いでしょうし」

コントロールチームのセフィラ、マルクトも、情報チームのセフィラ、イエソドもそれが最善であると判断している

ただできえ何かの介入によりALEPHクラスのアブノーマリテイが二体収容違反を起こし、既にエージェント、オフィサーまとめて20人以上死亡しているこの状況において、事態収束の為の犠牲は必須となっている

それはネツアク自身も理解している

しかし、納得できなかった

ネツアクは、人の死が日常であるこの会社での仕事に嫌気がさしていた

機械であるはずなのに、感情も自我もある自分を消したくて、もう何も見ないように、聞かないようにゆっくり眠りたくて

非常な現実から目を背けるように酒と薬をそっていた日々の中に、

問いを投げてきた者がいた

「なぜ…生きたくないのですか」

人間であるはずなのに、機械であるはずの自分よりも機械らしい一人の少女

生存願望と自殺願望、反する願いを持っていた自分達

いつからか、彼女は変わっていった

その変化は大きかった

今、彼女の変化に中てられた他の職員達が諦めずに戦っている

こんな荒んだ場所が、希望を抱えて回り出しているのだ

彼女はこの会社に必要な人材である…そんな理屈的な事ではない

昔の記憶が蘇る

魔女に連れられた、一人の子どもの姿

『…ああ…そういや、通信機壊れてしまいました』

これじゃ内線も使えませんね…』

画面の向こうのレイン575が呟いた

ネツアクは、そんな一画面を眺め続けている

The right mission, The failure of the only mistake  
IX

「…ああ…そういや、通信機壊れてしまいました」

これじゃ内線も使えませんね…」

全身の筋肉から力を抜きながらも刀から手を離さず、レイン575は廊下の天井に設置されている監視カメラを見上げた

「見えていますか母様」

これは私の、短い人生における初めての反抗期です」

頭の中は静かだった

いつも膨大な記憶を抱えていたはずなのに、凧のような静寂が広がる

「アンジエラ、いろいろとご迷惑をおかけしました

私も貴方のお力になれば良かったのですが、シナリオ上こんな展開はダメみたいです

…酷い話ですよ、希望の為に絶望が必要なんて

またいつか、どこかでもし会えたとしたら…その時は、お手伝いさせてくださいよ

この会社で一番の絶望を背負った機械…私達は、似た者同士なんですから」

繭は少しずつ拍動し、鮮明な瞳が周囲を見渡す

その彩り豊かな眼球達は、瞳を一点に収束し焦点を当てる

ああ、あの子の瞳は綺麗だな、宵闇の花みたいだ

あれがほしいな、あれがあればきつとだれもにあいされる、ほしいな、ほしい、ほしい、ほしいほしいほしいほしいほしいほしいほしいほしいほしいほしいほしいほしいほしいほしいほしい

ほしいな

「…ネツアクさん

貴方には一番お世話になりました  
具体的なことを言えば、いつも貴方の不節制な態度に怒っていたこ  
とくらい

でも、死にたがりの貴方のおかげで…私、知ることが出来たんです  
生きるからには、どう生きるか

この大きな檻の中で、どのように生きていくのか…

生きることと死ぬことの違い、それを問われてから何もかもが変  
わったんです

同僚や部下と親密に接したり、自分以外の命がどれほど自分にとつ  
て重要なものなのか…知るきっかけをくれたのは、間違いもなく貴方  
なのです」

赤い皮膚の繭は形を変える

大きく膨らみ、細く形どっていく

体中の瞼が開かれる

皮で覆われた口の奥からはただ唯一、何かの言葉が反響している  
「私を変えたのは、貴方です

それがいいことか悪いことか…それは判断しかねますが、少なくとも  
私はこの変化を得られて、「良かった」と思いました

だから、感謝しています

今まで…ありがとうございます、ネツアクさん」

大きな赤い影はゆらりと足を踏み出した

美しいその眼を持つ、目の前にいる人間を求めて

「…最期に、もうひとつ」

人型の赤い皮が、大きな口から赤い唾液を垂らしている

何もないソレには、愛されるものが必要である

だから、愛されるようなモノを欲しがる

ソレは今、美しい「眼」に手を伸ばす

「…ネツアクさん

貴方は生きてください

絶対、ですよ」

その時その人間が見せた顔は、涙を流しながらも誰もが見たことのないほどの優しい微笑みだった

生まれた時から自由なんてない

好みの自由、信じるものの自由、考える自由、動く自由、関わる自由、嫌う自由、欲求の自由

全てが母の言うがまま、だってそれが彼女達の世界だったのだから  
黒い風呂の中でオリジナルは骨と皮だけ、そこから聞こえる歌だけが彼女達の安らぎでもある

母は語る、このロボトミー社で働き、光の種シナリオに協力することを

その為にはより効率的にエネルギーを生産しなければならない

より多くの職員が絶望し、アブノーマリテイ達が殺人をすることで  
エネルギーは多く生産される

それを束ねる小脳達も、より良い希望を抱くことは許されない  
積み重なった絶望と苦痛の果てに、たった一人が悟りへと導かねば  
ならない

だから……「ここ」は、その台本シナリオに反してしまった

母の子の一人は、ここで思考を広めてしまった

疑問、歓喜、悲嘆、多くの「経験」を重ね、正真正銘「人」として  
の成長を得た

様々な感情を生み、心は豊かになった

脳に繋がる神経は、大きく発達したのだ

一人の子どもは、あの日読んだ本を思い出す

誰かがきっかけで苦悩し悩みながらも自分の為の願いを見つけ出す

それこそまさに「人間」の姿である

一人の子どもは、その瞬間理解する

自分を変えたその者が、どんな形であれ……自分にとって大きな存在  
になっていることが

これを、運命と呼ばずなんと呼ぶ

正しい使命と、唯一の過ちの運命  
彼女の人生は、その過ちにより彩られた

赤い爪が、彼女に忍び寄る

その爪先が触れるよりも早く、彼女は刃を振るった

刃はただ直線に引かれ、その赤い爪ごと手の半分を切り落とす

「H e l l o ?」

断面から血が吹き出る

腐ったような血と肉の匂いが、彼女の鼻腔を通り抜けていく

しかし、嗅覚神経はとうに麻痺している

「…貴方、愛されたいんですね」

刃を持つ人間は、その刃を構え直しては先程とは打って変わった凶悪な笑顔を浮かべる

こちらこそ、正に母に似た笑顔であろう

「貴方みたいな何もない故に誰かのものを奪うヒトは…残念ながら、誰にも…自分にも愛されることはないでしょう」

赤い、大柄な人影…第三形態に成った何もないは、棍棒に変化した片手を振り下ろす

衝撃とともに土埃が周囲を圧倒しながらも、人間はその刀を用いて棍棒を防いでいた

その力の強さからか、はたまた彼女の体の限界からか…既に手足は震え、額には汗が滴るほど流れている

人間は刀を傾かせ棍棒を受け流し、そのまま切っ先を腕に滑らせ切り裂いていく

肩を半分ほど切断された何もないは、表情を変えず切り口から絶えず血を流しながらも人間に手を伸ばす

人間はその手を避け、今度は手首から切り落とした  
返り血が降り掛かり、口元を濡らす

口内に侵入する鉄の味も、もう感じることはできない  
時間稼ぎの戦闘は、数分間に及んだ

人間は限界を超え苦痛も疲労も感じないほどに刃を振るい、赤い怪

物は切り刻まれて尚美しい瞳に手を伸ばした

数時間、何日と感じるほど長くも瞬きの間の戦闘は、収束を迎える

「ツ……」

何もないの足が、人間の腹を蹴り飛ばした

そのまま人間は通路の奥まで吹き飛び、血を吐きながら折れた刀で立ち上がる

その時、何もないの腕が形を変えていく

その腕は大きな鎌のような刃となり、人間目掛けて振りかぶる

「 g O O d B e Y 」

歪な言葉の羅列が、何もないの喉の奥から響いてくる

瞬間的に危険を感知した人間は、足を踏み出し回避するも…間に合わなかった

「……あ」

左へと避けた人間の右腕が刃と交差し、上腕から先の腕は重力に伴い地面に落ちていく

刀を持った右腕は血を流しながら二度バウンドし、やがては一切動かずただの「モノ」として放置される

人間は切り落とされた右腕に手を伸ばす

否、右腕が握ってる刀に手を伸ばす

しかしその瞬間、何もないが続けて刃を振るい、人間の横腹を切り裂いた

多くの血が吹き出し、血と酸素が減った体はバランスを維持できずそのまま倒れてしまう

「……」

呼吸もままならない人間は、横たわったまま何もないを見上げた

何もないは落ちている人間の右腕を拾い上げ、自身の皮でその右腕を手首に繋ぎ合わせた

どういう仕組みか、繋がった瞬間にその右腕は動き出し、関節運動を繰り返しては刀を落とした

そしてそのまま、人間の右腕を我がものにした何もないは、人間の方へ手を伸ばす



先程からずっと欲しかったものを、手に入れる為に

「……あッ……う、ぐ……」

人間の視界の左側に、自分の落ちた手が触れる

左眼の瞼の隙間に、指先が侵入する

そのまま神経や血管がプチリ、プチリと千切られ、視界の左は黒く染っていく

左眼が引き抜かれる音がした

見える世界は半分だけ、その視界に映る何もないは奪った右腕で奪った目玉を頭の皮膚の隙間に押し込んだ

痛覚神経は麻痺し、ただの空洞となった眼窩の熱だけが纏わりつく  
その熱も、やがては感じなくなっていく

何もないはその場から歩きだし、廊下を封鎖している扉の装甲を棍棒の腕で殴りかかろうとした、その時

『本日の業務を終了します』

皆さん、お疲れさまでした』

The right mission, The failure of the only mistake II  
X

「なにこれ、どういうこと…?」

メインモニタールームで、ヴィオラは狼狽していた

鎮圧されそうになっている無の世界蛇、収容違反した何も無いを自身と共に隔離した自分の子ども、着々と生産されていくエネルギー

彼が当初思い描いていた廃棄処分の子ナリオとはかなりかけ離れてしまっている状況に、困惑の色を見せ始める

「…やっぱ権能は七本揃わないと調子狂うな…五本じゃまとまりがとれない、六本目はここで見つまりそうなのに今だ影は見えないし…いや、今はそうじゃない

あの女に殺させようとせっかく舞台演出を整えたのに、これじゃ寸劇だ」

空になったティーカップを皿に叩きつけては、鋭い目つきでディスプレイを睨む

目に見えて苛立っているヴィオラを警戒しながら、アンジェラはエネルギーゲージを確認した

エネルギー総数は92%

本日のノルマまでもう間もなかった

アンジェラがやるべきことは、百倍遅い体内時間で十分に理解している

「…反抗期、か…いや、子供って本当に面倒だな

実際問題、子育てはこれが初めてなもんだからね

アンジェラは? やっぱりお父さんに振り向いてもらえなくて悲しいの?

反抗期、入ったりするの?」

アンジェラの記憶中枢に想起される一人の姿

今ヴィオラの足元に転がる死体と同じ姿

「機械は機械らしく」という言葉を発し、一度もアンジエラを見ようと  
しなかった男

アンジエラの心臓に似た部分が、軋むように痛んだ

「…さあ、どうでしょう」

「命令に忠実なのが機械だもんね

だからこそ、「心」つていうのは酷く厄介だけど…機械じゃダメなん  
だよ、アレを成し遂げるには

ちゃんとした肉の体、人間の肉体がないと意味がない

ところで…何をしようとしているのかな」

アンジエラは何も行動を起こしていないにもかかわらず、まるで思  
考を覗き見しているかのように問いかけるヴィオラに、アンジエラは  
静かに意識を集中させた

「…なんだと思いますか？」

エネルギーゲージはゆつくりとメモリを加算させていく

97%、98%、99%…

そして、100%になった瞬間、アンジエラはすぐ横にあつたアナ  
ウンス機材の放送スイッチを押し、マイクをオンにしては大きく声を  
出した

「本日の業務を終了します

皆さん、お疲れさまでした…！」

ヴィオラは無表情のままその光景を眺め、アンジエラを二本の触手  
で押さえつける

同時に、触手で器用に放送ボタンをオフにした

「…！」

「いやはや終業放送をするだけだなんて…なんか拍子抜けだな

放送だけじゃ、アブノーマリテイは未だ暴れて…」

そこまで言ったところで、ヴィオラは気が付く

一日の業務終了時に、収容違反したアブノーマリテイを再収容する  
ための一日に一度だけ稼働させるシステム

そのシステムのボタンは、今ヴィオラの後ろにある

「…まさか」

ヴィオラが振り向いた時には、それはもうこちらに向いていた。アンジェラが、触手に押さえつけられている腕を無理矢理動かし、その手に握る拳銃でヴィオラに狙いを定めてた。

ヴィオラが触手を動かす前に、最高のAIは引き金を引いた。その銃弾はヴィオラの脇腹横をすり抜け、後ろにあるボタンに衝突する。

その衝撃によりボタンは押され、画面の向こうでは脱走した何も無いが姿を消し、収容室内に戻されていた。

そのまま全収容室の扉が封鎖装甲により強固に塞がれる。

L社にて非業務時間のみ稼働させる防壁システムであり、これが稼働している間は職員も収容室に入ることができず、アブノーマリテイも収容違反は行えないようになっていた。

「…都市では、銃器に関して厳しい取り決めがなされています。

製造の際は、弾丸は鉄を貫通してはいけません。のだから」

鉄を貫かない弱い銃

その威力さえあれば、ボタンを押すことは可能であった。

「…してやられたね」

ヴィオラは薄く笑い、モニターを眺める。

泣きながら安堵し、生きていることに喜ぶ職員

動かない肉塊、血だまりの湖に横たわる蛇の亡骸

封鎖した廊下にて一人息絶える、右腕と左目の無い職員

ヴィオラはその光景を一通り見渡し、小さな溜息については触手を消しメインモニタールームから出て行く。

「今回は面白くなかったけど…ま、処分は終わったし、あとはあの死体を抽出チームに回したりなんなりすればいいよ」

どちらにせよ、もう終わりだしね」

拘束から解かれたアンジェラは去っていくヴィオラを眺め、モニターへと視線を移す。

「……そう、今回も…ダメなんです」

メインモニタールームに接続された、大画面と小画面

そのどれもが赤く点滅し、ブザーを鳴らしながら画面の中央に文字

列を並べている

↑!光の種シナリオエラー!↓

それは、繰り返す地獄を再びリセットする呪いだつた

管理業務施設内

業務終了の放送が流れた施設内は、喚起の声で染まっていた

「終わったー!」

「ここまでハードな仕事は初めてだな…!」

中央本部の広いメインルームにて、無の世界蛇を瀕死寸前になるまで相手取った職員達がその場にへたり込んでいる

「でも、なんとかALEPHクラスを鎮圧できたよ…!」

「すっごいしぶとかったし、あと一分長引いていたら全滅だっただろうな」

職員達はメインルームに横たわる巨大な蛇の抜け殻に目を向ける

それは、鎮圧された無の世界蛇のものであつた

「ねえ、レイン見なかった?」

疲労感から動けずにいる職員達に歩み寄ってきたココが問いかけた

「レイン?知らないけど」

「お前が避難させたんだろ」

「そうなんだけど…捜してもどこにもいないのよ」

どこ行つたのかしら…」

ココは駆け出し、その場から離れて施設内を探し回つた

「うわあああん!終わった!終わったよおお!!」

「もう駄目だ、これから食う飯がどれほどうまいのか考えただけで腹が減る…!」

コントロールチームのアブノーマリテイ達を管理していた安全チームの二人の職員も、互いを抱きしめながら一日の終わりに感謝し

ていた

「はっ！そ、そうだ！レインチーフは無事なのかな！」

「…大丈夫だ、あの人はチート級だし、何もないくらいぼっこぼこにしてるさ！」

その胸に拭いきれない不安感を隠すように、そうであってほしいという願望を語る

少しの休憩を終えて、自分たちの上司が残った安全チームの廊下に向かつて歩き出した

「…」

誰もいなくなったサブモニタールームでは、ネツアクが壁に凭れ掛かりながら片手で顔を覆い隠していた

「…クソッ」

先ほど見た光景が、頭から離れないのだ

他の職員を助ける為に、危険なアブノーマリテイを足止めしていた一人の職員

不愛想で、口うるさくて、不思議な人間

機械的だったその職員は、生きるために行動していた

以前は何をしても生き延びようとしていたその職員が、最期には他者を守るために自分の命をなげうったのだ

その職員は画面の向こうで片腕と片目を失い、腹を裂かれて横たわっているところを他の職員に回収されている

「ネツアクさん、こんなところで休まないでください

ちゃんとセフィラ用の休憩室、あるでしょう」

「どうです、この数はネツアクさんには無理でしょう」

「あえて言うなら酔っ払いダメ上司かと」

「人型のネツアクさん…想像できませんね

…見て、みたいです」

「ネツアクさん、お疲れ様です

しかし業務中に飲酒とはいただけません」

「ああほら、もう業務が始まります

ネツアクさんも持ち場についてください」

「…では」

「…ネツアクさん

貴方は生きてください

絶対、ですよ」

その職員の声が頭の中で再生される

最期に見せた彼女の笑顔は、今までの堅い顔つきからは想像もできない程に柔らかく、切ない泣き笑いだった

それを思い出すだけでネツアクの視界はノイズが走る

逃げるよう伝えても、彼女は逃げずに戦った

それは正しく、彼女の意思

「…いい人間に、なったな…」

涙も流せない機械の体を小さく恨んだ

最期の言葉は、死にたがりの機械に向けた願い

自分の生存しか求めていなかった彼女が、自分以外に「生きてほしい」と願ったのだ

なら、死にたがりの機械はどうするべきか

「…ああ、そうだな…こんな世界で生きろって言うんだろ  
お前はいつも、俺を叱ってばかりだな」

死にたがりの機械は、生きることにした

一言では言い表せられないあの職員の願いを叶え続けなければ、きつと彼女はまた叱ってくるから

ネツアクがそう決心した、その時

『光の種シナリオエラー！ 光の種シナリオエラー！ 光の種シナリオエラー！』

大きなアラートと共に、大音量のアナウンスが響き出す

「…!？」

ネツアクが驚愕している間に、彼は異変に気が付く

彼が保持している記憶が、少しずつ消去されていることに

「…全部、忘れろって言うのか…？」

記憶は次々剥がれ落ちていく

灰色の髪、紫の瞳、優しい名前

焼き付いた記憶が、古いものから

「やめろ…アイツが生きたことを、アイツが何かをしたことを、忘れちゃいけないんだ…！」

ネツアクが拒否しても、機械の体に組み込まれた仕組みは止まらな

い

「……………」

最期の姿までもが消えそうになった時、死にたがりだった機械は



Violence City  
Continuation of stardust  
I

転がる、転がる

美しい海のような瞳は転がっていく

ただ、往かねばならないという確信だけを頼りに

(…は)

菫の片目は、周囲の様子を見渡した

黒い空間、金色の輝き

そこはどこかの遺跡のように異質だった

(…私、まだ生きていますか)

呼吸は止まっていますが…息もせず五分も意識を保っているなどとは…我ながら怪物ですね)

腕もなく腹も破かれた人間は、一切動かないまま目線のみを操作する

それでも、動眼神経や視神経が麻痺してきてはその些細な行為さえ自由にこなせない

視線を上へ向けた時、黒い影が曖昧な輪郭ながら捉えることが出来た

「目が醒めたようだな」

女の声であるのは理解できたが、その声に聞き覚えはなかった

過去の自分達でさえ出会ったことのない誰かなのだろう

「お前の事は織っている

都市の害悪、海の星の子、魔女に造られし赤子よ」

その言葉に返答しようにも、唇はおろか、舌も喉も動かすことはできない

「まあ動けないのは当然の理だろう、なにせお前は死体だからな

死人に口無しとはよく言ったものだ」

何も言わなくても、黒い女性は人間が言いたいことを理解しているように語り続けた

「ここは下層、L社の抽出チームの区間だ

…と言つても、ここも時期に始点に帰すのだがな

今運ばれてきた死体であるお前を抽出する必要もないが…：ようやく会合した魔女の子だ、聞きたいことは山ほどあり底は尽きぬもの

大変未練がましいものだ」

人間は彼女の言うことを理解した

この周期はもう終了するのだと

光の種シナリオはエラーを起こし、時は巻き戻りやり直しが始まるのだと

「さて、どうかな？お前が必死に守った他の職員の命、未来…：お前の努力は全て無に帰す

誰もがお前がいたことを忘れ、その軌跡は亡骸と共に沈んでいくそれを知ったお前の気持ちを聴かせては呉れまいか」

視界はぼやけているが、声の主はきつと黒い微笑みを携えていることだろう

人間はそう思いながらも、声には出せない言葉を静かに頭の中で唱えた

(…それでも構いません

短い人生でしたが、生きた実感を得られました

例え無駄だとしても…：私の自己満足でも、誰かの為になれたその事実、私だけは忘れないでしょうから)

その言葉を察したのであろう黒い女性は、静かに呟いた

「何も面白みのない人形であったか

…なら、こう訊こう

お前は、まだ生きたいと願うか？」

そう問いかけられた人間はもうしていない息を詰まらせた

黒い女性…：抽出チームのセフィラは続けた

「生き延びる方法はある、だが確実では無い

成功すれば奇跡であり、失敗すればお前は永遠に人の道に戻ること  
は叶わぬだろう」

傷だらけの人間はセフィラを眺め続けた

一切動かない死体同然ながら、その視線は未だ魂が宿っていた  
「もう時間は残っていない、故に勝手に取り掛かせてもらおう」

セフィラがそう言った時、空間内の気配が増える

「来たか」

転がり続けた瞳は、黒い機械に警戒心を向ける

「その子をどうするつもり…貴方、頭の調律者でしょう」

抽出チームに辿り着いた瞳…海の瞳の眼球、先程鎮圧された無の世  
界蛇は問いかける

調律者、と呼ばれた機械は薄ら笑いを浮かべる

「調律者であったのも今は昔

現状は別の名があり、それは私でありこの空間の名でもある

覚えておくが佳い、赤子よ

私はビナー、お前に未来を与えるものだ」

ビナー、と名乗った機械は無の世界蛇に手を伸ばした

無の世界蛇はその瞳を赤く染め、威嚇する

「どうするつもりと聞いています！」

そう叫んだ無の世界蛇の声は、二つの音が重なっている

「ほう…魂は同じなれど、精神は分割しているのか

案ずるな、ただ生き残れるかもしれない施術を施すまでだ

…無の世界蛇、哀れな蛇…貴様をこの赤子に移植してな」

それを聞いた人間と無の世界蛇は、今の言葉が信じられずにいた  
アブノーマリティを、人間の体に移植する

死体である彼女は普通の人間よりも丈夫に造られてはいるが、アブ  
ノーマリティ達から抽出したE・G・Oではなく、アブノーマリティ  
そのものを移植するというのだ

そうすれば、一体どうなるかは誰にも見当がつかない

「ちようにど佳く穴が空いているだろう」

蛇の目を入れれば、もしかすれば生命力が吹き返すやもしれないぞ」

ビナーは無の世界蛇を持ち上げては、人間の眼窩の前に添える「私も見てみたい

人の深層が形となった幻想体が人間と組み合わせることで、どのような変化を齎すのか」

「…本当に、これでこの子は生き返るの？」

無の世界蛇は赤い瞳をそのままにしながら、ビナーに問いかける不安と期待が入り混じる中、ビナーは答える

「さて、どうだろうか？」

自我の塊を移植するのだ、赤子の精神も肉体も拒否反応を起こさないとは限らない

生命は皆、自分とは違うものを外へと追い遣りたがる故な」

「…でも、何もしないよりかは、可能性があるんだよね…」

空いた眼窩に、目玉が入っていく

「より強い精神で律することが出来れば、或いは…」

眼球が眼窩に収まった

「さて、あとは巻き戻るこの場から外へと出る事のみであろう

お前たちの特性は織っている、遡る時間、平衡する空間に嫌われた

魂達

このままでは赤子も蛇も、時の移ろいの狭間に消え去ろう

然し、一瞬のみこの異質な世界から抜け出す時が存在する

巻き戻るその直前…このL社の全システムが停止するその瞬間こ

そお前達が脱する為の抜け穴となる

…何故ここまでするか、だと？

…単純な話だ、赤子でもわかること

あの魔女に都市が侵されている、都市という世界がな

都市の変質に拘りは無いが…あの害虫に好き勝手暴れられるのが

私にとって気に食わない、それだけだ

そろそろか、都市で生き延びていれば、いずれまた会えることもあ

るだろうな

その時は茶でも淹れて、魔女の灯を吹き消した過程でも聴かせてお呉れ」

Continuation of stardust  
t II

周囲の壁一面が黄昏の空に染まったディスプレイの中央で、上等な革製の椅子に座りながら、ヴィオラは深く息をついた

「はあくくく……クツソー！試合に勝って勝負に負けたー！」

シュミレーション型人生ゲームってこれだから嫌なんだよ！クソッ！」

机の上に積み重なった書類の山を雪崩で崩すかのように何度も手で机を叩くヴィオラは、悔しそうな顔をしながら足をじたばたとさせた

「要因は絶体あの薬漬けだ、クソ、オリジナルがアイツと接触していたのが失敗だったんだ……記憶消去施術をするべきだったか

今やってもリスクとコストが高すぎて釣り合わない、今後は安全チームのチーフに回すのは……いや、安全チームに所属させるのもやめておこう

あの薬漬けと接触する可能性は低い方がいい

オリジナルが関わった記憶といい、自殺願望といい……疑問を抱かせちゃいけないな」

ヴィオラは椅子を回し右横にあるディスプレイのキーボードを叩きながら呟いてる

「……あ、そうだ……情報共有範囲を確認しないと

エラー要因は13日目、そこを共有してる全員は処分確定で……あとクソ女の情報保持者も記憶消去施術しないと、保有したままだとエラーのリスクが……

……ん？」

ディスプレイを睨んでいたヴィオラは、一つの違和感を見出す

それは、L社の状況を複数のデータからモニターしている画面の片

隅

アブノーマリテイ達の情報が載っているページ

「…あのクソ女、どこ行った？」

ヴィオラは百以上のアブノーマリテイ達の情報に綿密に記載されているその画面を五秒に一往復しながら何度も見返す

しかしリアルタイムに更新されていく情報に、彼の疑問を払拭させる記述はない

L社に收容されているアブノーマリテイ達情報は現在その周期において未收容だとしても、過去の情報は確実にデータが保存されているはずだった

しかしそこに、一つだけ情報が抹消されている

No. F-03-05、無の世界蛇の情報がロストしている

「なぜだ…う…575回目の25日目に鎮圧されて收容室に戻ったんじゃない…その後アンジェラが收容室封鎖して…」

…ああ、そういうことか、残った左目を使つて封鎖システムを解除したんだ…ふうん…となるとあの女の行動原理から考えると、575番のところに行ったのかな

…ちよつと待て、アイツが化け物になった過程つて確か…」

ヴィオラは一本の触手を取り出す

彼の権能である触手にはそれぞれ権能としての能力がある  
ヴィオラはその触手から「情報」を引き出し、頭を抱える

「…可能性は高いな

時間の波の隙間に消えたか、都市に逃げ延びたか…

僕が都市ではまだ自由に動けないのを見越しての計算か？調律者め…

クローン達を同時に都市に放てるのは七日間…うーん、隙を突くのは得意だけど広い都市で探すのは厳しいな

…仕方ない！別の手を回して探すとするか！

うんうん、何もかもが順当に進んだら面白くないもんね」

ヴィオラは椅子から立ち上がり、その広い夕暮れの空間を後にする  
そして、心底意地の悪い笑顔を浮かべて呟いた

「どこにいるのかなあ、575番とクソ女は」

xxxx年1月5日

その日、都市には雨が降り続いていた

三日目の雨は都市の道に川を作り、屋根から流れる水は滝のよう  
都市の巢の隙間：裏路地の建物の更に隙間、それは動き出した

「……………いッ…うう…」

それは起き上がり、周囲の様子を見渡した

「……………」

ゆつくりと立ち上がり、足を引きずるように歩き出す

雨の水分が服に吸収されているからか、酷く重かった

「はあ…こんなに、動きづらいとは…」

数メートル歩いただけで息が切れる

よろついた体を支えようと、右手を壁につく

「はあ…はあ…は…は…は…は…え？」

そこで、それは違和感を感じた

記憶を辿れば、自分は右腕を失ったはずだった

しかし、今自分は右手を壁についている

他にも違和感があった

自分の目線が異様に低いこと

脚は短いどころか、何も履いていない

着ていたシャツがあまりにも大きいためワンピースのように隠し

てくれているから何とか問題はないものの、体が縮んだかのような変  
化に混乱する

「な…なんで、私、小さく…？」

不意に横を見た

手をついていた壁は建物のガラスであり、今のその姿を映してい  
る

成人女性ほどあつた体は幼い子供のようになり、灰色の髪は  
真っ白に染まってしまっている

切り落とされたはずの右腕は肉と骨が生えたかのように存在して  
おり、痛みも麻痺もない

映った右目は変わらない董の色を鮮やかに輝かせているが、失った



はずの左目の虹彩は海のようなターコイズブルーに染まっていた

「…これ、は…私は…私は、レイン初期型575番…25日目にALIE PHクラスアブノーマリテイと戦闘し、右腕と左目を失い、腹部を切り裂かれ絶命していたに等しかったはず…」

…その後…確か、抽出チームの…そう、ビナーにより何かを埋め込まれて…そう、そうです！左目に、無の世界蛇を移植され…」

自身を落ち着かせるために、彼女は記憶を辿る

自身が一度死んでいるにも関わらず、アブノーマリテイを左目に移植し、蘇生したのだ

「こ、これは実験成功という事なんですか…？体が小さくなったのは副作用なんですか…？」

「気が付いたか、童<sup>わっぼ</sup>」

狼狽える彼女の近くから、別の声が聞こえる

その声に反応した彼女は素早く周囲を見渡し警戒するも、薄暗い路地の隙間に人影は見当たらない

「どこを見ておるのだ、節穴の目じやの

ああ！片方は小娘の目じやったな！くはは！」

よく聞くと、その声は彼女の元から聞こえてくる

厳密には、彼女の左目から

ガラス越しに見える青緑の瞳、その瞳孔が歪み何かが這い出てくる

その黒い影は次第に細長い形になり、蛇の形を形成する

「ふう、貴様が眠っている間退屈過ぎて、よりいんぱくとの大きい登場の仕方を考えることばかりやっておったわ」

「でっ…出っ…!?!」

アブノーマリテイである左目から這い出てきた独眼の小さな黒蛇は、そのまま彼女の首周りに巻き付き陣取った

「無事生きていて何より、死んでしまっただけは小娘が出しやばった意味がない

死からよみがえった気分はどうじゃ？」

「あ…あ、貴方は何なんですか!?!無の世界蛇…？にしては記録と違って話し方が老人臭いというか…」

「厳格なる妾を老人臭いとは何事じゃ！威厳を保ちつつ親し気のある口調を学んだ努力を馬鹿にしおって！」

蛇は威嚇するように口を開ける

「まあその通り、無の世界蛇というのはあの小娘を指す呼称であり、妾はちと違う

なにせ、妾は世界蛇ヨルムンガンドそのものと言っても過言ではないからな」

蛇はそう語り、チロチロと舌を出し入れする

「ヨルムンガンド…？」

「ああ、ここはそういう神話もない世界であったか

なに、案ずるな、知りたいなら一から語ってみせるのも吝かでは…」得意げにそう語る蛇は、彼女を見て一度言葉を切る

雨に打たれる小さい子供の体は、寒さにより震え、呼吸は荒く今にも凍え死んでしまいそうだった

「…いや、まずは身の安全を確保するところからだな

このままではまともに生き延びることも出来ぬ」

「そ、そうですね…しかし、私は会社の外に出るのは初めてなので地形がわかりません」

「妾は何となく知っておるぞ、小娘が昔ふいくさーとやらの仕事でいろいろ練り歩いておったからな

足の速さだけは自慢故、広く活動しておったわ」

「では貴方が安全地帯まで誘導してください」

「そんな器用なことできるか

…まあ、行ける当てがないわけではないが」

「ではそこまで案内してください」

「可愛いのない童よのう…」

彼女は大きなジャケツトを一度脱いで頭から被り、首元の蛇と共に歩き出した

広大な都市の隅で、生き延びる為に足を踏み出す

「ところで、貴方の名前は？」

「む？妾か？」

「先程、無の世界蛇は小娘を指すとか…まるで自分は別人のように語っているのだ」

水溜まりを踏みつけながら、彼女は傍らの蛇に質問をする  
蛇は少しの間沈黙し、懐かしむように空を見上げ答えた

「…無二」

かつて、小娘にそう名付けられたのでな」

無二、と名乗った蛇は何かを思い出す

今は昔、と言うほど最近でもない、遠い遠い世界の話

「…して貴様は？名は何という」

「私ですか？私は初期型レイン575番…識別番号vol. 1. 0—575です」

「馬鹿者、それは貴様特有の名ではないだろう

ただの番号ではないか」

無二にそう叱咤されるも、少女は困惑したように言葉を詰める

「名とは人物特定の為の識別記号であるのでしよう…？」

「大馬鹿者、名とはその者に対する想いを込めつけられるのだ

妾の名も、小娘が「唯一無二の存在」という意味をもつつけたものだ

貴様に名がないのなら、これから見つけるといい

自分で意味を込めるも良い、誰かに委ねるのも良い

自分だけの名を見つけたのだ、それは貴様だけの人生になる」

「私だけの…人生…」

母に処分され、生き返った彼女は母から独立したに等しい

今まで母の命に従っていた彼女が、今は自分の身一つで生きなければならぬ

「何、妾は貴様に名を与えることはできんが、多少手伝うくらいならできよう

乗り掛かった舟じゃしな！」

傍らの蛇は能天気な笑う

そんな無二に呆れながら、少女と蛇の珍道中が始まった

Continuation of stardust  
t III

××××年1月5日 午後6時12分

「寒いです」

「だろうな」

三時間近く歩き続けるも、雨は止まなければ目的地には到達できもしない

「本当にこの道なんですか？」

「まあ、多分」

「多分？」

「第一、裏路地とやらの区域が違うのじゃよ」

「区域をまたがないといけないんですか」

一人と一体の奇妙な旅は、グダグダな様子で続いている

空も次第に暗くなり、夜の影が忍び寄っている

「夜出歩くのは危険じやろう」

「私強いですし大丈夫です」

「子供な体でよく言いおる

冷えて体力も消耗しておろう、どこか雨風を凌げ侵入しやすい建築物でも…」

無二の提案により、彼女は寝泊まりできる場所を探した

そして、良物件を発見した

「ここです」

そこは、薄緑の鉄でできたゴミ袋を入れるコンテナだった

「ゴミ箱ではないか！」

「でも雨風を凌げますし、もしかしたら何かいいものが見つかるかもしれない、入りましょう」

「貴様…生存に関しては遅しいな…」

少女はコンテナの蓋を開け、中に侵入する

コンテナ内は埃臭かったが、食べ物類が少ないためか腐敗臭は少な

かった

「毛布があります、ラッキーですね」

「ううむ…そう、じゃな…」

ナイロンのゴミ袋からはみ出ている古い毛布を引き出し、自身の体に巻き付ける

冷え切った体ではすぐに熱は生まれませんが、無いよりはマシだった  
「…落ち着いたところで、無二にはいろいろ聞きたいことがあります」  
「ほほう、なんじゃ」

無二は少女の腹に収まりながら応える

少女は頭の中で山ほどある疑問を整理し、一つずつ聞いていく

「まず、私がこうなったことについて、でしよるか」

「子供の体になった理由についてか、よかろう」

無二は一呼吸おいて語り出す

「死体の貴様は片腕もなければ腹も裂かれていたからの、蘇生したはいいがそこから生きるのは体力が足りんのじゃ

そこで、体が大きくて体力が不足するならいつそのこと体を小さくすれば良いと思いつたわけじゃ！いやあ妾って頭いいのお！」

「なるほど、かなりの馬鹿というのがわかりました」

「しかし体の細胞を整理したおかげで腕もまたできましたし、腹の傷も跡形もなく治ったのじゃぞ？血も何とか足りたしの

あぶのーまりていを移植し生命力はなんとか繋ぎ止められたのだから、これからちゃんと食って寝れば肉体は正常に成長するさ」

「ここから再スタート、みたいな感じですか…これぞ第二の人生…」

「妾知ってる！こんてにゅーというやつじゃ！」

「貴方出会って三時間で威厳マイナスですよ」

無二は一度少女の傍を離れ、ゴミ袋を漁り出す

「次に、貴方の事です

無二は、無の世界蛇とは違うんですよね…？」

「そのことか、まあ確実に違っているのではなく…親鳥と雛鳥のようなものかの」

無二は袋からまだ腐っていない缶詰を引っ張り出し、その牙で蓋に

切れ込みを入れていく

「妾と小娘の事を語るには、まずヨルムンガンドについて知らねばなるまい」

「ここから小娘…萌恵についてじゃ」

「貴方が先程から言っている…その萌恵さんという方が、無の世界蛇に」

「その通り、まあ飯でも食らいながら聞かがいい」

無二は開けた缶詰を少女に差し出しながら語り始め、少女はその缶詰を摘まみだす

遠い昔、果ての無い多重世界線の向こう側

この都市よりも幸福な世界は存在し、その世界には数々の歴史があつた

その歴史の物語の一つに、北欧神話なるものが存在していた

一つの世界樹・ユグドラシルを柱に九つの世界が存在し、世界蛇ヨルムンガンドは神により人間界の海の底へ捨てられた魔物である

ヨルムンガンドは北欧神話の終末・ラグナロクにて最強神トールと相打ちになつた

死後ヨルムンガンドは「死」の概念へと変貌し、多くの死の運命を運んできた

ただの事象と化した世界蛇は形も名前もないままに何千年も生命の終末としてあり続けた

ある時、一人の赤子が産まれた

その赤子は、その事象を「黒い蛇」の形として認識した

赤子は死を蛇として認識することで、その事象に名前と形を与えてしまう

名と形を得た「死の蛇」は、赤子を愛した

常に赤子の周りに在り続けた

赤子の周りには、死が広がっていた

動植物に人間、不自然な数の生命はごく自然に寿命を迎えていった  
赤子は美しい少女に成長していったが、そんな少女にも死は訪れる

ある日、少女は殺された

死んだ少女に嘆いた死の蛇は、自身の形と名前を返還することで少女を蘇生させた

少女の肉体は人間のまま魂は蛇となり、精神は人間の彼女と死の蛇のものに分化された

死の蛇となった世界蛇は少女に宿り混ざったことで変貌、転生した

「…それが妾、無二というわけじゃ!どうだ、ようくわかったか!」

「…そうれすね」

「おい、おい半分寝ておらんか貴様」

語り終えた無二に対し、少女はうつらうつらと船を漕ぎながら答える

「半分寝ていたのではありません…完全に寝ていました

その北欧神話?の話だけで六時間…本題の貴方や無の世界蛇の話で二時間…眠くもなりません、ただでさえ疲れているんですから

要するに、ヨルムンガンドが変生を繰り返しながら無二となり、そのおかげで萌恵さんは人間から無の世界蛇になったという事でしょう」

要約した話に頷きながら無二は付け足す

「いや、小娘は今でも人間じゃ

あぶのーまりていと呼ばれていても、中身が蛇でも、小娘は人間…ずっと、ずっとな」

感傷的な無二の様子に少女は首を傾げる

無二は二度首を振り、改めるように顔を上げる

「まあ、小娘を化け物に仕立て上げたのは妾の前身…ヨルムンガンドも同然

本来ならそんな傲慢により生き返らせられるものではなかったからな

ならば、その責任を取るのは当然であろう」

無二は少女の膝の上でとぐろを巻きながら休む体勢を取る

「小娘…萌恵の人生から普通の幸福を奪ったのは妾達、多くの元凶は妾達…ならその後始末をするのも妾である」

腹は決まっておる」

「…その、原点の話は理解できませんでした」

では、この都市…ここでは萌恵さんや無二はどのような過程でL社に來たのですか？」

「知りたがりな童じやのう…まあ良い、ここからは妾の目的にも繋がる故、もししばらく語ってやろう」

無二はそのまま、都市での生涯を語り出す

この世界において、無の世界蛇というのは都市に隣接する大湖の底に住まう怪物として生まれた

その時は無二の精神が主軸に据えられていたが少なからず萌恵の精神も存在していた

萌恵は願った、「愛するあのヒトを探したい」と

無二はそんなことはここでは不可能だと制していた

しかし、萌恵の心を直に感じ取れる無二には、その気持ちかどれほど大きいのかは理解していた

「…あのヒト？」

「小娘が原点の世界にて出会った運命の相手じゃよ、いやあ愛とはええのう…」

そんな時、湖に光が差した

光と共に、誰かの声が水の中でこだました

「君の記憶を封印する代わりに、君の体を人間にしてあげよう」

その声は萌恵の返答も無二の静止も聞かずにその力を振るった

次に目覚めた時には、萌恵は人間の肉体を手に入れ、無二は古い記憶と共に萌恵の奥底に封じられた

人間として生まれ変わった萌恵は何も覚えていないまま、都市にて生き続けた



苦しみながら願っていたことも忘れ、都市の空に浮かぶ星を眺める  
ことのみを生き甲斐にしていた

そんな時、そのヒトは現れた

雨の降る夜、美しいヒトは萌恵の前に現れた

願いを忘れた萌恵でも、心の奥底でその出会いに感じ入っていた

やがて二人は恋人となり、夫婦となり、子を儲けた

しかし、用意された幸福は不幸の為の舞台準備に過ぎない

「…幸福の絶頂にいた小娘を不幸に陥れようとした者がいた

その者こそが、人形兵器だったあやつと蛇の怪物だった小娘に人間の  
体を与え…わざと小娘を幸福にさせそれを奪うことで絶望に貶め  
る、復讐のシナリオを綴った張本人

原点にて幸福すら得られなかった哀れな魂…確か、ここではヴァイ  
オレット、とか言ったかのう」

Continuation of stardust  
t IV

xxxx年1月6日 午前3時10分

その名を聞いた瞬間、少女の全神経が痺れるような感覚に陥った  
ヴァイオレットとは少女の親のような存在であり、L社にいた時少女に廃棄処分と命じた者

黒い森のスマイルの魔女

多くのクローンを作り、L社にて周期ごとにテストを行っているその目的は少女も知りたくない

「…無二は、母様を知っているのですか？」

「知ってるも何も、小娘とは因縁の関係よ

あの小僧は何度生まれ変わったとて、小娘に対する憎悪と復讐心を消し去ることはない

しかし…その行動は限度を知らず思想は狂人そのものだ

その憎悪を否定することは無いが…小僧の崇高な目的とやは小娘の理想に反する故、妾はあやつを止める

小娘にしてくれたことの礼もせんとおう」

少女は呆然とした

自分の母が、無の世界蛇…萌恵という人物に何をしたのか、萌恵という人物は母に何をしたのか

何も知らない彼女は、それを知りたいと思った

全ての真実を

「…全ては萌恵さんに対する復讐…自分の正体を忘れさせ、一時の幸せを与え…それを根こそぎ奪った」

「そう

伴侶も子も奪われた小娘はこの世界に存在する奇妙な物質により蛇の姿に戻され、あぶのーまりていとして收容された

一度收容室から出られたが、その時に右目は奪われてしまったの

う」

少女は自分の左目に手を翳す

自分のものではない、ターコイズブルーの瞳

それは、無の世界蛇となった萌恵という人物のものであった

「旦那は殺されたが、子供は小僧に利用されている

その子供を使い潰すことで小娘の復讐を継続しつつ、小僧の本当の目的を達成する為の道具としているのだろう」

「えっ…」

その話を聞き、少女は声を上げる

魔女ヴァイオレットが使い潰している子ども

彼女の脳裏に一つのシルエットが浮かぶ

黒い水に溢れた浴槽の中で、骨と皮だけになりながらも歌を歌う自分達のコピー元オリジナル

「…そ、それって…」

「静かに」

少女が続けざまに聞こうとした時、無二が険しい声色で注意する

無二は警戒している様子でコンテナ内で周囲を見渡した

「…視線がない」

「何を…?」

「この都市という場所は、常に視線を感じていた

今はそれがない」

「視線…それって、もしや都市の「目」の事ですか?」

確か常に都市を監視しているという頭の一部で…情報は覚えていますが、午前3時13分から暫くの間その目を閉じる時間があり、今がその時間なのではないでしょうか」

少女から「目」の話を聞き、無二は唸る

「ならば…この無数の気配はなんだ?」

気配という言葉を聞き、少女は訝しんでコンテナの蓋を持ち上げ外の様子を観察する

街灯の光も建物の看板の電光も消えた深夜の裏路地は、一寸先も見えない闇に包まれている

その静けさの中に耳を澄ませる

何かが引き摺られる音がする

「…なにか、いますね」

「童、蓋を閉めろ」

少女が無二に言われたとおりにコンテナの蓋を閉じようとした時、それは視界に映った

暗闇に浮かぶ、二つの仄かな赤い光

それは揺らめきながら、さながら瞳のように少女の方を見つめていく

「ッ…！」

少女は慌ててコンテナを閉じる

心臓が酷く脈打っているのがわかる

アレに見つかったが最後、きつと生存はないと彼女の本能が語っている

両手で口を塞ぎ、息を潜める

金属を引き摺る音と重苦しい足音がコンテナの外から聞こえてくる

その足音はコンテナ前まで迫り…やがて、次第に離れていく

「…行った…？」

少女が安堵していると、無二が声を荒げる

「童、避ける！」

その声により少女は咄嗟に体を横に捻る

すると、コンテナの蓋を貫通して巨大な刃物が突き出てきた

刃ごとコンテナの蓋は引き抜かれ、赤い光がコンテナ内を覗き込む  
赤い光は黒いマスクの双眸であり、ガスマスクのようなソレをつけた人型の何かは一人だけではなかった

数人の不気味な人影がコンテナを囲み、血の滴る刃を手に持っている

「…掃除屋」

少女は思い出した

社内にも現れるという情報があり、彼女は実際に遭遇するのも初

めてである

そして、こんなにもすぐに身の危険を感じるのも

「童…じつとしてろ！」

衝撃から動けない少女の体が引き上げられる

小さな黒蛇だった無二は一人？み込みそうなほど巨大化し、少女の襟を啜えてコンテナを飛び出した

そのままうねる様に左右に動きながら、何人もの掃除屋を引き潰していった

「む、無二！貴方大きくもなれるんですか！」

「大きさなど些末な事よ！にしてもこやつら、人間ではないだろう！肉も骨もないぞ！殻の中には液体しか入っておらん！」

無二が這い進めど這い進めど掃除屋達は裏路地を埋め尽くすほどに立ち並んでおり、無二を視認してはその刃で切りかかってくる

「ちくちくするのう！鬱陶しい！」

「目が機能しない間のみ裏路地に侵入するのが掃除屋だと聞き及んでいます！およそ80分間もの間、裏路地を前進し掃除していくのだとか」

「半刻以上も逃げ続けられるか！」

階段を降り、坂を上り、建物の隙間を通り、掃除屋達から逃げ続ける

しかし掃除屋達がなくなることはない

数人の掃除屋が、一際大きな刃で無二の体を切り裂いた

「ぐっ…!?!」

無二はバランスを崩し、そこに掃除屋達が畳みかけてくる

「無二！」

掃除屋達の攻撃により、無二はダメージを負っていく

そして、無二は啜えていた少女の襟から口を離してしまい、少女は掃除屋達の隙間に落ちてしまう

「わ、童…！」

「…ッ、私は…大丈夫です…」

掃除屋達に囲まれ、無二は身動きが取れずにいる

少女が体を起き上がらせると、その周囲に掃除屋達が少女を見下ろし立っている

「あ……」

「掃除屋って知ってますか？」

「情報は知っています」

彼らを通った後には何も残らないと

「そーそー！なんか都市の外の外郭にいるって話ですけど、なんか一定時間だけ都市の裏路地にも出没するんだとか

人を燃料にしたり、子供を攫うって噂もあるんですよ、怖いっすよねー」

「そうですか、怖いとは感じませんが……」

「まあ、レインさんならどんな怖い存在でも吹っ飛ばしてしまいですね！」

以前L社にいたころ、明るい後輩がそう聞いてきた

子供を攫う、人間を燃料にする、なんにしてもいいことはない

目の前にいる掃除屋は少女を眺めた後、その黒い手を伸ばしてくる得物もなければ小さい体では力もあまりない

抵抗できる術もないまま、少女はその手を見つめ続けた

…次の瞬間、その掃除屋は動きを止め、縦に二つに分かれて液体を零しながら倒れていく

「……え」

その他の掃除屋達も、次々と切り裂かれては液体を巻き散らしている

掃除屋達が切り裂かれていくその光景に、少女は青い軌道を見た  
暗い裏路地の夜の中、斬撃の音が残響となって暗闇に響き渡った

「……大丈夫？」

ふと、そんな声が背後から聞こえた

Continuation of stardust  
tV

xxxx年1月6日 午前3時45分

「…大丈夫？」

少女の背後からそんな声が聞こえてくる

少女は反射的に振り返り、後ろにいる誰かを見上げた

雨は止み、厚い雲がその切れ目から月を覗かせる

月光はその人物の姿を照らす

白銀の髪、青い外套、巨大な鎌

サファイアのごとき双眸は冷ややかな視線を向けたまま少女を見つめている

「あ…う…」

「混乱してるのかな、無理もないよね…掃除屋達に襲われたんだし

あの蛇も邪魔者かな」

声や体格から男性とわかるものの、その柔らかい微笑みから発した言葉と共に、瞬く間に倒れる無二の方へ歩み寄り、その鎌の刃を振り下ろす

「や、やめてー！」

少女がそう叫んだ途端、無二の姿は消え刃はコンクリートの地面に突き刺さった

「…あれ、消えたね…？」

少女は呆然としていながら理解していた

無二は「実体化」を解除しただけなのだ

無二が少女の前に姿を現す前のように、無の世界蛇である左目の中に戻っただけだった

それだけで少女は安堵し、青い男に視線を向けた

「…あ、あの…助けてくれてありがとうございます…」

「…いいんだよ、ちょっと君に用があったから」

青い男は少しの間の後に少女に向け笑いかけ、少女の元に歩み寄る

「わ、私に…?」

少女は助けてもらったものの、言い表し難い恐怖を感じていた  
その恐怖は、先程の掃除屋なんかとは比べ物にならないほど大きい  
男が近づいてくるのと同時に、少女は後退る

「そう、少し確かめたいことがあつてさ…ここにいたらまた掃除屋に  
邪魔されちゃうから、俺と一緒に来てほしいんだけど…」

穏やかな声でそう話しかける男の目は笑っていない

その凶器的な視線から逃れようと、少女は思考を巡らせる

そして…

「あっ！」

と大きな声を上げ、何も無い空に向かい指さした

「…?」

男はきよとんと間の抜けた表情をし、少女は騙せられると思つてい  
た反動から気ますぐくなる

そしてそのまま背を向け、逃げるように走り出した

「…鬼ごっこかな? いいね、懐かしいよ…」

少女は月明かりに照らされた裏路地を駆け回った

「無二ー無二無事ですか!」

その間、掃除屋の攻撃により負傷した無二に呼びかけながら小さい  
体を駆使し狭い隙間道を潜り抜ける

「なんとか大丈夫じゃが…少し疲れた」

無二からの返答を聞き少女はそのまま走る

あの青い男が危険なのは直感的に察せられた

その危機回避力に従い、足を動かした

しかし、隙間道を抜け出した瞬間

「脚、速いんだね」

出口の横、建物の壁に凭れ掛かりながら青い男は待っていた

「…!」

「小さな子どもを誘拐する趣味はないんだけど…話を聞いてくれない  
のなら仕方ないね」



男はその大きな鎌を片手で振りかざす  
そしてそれを瞬く間に振り下ろした

その刃は少女の背後に突き立てられ、すぐ後ろにいた掃除屋を切り  
裂いた

少女がそれに気が付く前に、自身の足が地から離れた

「なっ…」

「少しの間辛抱してね」

男は少女を小脇に抱え、建物の看板を踏み越えながら小さなビルの  
屋上に降り立つ

「…うん、ここなら大丈夫かな」

男は少女を下ろし、しゃがみこんで目線を合わせる

「さて、俺は君に聞きたいことがある」

少女は秘かに悟る、「この男からは逃げられない」と

半ば諦めながら、抵抗しない方が安全かもしれないと考えながら男  
の話聞くことにした

「君はいなくなつたスマイレの魔女の子ども、初期型レイン575番：  
で合っているかな？」

少女は五秒前の自分の判断を撤回した

180度方向を変え、そのまま階段のある屋内へ通じる扉に向かい  
駆け出した

「逃げないでほしいな」

逃亡も虚しく、少女は両脇を抱えられ持ち上げられる

「くっ…：…そうです、私が識別番号V01. 1. 0—575：レイン  
575番です」

「やっぱりそうだったんだ、聞いてた特徴とは違うけど、君を見つけれ  
れて嬉しいよ

その青緑の目がアブノーマリティっていうやつかな…？」

「私を見つけ出してどうするつもりですか

察するに、母様の手先の方でしょうか…：私を母様に差し出すのです  
か？それとも、殺すおつもりですか？」

少女は振り返り、自嘲気味な笑顔を向ける

男はそれを見て少し困ったように眉を下げた

「そうだね、ヴィオラとは友達なんだ

だから約束は守らないといけない…最悪、抵抗するのなら君を殺さないとならない」

少女の心臓は凍り付いた

それと同時に、どこか諦めていた自分もいた

母から逃れられるわけない、母は粘着質で性格が悪いから

「そう…ですか

随分短い延長戦でした」

少女はそう呟き、一息ついて…自分の舌を噛み切ろうとした

「おっと」

少女がしようとしたことにいち早く気が付いた男は少女を片手で抱え、空いた手の指を少女の口に突っ込んだ

「んぐっ」

「残念だけど、舌を噛んだだけじゃ死ねないよ

俺に殺されるのは嫌かい？」

耳のすぐ傍で声が聞こえ、少女は鳥肌を立てる

嫌に決まってます「いやにきまっへまふ…それほ、どこを触ってるんですかほこをさわっへるんれふか」

「これは失敬」

けらけらと笑い、男は呆気なく少女を下ろした

「…言っておきますが、母様の元には戻りません

貴方にも殺されません

私は生きるんです、それが不可能なら自分の死は自分で決めます」

少女は屋上の冷たい床に座り込みながら、力強い眼差しで男を睨み上げた

男は冷やややかな微笑みのまま口を開く

「…君は、俺達に似ているね」

そう言った男は再び少女と目線を合わせる為に、座り込んでいる少女の前に膝をついた

「じゃあこうしよう

俺は君を見なかった、君は名を変え素知らぬ顔で都市で生きる」

「…は？」

突然の提案に少女は素っ頓狂な声を出してしまう

「え、いえ、そんなことしていいんですか…？」

「約束は違えていないさ」

俺が言われたのは、「初期型レイン575番を見つけ出し連れてくること、抵抗すれば殺害してもいい」というものだ

君がその「初期型レイン575番」じゃなくなれば、俺は見つけ出せないことになる」

「そんな屁理屈…いや、母様も似たようなことするしお互い様…？」

「聞いてた特徴とも違うしね…俺達によく似た綺麗な白銀の髪だし両腕ある、背丈も小さい

蛇は見なかったことにするから…」

「ちよ、ちよっと待っててください、どうしてそこまでしてくるんですか」

自分に好都合な展開に運ばれる状況に困惑した少女は問いかける  
それに対し男は、今までとは少し違った…慈愛に近い微笑みを見せた

「俺と妹もね、元々研究素材の子どもだったんだ」

男は懐かしむように身の上話をした

「結局は外郭に捨てられたけどね

それでも、俺と妹は生きようとした

…君は、そんな俺達と似ている気がするんだ…髪も近いしね」

「多分脱色しただけなんですけど…」

「ともかく、俺の中で優先順位が変わっただけだよ

君は俺の妹にそっくりだし…その敬語とかね」

そんな幸運があつていいのだろうか

似ている、という理由から見逃してもらえる現状をにわか信じ難いが、好都合に疑心暗鬼になりながらも少女はこの条件を呑むしか生存の道はない

「…私が、レイン575ではなくなる」

「単純に、名前を捨てればいい

新しい名前を名乗るんだ」

名前

無二は言っていた

「貴様に名がないのなら、これから見つけるといい

自分で意味を込めるも良い、誰かに委ねるのも良い

自分だけの名を見つけるのだ、それは貴様だけの人生になる」

自分を象徴し、自分の人生となる自分だけの名

新たな生涯を歩む一歩としての必須条件

しかしそれは、直前まで自由などなかった彼女には些か難しい難題でもあった

「……名前……新しい、名前……」

少女が唸りながら悩んでいる様子を見かねた男は、ある提案を口にする

「何も浮かばないなら、俺が君に名前をあげる」

C o n t i n u a t i o n   o f   s t a r d u s  
t VI

「…貴方が、私の名前を…?」

「そう、君に名前をあげる

妹の真似事だけどね…」

何故そこまで良くしてくれるのかはわからないが、少女は一度男に  
名を委ねてみることにした

男は顎に手を当て、暫し熟考する

そして、十数秒ほど考え口を開く

「…イナ

イナっていうのはどう?」

「イナ…:…?」

「イナ

君のその番号? 575だったよね

5と7と5を足すと17になる、だから17<sup>イナ</sup>

…もし気に食わなかったら別のも考え…」

「いえ、いえ! それでいいです、シンプルかつ言いやすい名前です…好  
印象です」

イナという名前を貰った少女は、目を輝かせて身を乗り出した

自分の識別番号から派生した、自分だけの名前…イナ

少女は頬を赤らめ、何度もその名を復唱する

「イナ…イナ…」

「…喜んでもらえて何よりだよ」

男は立ち上がり、嬉しそうに笑った

「じゃあ俺はこれで

イナ、行く宛てはあるの?」

「無二…えっと、蛇が一応あると…どこかは私も知りませんが…」

「そっか…イナ、都市は広くて怖いところだ

それでも生きるといふのなら、強くならなきゃ

見逃すのは一度だけ、もし次に俺が君を殺そうとしたなら、俺を殺せるくらい強くなっているんだよ」

男は上半身を傾け、少女の頭を優しく撫でた

その言葉を受けた少女は、咄嗟に立ち上がったって声を荒らげる

「殺しません！私は、誰かを死なせて生き残るのをやめたんです！」

あの日の記憶が蘇る

後輩が、自分を庇って死んだ日のことを…今でも鮮明に

「…それは我儘だね

都市ではそんな平和に生きられない、生き残りたいなら時には殺してでも生きなくちゃ…」

「現実的ではないのは重々承知しています

今すぐには不可能ですが…いつか、すつごく強くなってみせます

誰も殺さずに済むくらい…強く、強くなります」

少女は男に宣言した

不殺を志すと

左眼の奥で、蛇は昔を思い出す

「私のせいで多くの人が死ぬのなら…私、皆を助けたい

…もう誰にも、死んでほしくないから」

お人好しで弱虫で愚直で泣き虫、そんな分け身の切願  
本当に、よく似ていると思った

「…逞しいな

じゃあその日が来るのを楽しみにしていようかな」

男はそう呟き、鎌を持ち直して立ち去ろうとする

「あ、まっ、待ってください！貴方の名前は…」

少女は男の服の裾を掴み、男を引き止める

名を貰ったのに、少女は男の名も知らないままだった

「俺の名前…？」

…いいよ、教えてあげる

耳を貸して」

男は屈み、少女の耳に口を寄せて耳打ちする

小さな声でも、裏路地の深夜ではよく聞こえた

「……アルガリア……？」

「そう、それが俺の名前」

アルガリア、と名乗った男は少女から離れ、外套を翻し深々とお辞儀をした

「それじゃあ、生きていたらまたどこかで会おう」

そのままアルガリアは屋上の柵を飛び越え、ビルから飛び降りて行った

「えっ!？」

少女は慌てて柵へ駆け寄り、地上を見下ろした

そこにはアルガリアの姿もなければ、青い欠片も見当たらない

ただ、掃除屋によって何も無くなった道が広がっているだけだった

「…行ってしまいました」

「危険な魂を持つ男じゃったな」

無二は回復したのか、再び実体を現し少女の首元に巻き付いた

「危なそうな人でしたが、案外優しかったですね」

「貴様は危機感が強いのか薄いのかよくわからないな」

いや、影響されやすい…いい意味で感受性が豊かなのかもしれないな

…？」

「まあ、誰かさんのせいで子どもにされましたから」

雨上がりの深夜の空の元、一人の少女と一匹の蛇がビルの屋上で黄昏れる

「…行く宛てに辿り着いたとして、強くなって生き残る為にはどうすればいいのでしょうか」

「そりゃあ貴様、なるしかないじゃろう」

そう言う無二に対し少女は首を傾げる

「小娘…萌恵は全てを忘れ人間になった後、この都市である職を手に入れた

便利屋…ふいくさー、というものじゃ」

フィクサー

その情報も僅かにインプットされているが、少女は深くを知らない  
便利屋という名の通り、恐らく様々な仕事を請け負う職業なのだろ  
うと考察した

「今の男もふいくさーであろう、あの小僧と仕事の契約上の関係か義  
理人情かは知らぬがな

小娘も名を馳せたふいくさーだったのじゃぞ、数年前までな

9級から1級のうちの1級、その1級でもずば抜けて位が高いのが  
色を持ったふいくさー

小娘は色を貰う直前に産気づいて退職しおった

色と言えば：昔は「赤い霧」なる護衛専門のふいくさーがおったの  
単純な強さにおいて右に出る者はおらん、小娘とも何度か顔を合わ  
せたことのある怪物並みの強さを誇る奴じゃった

：ちなみに、妾達が向かう先はその小娘が何度か短期契約をした  
ふいくさー事務所の一つじゃ

「…なるほど」

しかし：母様の命令ではないのに、何かになるのも…」

少女は途端に恐ろしくなった

母からの命令で生きてきたL社を脱し、広い都市で自由に生きる  
その自由を得ることが、急激に少女の脳を冷やす

「何を今更、あれほど息巻いておりながら

：貴様、右腕を一度失ったじゃろ」

少女は思い出す、一度自分が死んだあの時：まだレイン575だっ  
た時、危険なアブノーマリティと対峙し時間を稼ぐため戦った

その時に、そのアブノーマリティに右腕を切り落とされているのだ  
今ある右腕は、無二が少女の細胞を整理し複製したに過ぎない

「貴様達の右腕：上腕に、識別番号とやらが刻まれておっただろう  
小僧作の証：葦の花の刺青まで付けられて

その刺青の下に、小僧の命令受信器が埋め込まれておったら、GP  
Sも込みでな

小僧が発する命令式を受信し、神経に繋げ脳へと伝達する枷  
：しかし、今の貴様にそれは無い



あの気色悪い赤いませこぜが腕ごと受信器を切り落としたからな」  
自分の右上腕に植えられていたもの

識別番号と共に、無二の言う通り様々な機器が埋め込まれていた  
母の命令式を受信し無理矢理繋げた神経を介し脳へと伝達させ母  
の命令に強制的に従わせる受信器、居場所を特定するGPS、脳から  
神経を介し情報を発信する発信機

それらが骨に縫い付けられる形でクローンのレイン達に埋め込ま  
れており、細く長いコードは神経に接合させられていた

「貴様を縛るものは、真正銘なくなった

小僧は貴様が逃げ延びたことを察して探しておるそうじゃが…貴  
様は自由、母とやらに従う道理もなければ、先程小僧の元へは帰らん  
と言っておったじやろう

誰かから命じられた事通りに動くのは楽じゃ

だがな、自分で考え自分で動き、責任を負う…その代わりに、何を  
してもいい

独立とはそういうもの

貴様はまだ赤子に等しいが…これから先、この都市で自由が広がっ  
ておるのだ

妾も共に歩もう、だからな…自由への勇気を出すんじや

怖いのは期待しているからじゃ

イナ、これから貴様だけの人生が待っておるのに…何を躊躇う必要  
がある？

期待と不安こそ人間たる証！

暴虐な母から逃げ、強くなれ童

人間、夢を描きそれに向かい走るのが一番じゃ」

無二は雲紛れの星空を背に少女に語る

その力強い言葉に、少女は目を見開いた

生きる理由、生きる目標

生きるための願い

以前、死にたがりの機械が言っていたことを思い出す  
生きたいのなら、前を向こう

少女は、柵から手を離し空を見上げた

そして、目標掲げる

「私、なります」

不殺のフィクサーとして強くなり、実力と実績を重ね、いつかその色とやらも貰ってみせます！

そしたら…ええ、またいつか、ネツアクさんに会いに行きます！」

「その意気じゃ童…ところでねつなんかとは誰じゃ！」

拳を高らかに空へと突き出した少女…イナは、自然と笑顔を浮かべていた

無二はそんなイナを鼓舞するように、その腕に巻きつく

「そして…私、強くなって、母様を止めてみせます」

イナは拳を下ろし、巻きついた無二と視線を合わせる

「母様が何をしようとしているのか、私は知りません

知らなくてはなりません

母様と萌恵さん…いえ、「お母さん」のことについて」

「…貴様…」

「母様がいる場所…人材派遣会社ヴァイオレットカンパニーに繋が  
る、私達の製造基地…地上の具体的な場所は特定出来ませんが、そこ  
にオリジナルがいるんです

そのオリジナルこそ、無の世界蛇…萌恵さんの子ども、なんでし  
ょう

私はそのオリジナルから造られたクローン…萌恵さんの血を引く  
子どもです

…母様が何をしようとしているのか、真実を突き止めて…止めてみ  
せます

私は母様の支配から逃れられた唯一の子どもです

だから、母様の子どもとして…萌恵さんやその旦那さん、二人の子  
どもであり本当の親を知らないオリジナルに報いる為にも…母様が  
オリジナルや私達クローンで何かをしようとするのなら、必ず…私が  
母様を止めてみせるんです」

「…大きく出たな、童」

無二はその一つ目を伏せ、思い馳せる

「やはり、貴様の子だな…小娘」

無二はイナの腕から降り、先程のように巨大化してはイナを取り囲むようにとぐろを巻く

「やってやるか！あの下衆な小僧の鼻を明かし、いっちょぎやふんと言わせてやるぞ！」

「…！」

「おー!!」

イナと無二は結託し、声高らかに宣言する

いつか、スマイレの魔女…ヴァイオレットを打倒するべく、決意して

Continuation of stardust  
t VII

XXXX年1月7日 午後1時5分

とある裏路地、とある建物

そこはまさしく、フィクサー事務所の一つである

第一級フィクサー事務所：チャールズ事務所

それがその建物の名前として知れ渡っている

「はあ、昼飯昼飯…」

その事務所から、一人の男が出てくる

黒いスーツに黒い髪、更には黒い仮面を付けたいかにも怪しげな男

その男は、気だるげに頭を掻きながら事務所の扉を開け外に足を踏み出した

「……ん？」

そんな時、一つの違和感を覚える

いや、違和感なんてものじゃなかった

それは明らかに普段とは違う光景であり、また面倒な依頼が舞い込んできたのかと錯覚する

その事務所の出入口である扉の前に、一人の女の子が倒れている

着ているシャツはヨレヨレで、全身汚れている

くすんだ白銀の髪も、お世辞にも美しいとは言えない

「…えつと…あー……」

男は悩んだ

見ないふりをする事だっただってできるが、昼休みの事務所前なのでいずれ誰かに見つかるだろう

しかし、男の直感が囁いている

「絶対面倒なことになる」と

「…あー…おい、おい」

それでも、男は少女に声をかけた

ここで放っておいて死んでいたのなら、目覚めが悪いなどと理由を

つけて

「……………」

倒れた女の子から、声が聞こえる

何とか生きている様子に安堵した男は、声をかけ続けた

「おい、お前迷子か？捨てられたのか？」

その質問に対する返答は無い

その代わり、「ぐうううう」という大きな音が少女から聞こえてきた

「…」

男は少々呆れ、少女を抱えて事務所の中へ引き返した

「ありがとうございます助かりましたたふかりまひは！」

「わかった、わかったからもっとゆつくり食え」

事務所の応接間の一つ、そのテーブルの上に並ぶ食事達

少女はそれを次々と平らげていく

「腹が減って倒れてたなんてな、まあガキらしい理由だな

それで？お前家は」

「家？…そんなものではありません」

男は悟った、裏路地にはよくある話だった

裏路地でも生きるのは大変、故に子どもを捨てる親だって珍しくはない

この子も、ゴミを漁りながら掃除屋から隠れて生きてきたのだろうと

やけに大人びた口調だけが気になったが、自分の財布が痛いくらいで特になんとも思わなかった

「いい食いつぶりのお嬢ちゃんじゃないか」

「デザートにアップルパイはどうかな？」

その応接間に、さらに二人の男が入ってくる

一人は褐色で、もう一人は色白で柔和そう

頬にいっぱい食べ物を詰め込み、リスのようになった少女はそのまま頭を下げた

「まさか、ローランが事務所前に倒れている女の子に飯を奢るなんて

な」

「明日の天気予報は槍かな」

「ほっとけ」

ローラン、と呼ばれた黒い仮面の男はそっぽを向いた

「あー、お前、それ食つたらさっさと帰…って、家は無いんだっただか」  
「そうです、だからここに来ました」

少女は食べ物を読み込んだ後、フォークでアップルパイを一切れ刺し口へ運ぶ

「…ここに来た？チャールズ事務所に？何か依頼でもあるのか？」

褐色の男がそう聞くと、少女は首を横に振る

「ここで、働かせてくださいー！」

董色とターコイズブルーの瞳を爛々と輝かせながら、少女…イナはそう頼み、頭を下げた

しかし、現実はそう甘くなかった

「まあそうだよね…まだ10にも満たないであろう小さな子どもを、ウチで雇うことは出来ないって所長が…」

柔らかな表情で眉を下げるのは、アストルフオという男

「ローラン、お前が引き取つたらどうだ？」

冗談交じりにそう言う褐色の男は、オリヴィエ

「はあ？誰がそんな面倒なこと…これ以上の出費はゴメンだ」

そして、黒い仮面をつけているのがローラン

三人の男に囲まれながら、イナはむすりと頬を膨らませていた

(こんな体でなければ、すぐに採用即戦力間違いなしだったのに…)

イナは三人に「働かせてください」と頭を下げた

しかし、三人は「決めるのは所長」と言った

そこで、イナはアップルパイを口に入れたまま応接間を飛び出した  
所長室という部屋を見つけ扉を開けたイナはそのまま流れるように  
土下座し、所長である老いた男に就職希望を申し出たのだが…

結果は惨敗、即戦力どころか採用さえされなかったのだ  
子どもの体が恨めしかった

「なんでウチなんだ？事務所なら他にもあるだろ

フィクサーとして働きたいなら、ウチみたいなどころじゃなくても即採用するブラックな事務所なんてザラにあるぞ」

ローランはイナにそう言うも、イナは膨れっ面のまま応える  
「嫌です、ここがいいんです

ここは以前、1級フィクサーの萌恵さんとも関わりがあると聞き及んでいきます」

「君…彼女を知っているのかい？」

アストルフオが驚いたように声を上げる

「僕、彼女と一緒に仕事したことあるんだよ

脚が速くて…あ、もしかして君彼女の親戚かなにかかな？顔立ちが少し似ているし、左目も同じ色だし、さっきの駆け出しも速かった」  
「…まあ、はい、そんなところですよ」

イナは視線を泳がせ少し汗をかきながら返答する

「それで、お嬢ちゃんの出遇だが…俺から話をしたところ、拾ったローランが世話をしろってさ」

「はあ!?結局俺かよー」

私は拾い猫かなにかだろうかと少し思うイナはそれを口には出さず、ローランに向かい頭を下げた

「よろしくお願いします」

「いや勝手に話を進めんな！ガキ一人養う分の貯金なんて無いっての」

「学校に行く必要はありません、家のお手伝いなどもします

あと、ここで働けるようになるまで無償でいいので事務所の雑用等もさせてください」

頭を必死に下げるイナの様子を見て、ローランは沈黙を決めていたが…やがて痺れを切らしたように頭を掻き巻く

「…ああ、ー！ったく、ガキが一丁前に頭なんて下げるもんじゃない子どもらしく無邪気に笑っとけ」

そして、大きな掌でイナの頭をぐしゃぐしゃと撫で回す

「…で、では…」

「心底嫌だが、仕方ない」

「家事はできるか？」

「できません」

「そこからかよーしかも即答ー…まあ、まずは手伝いから始めるか」

黒い仮面の下の表情は見えないが、その声はやけに優しくかった

子どもだから同情されているのかは計り知れないが、イナにとつて

は子どもの姿でラッキーだったと思える出来事その2に認定された

「俺達も手伝うから、何かあったら言うんだぞローラン」

「そういや、君の名はなんていうのかな？」

アストルフオの質問に、彼女は自信満々に答えた

「私の名前はイナ…イナです！」



Continuation of stardust  
t VIII

xxxx年1月12日

周囲の壁一面が黄昏の空に染まったディスプレイの中央で、二人の男女が茶を飲み合う

血のような赤い茶を啜りながら、スマレの魔女は溜息をついた

「それで、575番は見つからなかったわけだ」

その質問に、ティーカップを置いた青い男は答える

「うん、一応いろんなところを捜したんだけどね、聞いている情報と一致する女の子は見つからなかったよ」

青い男：1級フィクサーのアルガリアは表情を崩さないままスマレの魔女を見つめる

数日前に遭遇したレイン575だった少女の事は伏せ、見つけれなかったと嘘の報告をしながら

「…」

スマレの魔女、ヴィオラは微笑んだまま冷たい眼差しをアルガリアに向けている

その眼差しに対し、アルガリアは空虚な視線を向ける

「いやはや、アルガリア：もうじき特色になるであろう君の実力を信用して依頼したんだけどね

君ともあろう人間が、廃棄処分のゴミ一つ見つけれられないなんて…」

「ゴミなら外郭なんじゃない？俺は都市の外にまで足を伸ばすつもりはないからね」

「そういや、君達を拾ったのも外郭だったなあ」

「拾われた後師匠に押し付けられたけどね」

「ふふふ」

「あはは」

顔は笑っているが目は笑っていない二人の会話は空気を凍てつか

せ、黄昏の画面を映し出す壁にヒビを入れていく  
ティーカップが欠け、紅茶は波紋を絶やさない

「アルガリア、真実を言え」

「575番はどこだ？」

「だから、言われている初期型レイン575番は見つけられていないよ

俺以外にもいろいろ手を回しているらしいけど、頭に知られないように最小限の手数でやっているんだよね」

「…まあ、都市と全面戦争するにはまだ早いからね

まさか、裏切ろうと考えてないよね？アルガリア、君は聡明で気狂いで都市で一番正しい在り方をしているんだから

僕と対立することがどれほど馬鹿馬鹿しいのは知っているだろう？」

「そんなのはわかっているさ…黒い森のスミレの魔女、アンタと戦うのは一方的な搾取だ、こつちには不利益しかない」

「ようやく解っているじゃないか」

笑顔を向けながら腹の探り合いを繰り返している時間を破ったのは、一つのインターホンの音だった

黄昏のディスプレイの一面、その奥から静かな声が聞こえてくる

「母様、この後一時間後に会談です」

あと二十分までには出発しないとなりません」

その声を聞いたヴィオラは少しだけ息を吐き捨て、椅子から立ち上がった

「わかった、すぐ準備しよう」

黄昏は急激に日の光を沈め、深い夜空が辺りを包んだ

「アルガリア、君とは友達だから一度くらいは見逃すけど…二度はないから

次に何か変な真似をしたら…君の妹、どうにかしちやおうかな」

それだけ言い残し、ヴィオラは電動開閉ドアから外へ出て行く

取り残されたアルガリアは、微笑みを消し去り静かな殺意を滲ませていた

「おはようございますー!」

「朝からうるせえ…」

ローランの元に引き取られてから早五日、イナは日々健気な学習と努力を繰り返していた

あの後ローランの家の風呂で体を清潔にし、アストルフオやオリヴィエが知り合い達にもらった子供服を何着か持ってきてくれた

それから五日間、ローランと家にいる時は彼に家事を教わり、ローランが仕事に行くときは事務所で過ごした

イナは学習が早いため、(調理以外の)家事は全て習得することが出来た

この日も、ローランと共に事務所に出勤した次第だった

「おはようイナ、今日もローランを起こしてやったのか?」

「はい、ローランは寝坊助ですから」

昨日遅くまで飲んでたのが原因です」

「またか、子どもがいるんだし自重しないとイケないよ」

「そいつを俺の子ども扱いするのはやめろ、あくまで一人で働いて暮らせるようになるまで面倒見るってだけだからな」

「大変感謝しています、いつかたくさん稼げるようになったらワープ列車で旅行に行きましょう」

アストルフオ、オリヴィエのお馴染みの二人と過ごすのもいつもの光景と化していた

しかし、イナには一つだけ解せないことがあった

それは、ローランが四六時中黒いのつぺらぼうの仮面を外さないこと

食事は一緒に食べるのに、ローランは食べ物を口に入れる時のみ仮面をずらし上げて食していた

眠るときも仮面を外さず、洗顔時や入浴時くらいしか仮面を外さないし、その素顔を覗き見ようとしても半径5m以内に近づいただけで気配を察知されてしまう

徹底的に顔を見せようとならないその意地には逆に感嘆してしまう

ほどだった

「どうしたんだイナ、ローランをそんなに見つめて」

じっとローランの仮面を見ていたのがバレたのか、オリヴィエが覗き込みながら聞いてくる

「ローランが素顔を見せてくれないのです」

「そりやそうだろ、いつも祖母の教えとやらで仮面をつけているからな」

「オリヴィエとアストルフオは知っているのですか？」

「まあ…そこそこの付き合いだからな」

「むー…」

祖母の教え、という情報を入手しただけでいい方だろうか、とイナは一人納得する

「イナ、所長から伝言だよ

お金を渡すからお使いに行行ってほしいって」

アストルフオが小さながま口の財布を持ってきてはイナに手渡した

「所長から直々のお使い！行きます！」

「事務所を出てすぐ前の通りを右手に曲がってまっすぐ行き、三番目の角を左に行つたところに雑貨店があるから、そこでガムテープと単三電池を買つてきてくれないかな」

「メモもなく行けるのか？」

「イナは記憶力がいいからね、もし帰りが遅かったら迎えに行こう」

イナは肩に下げたポシェットに財布を入れ、自信満々に胸を張る

「はい、私は物覚えと足の速さと怪力が取り柄なので！」

「取り柄だらけだな」

呆れた様子のオリヴィエに、アストルフオは微笑んでいる

「では行ってきますー！」

「おう、気をつけろよ」

ローランは軽く手を振りイナを見送る

意気揚々とイナは事務所を飛び出し、裏路地の道を歩き進む

「童、童」

髪の影から顔を覗き出した無二がイナに耳打ちをする

「なんですか、あまり人が多いところで話したくないんですけど…いくらなんでも喋る蛇と会話する子供は白い目で見られることでしょうか」

なるべく通行人と距離を取りながら、小声で無二に返事をするイナ  
無二は浮足立った声でイナに相談する

「買い物に行くのだろう…？妾あれがほしい、星屑の砂糖菓子」

「え…なんて？」

「だから星屑の砂糖菓子じゃよ、ほらあ小さくて色とりどりで甘くて…」

甘えん坊のような猫なで声でお強請りする無二の言うことを理解できないイナは、そのまま聞き流しながら店へと足を進める

「ガムテープよし、単三電池よし、買い物終了です

帰りましょう」

「星屑の砂糖菓子…」

ビニール袋の中と財布内の小銭、レシートを確認しイナは店を後にする

無二の泣き言が終始耳元で聞こえ続けているが、イナは無視し帰路につく

大きな通りで車が通り過ぎた隙に道を横断し、そのまま真っ直ぐ歩いていく

事務所の看板が見えてきたとき、イナの後頭部に衝撃が走る

「ッ」

「わ、童?!」

頭が揺さぶられるような感覚から醒めるために頭を数度振り、背後を振り返る

後ろの足元には、イナの頭ほどの大きさのゴム製のボールが転がっていた

「…知ってますこれ、バスケットボールです」

「いったいなぜ…」

「…ぷっ、ぎやははははっ!!」

否と無二が呆然としていると、離れたところから下卑た笑い声が聞こえてきた

道端すぐ横の空き地に背丈が近い少年が三人ほど、イナを見て笑っている

「…これ、貴方たちのですか」

「あはははは！そっだよ！間抜けにぶつけられてやんのー！バーカ！」

笑っている様子や言動から、少年達がわざとボールをぶつけてきたのは明確だった

「なぜこんなことを？」

イナは平然としたまま少年らに問いかける

少年たちは笑ったままイナに言い放った

「決まってるんだろ！気持ちわりーんだよお前！」

フィクサー事務所に入り浸るとか正気じゃないぞ！」

「あそこは人殺し集団だって父さんたちが言ってたんだ、お前も人殺しの仲間なんだろ！」

「やーい人殺しの仲間！」

その言葉を聞いたイナは、だんだんと胸の内が冷え切っていくような感覚がした

なにも口答えしないイナを見て、少年達の誹謗中傷はヒートアップしていった

「お前の目も気持ち悪いんだよ！なんで左右で色が違うんだ!？」

「人間じゃないんじゃないのか？うわ、バケモンだ！」

「ばーけもの！ばーけもの！」

少年達の化け物コールがイナの耳に纏わりつく

「童、無視しろ」

年端もいかぬ悪戯鬼共の戯言じゃ」

無二はそう言うも、イナの堪忍袋の緒は切れていた

足元に転がっているボールを持ち上げては、イナはそれを少年の一人の顔面に向け今出せる全力で投げつけた

硬いボールは回転し威力を増し、高速スピードで少年の顔にぶつかった

「ブツ……！」

「は……え……？」

倒れる友人を見て、二人の少年は呆然とする

ついでに無二も呆然とする

「さっきから黙って聞いてみれば、寄って集って情けない……」

しかし気概は買ってあげます、売られた喧嘩は買う主義ですので

三人がかりで来なさい、相手してあげます」

イナはそう挑発し、人差し指を立てくいくいと誘った

ボールをぶつけられた少年は鼻血を流しながら、三人ともその挑発に怒りながら、イナを叩きのめそうと殴りかかった

Continuation of stardust  
t IX

「…」  
「…」

「ただいま戻りました」

チャールズ事務所に戻ってきたイナを出迎えたローランとアストルフオはイナの姿を見て絶句する

イナの顔は泥と青痣でボロボロになり、服はボタンが解れ、髪はボサボサ：見事に目も当てられないほどの状態だった

「いや、戻ったのはいいけど…どうしたんだ、その恰好」

「え？…あ、これですか」

「ここに戻る前に近所の悪ガキ共と少しファイトしてきました」

「少少ってレベルか？」

イナは二人に医務室へ連れられる

アストルフオの手当てを受けながら、イナはさながら尋問のような質問攻めを受けた

「いったい誰にやられた」

「名前は知りませんが顔は覚えました」

「何人だ」

「三人です」

「女の子なんだから怪我しちやだめだよ」

顔は特にね」

「え？あ、はい」

テキパキと手当てを施されていくイナの左目に、眼帯が当てられる  
片目だけの世界が随分久しぶりのように感じられる

「せっかく綺麗な目なのね」

腫れているだけだから、薬を塗っていたら大丈夫だと思うけど、何か異常があればすぐに言うんだよ」

アストルフオの丁寧な処置は終わり、ローランはイナが持っていた



ビニール袋と財布を回収する

「とりあえずこれは俺から所長に届けておく

お前は暫く大人しくしとけ」

そう言い残し、ローランもアストルフオも医務室を後にする  
誰もいなくなつたのを見計らい、イナは無二に呼びかける

「無二、大丈夫ですか」

無二はイナの服の袖の影から顔を覗かせる

「まあ伊達に世界蛇やつとらんからのう…目ぐらいどうってことない  
わ」

「なら安心です」

「にしても童、貴様案外手が早いんだな」

無二の呆れた様子にイナは若干申し訳なく思う

「…まあ、凶に乗ったお子様を矯正するのは大人の役目なので」

「よく言いおるわ、どこが大人じゃ

貴様嘘つくのへつたくそじゃな

正直に言え、どうせ化け物と言われたのが癩に障つたのじゃろ」

無二は床に降りた後近くの机に登り置かれた小包のチョコレート  
を器用に取り出し口の中の放り込む

一つ、二つと口に入れ呑み込んだところで、イナが口を開く

「気持ち悪いと言われました」

「…むっ？」

口いっぱいチョコレートを詰め込んだ無二に目を向けることな  
く、イナは続ける

「フィクサーの仕事内容はこの数日間理解しました

以前の私も人を殺していたも同然ですし、人殺しの仲間というのに  
違いはありません

アブノーマリテイを左目に抱えている時点で、一般人からしてみれ  
ば化け物であるのは当然です

…しかし、気持ち悪いというのはいただけません

右目は、母様と同じ董色の美しい瞳です

今の私に残っている、唯一の母様と同じもの…

左目はお母さん萌恵さんの、海のような瞳

この瞳は、普段は深い青色ですが、光を反射させターコイズブルーに輝いているのですよね

どちらも私の自慢であり、誇りであり、宝物です…こんなに美しい瞳を気持ち悪いだなんて、なんて感性が貧相なんでしょう」

「：ヴァイオレットの神経支配からは解放されているはずなのに…貴様、本当にあの小僧を盲信しておるのか？」

「まさか

しかし、どんな人格者であれ私を作ったのは母様です

そして、私は母様の全てを知ったわけではないので…嫌うのには早計です

母様を止めると言ったのは私ですが、決して憎んでいるわけではないのです」

イナは静かに微笑み、複雑な心境を隠すように医務室のベッドに少しだけ横になる

「情があります

なにせ、あの人はいつも寂しそうですから」

それを聞いていた男が一人

黒い仮面の奥で何を思っているのかは計り知れない

彼は1級フィクサーであり、事務所経由でとある依頼をこなしている最中である

その依頼内容はただの人探し、しかし相手は上玉で莫大な金が舞い込んでくる仕事だった

「チャールズ事務所、そちらにある依頼をお願いしたい

もちろん、全ては守秘義務で

僕が作った人造人間…まあ僕の子かな

その子どもを探してほしい

容姿は…恐らく変わってるから、この写真を手掛かりにしてほしい  
多分、左目はターコイズブルーに変わっていると思うな

指紋データ、血液DNAのサンプルは渡しておくから、必要になったら使ってもらって構わない

運よくデータが確認できたら、それを確保して僕に連絡してすぐに、迎えに行くよ」

ある女が、その依頼を事務所に要求してきた

持ってきた指紋と血液、更にはその女と少し似ている女の写真…一人の人間の搜索に徹底していることに疑問を抱えながらも、互いに深い追いつかないことこそが都市を器用に生き抜く術

所長は情報力の長けたフィクサー一人をその仕事に就かせた

黒い仮面の1級フィクサー…ローランこそ、その「人探し」を全うしているフィクサーなのだ

「…」

ローランはわかっていた

五日前、チャールズ事務所の前に倒れていた小さな子ども…その子どもの瞳を見た時確信した

右の莖、左のターコイズブルー

指紋検査もクリア、先程採取した血液も検査中

その子どもこそ、依頼対象の搜索人物であることを

所長も、彼以外のフィクサーも、薄々知っていた

都合よく用意されたような流れに恐れるほどに、全てが都合よすぎている

それでもローランは仕事として、やるべきことをこなすだけ

「ローラン」

書類を持ったアストルフォが、ローランの元へやってくる

「照合結果が出た

…血液情報、完全一致…彼女で間違いない」

アストルフォは視線を伏せるも、ローランは淡々と携帯電話を取り出す

一緒に出した名刺の番号にダイヤルし、発信ボタンを押そうとした時、医務室の扉が開いた

「あれ、ローランとアストルフオ…こんなところで何をやっているのですか」

ガーゼに絆創膏、眼帯などの処置を施され傷だらけのイナが出てくる

その傷は近所の子供達と喧嘩をしたものだと言っていた

ローランは思い出す

初めて会った時、イナは酷く汚れてボロボロで、腹も空かせていた家は無いと言っていた

ここの事務所で働きたいと言い出し、どこにも行こうとしなかった働き者で不愛想で素直なただの子ども

写真とは違っても、そんな子どもが狙われている

しかし、情で動いては仕事は成り立たない

一瞬の迷いは、無垢な瞳を向ける少女にはわかりもしなかった

「ローラン」

アストルフオが声を欠けてくる

ローランは一旦携帯を懐に仕舞い、イナの頭をぐしゃぐしゃに撫で回した

「う、わ」

「…今日、何が食いたい？」

ローランは言葉を絞り出した

イナは少し考えた後、こう答える

「ラーメン」

「…子どもらしくねえな」

その時苦笑したローランの顔は誰も見れずにいた

しかし、その場にいたアストルフオだけが、ローランの気持ちを理解していた

イナの出自や生涯をまだ知らない彼らだが、それが普通ではないことは察している

あの依頼主の女の言動から考えても、正しく生まれた人間ではないことは伺える

ちゃんとした両親はいないかもしれないし、何より状況から見て少

女は逃げているのだろう

あの底知れない女から

物心ついた時から親の顔すら知らないローランがこの子どもを明け渡していいのか悩んでいるのを、アストルフオは知っていた

Continuation of stardust  
tX

×××年1月13日

「くそ、あの女…ぜってー許さねえ」

三人の少年が、空き地でボールを蹴りながら文句を言い合う  
彼らの顔や手足は、ガーゼや包帯でほとんど肌が見えていなかった  
昨日、イナという少女に三人がかりで殴りかかった結果がこの有様  
だった

「あのゴリラ女…もし次見かけたらこうだ、こう！」

一人がボクシングさながらに拳を突き出してみせては、残る二人は  
感嘆の声を上げる

しかし、背後に忍び寄る影を見てはその表情を青ざめさせる  
「ほう…それは楽しみですね、ぜひその拳の切れを確かめさせてほしい  
ものです」

拳を動かしていた少年は、その声を聞いてはゆっくり振り返る  
背後に立っていた少女…眼帯をつけたイナが、仁王立ちで少年らを見  
つめている

「で、出たな怪獣メスゴリラ！」

「キングゴングですか、失敬な」

デリカシーの無い男たちですね、まるでロイドみたいです」

溜息を吐きながらイナは少年達を睨みつける

その冷徹な視線に背筋が凍えそうになる少年達をよそに、イナは少  
年たちの間を縫い進み彼らが蹴り遊んでいたボールに足をかける  
そのままイナはボールを足で蹴り起こし膝の上で弄び、一度高く  
ボールを飛ばしてはその場で一回転し、その勢いそのまま落下してきた  
ボールを古いフェンスに向かい蹴りつけた

ボールはフェンスにぶつかり、回転しながら跳ね返ってくる

「今度はこちらで勝負しましょう」

私が攻、貴方達が守…今から30分、私から10点守りできれば貴方

達の勝ち

「ゴールはあのフェンスでどうでしょう」

「な…ば、馬鹿にしてんのか!? そんなの誰がするかっての!」

「そ、そうだそうだ!」

強がりのブーイングを浴びながら、イナは鼻を鳴らす

「そうですか、こんなに勝てそうな勝負にも乗らないなんて…随分と  
小心者のようですね」

「このまま私の勝ち逃げでもいいんですよ?」

…あ、それとも…私が強すぎるせいで恐れているのですか」

意地の悪い笑みを浮かべながら、イナは少年達を挑発する

少年達はあっさりと怒りの沸点を超え、先程とは違う怒声を放つ

「はあ!? そんなわけねーだろ!」

「お前なんか何にも怖くないし!」

そんな調子で、その日も子供たちの勝負は始まった

「というわけでサッカー勝負をしたんです」

「泥だらけの理由はそういうことか」

ローランと並んで歩く帰り道、イナは階段道を上りながら今日の事をローランに話していた

そんなイナの姿は全身泥で汚れていた

「また明日も勝負する約束を取り付けました」

「そうか…お前にも友達ができてよかったな」

友達、という呼称にイナは首を傾げる

「…友達というには些か険悪なのですが」

「なんだそりゃ」

ははは、とローランは笑う

その空虚な笑いに、イナは微笑みながらも違和感を感じていた  
階段を上りきったところで、ビルの隙間から差す夕陽を背にして、  
イナは数段下にいるローランに話しかける

「なにか、隠しているでしょう」

ローランは片目の紫に見下ろされながら、一瞬の沈黙の後に失笑す

る

「何言ってるんだよ、隠し事はごまんとあるに決まってるだろ」

「ローランは私と違って隠すのは上手いですが…昨日からの様子が少し違うのはわかります」

他人の心境を理解するのは苦手ですが、些細な動作の変化や言動の違和感はすぐに気が付きます」

「まじか、高性能の機械みたいだな

そこらへんの賭博でディーラーにでもなったらイカサマなんてすぐ見破られそうだな」

階段を登り切りながら、ローランはイナの横を通り抜ける

そのローランのスーツの裾を掴み引き留める

「話を逸らさないでください

…いえ、なんとなく察せます、チャールズ事務所は1級事務所だと聞きましたから

母様から依頼されているのでしよう、私を捕まえろって」

「…」

ローランは沈黙する

仮面の有無なんて関係なく、その表情は読み取れない

「虫のいい話なんです、こんな子ども一人引き取ってくれるなんて…私が探しものと同じか確認する間、目の届く範囲に置いたためだったんでしよう」

「…ひとつ、聞くが

なんであの魔女に追われているんだ？」

魔女、それはヴィオラの事を指している

イナの予想は当たっていたのだろう

「私は母様…人材派遣会社ヴァイオレットカンパニー代表ヴァイオレットが作ったクローン体です

オリジナルの子どもの肉と骨、母様の血で作られたクローン達のうちの一

私たちクローンは、ロボットミー社に派遣され母様の命令を遂行し生存を貫く人形でした



しかし…私は、とある人と関わり、誰かの死に深い衝撃を感じるようになったのです

それから、私は誰も殺さず、死なせないように努めました

しかし、それは母様の命令やロボトミー社の業務に支障を生むもの…私は廃棄処分を受け一度死にました

死んで、幸運にも生き返ったのです

ロボトミー社を抜けてからは、生き延びるのに必死です

こんな小さな体では、出来ることも少ないですから

私は生き延びなければなりません

生き延びて、母様がしようとして知っていることを知り、その野望を止める…生き延びた母様の子としての責任を果たしたいのです

あと、また会いたい人もいるので」

夕陽は既に沈み、空には暗闇が広がりにつつある

紫に染まっていく西の空を眺めながら、イナは左目を撫でた

「今はまだ何もできないから、せめてあと十年ほどは生き延びて強くなりたいですね

しかし、ここも手を回されているのならもういれませぬね

短い間でしたが、お世話になりました…事務所の皆さんにも、よろしくお伝えして下されば嬉しいです」

イナはローランに向き直し、深く頭を下げた

ローランはイナの方を向きながらも、ポケットに手を入れたまま微妙だにしない

イナは頭を上げては、また居場所がなくなった現実に少し悲しくなった

滲みだす視界を拭いながらイナは方向転換し、ローランとは反対の方に歩いていく

「よかったのか童」

無二がひそりと声をかける

「よくないです、でも仕方ありません…私は今、自分の生存を考えないと…

ローランが迷っている今しか逃げる隙はありません」

「せっかく童が安心して暮らせる寝床が出来たと思うたのになあ…気を許せる保護者も」

「…」

この六日間、イナにとって危険と隣り合わせでありながらも、誰かと過ごす楽しい日々でもあった

誰かと関わったことがイナが成長したターニングポイントだとすれば、誰かと関わることは大きな喜びでもあったのに

その幸福を、イナは自ら手放した

今はまだ、死ねないから

暗い夜道を一人歩き出す

寂しさが背中に覆い重なる

「…あーあーせっかく今日のデザートにアップルパイ買ったのになあ！」

その後ろから、大きな声が聞こえてくる

イナは足を止めた

「…」

「イナが林檎好きそうだったから買ったんだけどなあ！仕方ないなあ！一人で食べようかなく！」

ローランが一人、紙袋を持ち上げながら叫び続ける

無二はイナの髪の毛の隙間から後ろを覗きながら呆れて溜息を吐く

「何やつとるんだあやつは…引き留めるならもつとましな方法をせんか」

童が食い物ごときで気を引けるわけ…」

無二がイナの顔を覗き込むと、イナは俯きながら目を輝かせ、溢れる涎を飲み込んでいた

「いや滅茶苦茶迷つとるがな!!」

「…ぐつ…アップルパイを人質にとるとは小癪な…!」

イナは気づいていた

ローランほどのフィクサーなら、力づくでイナを捕獲し魔女へ献上することも可能であることは

しかし、ローランはあえてそうせずイナを呼び戻そうとしている

その事実には、期待してしまっていた

「お、すつげーうまそうじやん！こりやお子様には勿体ないかなあ！」

「……この男……」

イナが我慢を飲み込み込み駆け逃げようとした時、目の前に紙袋が降ろされる

「……」

「なんてな、俺一人でホール一個分はちよつとキツイ

お前に半分やる」

声は真上から降りかかり、紙袋から手を離される

イナがそれを受け止めると、頭の上に手を載せられる

「早く帰ろう、俺らの家に」

家は無かった

それは以前の話であり、今は違う

彼女の帰る家はあるのだ

「……し、仕方ありませんね……ローランが食べきれないなら食べきってあげましょう」

「いやあ助かったよ」

イナは振り返り、黒い男を見上げる

相変わらず仮面のままの顔が、綻んでいるように見えた

「いいんですか、これで」

「俺はなーんにも見なかった

大体、あの魔女は胡散臭いからな

もともと正規契約じゃないし」

「大人ってずるいですね」

「そんなもんだ、都市はそうできてる

魔女も俺らの全部を信頼してないだろうし、お互い様だ」

ローランはポケットから片手を抜き出す

その手には、一枚の小さな紙

それを握り潰し、イナに見えないように道端に捨てた

二人で並んで歩く帰り道、街灯に照らされたコンクリートの先を眺めながら家に向かう

「…父親って、こんな感じなんですかね」

ぼつり、と呟いた

自分の父親はいない、けどルートとしてはオリジナルの父親がそうなのだろうかと考えていた

「さあな、俺も両親の顔なんて知らないし」

「お父さん」

「やめろ」

軽い拳骨が脳天にぶつけられる

そのまま歩いていけると、二人の家に辿り着いた

ローランが家の鍵を開け、扉が開かれる

「どうぞお嬢様」

「苦しゅうない」

「それちよつと違くないか？」

二人が扉の向こうに足を踏み入れ、扉は閉じる

窓から覗く部屋の中が明るくなる

中から騒がしい声が聞こえてくる

家族と家を得た少女は、些細な幸福を噛みしめた

# White noise

古い記憶、落ちこぼれの情報

どれほど世界が重なり、どれほど時間が進もうとも…忘れてはならないものがある

「どうしてこんな理不尽で彼女が不幸にならなきゃいけないんだ

勝手に幸福な世界に書き換えておいて、勝手に世界の外に飛び立つて

残された幸福な世界から幸せが消えそうになったら、残された者が勝手に維持させようと生贄を用意して…?

彼女も僕も関係ないのに、どうして彼女だけ…

許さない

絶対に許さない

彼女から幸福を奪った奴らも、彼女を嘲笑って救わなかった奴らも、あの女が作った幸福なこの世界も

僕は全て否定した上で…創ってやる

誰も妬まず、誰も蔑まず、誰も見下さない…

誰もが平等で、幸福な、理想郷を」

XXXX年1月15日

「…ああ、寝てたのか」

ヴィオラは朝日に彩られた空間の中央の席で、座ったまま眠っていた

目の前の契約書や履歴書、スケジュール表やレポートの山に溜息をつきながら椅子のひじ掛けの先端を一度叩く

すると、周囲は黄昏の空の色に染まり、ヴィオラは立ち上がる

「…茜なんて嫌いだ」

僕を倒したお前たちがいる、茜の世界なんて」

机の上の冷めたコーヒーを、ディスプレイの壁に放り投げる

ぶつけられたコーヒーカップは砕け、コーヒーは壁に広がり床に零れ滴る

「…でも僕は失敗を活かさない馬鹿じゃない

不穏分子は徹底的に排除するさ…」

ヴィオラは右上腕をさすり、右腕が確かに存在しているのを確認する

「憎たらしい茜のお陰で、僕は忘れずにいられる

夜空はダメだ、あの女の色だから…」

冷汗が背筋を伝う

薄く息を吹き出し、自分を落ち着かせる

「…よし、大丈夫、まだやれる」

不安定に揺らいでいた紫の瞳は落ち着きを取り戻し、冷たい瞳になる

机の上にある大きなディスプレイを眺める

いくつもの画面に映る情報達の中に、蒼白の人形の姿が映る

「…今は、確か1759回目だったかな」

彼が監視しているロボトミー社の中は、未だシナリオを遂行中である

「大丈夫、必ず君を幸せにする

何度挑んでも、何千何万年かかっても…」

復讐者は静かにその願望を胸に抱える

「必ず、君が不幸にならない世界を作るからね

誰もが平等な、理想郷を」

「理想郷？」  
ユートピア

「そう、その実現が小僧の悲願だろう

…というか童、いつまでその眼帯付けてるのじゃ」

「ああ、こうした方が悪ガキたちも大人しいので」

イナが事務所の掃除をしている際にほとんど人が出払っている中、無二から語られたヴィオラの目的

抽象的なその情報に、イナは首を傾げる

「小僧はな、愛する者を喪っている

それが定めと言わんばかり、何度生まれ変わった世界全てでな  
初めの世界でそうと決められた運命なのだろうよ」

「母様が、愛した人…」

窓拭き用の雑巾を握り締めながら、イナは衝撃を受けた

あの母にも、誰かを思う気持ちがあった事実

「その者が早くに死にゆくのは最早決められたこと

そのどれも的人生、不幸な生涯を歩んだようだった

世界に「不幸者」と決められた魂…」

「…まさか、母様はその人を幸せにしようと、理想郷を創ろうと…？」  
「そう

どこにおいても、小僧は小娘への復讐と共に理想郷の実現を目標に掲げているだろう

それは恐らく、ここでも同様と見て差し支えないであろうよ

その過程、方法手段はわからぬがな」

無二は拭いたばかりの机に寝そべる

イナは雑巾を絞りながら、考える

(不幸に死にゆく運命を定められた愛する人：初めて聞いた時もそうですが、遠い世界から続く話：スケールが大きすぎて実感がわきませんが：)

母様にも、誰かを愛する心があつたなんて

確かに、大切な誰かが不幸に死ぬという運命にあるのなら、それを  
変えたいと思うのは必然なのでしょう

：何故、そう定められたのでしょうか

どこでもそうだから、母様はどの世界でも理想郷を創ろうとしてい  
る？

母様の中の絶対的な目標：理想郷実現の為に活動しているのなら  
ば、もしかして私達クローン体もその計画の一部…？

だとしたら…私達は何のためのパーツ？

母様が私達に下した命令と言えば、L社で生き残れということ…  
雑巾を絞り切った時、イナはふと思いつく

「…生存本能？」

「おーい、イナ」

掃除中の部屋の向こうから、オリヴィエの声が聞こえてくる

無二は慌ててイナの影に沈み、その姿を消す

「はい！なんでしょう！」

返事を返すと、扉が開かれオリヴィエが顔を覗かせる

「外でガキンチョ達が呼んでるぞ」

「はっ、今日はカードゲームで勝負する予定でした！」

「はは、所長には俺から言っというてやる

子どもにも二時間三時間の休憩は必要だって」

「ありがとうございますオリーブイエー！」

イナは手を洗いに行き、身なりを整え、アストルフオにもらった四  
人分のおやつをポシエットに詰め込んで事務所を出た

日々は続いた



事務所の雑用をしながら、近所の子供と遊び、家に帰って家族と過ごす

そんな普通の、ありふれたような日常  
しかしイナは忘れなかった

真実を知りたいということ、強くなるということ

そしてイナは理解していた

無二は全てを語っていないということに

知っていることがまだまだあるはずなのに、話していないということ

と 一度それを問いかけると、「まだ期ではない」と言うばかり

無二自身、イナの成長に合わせて全てを語るつもりなのだろう

今はまだ、力をつけろと言っている

ので、イナは日々鍛えた

体力、技術、獲得できることは毎日繰り返し練習した

退屈な時間などないまま、月日は流れた

# R a i n y   b l u e I

××××年6月7日

イナがチャールズ事務所に来てから、三年が経った

「お、イナ、また背が伸びたんじゃないのか？」

長期の仕事を終えて事務所に戻ってきたオリヴィエがイナの頭にその手を置いた

「当然です、毎日牛乳を飲んでいたので」

イナの背丈は10cmほど伸び、イナは得意げに胸を張る

「はは、イナは努力家だな」

書類を整理するアストルフオは笑いながら棚の戸を閉じる

「まあちんちくりんには変わりないけどな」

ローランはイナを見下ろして笑っているため、イナに脛を蹴られる三年もの間、イナはここで生き延びた

母はなにか手を出してくるわけでもなく、ただ平穩そのものの日々だった

イナは少しずつ成長し、力もつけていった

近所の子供達との交友も続いており、裏路地の隅で死体を眺めることも日常と化した

「ローラン、もうイナは事務所に何人かには腕相撲で勝てるくらいになっっているんだから侮ってはいけないよ」

「よし、今度は俺と腕相撲しようか」

「オリヴィエは嫌です、肩が外れます」

白銀の髪は少し伸び、左目は未だ眼帯をつけたまま

「イナがまだ腕相撲で勝てないので、ローランとオリヴィエと…」

そんな会話をしている時、その一室の扉が開かれる  
その扉の向こうから、新たな人影が現れる

「あら、談話中でしたか」

白銀の長い髪、青い瞳、引き締まった体

一目見ただけで絶世の美女と理解できてしまうほどに美しい女性  
が、空間に混ざる

「ああ、アンジェリカ」

「誰だ？」

「数日前入った新人だよ」

初めて会うオリヴィエに、アンジェリカは頭を下げる

「先日このチャールズ事務所に入らせていただきました、アンジェリカです」

よろしくお願いします」

美しい女性は凛々しい表情のまま、視線を逸らす

その視線はローラン…の隣の子ども、イナに向けた

視線がぶつかったイナは咄嗟にローランの後ろに隠れる

「おい、しがみつくな」

「ははは、イナは昨日アンジェリカにこてんぱんにされたからね」

「ふふ、いつでもリベンジしてきていいですよ」

アンジェリカは余裕の笑みを浮かべ、イナの目線に合わせようと屈んで覗き込む

「…」

イナはローランの影から出てくることはなく、ふくれっ面でアンジェリカを睨みつける

その微笑みが、見覚えのあるものであるからだ

「アンジェリカも休憩か？」

「はい、一通り挨拶も済んだことですし」

「そーいやローラン、あの話どうなったんだ？」

「あつ…忘れていた」

「全く…しかし、君に親戚や頼れる親しい友人も事務所外にいないだろう」

「…まあ、そうだな…」

「何のお話ですか？」

大きな大人たちの会話に圧巻されながら、イナはその会話を聞いていた

数日前から事務所内で持ち上がっている依頼の話

それは、ファイクサー事務所を取り仕切るファイクサー協会からの正式

な仕事

「ああ、事務所全体で取り掛かる仕事：都市の星、血染めの夜の討伐についてな」

「：最近、血の抜けた死体が徘徊していると裏路地でももっぱらの噂ですからね」

「イナも、ついこの間襲われかけただろ」

「はい、友人らとかくれんぼしていたら：：こう、ぐわーっ！と」

襲われたときの体験を再現しようと、イナは腕を上げて目つきを鋭くしてみせる

ローランがその腕をがしりと掴み、話を続ける

「とりあえず、物騒な裏路地は更に物騒になってるってことだ

：だから、その間、イナをどこか比較的安全な所に預けたいと思っ  
てな」

「んなあ!？」

その提案に一番衝撃を受けていたのはイナ本人だった

「待つてください！私をローランの家から追い払うのですか！」  
「違うって」

俺達は事務所総出で都市の星討伐に挑むんだ、事務所に関係する範囲にいたらお前も危ないし：：」

「ローランのいけず！私は強いです！」

「俺に腕相撲で勝ってから言え」

そんな口喧嘩を聞きながら、アンジェリカは閃いた

「事務所の管轄外へ、イナを避難させたいということですね？」

アンジェリカがそう聞くと、ローランは静かに頷いた

イナは納得がいかない様子で頬を膨らませる

「それなら、一つ宛てがありますよ」

アンジェリカは優しい笑顔を浮かべて、連絡先を確認した

××××年6月10日

それから三日

イナは必要な荷物をまとめて事務所に来ていた

「…」

大きなリユックサクサクを応接間の床に置き、ソファの上で膝を抱えてイナは終始むくれている

「おい、イナずつとふくれっ面だぞ」

「まあ三年暮らした家を離れて、見知らぬ人の元に預けられるんだし…」

「アンジェリカの親族なんだろう？本人も「ちよつと変だけどいい人です」って言っていたし、信頼してもいいんじゃないか？」

「そうじゃないだろ、オリヴィエ」

イナは寂しいんだよね」

そんなイナを眺めるオリヴィエとアストルフオの会話は、イナの不機嫌を加速させる

イナはアストルフオの問いかけを無視し、ソファから飛び降り走り出す

そのままイナは事務所を飛び出してしまった

「…おい、いいのか？」

「大丈夫、子どもながら聞き分けはいいからね」

外に飛び出したイナは、近くの空き地に来ていた

もう錆びついてるところどころ千切れているフェンスに何度も殴りかかり、苛立ちを発散させる

「あーもうーもうーなんなんですか！私なら大丈夫ですから…だから…」

泣き出しそうなイナに、無二が声をかける

「童、わかってやってくれ

ろーらん達は、貴様の安全の為にやってるのじゃ」

「そんなの、わかってます！皆さんが優しいのも…でも、守られているばかり…皆さんが危険な仕事に身を投じるのに、私は暢気に安全に過ごせと」

「仕方がなからう、貴様はまだ未熟だからの」

「なら大人の体に戻してくださいよ！」

「無茶言うな！細胞が足りんわ！今度は片腕だけに飽き足らず両腕か両足失うぞ！」

そんな口論を繰り返していると、背後に気配を感じた

イナは咄嗟に振り返り、その気配を視認する

そこには、三年来の友人である近所の少年が二人、立っていた

「あ……こ、こんにちは」

「イナ、遠い裏路地に行くんだって？」

「う……え、ええ、まあ……」

「いつ帰ってくるんだ？」

「……わ、わかりません……事務所の大きな仕事が終わり次第、でしょうか」

「……そっか」

寂しそうに目線を下げる二人に、イナはいたたまれない気持ちになる

しかし、ふと違和感に気が付く

いつもはもう一人いるはずなのに、今日は二人しかない

「あの、彼はどこに……？」

いつも悪ガキのリーダー格のような少年が、今日はいない

二人は暗い顔を更に暗くする

「……かった」

「え？」

「……死体で、見つかったって……今朝」

イナは、鈍器で後頭部を殴られたような気分だった

このあたり一帯は、チャールズ事務所があるお陰か比較的治安が守られていたのだ

だから、イナも少年らも今まで安全に生きてこられた

しかし、今、身近な人が犠牲になってしまっていた

「数日前に行方不明になって、今朝見つかったんだけど全身の血管が抜き取られてるのに動いていた

でも、生きてはいなかったって……」

「……それ、は」

事務所で聞いた、血染めの夜の案件

血管を引き抜かれた死体が、ひとりでに活動している

少なくとも五日前には会っていた彼も、その被害に遭ったのだ

「…仕方ないよ、裏路地だし」

「巢の中なら、もっと安全に暮らせるのかな」

「イナもいなくなるなんて、寂しくなるなあ

戻ってきたらすぐに言えよ」

友達が死んだのに、少年達は涙を見せない

所詮は裏路地だから、命の価値はとも低いから

だから仕方がないと、諦めてしまうのだ

イナは涙を溢れさせながら、二人の少年を両腕で抱きしめた

「…私が、いつか…強いフィクサーになって、皆を守ります！

皆が安心して生きられる、そんな世界を…絶対…」

イナは二人を強く抱きしめた

二人の少年はイナのぬくもりを感じ、遅れながら友人を失った悲しみを自覚する

「う…ああ…うああああ!!」

「ひぐっ…ぐすっ…」

「…うう…うううう…」

三人揃って泣いた

いつもの空き地で、いつもより一人欠けて

そんな光景をひっそりと眺める男女

「…いつ声をかけるべきでしょう」

「なんだかんだ仲良くなってるんだよな」

ローランとアンジェリカが、空き地の外から三人を見守っていた

「いつも仮面をつけていて気持ち悪いと言われている貴方が、子どもには優しいのは意外でした」

「…まあ、いろいろ事情があるんだよ」

そんな会話をしながら、イナが二人と別れてローランとアンジェリカの方に歩み寄ってくる

「…あ」

「こんにちはイナ、お待たせしてしまい申し訳ありません  
準備できましたよ」

アンジェリカがそう声をかけると、イナは視線を逸らしながら事務  
所の方へ戻っていく

「…見事に嫌われていますね」

「キチガイだって気づいてるんじゃないか?」

ローランがそう呟くと、後頭部に拳骨がぶつけられる

先日、三発も拳骨を食らっていたのにも関わらず



## R a i n y   b l u e Ⅱ

××××年6月10日

イナは自動車の中で揺られながら窓の外を眺めていた  
移ろいゆく景色の中に、ローラン達と行ったパン屋が過ぎ去って  
いったのはとつくに前だった

区関所を五つ抜け、休憩を挟みながら長い時間移動する

「もう少しですからね」

イナの隣に座る運転手のアンジェリカは度々イナに声をかけてくれるも、イナは窓の外を眺め続けるばかりだった

夕日が沈みかけた頃、信号で止まった車内でイナがようやく口を開き出した

「…アンジェリカ」

初めてイナに名前を呼ばれ、アンジェリカは驚いた様子でそちらを向いた

「貴方、強いんですね」

イナは、数日前アンジェリカが事務所に来たばかりの頃を思い出す  
自分の方が長くいるから、と先輩面をして腕相撲を挑み、呆気なく  
返り討ちに遭ったその日の事は今も鮮明に覚えている

指相撲も、トランプも、かけっこも…あらゆる勝負に負け続けている  
ことから、イナはアンジェリカに対し苦手意識を感じていた

しかし、今はその強さを認めて素直にアンジェリカと会話する  
「…私、昔は強いフィクサーになりたいが為だけにチャールズ事務所に  
身を置いていました

しかし今は、皆の役に立ちたい  
誰かを守る力が欲しいのに…そこに辿り着けるまでの道のりが  
長すぎるんです

以前はそんな力があつたのに…今の私にはできないんです  
だから、貴方をお願いします

チャールズ事務所の皆を、ローラン…私の家族を、守ってください」

イナからの頼みを、アンジェリカは静かに聞いていた  
そして、右手をイナに差し出した

「…?」

「約束です」

貴方の家族は、絶対に守ってみせますよ…必ず」

アンジェリカは右手の小指だけを立て、イナに突き出す

イナは恐る恐る自分の左手の小指をアンジェリカに向けると、アンジェリカは小指を半ば無理矢理絡ませ、大きく振った

「指切り拳万、嘘ついたら針千本飲ます

指切った!」

小指を交わらせた約束をして、アンジェリカは微笑んだ

悪戯っぽい無邪気な笑顔は、イナを緊張感から解き放つ

「アンジェリカ…」

イナも表情が解れ、指切りをした小指を眺めながら呟く

「…青信号ですよ」

「あ」

車の後ろから聞こえるクラクションに気が付いたアンジェリカは、車のアクセルを踏み出した

「ようし着きました! さあイナ、ここですよ」

窓の外を眺めていたイナは、呆然と口を開けて周りを見渡す

どこを見ても高いビル群、優雅な建築物は高級な雰囲気漂わせているが、並び歩く人影の中にはガラの悪いゴロツキも少なくない

裕福層が住んでいそうな区画だが、決して治安がいいというわけではないのかもしれない

イナは慌てて大きなリュックサックを後部座席から引っ張り出し、よろつきながらもそれを背負った

車の鍵をかけたアンジェリカの後ろを歩き、白いビルに入っていく  
そのビルはホテルで、アンジェリカはカウンターに一度会釈し、エレベーターまで歩いて行った

イナはその後ろをついていくが、アンジェラの場に馴染む優雅さに

圧巻される

「童、ここお高い匂いがするな」

無二が落ち着きなく耳元で騒ぐのを聞き流し、イナもエレベーターに乗り込んだ

エレベーターは上へ昇り、ガラスの窓から周辺の様子が見渡せる

暗い夜の空に対抗するように地上は煌びやかに輝き、まだ眠ることを知らないようだった

「綺麗ですね、イナ」

「…こんな外から見えやすいガラスの窓、狙撃で暗殺されないか不安です」

「考え方が物騒ですが、嫌いではありませんよ」

そんな風に会話しているうちに、エレベーターは最上階に到達した  
そこはホテル内でも一際値段が張るであろうスイートルームの階である

白い廊下に降り立ち、アンジェリカは一室しかないスイートルームの扉まで進み、インターホンを押した

イナはアンジェリカのすぐ後ろに隠れるようにして、扉の奥から現れるであろう誰かを警戒した

インターホンが鳴ってからたった二秒、その扉が開かれる

「アンジェリカ！待ってたよ！」

現れたのは、白い髪に青い瞳の男性

アンジェリカとよく似た顔の男性を見て、イナは口を半開きにして驚愕した

それは、三年前自分を助け、イナという名前をくれた相手：アルガリアだったからだ

「兄さん…出るの早すぎます、玄関で待ち伏せしてたんですか？」

「まあね、アンジェリカがホテルのロビーに来た時からそんな気がしていたから…君が来るまでの2分32秒、ここで待ってたよ」

アンジェリカに兄さんと呼ばれたアルガリアは心底嬉しそうに話すも、アンジェリカは頭を痛めている様子で額を抱える

アルガリアはふとイナの存在に気が付き、イナの方を見た

少し目を見開いた後、にこりと笑う

「初めまして、君がアンジェリカが言ってた子だね」

初めましてと声をかけられ、イナはようやく意識を取り戻した

(…あれ、覚えていない…?)

「イナ、この人はアルガリアです、たくさんわがママを言うんですよ

兄さん、この子はイナ…しばらくの間、この子を預かってください」

「アンジェリカの頼みであれば喜んで

イナ、おいで」

胡散臭い笑顔に後退しそうになるが、後に引くことはできないためイナは渋々アルガリアのいるスイートルームの玄関口に足を踏み入れた

「では私はこれで」

「もう帰るの？今日は遅いから泊っていけばいいのに…」

「結構です、もしもの時はビジネスホテルに泊まるので」

アンジェリカは屈み、イナの目線に合わせる

「それではイナ、またそのうち様子を見に来ますからね」

「…」

イナは小さく頷き、アンジェリカは微笑んでその場から引き返し、去っていった

「……」

「いつまでそんなところにいるの」

アンジェリカの方を眺め続けていると、後ろから声をかけられる

部屋の奥に入っていたアルガリアの方を振り返る

「おいで、イナ」

イナは扉を閉め、廊下を進んでいく

スイートルームのリビングは広く、テーブルに置かれた蓄音機や棚に置かれたCDプレイヤー、片隅のピアノ…音に関する物が多く置かれている

中央のソファに腰かけ、アルガリアは息をついた

「…まさか、アンジェリカから頼まれた子供が君だとは思わなかったよ」

「…」

覚えていた、アルガリアはイナを覚えていたのだ

「左目どうしたの？もしかして、取られちゃった？」

「…健在です、ただ、近所の子供に気味悪がられるので眼帯をつけたままにしています」

「ふうん…まあどうでもいいけど」

アルガリアは蓄音機を動かし、音楽を流し始めた  
静かなバラードがリビングに広がる

「…そちらは

あれから、母様になにもされなかったのですか？」

「うん、得に何も

他の事に集中しているのもあって、あんまり君に気をかける暇もないみたい

それでも、君の捜索の手を緩めたわけじゃないよ？ヴィオラの支配圏は徐々に広まっているからね…

今の段階が一番安全なようだよ」

テーブル上のコーヒーマグに口をつけ、アルガリアは雑誌を広げた

そのページには、L社の写真が写っている

「…」

「ヴィオラが契約している会社の一つだよね

創立してすぐに契約を結んで…社員が派遣されてるっていう

他にも、L社の子会社や中小企業、翼では他にT社なんかにも…

ヴィオラは一番はB社の特異点が欲しいみたいだけど」

L社のページを眺めながら、イナは複雑な心境になる

イナは廃棄処分をすり抜け、都市に逃げ出せた

しかし、あそこにはまだ大切な人が取り残されているのだ

脳裏に深緑の箱が思い浮かぶ

「まあとにかく、ヴィオラは勘が鋭いし…趣味の悪い触手の力も計り知れないけど、万能だったとしても全能ではないから安心してほしいと思うよ

都市の全てを見渡せる力がないから、俺みたいな手足が使われるわ

けだしね」

アルガリアはコーヒーカップを持ってソファから立ち上がり、キッチンの方へ歩いていく

「大丈夫だよ、俺の優先基準はアンジェリカが一番だから…アンジェリカに頼まれた君の面倒は見るよ

ほら、そんなところに突っ立ってないで、寛ぐといいよ」

そう促され、イナはゆっくりリビングの中に入り、リュックを床に降ろした

「ふむ…妾の存在を知っている貴様だから妾も寛がせてもらうかの」

無二がイナのスカート影から姿を現し、アルガリアの方に向けた「どこから出てるんですか貴方!」

「あるがりあ…といったか、貴様

もし童に手を出して見ろ、その時はその頭蓋、砂粒になるまで噛み砕いてやるからな」

無二は警戒心をむき出しにし、蛇の躯体を巨大化させ威嚇する

アルガリアはそんな無二に怯むことなくキッチンの棚から飴玉を取り出し無二の口の中に放り込んだ

「…! 飴玉か…!」

「甘いもの好きだよね、君

イナも食べる?」

「…何で知ってるんですか」

無二が甘いもの好きだという情報を知っていることに恐怖を感じながら、イナは差し出された飴玉を受け取った

無二は小さくなり、イナの首元に巻き付く

「情報源は教えてあげない」

イナは包み紙に包まれた小さな飴玉を上着のポケットに入れる

アルガリアはにこやかな笑顔を絶やさなまま、キッチンの横に続く廊下を指した

「君の部屋は別室に用意させたから、荷物を置いてきたらどう?」

奥の突き当りの手前の部屋だから」

イナはその指示に従い、リュックを担ぎリビングの端に続くキッチン

ン横の廊下を進んだ

リビングから続くガラスの壁からは絢爛な裏路地の光景が広がるも、遠くに見える壁の向こうの巣の中の方がより一層輝きを仄めかせている

ガラス壁とは反対側の壁に扉があり、突き当りにも扉がある  
「ここですね」

イナは手前の扉を開き、中に入る  
踏み入った瞬間から照明が点灯し、部屋の中を照らす

上等なベッド、大きなクローゼット、壁際の机と椅子も一級品のようだった

「…ローランの家とは大違いだな」

「稼ぎの問題でしょうか…ローランもそれなりに稼いでるはずなのに」

「気に入ってもらえた？」

真後ろから聞こえた声に反射的に振り返る

イナのすぐ後ろに、アルガリアが立っている

「荷物を置いたら上着を着たままおいで

せつかくだし外食にでも行こう」

あの夜と同じ青い外套を身に纏い、大きな鎌を手にしたアルガリアはイナにそう告げてリビングの方へ戻っていく

その後ろ姿を眺め、イナと無二は顔を見合わせた

「…相変わらず気味の悪い男じゃな」

「気配に全く気が付きませんでした…」

一先ずイナはリュックをクローゼットの傍に置き、そのままアルガリアが待っているリビングへと向かった

## R a i n y   b l u e Ⅲ

静かなピアノの旋律がホール内を満たす

煌びやかなシャンデリア、規則正しく動くウェイター

いかにも高級なレストランの一角、奥の個室席に座る二人

運ばれてきたブラッドオレンジのドリンクをストローで啜るイナは、この空間の空気に気圧されていた

「…」

「…」

「……」

「…どうしたの？食べないの？」

向かい席に座るアルガリアは、優雅な所作でローストビーフを口に運ぶ

「場違いすぎて、なんかもう味もわからないですよね」

「確かに、子連れで来るような場所じゃないかもね

一等地のご令嬢ならまだしも、君みたいな普通の子供ならなおさら

…あ、普通じゃなかったね」

「そんな貴方は様になってますね

一等地の御曹司か何かでしたか？」

イナの返しにアルガリアは一度ナイフとフォークを置き、膝上のナプキンを皿の横に広げた

「そう見える？」

「…いえ、実際そうならフィクサーになんてなってないでしょうし…没落でもしてない限り」

「そうでしょ？…俺達はね、外郭出身なんだ」

アルガリアは添えられているパセリを皿の上からナプキン上に移動させる

「とある研究所の被検体でね、用済みになった後外郭に捨てられたんだ

俺とアンジェリカは、そこで必死に生きようとした

…そして、ヴィオラに拾われた



「生き延びたいのなら僕のところにおいで」って  
「母様に…」

アルガリアと母の関係を改めて知り、イナは理解した  
以前アルガリアが母を「友達」と呼んでいたのも、契約でもなんでも  
もない真実の表現なのだと

「そう、しばらく世話になった後師匠…とある女性に預けられたんだ  
そこで鍛えられて、今はこうしてフィクサーをやっているんだ」  
「…被検体、だったんですか」

「そう、やっぱり似てるね、俺達」

嬉しいか嬉しくないかで言えば嬉しくない言葉に、イナは唸る  
アルガリアはワインを一口飲み、そしてそれを後ろに放り投げた  
そのグラスとワインが床に落ちるのと同時に、アルガリアは傍らの  
鎌を手にシヨーステージを隠す赤いカーテンを切り裂いた

「だからかな…君のこと、可哀想って思ってしまうんだよね  
あんな魔女から狙われることになって  
だから…俺が守ってあげる」

カーテンの向こうから血飛沫が噴き上がる

その向こうには数人の男女が潜んでいた

「…えっ」

「チツ、やっぱり気付いていたか…」

リーダー格のようなガタイのいい男が、切り裂かれた死体を尻目に  
こちらを睨んだ

「当たり前でしょ？むしろ、どうして気が付かないかな…子供じゃあ  
るまいし」

「あれ、これサラリと侮辱されています？」

「どうせこの子が狙いなんだろうけど、目的は金？悲しいよね…都市  
ではたくさん金が必要だから」

隠れていた数人は改めて武器を構え、アルガリアを警戒する

一方アルガリアは涼し気な顔で相手を見ていた

「青い残響…最近色を貰ったからって調子に乗るなよ」

「青…？」

一人の男がアルガリアを「青い残響」と呼び、イナは首を傾げながら、以前無二が言っていたことを思い出す

「9級から1級のうちの1級、その1級でもずば抜けて位が高いのが色を持ったふいくさー」

色を持つフイクサー、特色と呼ばれるその称号をアルガリアは手にしていた

青い双眸と外套、大きな鎌を見ても確かに「青」がよく似合う

「俺もそこそこ有名になってるみたいだね…嬉しいよ」

「お前もスマイレの魔女から依頼されてるって聞いているぜ

どうしてまたそのガキを守る？ 契約違反だろ

そのガキを探し、見つけ次第引き渡すか最悪殺せ、そういう話のはずだ」

男が1枚の写真を取り出す

その写真には、髪が白く左目を眼帯で隠している子どもの姿が映っている

それは紛れもなくイナの姿だった

隠れていた男女達は、スマイレの魔女…ヴィオラの手先の者だとイナは瞬時に理解する

それよりもまず、イナは自分の身元が割れているのに驚いた

いや、むしろ今までの三年…三年もの間、母が自分の現在の特徴を知らないままだった方が奇跡なのだ

「…さすがに隠し通せぬか、してやられたな」

「無二、貴方何かやっていたんですか…？」

髪の間から様子を伺う無二に、イナは問いかけた

無二がそれに答えるよりも先に、敵の一人がイナに斬り掛かる

「…！」

無二に気を取られている隙を突かれ、イナは避けようにも間に合わないことを悟る

しかし、その刃がイナに届くよりも早く…アルガリアの鎌の切っ先

が、持ち主の腕を貫いた

「ぐあッ…!？」

「残念だけど、お触り禁止なんだ」

そのままアルガリアは敵の腕を切り落とし、ついでと言わんばかりに首を切り落とした

血飛沫がイナの手前まで吹き飛んでくる

「…そんな」

イナは目の前で倒れる死体を呆然と見つめる

「クソッ、青い残響に構うな！目的はあのガキだ！扉事務所の名に恥じないよう、必ず依頼を遂行してみせろ！」

男が他の者達を鼓舞し、残ったメンバーが一斉に襲いかかってくる

終幕は、呆気なかった

アルガリアは血のついた鎌を振るい、血を払う

死体が13、生者はたったの一人だけ

それも、虫の息であるのだが

「う…うう…」

イナは何が起きたのか理解できなかった

その動きを目で追うことは出来ても、理解し難かった

まるでワルツでも踊っているかのように優雅な惨殺

殺戮の演目で流れていたであろう音楽が、耳元に残るような感覚

悲鳴と絶叫の断末魔という楽曲…絶え絶えになっている男の呼吸が残響となって聴こえてくる

「…さて、君には聞きたいことがあるんだよね

事務所総出で狩りに来たんだろうけど、他の事務所の人間は？依頼は裏ルートからなら仲介者もいるはずだよ？答えてくれてたら助けてあげるかもしれないよ」

アルガリアは死にかけの男の元に歩み寄り、利き手の手首を踏みつけ見下ろしながら質問する

尋問の返答は来ず、ひたすらの呼吸のみが響き渡る

「…悲しいな、会話くらいできるはずなのに

声を出せないのかな？それじゃあ出るようにしてあげるね…」

アルガリアは鎌の刃を男の足に突き刺した

「うがアア!!」

そのまま鎌を動かし、足のラインに沿うように数cm引き裂く

「どう？声出たでしょ？それじゃあさっきの質問に答えてくれるよね」

「はあ…あゝ あ…………青い…残響…お前…これでいいのか…？」

スマレの魔女に…報復を受けるぞ…」

「今質問しているのは俺なんだけどな」

アルガリアは更に数cm、足の肉を切り裂いていく

「いぎつ、う、ぐうううツ…!!」

じ、事務所の人間は…まだ何人か残っている…依頼は…17区に事務所を構えている情報屋から…!」

尋問は拷問へ変わり、イナは震えていた

恐怖ではなく、ただ哀しかった

「そつか、じゃあどちらも潰しておこうかな

答えてくれてありがとう」

「はあ…クソツ…これで、俺は…助かるのか…？」

足に突き刺していた鎌を引き抜き、アルガリアは微笑みかけた

男の太腿の30cmもの傷口から血がドクドクと溢れ出る

「…それじゃあ、君も死んでね」

アルガリアが血のついたままの鎌の刃を、男の首に添えた

「は…はあ…!?ま、待てよ…さっき助けてあげるって…」

「助けてあげるかもとは言ったね

だから殺すことにするよ」

アルガリアは狙いを定めるように鎌を振りかざし、それを振り下ろそうとした

しかし、その時に

「や、やめてー!」

イナが男とアルガリアの間に割って入ったのだ

イナは男を庇うようにアルガリアの前に立ち塞がる

「…何してるの?」

「あ、あの、守られといてなんですけど…こ、この人を殺すのをやめてください」

「何で?生かしておいたら危険じゃない?」

「…今現在、私は母様に既に姿を知られてしまっています」

それなら、危険度は変わりないですから…この人を殺すことだって無意味です」

空気が重い

肌が今にも粟立ってしまうような重苦しい空間で、イナはアルガリアに真正面から反論する

この都市に正常さを求めるのは馬鹿げているのは知っているが、それでも尚この青い男がどれほど気が触れているのかはイナも少しづつ理解していた

それでも、血の池を踏みしめながらもイナは男を守ろうと立っている

「…それもそうだけど、なら殺してもいいんじゃない?」

「い、嫌です」

「どうして?」

「…私は…もう、人が死ぬのを見たくありません」

「…ああ、そういやそんなことを言っていたね」

アルガリアは以前のことを思い出したように俯いては、ゆっくりと鎌を降ろした

わかってくれたのか、とイナが安心したところで…何かが真横を掠めた

「ぐあああああ!?う、う、腕、腕がアツ…!」

イナが後ろを振り向くと、負傷していた男の片手が消えていた

数メートル離れた地点に、ぼとりと重量のあるものが落ちる音がする

そちらを向けば、男のものであろう片手が落ちている

その手には、刃渡り15cm程のナイフが握られていた

「わかる?イナ

君は今、自分が守った人間に殺されそうになったんだよ？

これでもまだ「殺さないで」って言える？」

アルガリアは微笑みを絶やさぬまま、鎌で男の息の根を止めている  
瞬く間の光景にイナは放心するしかなかった

「…童」

「…」

「帰ろう、イナ」

うーん…来て早々だけど、引越しが必要かもね

あと、君もその外見を隠さないと…整形する？」

青い外套を翻し、血のついた靴のまま個室を出ていくアルガリア  
に、イナは重い足取りでついていった

# R a i n y   b l u e   I V

XXXXX年6月11日

レストランでの悶着の後、ホテルに戻ってシャワーを浴びた後に沈むようにベッドで眠ったイナは、翌日の昼前に目が覚めた

眼帯を外した両の目から見える世界は、電灯の仄かなオレンジの光により薄暗く照らされている

「……無二」

傍らの枕の上でとぐろを巻いていた無二は顔を起こす

「起きたか、童」

「起きました、あの……あの人は？」

「……さあな」

昨夜貴様に布団を掛けた後部屋を出ていった、それからのことは知らぬ

彼奴も自室で休んだのじやろう」

無二から話を聞きながら、イナはベッドから降りて机の上に置いてある眼帯を付ける

「……不思議だったんです」

都市全土を掌握していないとはいえ、あの母様が三年もの間、私を見つけられていなかったこと

無二、貴方何かしていたんですね？」

イナの問いかけに、無二は数秒の沈黙の後に大きく溜息を吐いた

「……はあ、いや何、ただの隠蔽工作に過ぎん

あのろぼとみー社とやらから脱出する際、小娘……無の世界蛇の情報を抹消し、ついでに貴様の後をつけられぬよう足跡……痕跡を消していたのだ

しかし、彼奴の「権能」の力だろうなあ……今の貴様の姿もばれてしまえば隠蔽工作も通らん

姿さえ知られてしまえば、捕まえるのも容易いであろうよ」

権能、それは母の手元にある五本の触手

本来ならば七本あるはずらしいのだが、今は五本しかない

権能にはそれぞれの能力がある…のだが、その真相はイナも知らなかった

「その、権能の力とは」

「…やはり、作り出した子にも伝えておらぬか」

まあ、自らの手の内を易々と晒すような輩ではないか」

無二は自身から溢れ出る影の塵を操り、仄暗い寝室内で黒い触手を再現して見せた

七本の権能には、それぞれ異なる能力がある

一本目、英雄の権能

英雄のように強靱な肉体を作る権能：平たく言えば、不老不死の能力

二本目、叡智の権能

ありとあらゆる知識、記憶を引き出す権能

この世だけでなく全ての平行世界、過去や未来、外の世界の知識等も取り入れることが可能になるもの

「…なのじゃが、「未来視」は制約…否、抑止力により使用できないのだ」

三本目、運営の権能

無から有を生み出し、価値の流動や役割の管理を行うための権能  
端的に言えば、魂の宿る生命以外ならなんだって作り出せるもの

四本目、支配の権能

他者がヴィオラを「圧倒的強者」と認識することでその者の行動を制限、支配することができるもの

「童、貴様らがあの小僧に精神や行動を支配されていたのはこれによるものだ」

あの右腕の刺青の下に組み込まれていた神経命令回路…それがこの権能の一部から生成されているものだからな」

五本目、処断の権能

不必要なものを排斥する権能であり、ヴィオラの支配圏内にしか作  
用しない

更には「契約」を結んでいる相手にしか使えかいが、小さな細菌か



ら感情の一部、果てには生命活動まで「処断」できる

「母様は、なぜこの権能で私を処分しなかったのでしょうか」

「彼奴はげーまーじゃからじゃ

彼奴は安全な策よりはいいりすく、はいりたーんな策を好む

：何より、小娘自身に貴様を殺させることを愉悦と見なしたのだから  
う

然し愚策じゃったな！彼奴の慢心により童だけでなく無の世界蛇も手中から逃してしまふことになったのだからな！」

残り二本の権能は今はいオラの手にはないもの

六本目、万象統合の権能

全てを「繋ぐ」権能

七本目、万物乖離の権能

全てを「切り離す」権能

「…この最後のふたつは、よくわかりませんね」

「正直妾も詳しくはない、何せ使用したことなんてほんの僅かな二本じゃからな

ただ：言うなれば、彼奴の切り札と言っても相違ないであろう」

スマイレの魔女の手元に無い、二本の切り札

情報の少ないその二本を、スマイレの魔女は探しているのだろう

「妾の憶測じゃが、小僧がろぼとみー社に執着するのは権能の出現を待っておるからじゃろう

妾から見てもあそこは異質じゃ…この都市を変革しうるやもしれん  
ん

やれやれ：小娘のように傲慢で強欲な輩はどこの世界にも一人二人というものだな」

無二は溜息を吐いて首を振る

触手を模した影は無二の体に吸収されていき、跡形もなく消える

「…そんな母様に、どうすれば敵うのでしょうか」

イナはベッドに座り、膝を抱えては床を眺める

その視線に合わせるように、無二は床を這いずる

「まだ時はある、小僧は万全を期すように慎重になっている今が好機

だ

今はただ成長するのだ童

貴様が五体満足で肉体を成長させ、この都市で精神を鍛えろ

…さすれば、妾が知恵を授けてやろう」

「…あどどのくらいでしょうか」

「それは貴様の成長次第じゃ

童、貴様の出自は異質とは言え貴様も人間の子に変わりはない、であるならば貴様は人として生きろ

小僧に使われる道具としてではなく、一人の人間としてだ」

「…こうしている間にも、<sup>あそこ</sup>L社では皆が…」

イナが思い浮かべるのは一つの箱

飲んだくれの薬物中毒者で、酷い上司

自分と共に仕事をした仲間達

繰り返す地獄を一人記憶したたった一つの結末へ導く孤独の機械

L社に残ったもの達は多く、今のイナにそれらを救う術もない  
生きるだけで必死になっている今では

「…急がば回れ、と言うじゃろう

急いで事を仕損じるより、時間をかけてでも確実な道を辿るべき  
じゃ

今は今の運命の流れに身を任せ、生き延びることに尽力せよ」

無二がそう言い聞かせていると、イナの寝室の扉が開いた

「あれ、起きていたの

おはよう、と言つてももうお昼時だけど…」

扉の向こうから現れたのは、髪を濡らし首からタオルを下げ、身にはズボンだけで上の肌を露出させたアルガリア

見てわかる通り風呂上がり、といったような身なりをしているアルガリアを見て、イナは固まった

「…きッ……きやー…っっ!!?」

あ、あ、あ、貴方なんて格好なんですか!？」

「おい青い小僧! 貴様れでの部屋にのつくも無しにおめおめと入ってくるでないわ! しかも上半身裸体ではないか! 礼儀を痴れ礼儀を

「馬鹿者！」

「別に減るものでもないだろ？…あれ、それとも意識しちゃった？はは、イナもませてるね」

「出ていってください！バカ！バカ！」

イナは目を閉じながら傍らにあった枕をアルガリアに投げつける  
そこそこ威力のある枕を軽く避けて、アルガリアは部屋の出入口に寄り掛かる

「罵倒の語彙少ないね」

「もつとありますし!?あ、アホ！おたんこなす！」

「童の馬鹿者！もつと工夫して罵るのだ！世にはこんな言葉があるぞ！しすこんとかろりこんとか」

無二がそう教えた瞬間、アルガリアは無二の首を掴み無二を持ち上げた

「なるほど、悪知恵はそこからか…縊り殺しちやおうかな？」

「童ー！童助けてー！妾死んじやう！」

「アブノーマリテイが何言ってるんですかー！」

一悶着を終え、アルガリアは服を着てリビングでソファに座りながら紅茶を飲んでいる

イナはふくれっ面で昼食に差し出された宅配ピザを頬張る

「美味しい？適当に選んだんだけど…」

「トマトとバジルがチーズと絡み酸味と香味がチーズ特有の味を抑えつつ互いに引き立て合い、スパイシーなサラミがアクセントとなって美味しいと言えば美味しいです…」

「食レポ上手だね」

次々とピザを平らげていくイナを眺めながら、アルガリアはノートパソコンの画面を眺める

そこには、ネットニュースの記事が映っている

「…何見てるんですか？」

「うん？…なんでもないよ、ただフィクサー事務所が二つ、昨夜のうちに潰れたっていうニュースだよ」

都市は人が生きるには難しい場所だからね、淘汰されるのは仕方ないことだ……」

アルガリアはパソコンを閉じ、ティーカップをテーブルの上に置いた

そしてイナを見つめ、爽やかな微笑みを見せながら口を開く

「昨日来たばかりで悪いんだけど……引越そうか」

# R a i n y   b l u e V

XXXXX年6月10日 午後10時40分

レストランでの悶着の後二人（と一体）はホテルに戻った

イナは帰路終始沈黙したままホテルに戻ってはパジャマを抱えて浴室に行き、入浴後は寝室へ直行した

それから一時間後、アルガリアはりビングで本を読んでいたが不意にそれを閉じ、イナの寝室を覗きに行く

扉を開くと、常夜灯の淡い光に照らされた室内が薄暗いながらも見渡せる

上等なベッドの上で、イナは寝息も聞き取れないほど静かに眠っていた

まるで死んでいるかのような様子を眺めた後、アルガリアはイナに布団を掛け直した

アルガリアにとつて、イナという一人の子供に対する特別な感情は無い

自分と似た子供、被検体、愛する妹の頼まれ物

多少気にかけることもあったから、三年前は助けてやった

それが巡り巡って妹と出会い、妹を仲介し自分の元へやってきた

アルガリアは考えた、目に見えない流れが世界に存在しているのなら、今この瞬間が正にその証明になるだろうと

アルガリアは知らなかった、自身に妄執の火種が生まれつつあることを

「…おやすみ、イナ」

三年前より伸びた白銀の髪をひと撫でし、アルガリアはイナの寝室を後にした

そのままリビングに足を運べば、再び青い外套を身に纏う

そして、玄関から部屋を出ようと扉に手をかけた時

「あるがりあ、とやうら」

背後から呼び止められる

振り向けばそれは黒い蛇の姿をしている

頭部に浮かぶ赤い瞳は一つしか無く、それは見定めるようにアルガリアに向けられていた

「…無二、だっけ」

「貴様、何故童を護る？」

「貴様の利益はなんだ」

「何を聞いてくるかと思っただら…そんなこと？」

「案外面白くないね、君」

「貴様は童に好意を持っておるわけでもなからう」

「貴様が童を助ける動機には…いつも、誰かが介入しておる、そうではないか？」

「無二の言うことは正しかった」

「三年前アルガリアがイナを助けたのは、単純に妹に似ていたから今回イナを守ったのは、妹がイナを頼んだから」

「どちらも根底にはアルガリアの妹…アンジェリカが存在しているアルガリアの行動理念はアンジェリカが基盤となっているのだ」

「そうだね…アンジェリカがイナを預けたんだ、だから俺はイナを守らないと」

「死なせてしまえば、きっとアンジェリカが悲しんでしまうだろうから」

「魔女との契約より肉親との信頼関係を優先か…まあ、まだ人間らしい部分はあるようだね」

「しかし、貴様の妹が童を殺すように願えば、貴様はそうするのであるろう？」

「それは勿論、俺個人の感情で助けるのは三年前のあれきりだ」

「見逃すのは一度だけ、と言っているからね」

「やはり信用できんな…良いか、妾は童に生き延びてもらわねば困る童が生き延びるために、もし貴様が危害を及ぼす素振りを見せたら」

「…貴様のそつ首、喰らうてやる」

「来たばかりの時と同じように、無二はアルガリアに対し威嚇する」

「無二はアルガリアが危険な男だと以前から感じ取っていた」

「…君はそんなことできやしないだろう？」

アルガリアは静かに微笑み、無二を見つめた

「……何故、そう言いきれぬ？」

訝しむように睨む無二に、アルガリアは告げた

「だって君は

いや、貴方は……」

昔のことだ

五年か六年か、それくらい前のこと

アルガリアはヴィオラ直属のフィクサーをしていた

当時はまだ6級ほどだったか、巡り巡って自分を拾った魔女の下に戻ってくるとは思っていなかったアルガリアは、アンジェリカと共にスマイレの魔女の下で働いていた

その時、とある先輩がいたのだ

夜空のような髪、深海のような瞳、都市の人間とは思えないお人好しな女

一級フィクサーだったその女性は、同じくヴィオラの部下といった立場の男と結婚した

アルガリアとアンジェリカが来た頃には恋人同士だったのだが、見ていてもどかしい二人だったと記憶している

なんにせよ、その女性にしる伴侶の男にしる、二人の世話になった相手には変わりない

「二人とも、そんなに険しい顔してないで

せつかく綺麗な顔しているんだから、笑って見せて」

そう言われてから、アルガリアは常に微笑みを浮かべるようにした  
ある時、男は外郭に派遣されることになった

しばらくしてから、子を宿した先輩もヴィオラもそこへ向かうことになった

ヴィオラは度々戻ってきていたが、それっきり先輩も伴侶の男も帰っては来なかった

……派遣される前、伴侶の男はアルガリアに声をかけていた

「ねえ、アルガリア

「ちよつといいかな？」

「どうしたの、――…君の方から俺に声をかけるなんて」

「いや、ね…君になら安心して頼める気がしたんだ」

「伴侶の男は、本当に美しいヒトだった」

「女に見紛うほどに整った造形だとアルガリアも理解していた」

「…もし、僕達の子が産まれたら…よろしくね」

「…なんで？」

「ほら、彼女…萌恵って君達を自分の弟や妹のように感じているみたいだから」

「その場合俺は叔父さんってこと？ 勘弁してほしいんだけどなあ…」

「頼んだよ、僕は君達を信頼している」

「…彼女と子どもに何かあれば、連れて逃げてほしい」

「僕はもう、出来ないから」

懐かしい記憶だった

まだ若かりし頃の記憶、親しい誰かの記憶

そんな誰かもそれつきり会うことはなかったし、頼まれ事をこなすにしても先輩もその子どもすら戻ってくることはなかった

ヴィオラは派遣先の研修所での出来事は話してくれたが、嘘と本当が混ざった捏造も込みだろう

ヴィオラが作った「レイン」という商品を見た時に戦慄したのを記憶している

先輩とヴィオラは顔の造形が似ているが、そのレイン達もまたよく顔が似ていた

機械的な言動、紫の瞳、まさに魔女の子としての理想形なのだろう…しかし、三年前、逃げ出した一人の魔女の子を見て更なる衝撃を受けたのは今にも新鮮な記憶だった

左目に宿した深い水底のような瞳は、月に照らされ水面のように染まり美しかった

まるでかつて見たあの慈愛の眼差しのように

「…うん、彼女は美しかった」



ああいう人が聖女って呼ぶのかな？それなら…聖女の子どもはど  
う育つのだろう」

暗闇の中足を踏み締める

ガラスが砕ける音、呻き声、鉄の香り

何とも容易い殺戮の間に思い出を想起していた

「あ…ぐ…どう、して…青い残響が…ここに…」

アルガリアは見た、自身の鎌の傍らに蠢く虫を

「どうして？君達が最初に襲ってきたんだよ？なら仕返しされたって  
文句は言えないはずだろう」

ここは扉事務所本部、アルガリアとイナを襲撃してきたフィクサー  
達の所属事務所

しかし今や息をしている人物など一人か二人程なのだが

「情報提供元は既に押さえてあるから、あとは君を殺したら終わりだ  
…」

「ま、待て！気が違えたのか!?スミレの魔女の命令に背くのか!？」

「俺は君達と違ってあの気持ちの悪い触手に洗脳されていないし…  
ヴィオラは自由にやっているんだ、俺も自由にさせてもらうだけ…」

次の返答はなかった

もう答えられる者など、どこにもいないからだ

「…」

血溜まりの中心で、アルガリアは口ずさむ

かつて聞いた、静かな音楽を

「きらきら光る、お空の星よ…瞬きしては…みんなを見てる…」

今日の都市の夜空に、星は見えない

それでも、遠い星に祈りを捧げるように

誰かを追悼するように

「…酷い有様」

その歌を割くように、声が響く

暗闇に溶けるように這い出てきた黒い蛇を見て、アルガリアはニコ  
リと笑う

「貴方が望む方法ではないだろうけど、これが一番手っ取り早いから

ね」

「…この都市は、どこまでも手遅れなの」

赤い一つ目がアルガリアを見つめる

それはイナの傍らにいる蛇、無の世界蛇…無二の姿

そのはずなのに、声も口調も、雰囲気さえも違っている

「それが都市だからね

…さあ、帰ろう、あの子の元に

モエさん」

# R a i n y   b l u e VI

XXXXX年6月11日 午後1時23分

「ほらイナ見てよ、虹色の綿あめ」

「見目ばかりでお腹の足しにならなさそうな雲ですね……甘！うま！」

晴れた休日の昼下がり

イナとアルガリアは裏路地でも有数のテーマパークに来ていた

実際には昨晩泊まったホテルとは別のホテルへとチェクインした後、アルガリアの誘いで近くのテーマパークへと足を運んだのだっ  
た

少し古びたテーマパークだが、危険な裏路地に必要な娯楽施設として住民には愛されているらしい

休日ということもあり、子連れやカップルの客が多く訪れている  
アルガリアとイナも、傍らから見れば親子に見えるかもしれない

「童！童！わ、妾にもその砂糖菓子一口…いや二口、いや三口！」

「大きいので何口でもいいですけど、人に見られないように食べてくださいね」

イナの髪の毛の隙間から無二は顔を出して綿あめを食べる

特徴的な耳のカチューシャを着けたアルガリアは、パンフレットを見ながら次のアトラクションを決めていた

「よし、次はモンスターハウスに行こう」

「脅かし屋敷ですか？ふん…アブノーマリテイをぎったんばったんしてきた私にかかれば、そのようなお遊戯施設どうってことありません」

「……ぐすつ…」

「ほらよしよし、もう出たからねイナ」

モンスターハウスから出たイナとアルガリアだが、イナはすすり泣きながらアルガリアに背負われていた

小刻みに震えながらアルガリアの首を締めんばかりにしがみつく

イナの様子に、無二は溜息をつく

「細胞整理の際に身体に連れられて精神も幼くなつたのかもな

感性が年相応、というわけじゃ」

「そんなの知りませんっ…ひぐっ…」

「ごめんよ、イナ

俺があそこを選んだばかりに…お詫びに次は楽しいところに行こう」

アルガリアはイナを背負つたまま足を進める

軽快な音が流れる遊具場から少し離れ、閑静な道へと進む

その先には、立ち入り禁止の看板が置かれた大きな赤いテントがあった

周りには動物を閉じ込めた檻が並んでおり、皆が二人へと視線を向ける

「…立ち入り禁止、とありますけど」

「そうだね」

笑顔を崩さないまま肯定の返答をするも、わかつた上でやって来たようなアルガリアにイナは眉を顰める

程なくしてテントの入口の布が翻り、中から人影が現れる

「おやおや、立ち入り禁止のサーカスに踏み入る生臭くも芳しい香り…お客様でしょうか？」

赤いピエロのような格好をした男が、アルガリアとイナの方を見やる

3秒ほど値踏みするようにつめた後、ピエロの男は満面の笑みで拍手をする

「ようこそようこそ！迷える子羊と狼様！我ら八時のサーカス、お二人を歓迎致しますとも！」

立ち入り禁止の看板を持ち上げては端に寄せ、ピエロの男はニコニコと笑いながら二人に歩み寄る

「へえ、八時のサーカスって言うんだ」

「ええええそうですとも！最近客足が途絶え皆様を笑顔に出来ず私も苦心しておりますが、悲しげな幼い少女を見れば笑顔にしてみせる

のが道化というものです！

顔を顰めるほど苦い香りを得たのなら、次は甘くも刺激的な香りを貴方にお届けすることをお約束いたしましょう！」

男は何も無い片手から一輪の花を取り出し、イナへと差し出す

イナは独特な言い回しをするピエロの男に困惑しながらも、その花を受け取る

「さあさあさあ！お客様！ご入場はこちらから！お席はどこでも自由ですよー！」

ピエロの男はテントの入口へと潜り込み、手招きをする

アルガリアはそのままついて行き、イナは貰った花を無二に食べられた

照らされたステージ、その周りを囲む観客席

観客は中央席に座るイナとアルガリアのみ

まずはライオンの火の輪くぐり、猿達のパーカッションに合わせ猫はナイフジャグリング

二頭の象の玉乗りの上で魚達の空中ブランコ

物理学や生物学では説明できない演出のパレードの最後は、会場を埋め尽くすほどの花卉で締めくくられた

「観客様方！この度は私達の公演を見て下さり誠にありがとうございます！ありがとうございました！」

またのご来場、お待ちしておりますー！」

見たことも無いパフォーマンズの数々の余韻に浸っていたイナは、気がつけば夕暮れのテーマパーク内をアルガリアに手を引かれて歩いていった

「どうだった？」

アルガリアはこちらを一瞥し問いかけてくる

その言葉にイナは胸の内の高揚を伝えようと口を開いた

「…楽しかった、ですー！」

未だ高鳴る心臓を抑えながら、頬に集まる熱量を再現するように大きく声を上げる

それを聞いたアルガリアもまた、満足そうに微笑んだ

というのが、一か月前の話である

XXXX年7月13日 7時53分

「時の流れは早いもの、先週の引越しかももう一週間経ちましたね」

「青い気違いの元に来てから二度も引越するとはのう」

アルガリアの元へ預けられ一ヶ月、その間に引越しは二回

同じところに根を張らない分、逃げるには最適なのだろうが

「そんな顔しないで、今日はアンジェリカが来るんだから」

アルガリアがテレビの報道を眺めながらコーヒーを啜る

イナはつくづく呆れていた

普段からテレビを頻繁に見るような人間ではないのだが、イナは知っている

朝のテレビでは、画面端に現在の時間が表記される

テレビの時間は正確だ、しかもこのチャンネルは秒単位で教えてくれる

アルガリアは報道より秒単位で進む時間の方を見ている

イナはつくづく呆れていた

この男の妹溺愛ぶりに

「妹の到着を待つのにてれびの時計(秒単位)を眺めるとは気色が悪いのう」

「来たばかりの頃もなんだかそんな感じでしたけどね」

朝食を済ませたイナは洗い物を終わらせ、次に洗濯物を干そうと脱衣場へ向かう

30分後、洗濯物を干し終える頃にリビングに備え付けられている内線電話が着信音を響かせる

ワンコールでアルガリアはスピーカーボタンを押す

「なに？」

『アルガリア様、妹様がお見えになりました』

フロントからの通達に、アルガリアはスピーカーをすぐ切り玄関前へ移動した

「二階から最上階まではエレベーターで約34秒、階段ではアンジェリカの足なら8分5秒が妥当かな…そこから部屋までの歩行距離は10秒もない、フロントからの伝達のラグを考えると……」

ブツブツと呟きながら玄関前で壁に寄りかかるアルガリアを見て、遠くから覗き込んだイナと無二は鳥肌を立てた

「妾知ってる……鬼門じゃ、鬼門」

「キモいって言いたいのでしょうか」

うん…まあ…わかります」

イナはつくづく呆れていた

大事なことなので、三回述べる

間もなく、このスイートルームのインターホンが鳴らされる

アルガリアは間髪入れず玄関扉を開いた

「アンジェリカ！待ってたよ」

「イナ〜！お久しぶりです！」

扉の向こうから見えたアンジェリカは、両手を広げるアルガリアの脇を通り抜けイナの元まで駆け寄ってくる

「え、あ、アンジェリカ…お久しぶりです！」

「元気にしてました？兄さんに何か変なことされてませんか？」

何かあればすぐ相談してくださいね、何発でも殴ってあげます」

「アンジェリカ…俺、涙が出そうだよ…」

アルガリアを見事にスルーしたアンジェリカにもまた、イナは困惑した

それでも一ヶ月ぶりに会えたアンジェリカに対し喜びの色を隠せずにはいた

「今日は私だけですが、ローランもアストルフオもオリヴィアも、皆貴方に会いたがっていましたよ」

懐かしいチャールズ事務所の面々を思い浮かべる

今頃、都市の星について調査を続けているのだろう

裏路地を徘徊する血管のない動く死体達を相手取りながら

「今日はお土産を持ってきました」

近くのケーキ屋のアップルパイ、好きだと聞きましたから」

「ほ、ほんとですか！」

「兄さんも、イナがお世話になっっているお礼に食べてください」

「アンジェリカ…気遣いができるいい子で俺は嬉しいよ」

アルガリアが紅茶をいれている間、イナとアンジェリカはリビングで話をしていた

「都市の星の全貌はまだ見えません

死体達の痕跡は無いに等しく、雲を掴むようです…この案件が終わるのも、年を跨ぐことになりそうです」

「…そうですか」

切り分けられたアップルパイを頬張りながら、イナは視線を下げる  
都市の星、血染めの夜

それはイナの友も奪い去ってしまった

その悲しみ、悔しさを忘れたことは無い

可能なことなら仇を討ってやりたいが、今のイナにそんなことはでき  
きないのだ

「今全力で調査に当たってます、良い報せを待っていてください」

アンジェリカはイナの頭を撫で、そう言葉をかける

アルガリアが紅茶を運んできて、その日は昼頃まで三人で話をした



## White noise II

悲鳴が響き渡る

血が吹き飛ぶ

わかりやすい地獄のような光景に、一人、ため息を吐く

(……また、死んだか)

モニターの向こうに映る職員達だった残骸を、一通り眺めていく  
殺した怪物達は愉快そうに笑い、収容室へと帰っていく

その日も、生産エネルギー量は順調であった

人を殺すことでより多くのエネルギーを得られる

一体何がどうなってこんな仕組みになったのか、そんなことは誰にもわからない

ただ、ため息を吐いた張本人の僅かな望みも叶わず、人の命とは簡単に潰えていく

それも仕方ない、この会社を取り仕切る上級AI様は人命より効率をお望みなものだから

「や、ネツアク

調子はどうだい？」

サブモニタールームの出入口から、声が聞こえる

ネツアクは機械の体を動かし、背後へと視線を向けた

高い背と長い灰色の髪、薄ら闇でも輝く紫の瞳

黒い森のスミレの魔女、ヴァイオレットその人だった

「…単純な気分の話をしているなら、最悪って答えてやるよ」

「だろうね！君はなかなか異色だよ、セフィラの中ではね

皆機械として機械らしく仕事に勤めてるのに、ネツアクは…

…いや、セフィラ達皆人間らしいね、それを隠しているだけで」

「何をしに来た」

ネツアクはこの上なく冷たい声で言い放ち、ヴァイオラを睨む

そんなネツアクの反応が愉快極まりない様子で、ヴァイオラは頬を吊り上げる

「まあそんなにツンツンしないで

……お前の秘密、黙ってやってるんだから」

ネットアクはその言葉に、機械の体の芯奥が凍り付くような錯覚を覚えた

すぐさまヴィオラは人懐っこい笑顔に切り替え、ネットアクから距離をとる

「何をしに来たも何も、簡単なことだよ

準備が整った、僕も腰を下ろしてこのロボトミー社に協力しようって思ってるね」

「……それは」

「というわけで、これから毎日よろしくね

と言っても頻繁に会うことはないだろうけど」

ヴィオラはそれだけ言い残し、サブモニタールームを後にした

怪訝そうなネットアクは、モニターの方へ視線を移す

モニターの向こうでは、ヴィオラと同じ髪色、瞳の色の女職員が怪物達を切り捨てていつている

「もう何回目になるんだ？」

「…反復数、12834回目よ」

「そっか、だいぶ来ているね」

その日の業務終了後、ヴィオラはメインモニタールームにてシャンパンを片手にこの会社の上級AI・アンジェラと対話をしていた

アンジェラは瞳を閉じ、無機質な顔をしてモニターを眺めている  
今やもう初めの頃の人間的な表情など伺い知れない

「貴方なら聞かなくても記録していると思っただけだね」

「まあそうなんだけどね

…一万回を超えているけど、シナリオを達成させるにはまだまだかかると思うな

少なからず…外の時間換算で、5年以上はかかるね

なんせ、このシナリオはAが悟りへと進んでこそ、君はそのシナリオへと正確に導くガイド…

僕はただの脇役、そうだろうか？」

「貴方が脇役なら、私は腹を振れさせるわ」

「笑うこともしなくなつた癖に」

「…もうすぐ管理人が目覚めるわ」

早く出ていって」

冷たい声色、冷たい態度、蒼白の機械はまるで氷のようにヴィオラを追い払う

ヴィオラは口を尖らせながらもシャンパンを持ったままメインモニタールームを後にする

「母様」

メインモニタールームから出てきたヴィオラを、一人の女が出迎える

同じ灰色の髪、同じ董色の瞳の職員

彼が作るクローン達の一人である女

「…レイン vol. 2. 7-14562、今日の調子は？」

「問題ありません」

wawクラスのアブノーマリテイが脱走し一時窮地に立たされたましたが、他の職員の命のおかげで生存出来ました」

「うん、それでいい、よくやったよ」

ヴィオラはクローンに優しく微笑みながら、足を進めていく

「同じ失敗は繰り返さない…」

あらゆるシチュエーションでも生存方法を導き出す思考、生存本能…ここでは無数に近しくシミュレートできるからね

そのデータを集計して、作り出さないといけない

君達のこと、頼りにしてるんだよ」

ヴィオラがそう激励すると、クローンは頬を染め嬉しそうに顔を輝かせる

「は、はい！私達、皆母の為にがんばります」

そのままクローンは一礼し、ヴィオラの元から去っていく

ヴィオラはそれを笑顔で見送り…クローンが見えなくなつてからその笑顔を消し去る

「…母の為に、か」

一人のクローンを脳裏に浮べる

A L E P H クラスのアブノーマリテイを移植され、更には肉体が縮んだ廃棄処分のクローン

今でも搜索の手は緩めていないが、廃棄処分が出来ていない現状に小さく苛立っている

(無の世界蛇と一緒にいると、探すのも一苦勞なんだよな…かくれんぼ上手すぎ)

まあ、何人かは裏切ってるんだろうけど

…運が悪い、なんて言わせてやるものか)

誰がヴィオラを裏切っているのか、ヴィオラはその対象をとうに絞り出している

しかし、あえて黙認し泳がせたままにいる

下手に消えられるよりも、行動を把握できる位置にいる方がいい

更には、あえて生き延びさせることで彼が欲する失われた「権能」が再顕現するのを待っている

(僕の血を混ぜたクローンだ、僕と同じDNAを持っている…万が一という可能性もあるからね

行動を監視できる範囲内で餌にするのが今のところ丁度いい

頭を目をつけられている以上、派手な行動もできないし…)

片手のシャンパンを後ろに放り投げ、そのまま歩き出す

紫の瞳は、見えない未来を見据えるように深く影を落としている

(世界に見捨てられ幾星霜…死んでは新たに生まれ幾つもの世界を生きてきた

君が運命力を捨てた理由はわからないけど、君がそうしたとしても僕がすることはただ一つだけ

…必ず、君が幸福に生きられる世界を構築するよ)

左耳の紫の花飾り、その一枚の花弁を指で握り締め、不快そうな表情を消し去りヴィオラは長い廊下を歩き進めた

# 17, s Adventure I

XXXXX年10月9日

イナと無二がアルガリアの元で暮らし始めて四ヶ月

度々の強襲こそあれ、それ以外は比較的平穏な日常を過ごしていた

「無二?…無二」

「…」

しかし、三ヶ月間無二は静かに眠ることが多くなった

呼び掛けに首を持ち上げるが、暫しこちらを見つめた後再び眠りこける

本当の蛇になったように大人しくなり、その場を離れるといつの間にか影の中へ戻っていく

「どうしたんでしょう、病気?」

「アブノーマリテイ…幻想体っていうのがどういうものかは知らないけれど、この都市で未知の病を発症しないとも限らないよね…感染の可能性だってあるかもしれないし、いつそのこと殺しちゃおう?」

「やめてください」

無二の変化以外は変わったことも無く、それはローラン達が遂行している任務も同上である

血を抜かれた動く死体、その被害規模は拡大する一方

であるのに未だ血染めの夜の事件は解決しない

犯人のしつぽさえ掴めていない状況、平行線は未だ続いていた

そんな秋の昼のことだった

「…というわけで、いつもお世話になってるアルガリアにお礼の品を用意したいのです」

「それはそれは、アルガリア様も大変お喜びになるでしょう」

アルガリアが留守の間、付き人の男にイナはとある相談をしていた  
それはお世話になってるアルガリアへの感謝の気持ちを込めて  
プレゼントを贈りたい、といったものだった

具体的な物は何も浮かんでおらず、アルガリアに内緒で雑誌を漁りまくっている最中であつた

「アルガリアは何が好きなんでしょう」

「さあ：私めも存じ上げませんね」

「エリックでも知らないんですか」

エリックと呼ばれた中年の男は困ったように眉を下げた

エリックは、アルガリアが雇った付き人であり、今はイナのお目付け役といった仕事をしている

アルガリアとて常にイナの面倒を見れるわけでもなく、フィクサーとしての仕事は長時間家（ホテル）を空けることだつてよくある

そこで、アルガリアが居ない時に世話役を任命されたのがエリックである

イナは家事のほとんどは出来るが、料理は壊滅的なためエリックがいつもイナに手料理を振舞ってくれていた

「アルガリアはいつも宅配やホテルのオーダーばかり活用しているので、手料理は大変嬉しいです」

「喜んでもらえて何よりです」

活力のない瞳を細めながら、エリックは応える

イナはエリックが作った昼食を頬張りながら、引き続き雑誌を読み続けた

アクセサリー、時計、洋服、嗜好品：アルガリアが喜ぶようなものは何一つ浮かばなかった

初めて来た時のスイートルームには、ピアノやCDプレイヤー、蓄音機などが置かれていたことからアルガリアは音楽が好きなのかとも考えた

しかし以前そう問いかけると

「うん？…うん…音楽が好き、と言うよりかは…音が好きなのかな  
静かなのは苦痛でさ、でも今はイナがいるからこういった物も必要  
なくなってきたよね」

と返された

音楽ではなく、音を聞くのが好きなのだと言う

好きと言うよりかは、無音を避け音を求めているのか

静寂が苦痛である所以は知り得ないが、それでもイナを更に悩ませ

るには十分だった

「アルガリア様なら、イナ様が差し上げるものならなんでも喜ばれるのではないですか？」

「…多分そうなんですよね

でもだからといって手を抜くのはいただけません」

「…では、イナ様がお好きなものを差し上げてみては？」

エリックからの提案に、イナは目を丸くする

自分の好きなものを、アルガリアにプレゼントする

数年前の記憶が蘇ってくる

「都市の生活って息苦しいけど、嫌なことだけじゃ気が滅入りますから

好きなもん増やして幸せに浸れるときは多くあった方がいいんです

好きも嫌いもない人生なんて、生きてる！って感じしないじゃないですか」

懐かしい記憶に、イナの口元は綻んだ

「それ、いいですね

よし、私の好きな物を共有しましょう！」

「その意気ですイナ様

して、イナ様が好きなものとは？」

エリックにそう問いかけられ、イナは静かに考えた

自分の好きなもの

今まで生きてきた中で好きなもの

「…私が好きなものは…」

まず最初に思い浮かんだのは、深緑の箱

次に、怖い母親

博識で愛嬌のある無二

かつての安全チームの仲間、アンジェラ

ローラン、アストルフオ、オリヴィエ、アンジェリカ、近所の友達

…  
浮かぶものは人の顔ばかり

(ではなく…プレゼント出来そうなもので…)

都市の夕焼け、道端の花、鏡になる水溜まり

「好き」を自覚してからは、目に映る全てが尊く見えてしまう

ただ、やはり「死」だけは好きになれやしないのだが

「…は…そうだ!」

「如何なされました?」

イナは徐ろにアルガリアのノートパソコンを立ち上げ、インターネットを使いとあるサイトを探す

都市の至るところに店舗を構えるスイーツ店、メリユジーヌのサイトを開き調べる

イナが求めたものはただ一つ、このスイーツ店の名物であるアップルパイだった

「このアップルパイ、本当に美味しいんです

アストルフオが食べさせてくれたのが最初だったんですが…あ、アストルフオというのは友だちなんですけど」

「…ああ、ここは多くの人が訪れる有名なお店ですね

おや、明日は限定50個のスペシャルアップルパイを販売するそうですね」

サイトの大きな見出しを見て、エリックは簡単の息を漏らす

イナも同様にそのページを見て、決意を固める

「よし!決めました!明日近くのメリユジーヌへ行き、アップルパイをゲットしてみせます!」

「…明日は私もおりません、残念ながら外へ出られません

元々そうですが、近頃裏路地はより一層危険ですから…」

「大丈夫です!私はそこら辺の子どもより強いんです!弱い大人にも勝ってます!

血管の抜けた死体にだって負けやしません」

ボクシングさながら拳を空中へ繰り出し続けるイナを、エリックは困ったように眺める



こうして、イナの冒険が幕を開けたのだった

## 17, s Adventure II

XXXXX年10月10日

静寂なホテルの最上階の部屋の中で、イナは一人準備を進めていた「ハンカチよし、お財布よし、鍵よし、地図よし：防犯ブザーよし！ ようし！準備終わりました！」

ポシエットに必要なものを詰め込み、出入口に見張りがいないのを確認しイナは部屋を飛び出す

重い扉から廊下へ出ては、扉はオートロックで閉じる

彼女は今から、重要なミッションに取り組むことになるのだ

「ふふん、見張りも私の作戦に見事に引っこかりましたね

えつと：ここから一番近いのは21区の店舗：それでもバスで一時間はかかるんですね」

エレベーターに乗り込んで地図を広げ、今住んでいるホテルと目的地、近くの公共機関乗り場までチェックして付箋で必要料金も添付している

今の彼女には抜かりはなく、かつてL社で戦っていた頃のような集中力を研ぎ澄ませている

ホテルのスイートルームの入口付近で見張り番をしていた男は、イナが予め通販サイトで適当に購入した荷物を受け取りに行かせ、持ち場を離れさせている

エレベーターが一階に到着し、イナはフロントを確認する

見張りの男が配達員から荷物を受け取っているのを確認し、近くの休憩所に身を隠す

見張りの男が荷物を持ってエレベーターへと歩いていくのを見送り、ホテルロビーとフロントを出て大通りに足を踏み出す

「スイートルームではシャワーを出しっぱなしにすることでシャワーを浴びている最中と思わせる：カモフラージュも完璧です

帰りも同様の手口でいきますか」

今の時刻は午前10時、朝とも昼とも呼べない中途半端な時間故か、街ゆく人の数は控えめであった

それでも人の波は絶えず押し寄せ、小さな子ども同然のイナは押し流されてしまいそうだった

人の隙間を掻い潜り、イナはバス停に到着した

一息つく間もなく目的のバスが到着し、また人混みに流されるようにバスへと乗り込んだ

「ぐうっ…」

既に人でいっぱいなバスの中、人の熱による蒸し暑さと体臭や香水の匂いが混ざり、更にはバスの揺れも加えられ吐き気がする

中途半端な時刻でこの状態なら、通勤や通学ラッシュは一体どうなってしまうのか

イナには想像がつかなかった

15分ほど揺らされた後、ようやく少しバス内が空いた

目の前のバスの座席がひとつ空き、好機と言わんばかりにイナが腰を下ろそうとすると、尻目にバスの入口に歳を召した老婆が立っているのに気がつく

「……あの」

イナは暫し考えた後、その老婆に声をかける

老婆がその声に気が付き、イナの方を向く

「いい、空いてますよ」

「ありがとうねえ、若いのに偉いねえ」

「いえ、これくらい当然です」

空いた席を老婆に譲ったイナは、老婆の傍らで自慢げに胸を張った今どきこの都市の中、しかも裏路地で足腰が丈夫でない老人がいるのはかなり珍しいことだった

老婆は杖を片手に胸をひと撫でし、イナに向き合う

「お嬢ちゃんは一人でお使いかい？」

「はい！隣の区まで買い物です」

「しっかりとしてるねえ」

老婆はくしやくしやの笑顔を浮かべ、頷いた

「うちの孫娘そっくり」

「お孫さんがいらつしやるのですか」

「ええ、貴方と同じくらい」

老婆は手に持った巾着の中から、一枚の写真を取り出した

そこに映っていたのは、老婆を囲み笑顔を見せる男女と幼い女の子  
それを覗き見ながら、イナは息を呑んだ

「…幸せそうですね」

「そうでしよう？これ、一ヶ月前に撮ったのだけどね、今日久々に息子  
家族達に会いに行こうと思つて」

「…そうですか」

バスが停車し、下車側の扉が開く

人が流れバスを降りていく中、老婆も重そうに腰を上げた

「ここで降りるよ、ありがとうねお嬢ちゃん」

老婆は笑顔でイナに頭を下げ、バスを降りていった

その光景をイナは表情を変えずに見送る

(…あの写真、十年前の日付でしたね)

この都市、裏路地の中、まともに生きた老婆ではないことを察した  
イナはせめてあの老婆が無惨に殺されないことを祈りながら、空いた  
席に座った

同日 同時刻

イナが隠密にホテルを抜け出し、買い出しへと出向かって暫く

ホテルのスイートルームの主、アルガリアは仕事合間に一度ホテル  
へと戻っていた

「アルガリア様、お帰りなさいませ」

「うん、ただいま」

部屋の見張りに軽く挨拶をし、カードキーを使ってスイートルーム  
への扉を解錠させる

部屋に入った途端聞こえてきたのは、シャワーの音

「…イナ？シャワーを浴びているのかい？」

そう声をかけるも、シャワールームからイナの返答は返ってこない  
不審に思ったアルガリアは、躊躇もせずシャワールームの扉を開け

る

バスを囲うカーテンを無造作に開くも、そこにイナの姿はなくただシャワーの水滴がバスの中を滴っているだけだった

「…」

アルガリアはそのままシャワールームを出て、イナの部屋へ向かう  
イナの部屋ももぬけの殻、必要最低限の荷物だけ持って出ていった様子だと推測される

「……どこへ行ったのかな？」

スイートルームの中はシャワーの音以外ほぼ静寂に等しく、どこにもイナは見当たらない

アルガリアはそのままスイートルームを出て、見張り番の男に声をかける

「イナは？」

そう問いかけると、見張りの男は驚いた顔をする

「お、お部屋にいらっしやらないのですか？」

「……どこかへ出かけたんじゃないの？」

「いえ、私がここに立っている間は誰も出入りなど…」

一度荷物を取りにフロントへ降りましたが、荷物をお部屋に運んだ時はシャワーの音がしていたので…」

「…そう、君は本当に間抜けのようだね

自分が与えられた仕事も出来ないなんて、俺はガツカリだよ…」

見張りの男の顔は、瞬く間に青ざめていく

「い、今すぐ捜しに…」

なんとかその場を逃れたい一心で、必死な顔でイナを捜しに行こうと見張りの男は駆け出した

しかし、足を踏み出したその直後…男の体は赤い床に倒れ伏す

ゴトリ、と重いものが落ちる音がする

見張りの男の首と胴体が切断され、その生命活動は停止した

「…やれやれ、お転婆だな…あの子は」

アルガリアの口元は緩く微笑んでいるように見えるが、その瞳は一切笑みを浮かべず暗く仄めいている

アルガリアはそのままホテルを後にし、裏路地の暗い道へと進んで  
行った

# 17, s Adventure III

XXXXX年10月10日 10時52分

「ふっふっふっ…最後の最後、運は私に味方しましたね」

とあるケーキ屋から出てきては、一人不敵に笑うイナ

その手には白い箱を入れた紙袋が握られており、確かな重みにイナは頬を緩ませる

「ラストひとつでしたが、無事購入できてよかったです

限定アップルパイ…いえ、これはあくまでアルガリアに対するお礼の品ですから！あわよくば一緒にいただけようなんて…」

誘惑に打ち勝とうと頭を左右に勢いよく振り、イナは紙袋を持ち直す

「バス停までは歩いて20分でしたが…次のバスまであと10分、間に合いません」

降りたバス停から歩いてきた道を引き返し歩いていくが、時間の無さから無意識に足早になってしまっている

しかしアップルパイを運んでいるから走らないようにしながらも、イナは慌てた様子で足を進めた

「…おや、こんなところに道が」

そんな時、イナは建物の間に通じる階段を見つけた

どうやら路地裏のようで、薄暗いながらに通路は続いているようだった

「近道かもしれませんね、行ってみますか」

イナは躊躇うことなくそのまま階段を駆け下り、進んでいく  
薄汚いゴミ溜めを通り抜け、バス停のある方角へ歩いていく

そんな時、イナの前に大柄な男達が立ち塞がった

「…」

薄ら笑いを浮かべた四人の男はイナを見下ろしながら声をかけてきた

「よう嬢ちゃん、こんなところにおひとりかい？」

「はい、買い物帰りですから」

「へえー、なんだかいい身なりじゃないか

いいところのお嬢ちゃんかな？」

「いいところではないですが、この服はどこかのブランドだと言っていました」

「そうかいそうかい！」

なあ嬢ちゃん、俺達今仕事なんだ」

男達は下卑びた笑みでイナを見つめながらも、イナを取り囲んでは各々の手に刃物を握る

「俺達はネズミ、つていうんだ

知ってるか？裏路地で内臓を売り払うんだ」

「…」

「その内臓は獲れたて新鮮なものが高く売れるんだ…特に若い内臓はな

わかるか？生きた人間の新鮮な内臓、一人分売れば一週間は生きられるんだ」

男の一人が、イナの首に手を伸ばしてきた

その時

「……あ？」

男の腕が、白い腕に掴まれる

その白い腕は細く乾涸びているようで、生命活動を感じ取れなかつた

「なんだよ、邪魔すん……な……」

妨害された男が振り向いた瞬間、その男の首に何かが噛み付いてきた

そのまま男は喉の肉を食い破られ、血を吹き出しながら倒れる

男の喉を千切ったのは、全身が枯れた木のような青白い人間

…だが、イナは瞬時に理解した

以前、見たことがあるのだ

「…最近、血の抜けた死体が徘徊していると裏路地でももつぱらの噂ですからね」



「イナも、ついこの間襲われかけただろ」

「はい、友人らとかくれんぼしていたら……こう、ぐわーっ!と」

そう、そうだ、数ヶ月前に近所の悪ガキ達と遊んでいた時

その時もこの白い死体と同じような怪物に遭遇したのだ

その時はローランが助けに入ってくれたのだが、今はローランもアルガリアもない

更には……その動く死体は、一人だけではなかったのだ

「う……うわああああ!?!」

「ひぎ、やめ、やめろオー! たすけ、ぎやああああ!」

男の仲間達が、次々溢れる動く死体達により食い殺されていく

動く死体は10人以上、それに囲まれながらイナは必死に思考を回している

(動く死体、血染めの夜の産物……今朝のニュースでは21区にはまだ出ていないという情報のはず……)

(まさか、新しく殺されたばかりの……? この短時間で、こんなにな?)

(倒すべき? 無二が万全ではないこの状況で? アップルパイを守りながら?)

(無謀過ぎる、第一得物も無いのに……!)

やがて複数の死体達がイナへと手を伸ばし始めた

その手を咄嗟に躲し、イナは来た道に戻るように踵を返す

「あ……はあ……ひっ……」

走り出そうとした時、男の仲間の一人が腰を抜かして座り込んでいるのを見つけた

死体達はこれ見よがしにそちらへと群がる

「うっ、うわああ! くっ、来るなあ!」

「……全く……!」

イナは死体に掴まれた青年の元へ駆け寄り、青年を襲おうとする死体の一人に狙いを定める

そのまま走った勢いで跳躍し、体を捻りながら死体の頭部に強力な蹴りを入れる

「ツガ…………ア…」

「入りました」

死体はそのまま他の死体達を巻き込み後ろに倒れる  
低姿勢で着地し、イナはすぐ様立ち上がる

「死にたくないのなら逃げますよ！」

イナは青年にそう叱咤し、青年は我に戻ったようで慌てて腰を上げ  
走り出す

イナと青年は並びながら薄暗い道を駆け抜ける

「はあ…はあ…何なんだよアレ！」

「ニユース見ないんですか！ラジオとか！」

動く死体ですよ！もう四、五ヶ月前から各裏路地で頻出しているも  
のです！全身の血を抜かれて尚動いて人を襲うんです！」

青年にそう説明しながらも走る足は止めず、紙袋を抱えながらひた  
すら逃げる

しかし、表通りに出る為の階段に、先程とは違う死体が5人行く手  
を塞いでいた

「ひっ…!?また！」

「…ルートを変えましょう！」

イナは方向転換し、建物の中のわずかな隙間へと入っていく

換気扇の上に飛び乗り、猫のように通り抜ける

「ま、待ってくれよ…！」

青年も無我夢中でイナの後を追う

二人揃い建物の隙間を抜けてからも、動く死体から逃げ惑い続けた  
行く先々で動く死体が道を塞ぎ、その度に違う道へと進んでいく

(なんだか…誘い込まれているような…！)

動く死体の突如大量発生に混乱しながらも、二人は裏路地の中を  
逃げ続け…

やがて、昼の光が届かない暗い道歩いていた

蛍光灯の光は赤く、腐敗臭が蔓延した場所

背後から動く死体が襲いに来る気配もなく、イナと青年はゆっくり

息を整えた

「はあ…はあ…もう…なんなんだよ…」

「ふう…なんでこんなに湧くんですかね…ゴキブリでしょうか…」

ともかく、変なところに迷い込んでしまいましたが進むしかないです  
すね」

イナは紙袋の中を確認し、迷いなく進む

そんな様子を見て青年は怯えた表情を浮かべる

「な、なあ…お前、本当に子どもか？」

見たところ10歳そこらに見えるけど…やけに肝が据わってるし、  
さっきの身のこなしも子どもとは思えないんだが…」

「内臓を奪いに来ておいて何を言ってるのやら」

今時の子どもは飛び蹴りくらいみんな出来ます」  
嘘である

イナは今適当なことを口に出しただけである

「そ、そういうものか…」

「貴方も災難ですね、内臓を売らないと生きていけないくらいなのに、  
こんな事件に巻き込まれてしまって

まあ、因果応報つてものでしょう、真面目に就職したらある程度の  
食い扶持はてきるでしょうに」

そこまで言つて、イナは警戒した

足音が、自分のものしか聞こえなくなっていたからだ

「……」

ゆっくり後ろを振り向くも、先程まで一緒に歩いていた青年の姿は  
見えなかった

赤い蛍光灯が点滅する

パチ、パチと光つては消えてを繰り返し……

やがて、道の奥から気配を感じた

「……」

心臓が収縮したまま締め付けられるような感覚がした

ギチギチと音が聞こえそのまま、冷や汗が吹き出し神経は麻痺す  
る

「うん、若い男は悪くは無いね

ただ不健康そうだ：血が少し臭いな」

そんな声が、背後から聞こえてくる

巨大な針が背中に突き刺さりそうな威圧感に、イナは恐る恐る道の奥へと視線を向けた

点滅する赤い光に照らされた、黒い影

液体が滴る音が、鼓動代わりになって響く

一瞬にして姿を消した青年が、黒い影に抱えられている

その顔に生気は無く、先程と比べて肌が青白くなっている

黒い影は男の首筋に何度も噛み付いては血を啜っている

恍惚そうに、美味しそうに、もつともつと強請るように

体の芯から冷えていくような光景に、イナは後退る

「逃げないでよ、お前だって立派な私の獲物だ

…血染めの夜の、ね」

ある日突然、血管が抜けた死体が発見された

その死体は日に日に数を増し、怪事件としてハナ協会から都市怪談として指定された

しかし…この事件の階級は、瞬く間に上がっていった

血の抜けた死体は減ることを知らず増え続け、更にはその死体がひとりでに活動を始めたのだ

その死体は裏路地の住民を次々と襲い、被害数は日を追う毎に増加  
今や都市伝説、都市疾病を超え都市悪夢にまでその階級を上げさせた

風の噂では、協会は都市の星に認定中なのだとか

血の抜けた死体の血は一体どこへ行ったのか

古くから法螺話として言い伝えられている血を吸う怪物の仕業なのか…

人々は真相はわからずとも、その事件に名前をつけた

血染めの夜——と

「今や世間は貴方の話題で持ち切りです…血染めの夜」

「それは光栄だ

私はただ、あるがままの自分で生きているだけなんだけれど」

今、イナの目の前に現れたのは間違いなくその血染めの夜の主犯なのだろう

体の多くを影で覆い、そのコートの赤みは返り血なのか元々の生地なのか

血染めの夜は青年の死体を地に捨てては、イナを値踏みするように見つめる

「…若い子どもも、美味しそうじゃないか

嗅いだことの無い匂い…珍味かな？」

「…私を食べても、不味いですよ、きつと」

イナは溢れる冷や汗を堪えながら少しづつ後退る

なんとかこの場から生きて逃げる術を考えるも、頼りになる無二の状態が不安定な為希望は無いに等しい

一番現実的な方法は、来た道を引き返し動く死体の群れを抜けるしかない

幸い、動く死体はかつて遭遇した掃除屋と比べれば大した戦闘力は持っていないのだ

数の多さは同等ではあるが

「逃げようと考えているね？」

やめたほうがいい、抵抗すればするほど苦痛は伴うのだから」

血染めの夜が、指を鳴らした

それを合図に、前からも後ろからも青白い死体達が集まり始めた

「…!?!」

「大人しくしていれば痛くはしない

ただ…血管を貫うだけだから」

動く死体はどんどんイナの元へ群がり、イナの体を掴んでいく

腕、足、肩に頭…体の至る所を押さえ付けられ、イナは持っていた

紙袋を落としてしまう

「あつ……………」

紙袋の中に入ったアップルパイは地に投げ捨てられ、動く死体達に踏まれ蹴られ形を崩していく

ただのゴミと化したアップルパイの残骸から、イナは目を離せずにした

すぐそこに、血染めの夜が忍び寄っていても気が付かずに

「それでは、いただくとしよう」

イナの右腕を持ち上げ、血染めの夜は噛み付いた

「いッ……」

牙が食い込む痛み顔に顔を顰め、白い肌を赤い血が滴っていく

じゅる、じゅると血を吸う音が空間内に反響する

「……………なんだこれは

今まで味わったことの無い味……………うん、不味い」

イナの血を啜った血染めの夜が、眉を顰めた

「こんな不味いものは生まれて初めてだ

血そのものの不味さではなく…お前、何か混ざってるな？」

「……」

「…まあいい、珍味として重宝するのもいいな

私のコレクションルームへと案内しよう」

血染めの夜がそう言い捨てるも、イナの耳には届かない

今イナを蝕んでいるのは痛覚による熱ではなく、神経による奥の熱形が崩れ砂と埃が混じったアップルパイ…アルガリアへの感謝の品がただの生ゴミへと変貌した悲しみ

悔しき、憂い、絶望にも似た感情は、涙となってイナの目から零れ落ちる

「……お礼の……」

涙が目の奥から溢れるのと同時に、左目の奥から針で刺すような痛みを感じた

…アブノーマリテイである左目が、まるでクリフォトカウンターがゼロになった時のように、イナという収容室から飛び出していく

眼帯の裏、瞼から影が漏れ出て行き、その影はイナの周辺で形を成していく

それに巻き込まれるように動く死体達は呑み込まれていき、イナと血染めの夜だけが影に巻き込まれずにいた

「…む…無…」

影はやがて周囲の壁や天井を巻き込み、コンクリートを砕きながらその瓦礫すら取り込んで肥大化していく

穴の開いた天井の上、曇り空から小雨が降り注ぐ

警戒した血染めの夜は後退り、険しい視線を影に突き刺す

「なんだそれは…湖の怪物か？どうしてこんなところにな？」

……まあいいか、今日はもう帰るとしよう」

そのまま血染めの夜は奥の道へと姿を消した

竜巻のように影は暴風を巻き起こし、近辺を破壊しては勢いを増し

ていく

その中央にいるイナを守るかのように、台風の目の中にいるイナは困惑していた

「む、無二…無二どうしたんですか…お、落ち着いてください…!」  
突然の状態にイナが狼狽していると、黒い影の竜巻が青い刃によって切り裂かれる

黒い影はその斬撃により霧散し、やがて小さな黒い蛇の形へとまとまった

「…い、今のは」

イナが理解するよりも早く、イナの背後に誰かが降り立った

「全く、厄介なものばかり引き寄せてしまうのかな」

聞き慣れた声に安堵すると同時に…背中越しでもわかる怒気に背筋が凍った

「……………あ…アル…」

「君、今自分がどういう状況なのか理解している?」

冷たい声に、冷や汗が止まらない

イナが震えていると、蛇の形に留まった無二がピクリと動き出したその瞬間を逃さず、背後にいる青はその刃を無二の胴体に突き立てた

「——!」

「や、やめてください!アルガリア!」

刃の刺さった無二の体からは、血ではなく影のような塵が瘴気のように零れていく

イナの咄嗟の懇願にも、アルガリアは冷たい微笑みを浮かべるだけだった

「ねえイナ、君…以前はどうだったか知らないけれど、今の君はただの小さな女の子なんだよ」

「ほ、他の子供より数段強い自信があります

大の大人だって捻り倒せます!」

「相手が人間じゃなかったら?数の暴力で圧倒されたら?狡猾で厭らしく策に貶めてきたら?」



小さな君はほんのひと摘みで潰されてしまうね…

例え恐ろしい怪物を手に入れていても、この通り制することも出来ていないだろう」

小刻みに震える無二を尻目に、イナは生唾を飲み込んで視線を下げる

アルガリアは怒っている、その事実を目を向けることが出来なかった

「…」

「…君はね、イナ…今の君は弱者であることを理解していない

弱かった時期が無かったから、いつも強いまましていると錯覚している

君は弱い、だからこそこの都市では淘汰されてしまうんだよ」

アルガリアは鎌を引き抜き、傍らに降ろす

弱りきった無二を抱き抱え、イナは俯いた

「…アブノーマリテイ…だったかな

それ、人を殺せば殺すほどエネルギーを生み出すんだよね

そうでなくても、いくつかの作業でエネルギーを生み出していると

か聞いたな…

…三年くらいだっけ？君達が抜け出してきたの

三年間、今までソレはどうしてきたの？」

アルガリアにそう聞かれ、イナは思い出す

今までの三年間、無二はイナに知恵を授けいつもイナに寄り添い、

助けてきた

アブノーマリテイNo. F-03-05…無の世界蛇は、人の言

葉を話す目玉として理性的なアブノーマリテイとして認知されていた

た  
その無の世界蛇のクリフォトカウンター減少条件は…総合的に見れば、「他者の死」がきっかけとなっていた

この裏路地での生活は、常に死が転がっている

無二はずっと耐え続けていたのだ

目の前に広がる死を見ていながらも、自身がアブノーマリテイとし

て暴走しないように

「…無二…」

「…それで、どうして外に出たの？」

当たり前過ぎて言うのを忘れていたけれど…普通に考えて君は今狙われの身だから、勝手な行動をされたら困るな…」

「…ごめんなさい…」

イナは自分の愚かさに悔いた

いつもいつでも、「自分なら大丈夫」という自信があつた

それは強さ故の慢心、確かにイナは強いが、肉体は未だ幼い子ども同然なのだ

下手な強さが、イナの視野を狭めてしまった

自分の足元さえ見えないほどに

悔しさに唇を噛み締めながらも、イナは視線を上げて生ゴミと化したアップルパイを見つめる

死体達に踏み潰され、更には無二の竜巻によりクリームが飛沫が広がっている

「…あれがどうかしたの？」

「…アルガリアに…差し上げたくて…」

消え入りそうなイナの声にアルガリアは目を見開いた

暫く無惨になったアップルパイを見つめては、イナの肩を手を置いた

「俺なんかの為に、ありがとう

でもね、イナ…君はアンジェリカから頼まれた大事な俺のお客様なんだ

君に何かあれば…アンジェリカが悲しむ」

イナの右腕は血染めの夜に噛み付かれ血が流れている

その怪我を見つめては、アルガリアは目を伏せた

「…帰ろう、イナ」

アルガリアの言葉に、イナはそれ以上何も言わずに静かに頷いた

抱えている無二は呼吸こそしていないものの、アブノーマリテイは死なないお陰か形を保ったまま眠り続けている

アルガリアに手を引かれ、イナはホテルへと戻って行った

# Blood footprints I

XXXXX年10月12日

未だ痛む右腕に意識を向けながら、イナは繋がれた左手の先を眺める

大きな手がイナの小さな左手を優しく、それでいて捕獲した兎を逃がさないように力強く掴んでいる

その手の大きさの差、力の差にイナは心情内でため息をつく  
(…子ども、ですな、私は)

イナの手を離さないまま、アルガリアはとある建物の戸を叩く

そこはチャールズ事務所：実力派フィクサー事務所であり、以前までイナが居座っていた居場所だった

ノックの音から間もなく、慌ただしい足音と共に扉が開かれ、中から真っ黒な男が現れる

「イナッ！」

髪も服も顔さえ黒い男：仮面をつけたローランが二人を出迎える

「ローラン！」

「お前ッ…心配したんだぞ、アンジェリカからお前が襲われたって」

「…ごめん、なさい」

ローランは屈みイナの両肩を掴んではイナの無事をしっかりと確認し安堵する

「…イナの世話、助かった

けど、監督不行届じゃないか？」

ローランはそのまま視線を上げ、アルガリアを見上げる

その声には僅かな怒気が孕んでおり、アルガリアは笑顔のまま冷たい視線を向ける

「お前がアンジェリカと組んでる男？」

ふうん…お前が実力不足だから未だ血染めの夜を特定出来ないんじゃないのかな？」

アルガリアの笑っていない笑顔とローランの嫌でもわかる殺気が混ざり合い、一触即発の雰囲気を広めている中、イナはどうしようか

と汗を流している

「ちよつと兄さん！ローランを悪く言わないでください」

ローランも、イナが怪我をして心配なのはわかりますが、あまり噛みつかないでください」

そんな一歩間違えればすぐ殺し合いが始まりそんな空気を仲裁したのは、チャールズ事務所の奥から出てきたアンジェリカだった

「アンジェリカ…」

「イナ、詳しいことは中で話しましょう」

お二人も、いつまでも睨み合っていないで入ってください」

アンジェリカはイナの右手を握り事務所内へと引き連れ、アルガリアとローランは未だ冷戦状態のように互いを睨めつけている

数ヶ月ぶりのチャールズ事務所だったが、ロビーにも廊下にも人気はなく、そのままイナは応接間に通される

イナ、アルガリア、アンジェリカ、ローランが席に着き、揃ったところでアンジェリカが口を開いた

「…今回イナを襲ったのは血染めの夜、で間違いないですね？」

アンジェリカの質問にイナは静かに一度頷いた

二日前、アルガリアに無断で外出した際に偶然遭遇した女性…血染めの夜

赤い瞳と白い肌は人間のものとは思えず、血を味わうその味覚もやはり人の感性とは掛け離れているだろう

しかし、都市には人肉を好んで食す人間も少なくは無いため断定は出来ないが

「これが噛まれた痕です」

噛んだ、と言うよりかは吸い付いた…に近いのですが」

イナは右袖をたくし上げ、包帯を解いてガーゼを剥がす

腕にはくつきりと歯型が残って痣となり、犬歯位置には抉られたような穴が開いている

それと同時に、アルガリアは懐から一本の試験管を取り出した

試験官の中には赤い液体が入っており、アルガリアが振ると液体は揺れ波打つ

「これはその時傷口からすぐ絞り出したイナの血液  
抗凝固薬と混ぜてあるけど、ひとまず血液にも傷口にも毒性反応は  
見られなかったよ」

あの後アルガリアはイナを医者（闇医者だが）に診せ、検査させて  
いた

感染毒等の侵入の有無の確認の為である

ひとまず毒や菌の類は見られず、感染症の心配も無い

「…これで、血染めの夜の菌型と唾液成分が手に入ったわけか」

「ようやく情報を手に入れました」

あと…血染めの夜と遭遇した場所も教えてください」

「21区43町7番道地下通路です」

ローランは用意した21区の地図上に、イナの情報を元に印を付け  
ていく

21区の地下通路は他の裏路地とも繋がっており、複雑な迷路に  
なっている

「実際に現地へ行って調べてみる価値はあるな」

「ひとまず所長に報告しましょう、現地調査の人員は所長が決めるで  
しょうから

ありがとうございます、イナ

これで調査は前進しました」

アンジェリカはイナを誉め、ローランはイナの右腕を処置し直して  
は頭を撫でた

それでもイナは暗い表情のまま、二人は顔を見合せ困惑する

「それじゃあ、用は済んだから…俺達は行くね」

アルガリアがソファから立ち上がり、イナの肩に手を置く

「珍しいですね、兄さんがもう行くなんで」

「本当はまだアンジェリカと話していたいけどね

まだこの後急ぎの用事があるんだよ…」

急ぎの用事、とアルガリアは言うが、イナの頭の中には疑問符が浮  
かび上がる

そんな用事など聞いていないのだ

「ほら、行くよイナ」

しかし、アルガリアに促されるままイナはソファから降り、その後ろ姿について行く

「…イナ」

そんなイナをローランは呼び止める

イナはローランの方を振り返る

ローランはイナの元へ歩み寄り、再度頭を撫でる

「…血染めの夜は俺達が必ず仕留める

そしたら…また、一緒に暮らせるから」

ローランの優しい声に、イナは涙が溢れそうになるのを堪える

「…はいっ」

精一杯の明るい笑顔と声で応え、イナはそのままアルガリアと共にチャールズ事務所を後にした

ローランとアンジェリカはそれを見送り…小さく溜息を吐き出した

「…まだ骨が折れそうですね」

「ああ…だが、絶対に血染めの夜はこの手で潰してやるさ」

「それで、急ぎの用事とは？」

エリックが運転する車内、後部座席

イナはアルガリアの隣に座りそう問いかけた

アルガリアは窓の縁に肘を掛け外を眺めていたが、そんなイナの質問に視線を向けた

「買い物だよ」

「何を買うんですか？」

「とっておきかな」

具体的なことを言わないアルガリアに痺れを切らしながらも、イナも自分の真横の窓を眺めた

その時

「……………あれ？」

ほんの一瞬

イナの優れた動体視力がその人物を捉えた

車の外、歩道の隅、杖をつきながら歩く老人

裏路地では珍しいその老人を、忘れることは無い

先日バス内で出会った老婆…まさにその人であった

「……………」

また公共機関を使って移動したのだろうか、しかし以前出会った場所と比べ移動距離が長いことに疑問を感じながらも、過ぎていった景色と共に見てなくなった老婆を見送ってはイナは視線を前方へと向けた

「エリック、ここだ、止めて」

アルガリアがそう言っでは、エリックは車を車道脇に停車させる

アルガリアはそのまま車から出て、ふらりとある建物へと入っていった

「……………」

イナはその建物を見ては、アルガリアの言っていた「買い物」の意味を理解した

程なくして、アルガリアは建物から出てきて車内へと戻ってきた

その手に持った紙袋を、後部座席の真ん中に置く

「これ、イナが買ったヤツでしょ？」

アルガリアが買ってきたのは、以前イナが購入しては血染めの夜との遭遇で駄目になってしまった…人気スイーツ店のアップルパイだった

「な…あ、アルガリアが買っては意味が無いんですが！」

「そう？…俺へのお礼は、美味しい紅茶を淹れてくれるだけで十分だよ」

そう言っって微笑むアルガリアに対しイナは膨れっ面のまま睨め付けるが、しかしアップルパイの魅力に根負けし、大人しく前方へ顔を向けた

それからホテルへと戻った二人は、美味なアップルパイと微妙な紅茶で午後のティータイムを過ごしていた



B l o o d   f o o t   p r i n t s   I I

XXXXX年XX月XX日

これは、夢です

黒い水底のように揺蕩う私の自我

まるで子宮の中にいるような暑くも寒くもない空間の向こうから、鎖が繋がっている

その鎖は私の首に巻き付き、喉を締め付ける

不思議と息苦しさは無く、私はただ見える右目で周囲を見渡します  
そんな時、声が聞こえました

いやだ、いやだ

はなれたくない、もう二度とひとりになりたくない  
どこにもいかないで、やだ、いやだ

いかないで、お願いだから、わたしも連れて行って  
はなれないで、いかないで  
わたしを置いていかないで

XXXXX年10月13日

視界いっぱい広がる天井を見て、イナは目を覚ます

何か夢を見ていたような気がするが、今のイナには思い出せずにいる  
る

ぼんやりとする頭のまま体を起き上がらせると、イナは自分の腹の上  
上に黒い物体がいることに気がついた

その黒い物体は細長い蛇であり、その蛇はイナの左目：無の世界蛇、通称無二であった

「…おお、起きたか」

イナが起き上がったことにより無二は気がつき、頭をふらつかせながら持ち上げる

「その…なんだ…迷惑をかけてしまったな」

「いえ、迷惑だなんて…まあ、止めてくれたのはアルガリアですし…」

「そうか…そう、か」

歯切れの悪い無二に違和感を感じながらも、イナはそのまま無二を肩に乗せベッドから降りる

寝室の窓を覆うカーテンを広げ、どんよりとした曇天の空を見上げる

「ひと雨降りそうですね」

「雨…そう、だな」

「もう、元気出してください」

活気の無い無二はらしくありません」

覇気の無い無二の雰囲気、空模様と同じようにその場が曇っていく感覚がする

そんな時、イナの寝室の扉からノックが響く

「起きた？朝ご飯用意できているけど」

「はい！今行きます！」

アルガリアが朝食に呼び出しに来ては、イナは目を輝かせ返事をし、て寝室を飛び出す

扉の向こうには、寝起き故にラフな服装のアルガリアが立っていた  
「おはようイナ

…君も」

アルガリアはイナに朝の挨拶をし、次いでイナの肩に乗る蛇に向かって言葉もかけない

無二はアルガリアを一瞥しては、直ぐに視線を下げアルガリアから目を逸らした

アルガリアはそんな様子を気にかけることなく、イナと共にリビング

グへと向かう

イナは瞬く間に洗顔と歯磨きを済ませ、リビングの椅子に座り、机の上に並ぶホテルの朝食セットの前で手を合わせる

「いただきますー」

「いただきます」

続けざまにアルガリアも合掌し、二人の朝食は始まる

ホテルの給仕が運んできた朝食は格別に美味であり、イナは満足そうに頬張っていく

そんな様子を眺めていた無二が、徐ろに口を開いた

「…なあ、小童」

「んむ？」

「……なんですか？」

無二に呼ばれたイナは口の中で咀嚼していたエッグベネディクトを飲み込み、無二の方に向き直す

無二は何度か躊躇ったように首を下げつつも、やがては決心したようにイナの方を真つ直ぐ見つめる

「…貴様は、今は子供の肉体だ

しかし成長は続いている、現に齡10程の小娘になっておる

しかし、都市…裏路地とは危険が隣り合わせの世界

更には、小僧から…ヴァイオレットから隠れ逃げ続けるには余りにも非力極まる

小童がどれほど、生存の為に高い戦闘能力を有して作り出されたとしても

ロボトミー社にいた頃が全盛期として、今やその半分にも満たない力である」

イナはそれを聞き、眉間に皺を寄せ少しばかり視線を下げた

自分がどれほど自分を過信していたのか、つい先日痛感したのだ  
「10では心許ない

せめて14…否、15だ

15には晴れてフィクサーになれるよう、妾も隠し弾を曝す時が来た」

そう言うと、無二はゆるりとイナの影の中に潜り込み、姿を溶かした

「小童、自身の影に手を差し入れてみるといい」

無二の指示に従い、イナは自分の襟足付近に手を伸ばした

本来そこには、項と髪しか掴めるものはないはずなのだ

しかし…伸ばした先には髪の感触も項の感覚も無く、代わりに何か固いものを掴んだ

イナは恐る恐る後ろに回した手を引き戻す

腕を引き戻す 度、掌にかなりの重量を感じ取れる

イナはそのまま、自分が握って引き出したものを確認する

しかしそれは、にわかには信じ難いものであった

イナの手に握られていたのは…拳銃

スライド式の、1kg程の拳銃だった

「…これは…」

「妾は何も、自ら影を通じて出入りしているだけでは無い

こうして、影を通じて妾の腹の中へと手を伸ばすこともできる

妾の腹の中には、数多くの武具が蓄えられておる

まあ、武具といっても小娘が扱っていた銃火器や刃物に限るがな」

イナが影から取り出した拳銃を見て、アルガリアも息を飲む

「…それ…そうか、そういうことだったのか…」

アルガリアの呟きにイナは気付かないまま、その拳銃を回して眺めた

すると、拳銃の銃身に何か文字が書かれているのに気がついた

「無二、この文字はなんですか？見たことも無い…文字？記号？」

イナの質問に、再び影から姿を表した無二は目を細めながら答えた

「それはルーン文字という

ルーンとは、その文字一つ一つに呪いまじなの効能が宿っておる

しかしそれはただの呪いではなく…魔術、というものだ」

「…まじゆ…？…？」

「魔力というエネルギーを通すことで作動する装備のようなものだ  
魔術とは神秘、奇跡…魔力を用いて行使する御業のこと

貴様らの言う、特異点に近いものだ」

無二の説明に頭がパンクしそうになりながらも、イナは理解しようと銃に観察する

イナがその銃に刻まれたルーン文字に触れた時、僅かに文字の一つが光を放った

「……」

「まあ、小娘と小僧の血を引くだけはある

小童、貴様の魔力量はさほど多くはないが、「ごごぞ」という時の切り札に活用するといい

銃火器の武具は他にもあるし、ルーンを用いらずとも本来の役割はこなせる」

「……15になるまで、無二の中にある武器をあらかじめ使いこなせるようになればいい、そうですね?」

「そうすれば、フィクサーとしても問題なく活動出来るであろう」

イナは手にした拳銃を机の端に置き、マグカップに持ち替えては中に入ったミルクを一気に飲み干す

「よし!それでは日々鍛錬です!」

アルガリアやアンジェリカ、ローランをも超えるフィクサーになってみせます!」

「ふーん……大きく出たね?俺を倒せる日を楽しみにしてるよ」

「5年後、協会に手続きをさせ正式なフィクサーになってからが本当の勝負である

都市で活動するとなれば、小僧も確実に何か仕掛けてくるはずだ」  
「母様の情報網は恐ろしいですからね、もちろん用心します」

朝食を頬いっばいに詰め込んで飲み込み、イナはアルガリアに真っ直ぐ視線を向ける

「アルガリア、先日のような考え無しの行動はもちろん、無断の活動はしないようにします

そして、重ね重ね身勝手なのは承知の上でお願いします」

イナはテーブルに両手をつき、額をぶつける勢いで頭を下げた  
アルガリアは目を丸くしながらもその様子を眺める

「…私を、弟子にしてください！」  
そして、イナから出てきたその言葉に、アルガリアは涙目になりながら高らかに笑うのだった

## White noise III

生命は生き残るために必要な要素がある

それは三大欲求とされ、そうして長い歴史の中であらゆる生命が生き延びてきた

生きるためのエネルギー補給、食欲

生存の為の休息、睡眠欲

自分の種を後世へと残す性欲

この三つがあつてこそ、人間を含めた生命は今日まで自らの種族を残してきたのだ

しかし、これらはいくまで「必要最低限の欲」に過ぎない

より過剰な欲を求めれば、生命は自滅をする

より長く生きるために、自ら自分の生命活動をコントロールしなければならぬ

怪我も病も未然に防ぎ、自分の外からの襲撃にも対応出来るように何より、「生きたい」という心こそ…生きるには必要不可欠なのだ

「反復、15538回目」

リセットされた一日目、黒い泥のようなコーヒーの苦味はヴィオラの脳に程よい刺激を与えてくれる

前回は惜しかった、と思つてもいないことを思い浮かべながらも、また「初めて」管理人職に就いたXをディスプレイ越しに眺める

瞳を閉じたアンジェラが、貼り付けた微笑みで管理人Xを出迎える  
ああ、この一日目に辿り着くまで一体幾つの屍を積み上げてきたのだらうかと想像する

湖に放り込めば底に死体が積み重なり、それはもう腹が振れる光景になるだらう

しかし、ヴァイオレットに殺人という趣味も無ければ人間が死のうが生きようが「使える」か「使えないか」の分別しかできないのだ

それは、自分の命ひとつとつてそうだった

「軌道修正は必要かもしれないな

ああ、時間は沢山あるが無駄に時間はかけていられない」

傍らに揺らめく白い触手を、ヴィオラは自分の白い手で撫で上げる

「…お前達はいいな

喋る事も反発する事も無い、完璧な僕の権能達

あの神がくれたとはいえ、本当に有能だよ」

撫でられた触手は床へと沈んでいき、周囲は静寂に包まれる

「…さて、また暫くは管理人くんの働きを観察するのでしょうか」

ヴィオラはディスプレイへと向き直し、手を組んでは顎を乗せて心底楽しそうに笑った

「…そう、これらは全部、私が奪われたモノ

産まれたばかりの赤ん坊の頃、世界の平和の為にくべられたもの」

「必要だと思っていないけど…それでも、奪われたままで放置するのは悔しかった」

「だから、せつかく不完全ながらに生き返ったとしても、取り戻したかった

私の運命力、私が生きれなかった私の幸福」

「けど…そう、けど、私が取り戻してもそこから先は思いつかなかった私に運命力が戻ったとして、私が既に死んだことに変わりなんてないんだから」

「私自身の使い道、どうしたいか、どうしていききたいかなんて…どうの昔にわかんなくなっちゃった

なら、私が持つても宝の持ち腐れってやつなんだよね」

「ならさ…私はこの世界に私の運命力を使ってほしい」

「より幸福に、より幸運に…より、私以外の誰かが笑ってくれるなら」

「…結局、私は自分の幸せより他人の幸せの方が満足する狂人らしい」  
「やっぱり、100年前の救世主サマと血が繋がってるだけあるんだな」

「ごめん、??…これからはもう、私の為に頑張らなくていい

私が幸せになる世界なんて求めなくていい



「これ以上貴方が磨り潰れる必要なんてない」  
「私は、これで満足するから」

「そんなの、受け入れられるわけないだろ」

# I Nightmare of the sunset

XXXXX年6月24日

だだっ広い空間に、重苦しくのしかかるような重音と劈くような高音が入り交じる

火薬の匂いは鼻腔を通り、僅かに流れる塵の風は目を襲う

肩口に響く衝撃に対し、人体は微動だにしない

「…的300m、20発中20発、中心半径10cm以内に命中しているね」

モニターを通して銃弾の命中ポイントを確認しては、男…アルガリアは足元を見下ろした

防音ヘッドホンを外し、小銃から手を離れた少女は得意げに笑った  
「当然です、二年間猛特訓したんですから」

片目を眼帯で覆う少女…イナは、立ち上がってアルガリアに向かい合う

その背丈はアルガリアの肩ほどにまで伸び、未だ伸び続けている段階である

「無二の腹の中…私の影と通じる異空間には、無数の銃火器やナイフが収納されています」

それらを使いこなせるようになるまで、かなり時間がかかりました」

初めは大人の姿で生まれたイナにとって、今の子どもの肉体は筋繊維が違ってくる為、以前よりも弱体化している

そのマイナスに追いつく為、イナはアルガリアの手配の元無二が与えた武器を一通り完璧に扱う為に二年間修行を積み重ねてきた

「小銃、長銃、拳銃、機関銃に至るまで様々な種類があり、そのどれもにルーンが刻まれています」

銃器の扱いは申し分無いとは思いますが、ルーンの方は未だ使いこなせていません…」

イナはそう言いながら、銃に刻まれた記号の羅列を撫でる

その記号達はルーン文字と呼ばれるもので、銃や弾丸、ナイフの刃にまで刻み込まれている

このルーン文字を活用すれば、銃器やナイフを媒体として多くの恩恵が得られるのだと言う

「銃を武器に出来るのは大きなアドバンテージだと思うよ

何せ、都市は銃の取り締まりに厳しい

弾丸は鉄を貫いてはいけないし、何よりその弾一発一発の税が高い

：

それに引き替え、君が用いる銃はこの都市で造られたものじゃない、弾丸だってそうだし、

だから税はかからないし、放たれた弾丸は消え物は残らない」

射撃場から出ては、アルガリアは長い廊下を歩きながらそう語る

この都市には一見意味が不明な規律が多く、それは銃の取り扱いにまで関わってくる

都市にフィクサーは数多く存在しているが、その中でも銃を用いる者は少ない

銃弾にかかる税が高いから、それなりに稼いでいる者しか扱えないのだ

「特異点にも似たようなこの力：無二様様です」

「あとはルーンの力を引き出せればもう

全く：親が親なら子も子、か

お主の中に流れる劇物が魔力の流動を堰き止めているせいで、回路に通すことも儘ならぬ」

イナの髪の毛の隙間から、黒い蛇が顔を覗かせる

黒い蛇：無二は溜息を吐きながら首を振り呆れ、イナは頭を悩ませる

無二の言う魔術を行使する為、エネルギー操作の修練も積み重ねてきた

精神統一から始まり、呼吸や脈拍：血流さえ操り、神経を研ぎ澄ませ体内エネルギーの循環を切り替えさせる

しかしイナが二年かけて達成出来たのは、一本

体内の神経路にエネルギーを通せたのは、たったの一本のみ

「なけなしの一本では銃は愚か、ナイフのルーンさえ起動出来やせぬ

一文字でさえ届かぬのう…」

「うっ…わ、私にはわからない分野なのでそこは無二に任せますが…  
そこまであからさまに落胆しなくなつていいじゃないですか」

わかりやすく頬を膨らませ拗ねるイナは、アルガリアに続いて射撃  
場のあるビルを出て、出入口前に停る車に乗り込んだ

運転席には見慣れた男…エリックが待機している

「それじゃあホテルまでよろしく」

「アルガリアは？一緒に帰らないのですか？」

「俺はまだ仕事が残ってるから」

アルガリアは窓越しに微笑みイナに向かって手を振る

そんな挙動に対しイナも手を振り返す

そのままエンジンはかかり、車は発進していく

アルガリアを置いてイナを乗せた車は都市の裏路地を走る

「本日の射撃訓練は如何でしたか」

「パーフェクトです」

次は500mに挑戦してみたいですね」

「はは、イナ様なら必ずや中心に命中させてみせるでしょうね」

エリックは乾いた笑みを零しながら、道の先を見据える

イナは普段よりもその雰囲気か仄暗いことに気がついた

「…エリック、何かありましたか？」

「えっ？」

…いえ、大したことではありません…単純に、考えているだけです」

エリックは行き場のない苦痛を吐露するように、少しずつ語りだし  
た

「我々は一体何処へ向かっているのでしょうかね」

「…何処、とは？」

「都市に生まれ、都市で生き、毎日同じ時間に起き同じ仕事をして同じ  
ように眠る…一体何を目指しそれを繰り返しているのかと」

「…」

イナは思い出す

過去、自分も生きる意味もなく「生きたいから」という理由で仲間を足蹴にしてきたこと

絶対的な母からの命令としても、生きることに理由を見い出せずにいることは死とどう違うのか

自分に問い掛けてきてくれたあの言葉を思い出す

「まるで歯車のように、同じように回り続けて都市という大きな機械を動かしている…」

ほんの小さなパーツで、すぐに替えがきく

それが私達なのでしょね

「…それは…」

イナには何も答えられない

自分だって、多くのクローンの中の一人に過ぎなかった

バグとエラーで母から直々に廃棄処分とされた

それはつまり、替えなどいくらでもあることだった

「…歯車として回り続けることで、都市は良くなるのか

歯が組み込む度に摩擦で擦り減り、私という存在は都市から廃棄されてしまうのでは無いのか…いろいろ考えてしまうのです」

エリックの深刻な悩みを聞き、イナは口を噤んだ

今の彼女に、彼の深い苦悩を払拭することなど出来やしない

「…はは、つまらないお話でしたよね」

「……いえ」

「さあ、もうじきホテルに到着しますよ」

イナは車の窓の外へと視線を向ける

赤く燃える炎のような夕焼けが裏路地を、都市を焼いていく

その焼却されていくような様はイナに一抹の不安と焦燥感を駆り立てる

ローラン、アンジェリカとの連絡が途絶えて二ヶ月経つのだ

## II Nightmare of the sunset

二ヶ月前、イナが最後にローランと会話をした時のことだ

『二日前に血染めの夜の根城を特定した

一週間後、叩きに行く』

そう告げられ、イナは静かにローランとアンジェリカの無事を祈ったのだ

二年前のイナなら、自分も行くと駄々を捏ねた挙句無断単独で乗り込んでいたかもしれない

しかし、イナは精神面での成長を果たした

今の彼女に、ローラン達の為に出来ることは何も無い

だからこそ、イナは自分の牙を研ぐことに集中していた

そして…二ヶ月が経った現在

『……して、現在一家団地で惨殺されている事件が相次いでおり、ハナ協会はこの事件を「家取り」と名付け、都市伝説へとランクを上げ…』

イナは8区のホテルのスイートルームにて裏路地のニユースを見ながら昼食をとっていた

「あらぬ噂、都市怪談はごまんとありますが…都市伝説へと上げられるのならば相当ですね」

「この事件…二年も前から引き起こされておるのう」

「そうでしたか?」

「二年前までは年に一件、二件のみであったが…ここ数ヶ月で数が増えておる

協会がランク上げたのがその証拠じゃ」

無二は小皿に入られている金平糖を次々と飲み込みながら、テレビの方へ視線を向ける

その表情は蛇でありながら、そこはかたなく険しくなっているように伺える

「…無二、あまり無理なさらず」

「いや、妾も何時までも甘えておるわけにはいかぬ」

無二はALERTクラスのアブノーマリテイであり、人間の死がトリガーとなつて凶暴化する特性を有している

その為、日常的に人間が死ぬ都市では常にその危険を伴わせているアブノーマリテイは自我の具現、本能の抽出…故意的に自分の特性を抑え律するアブノーマリテイ等はそうそういるものではない

やはり無二は…無の世界蛇は、他とは違い何か特別なのだろうかイナは改めて考える

それを考えると、連なつてロボトミー社のこと…未だそこにいるであろう職員やAIのことを思い出す

「…今何も出来ない悔しさは、この五年余りで痛いほど噛み締めました

少し早いですが、そろそろ…」

「そうじゃな

貴様の成長ぶりは目覚しい、そこはさすがあの小僧が作ったクロールだと認めざるを得ない

小娘が遺した遺産を短期間で全て扱えるようになるとは、妾も舌を巻く」

最後の一粒をその虚空内に飲み込んだ無二はイナの方へ這い寄り、定位置である首周りに留まった

「なので、予め手続きはしておいたぞ」

「えっ、その体で…どうやって…」

「企業秘密、というやつじゃ

妾は器用じゃからな」

そんな会話をしていると、リビングに備え付けられている内線電話から着信を告げるメロディが流れる

内線電話、つまりフロントからの知らせだ

イナは受話器を取り、耳に当てる



「2562部屋をご利用してくださってるイナ様ですか？」

「はい、そうですか」

「貴方様宛にお手紙が届いております」

差出人はハナ協会から…お部屋までお届け致しましょうか？」

部屋に届いた便箋は、質素な白い封筒だった

その中にはかなりの書類が詰まっているのか、それなりの厚みをしている

「詰め込みすぎじゃろ」

「書類整理は得意です」

イナは缺で封筒の端を切り、中から数々の書類を取り出す

まず一枚目には…「フイクサー認定試験受験願受領について」

大きなフォントで書かれたタイトルと、数枚がワンセットにされたその書類を見て、イナは口元が緩むのを自覚した

「このご時世、武器を持ちそう名乗れば皆フイクサーとなるが…やはり正面からの正規雇用が一番じゃ、独立はお先真つ暗じゃしの」

「無二、ありがとうございます、申請を出してくれて

これでようやく私も…」

「貴様の今の身体年齢は齡十二程であつたか…まあ、実年齢としては五歳かそこらとは言え、これで受ければ最年少記録も狙えるかもしれないな」

「さあ、それはどうでしょう

ともかく、訓練と勉強を重ねていた私に死角はないでしょう

えーっと…筆記試験と面接の一次試験と、実技の二次試験ですか」

「二次試験は三週間後、その一週間後に合否発表が届き…それから二週間後に二次試験とな

長丁場になりそうよな」

「このくらい何ともありません

…が、慢心は大敵ですからね、もちろん直前まで勉強も特訓もしますよ」

「勤勉よなあ、まあそんな小童じゃし心配する必要はないかもしれん

な！

「この試験も勝ったものよ！フハハハ！」

「アハハハ！」

届いた書類を確認しながら、一人と一匹は高らかに笑う

傍から見れば不審者か精神異常者極まりないが、ここはホテルのスイートルーム、家主も外出中の為一人と一匹を怪しい目で見る輩はいない

(…まあ、助かるよアルガリア

ありがとう、この子のために手続きを手伝ってくれて

フィクサーの上を目指せば、実力も名声も資金もつく

白…ヴァイオレットに対抗する術が手に入る

きつと…これで…)

三週間後、3区ビル内

フィクサー認定試験第四会場として利用されているそこは、見るからに屈強な男や不気味な女、得物を手に殺意を振りまく子どもさえもいた

「うわ…物騒な場所ですね」

イナはアルガリアが用意してくれた一見清楚なお嬢様のような、小綺麗なシャツとタイトスカートを着ている

眼帯を付けている点こそ普通の雰囲気とは違って見えるが、それでも試験会場に集まった受験者達の中ではかなり浮いているように見える

「面接もあるので外見は整えておかないとなんですけど…逆にこの人達は大丈夫なんでしょうか」

「ライバルが減ると思っておけ

して小娘、十三年前に廃止された都市条例違法時における処置内容はなんじやったか？」

「条例違反発見者は直ちに頭へ報告し、条例違反者は如何なる理由であつてもその場から移動することを禁ずる

また、その場に伏せ自分の頭を地面に100回叩き付ければ一時措

置を認め嚴重謹慎とする…でしたね」

「うむ、記憶力のいいお主なら問題ないな」

髪の下から無二の耳打ちを聞き、出題に答えながらイナは示された自分の席へと座る

その横には、先程見かけた手にナイフを握り続けてブツブツと何かを喋っている少女がいた

「ツ…」

「…なんだよ、何見てるんだよ」

「いえ…」

ヒク、と顔が引き攣ったのがバレたのか睨まれてしまう

視線を逸らすも、少女は執拗にイナに絡んできた

「なんだ？…ここはフィクサー認定試験会場だぞ、小綺麗なお嬢様の来る場所か？冷やかしに来たのか？あたしが病気だからか？馬鹿にしてるのか？あたしみたいな病人はもうこれしか道がないんだよ！」

ヒステリックに叫ぶ少女の訴えを聞き流しながらも、イナは少女の様子を観察する

7月、気温も上がり暑くなってきた最近ではあるが、少女は全身黒い長袖に身を包みフードを深く被っている

そして、チラホラと服の隙間からは薄汚れた包帯が覗く

「…」

「クソツ…おい、黙りかよ」

「そこ、もうすぐ試験です」

厳粛に」

試験スタッフから注意を受け、少女は舌打ちをして荒々しく椅子に座り直す

数分後、試験管が入場し試験の流れの説明を受ける

そして各人に試験用紙が配られ…フィクサー認定試験が開始した

### III Nightmare of the sunset

XXXXX年7月25日

「面接練習であればほど対策したのに、いざ「フィクサー」として目指すべき目標は？」と聞かれて「都市では無駄に死ぬ人が多いのでそれを改善すべく心血を注ぎたいからです」と答える奴があるか

馬鹿馬鹿しいと鼻で笑われたであろう」

「うっ…だ、だって気がついたらそう口にしていたんです

面接なんてやったことないし…」

「あー、L社には裏口入社みたいなものであつたな…」

認定試験、一次試験から早一週間後

本日は一次試験の合否発表が届く日である

のだが、無二はイナの面接のダメっぷりに何度も溜息を零してはグチグチと小言を言ってくる

「筆記の方は懸念しておらぬが、ああ…面接…あれほど圧迫面接さえも練習しておったのに…」

「昔の私なら圧迫面接を圧力面接にしてみましたね

面接官の頭を机に押し付け…」

「そういう物騒発言は良い！全く！」

不安に駆られる無二とは正反対に、イナは随分と余裕そうな様子で知らせを待っていた

そんなことをしているうちに、フロントからの内線着信が届く

到着した手紙は前回とは違い、比較的薄いものとなっていた

「(…これは…まさか不合格通知では…!?)」

「さあ、どうでしょう」

震える無二を他所にイナは慣れた手つきで封筒を開いていく

三つ折にされた紙を開いて一通り目を通し…イナは、満面の笑みで

無二を見下ろす

「ふふふ…無二、結果見たいですか？見たいですよね？」

「なんかもう理解したからよい」

イナの一次試験の結果は…見事合格

面接でも筆記試験でも合格点を大幅に超え、満点を叩き出している  
と手紙には記載されていた

「次は二週間後の二次試験ですね

当日はまた3区のビルに集合、試験内容の発表だそうです」

「フィクサーはあらゆる仕事を請け負う便利屋じゃからな、どんな試験内容であつても対応できるよう備えておくように」

「はいはい」

すっかり冷静さを取り戻した無二はイナにアドバイスをし、イナはそんな無二に呆れながら返事を流す

確かに、実技試験とはいえフィクサーはあくまで「便利屋」、あらゆる仕事を請け負う職であるためどんな試験内容を出されるかはわからない  
もし備えていたとしても、もしかしたら突拍子もない内容を出されるかもしれない

そのことを念頭に起きながら、二週間を過ごした

そして、実技試験当日

「皆様、お集まりいただきありがとうございます」

そして、一次試験合格誠におめでとうございます」

試験監督であろう協会のフィクサーがビルのホールに設置されているステージの上で挨拶を行う

イナはいつでも臨戦出来るよう動きやすいパンツスタイルで赴き、得物を持たないのも不自然な為ナイフホルダーにいくつかの武器を仕込んで身につけている

同じ試験会場で一次試験に臨んだのは約三十人程であったが、今この場に揃っているのはたったの十三人であった

(かなり減ってますね……ん?)

その十三人の中には、一次試験の日にイナに突っかかってくる危う

い少女もいた

(ふーん、少なくとも馬鹿ではないのですね)

一次試験の筆記合格ラインは七割、そこに面接での得点が六割…その基準値を超えて、一次試験が突破できる

(あの態度と事前に忠告されたこともありより厳しく注視されていたのかもしれないのに…それを突破できるのは、なかなか実力があるそうですね)

まあ、やはり危なっかしいことには変わりありませんが)

イナは少女から視線を逸らし、周囲の他の受験者を見渡す

(殺し屋、傭兵上がり、シエフ…配達員

経歴こそバラバラですが、この都市でこの職を目指すだけのことはありますね

それぞれ得意な戦法が違い、得意とするモノが違う

試験内容如何では遅れを取りかねない可能性もあるのですね)

イナが一人分析をしていると、監督役のフィクサーの挨拶が終わる、他スタッフから一つの封筒を受け取る

「それでは、本日の試験内容を発表致します」

封筒の封を解き、中から一枚の紙が引き抜かれた

イナを含めたその場の参加者全員の空気が張り詰めたような雰囲気広がる

「第七十三回、フィクサー認定試験実技内容は…

人探し、です」

## IV Nightmare of the sunset

二次試験、実技

試験内容は、人探し

「4区に居住するとある中企業の第一責任者が一週間前から行方不明会社の方は代理者が不在の為、搜索依頼が寄せられたのが三日前ですね」

「搜索依頼を後回しにする辺り都市らしいな

そして、都合よく試験内容に決められたというわけか」

イナ及び無二は、早速試験に取り掛かるため4区まで来ていた

試験期間は一週間、合格基準は聞かされていないが、見つけれれば合格は確実だろうと二人は踏んでいる

故に、まず人探しの基本である情報収集の為4区へと赴いた

「ここが行方不明者が住んでいるマンションですね

そこそこいいところじゃないですか」

やって来たのは敷居の高いマンション

廃れた裏路地の中でも一際綺麗な高層マンションの入口は、フロントの広さも十分にあった

「あの」

フロントに立つ警備員にイナは声をかける

警備員はイナを一瞥し、溜息を吐く

「なんですか」

「最近行方不明になったこの住人について聞きたいのですが」

警備員は嫌気が差したように眉を顰め、イナを見下ろす

警備する職柄とはいえ、その不遜な態度にイナは少し苛立つ

「残念ながら私は何も知りませんよ

その人が行方不明になったのは、仕事帰りですから」

「仕事帰り……つまり、夜間ということですか？」

「そうですね」

その人はいつも朝7時30分、決まってマンションを出て大体夜8時に帰宅されます

たまにもっと遅い日はありますが」

朝7時30分に出発し、凡そ夜8時に帰宅

基礎的な情報だが、対象の一日のルーティンは貴重な情報となる

「そうですね、ありがとうございます」

あと、行方不明者の近所の方にもお話を伺いたいので、入ってもよろしいですか？」

このマンションはフロント先のエレベーターからは関係者以外立ち入り禁止の状態であり、用がある人間はインターホンで呼び出す必要がある

残念なことにイナにはこのマンションに友達もいなければ知り合いですらない

「…まあ子供だからいいか」

そう呟きながら、警備員はエレベーターの開閉ボタンを解錠し、エレベーターの扉が開く

一言余計な警備員に内心悪態をつきながら、イナは愛想のいい笑顔でエレベーターに乗り込んだ

行方不明者が居住しているのは十階、まずは十階から情報を集めることにしたイナは10のボタンを押した

「ああ、あの人？ 厳格そうな人だったな

ザ仕事人みたいだな」

「お堅そうな人だったよ、遊んだことなさそう」

「挨拶はするけど愛想が悪くてね

休日によくどこかに出掛けていたかな

場所？そこまでは知らないよ」

「昔は奥さんと息子さんと暮らしてたみたいだけどね、離婚したらしいよ」

あ、それとここだけの話なんだけど、離婚の原因は浮気らしいんだ



…しかも巢の重役！」

役に立ちそうな情報から、面白半分の噂話まで

聞けることはよく聞けたのではなからうか、どんなに信憑性の低い話も真実なり得る可能性を秘めているのだから

「次はどこへ行くのだ？」

「会社の方です」

認定試験の都合上話は通してあるそうなので、話を聞きに行きましよう」

イナはそう言いながらバスに乗り込む

公共交通機関に乗る機会は昔と比べ増えたもので、それでも周囲への警戒は怠ることなく座席に腰をかける

通勤ラッシュ時間はとうに過ぎていたため車内はかなり空いており、乗客は10人にも満たない

それでも、突然バスジャックが起こるなんて可能性が余裕で転がっているのが都市というもの

それ故、イナはその気配に気がついていた

「おい」

野太い呼び声が、自分の座る座席の真横から聞こえてくる

イナは左目を眼帯で覆っている、それは左目に繋がるアブノーマリテイの無二を隠す為のもの

だからイナは常に左側の死角をとられないようこの日も左側の座席に腰をかけていた

だから、声が出したのは右側の通路

イナは右目を動かし横を見やる

体格のいい男が、こちらを見下ろしている

「何でしようか」

「お前、フィクサー認定試験参加者だろ」

先程会場にいた男だろう、こちらが視察していたように相手もこちらを観察し覚えていたようだ

「だからなんですか？」

「今回の認定試験は一次試験を通過した者が多い

邪魔者もその分多いということだ」

イナは今回が初参加であり、一次試験を通過した十三名が多い方なのだということを初めて知る

あれで多い方なのか、という驚愕こそあれ…男がその先続けようとしていることは察しがついている

「なるほど…まず潰しやすい者から潰しに来た、ということですか」  
「話が早くて助かる

大丈夫だ、骨を一本か二本折るだけだからな」

そう言つて男はイナに手を伸ばし、イナの腕を掴んだ

その瞬間、重い音がバスの車内に響く

その音に他の乗客も二人の方を見やる

太い物が折れたような音

唸る声

男は後ろへ後退り、よろめき向かいの座席に座り込む

「ぐ…あ…ッ！」

男は腕を抑えながら苦悶の表情で大粒の汗を額に流している

「一本二本、折るだけでしたっけ

ならもう一本…折りましたようか」

イナは掴まれた腕を左右にふらふら振りながら立ち上がり、先程とは逆に男を見下ろす

「おいおい小童、腕を折るなんてなかなかやるではないか」

「先に手を出してきたのはあちらです

ローランならこの程度では済ませませんよ」

「こッ…のガキ…！」

男は先程の冷淡な表情を崩し、血眼になってイナを睨みつける

それをイナは静かに見据え、男は内出血により青く腫れ上がった腕を下げては立ち上がる

そして、懐から大きな肉切り包丁を取り出してはそれを振りかぶりイナに襲いかかる

しかし男は怒りと痛みにより失念している

「ここが、バスの中であることを

「ツぐ…!?!」

バスは赤信号により一時停車し、男の体は慣性によりよろめく

イナはその動きを全て見切っては刃の軌道を避け、包丁を掴む男の手首に手刀で衝撃を与える

その瞬間に男の手から肉切り包丁は零れ落ち、それが地に落ちる前にイナが包丁を手に取る

そのままよろめいた男の足に自身の足を引っ掛け、男を倒したイナは肉切り包丁を男の首元に添わせる

「頭の弱い方ですね

見た目で人を判断しないことです、見た目が子供でもこうやって貴方を殺すことなんて容易いのですから」

男は首元から伝わる鉄の冷たさに呼吸を乱しながら、再び動きだしたバスの揺れすら認識できずにいた

『5区西口、5区西口に停車します』

バスの中にアナウンスが響き渡る

そして間もなく停車したバスは扉を開き、乗客を乗せようとする

イナはその瞬間、男の胸倉を掴み近くの扉へと投げ付ける

男はバスから追い出され、乗り込む客のいないバスはその扉を閉じた

拍子抜けの顔をした男はそのまま呆然とバスを眺め、イナは窓越しに男に笑いかけ手を振る

「本当に殺すわけないでしょう

私はそういうのもう辞めたので、ただの脅しです」

あの腕では試験の復帰は厳しいだろうと判断し、イナはそのままバスに乗り目的地へと向かい続ける

# V Nightmare of the sunset

それから実技試験対象の会社を訪れても細かい情報を得られないまま、一日目は終了し

二日目の昼

「どうやら昨日の男以外にも二人脱落しているようだな」

今朝方運営から連絡が届き、二次試験参加者十三人中三人が試験継続不可能として棄権となったことを通達された

生存は定かではないが、考えることはどいつもこいつも同じようイナは溜息をつく

「悠長に調べ物をしておるとすぐに刃の切っ先が向きそうだな、童」  
「そうですね」

と呑気に返事をしながらも、イナはアルガリアから貰ったノートパソコンを使い情報を整理していた

行方不明となった男は、いつものように会社に向かいその日の仕事を終えて退社した

そして、家に帰る事無く行方を眩ませた

裏路地では「よくある」話であり、会社側としても代理が戻るまでの穴を埋め合わせする腹積もりなのだろう

その役職が欠けているから必要なだけであり、誰も男本人を必要としていない

それはこの試験も同じ

「試験内容」としか見られていない男のことを、イナは憐れに感じる  
「…」

だからだろうか、自分に重ねて見てしまうのは

母の道具として使われていた頃の記憶が脳裏を掠める

それを振り払うように頭を振り、ノートパソコンにマップを広げる

「次はどこに向かうんだ？」

「交友関係はあまりない方だと伺っているので、必然的に絞られてきます」

次はここで話を聞いてみましょう」

そうしてイナがピンを刺したのは、とある古い一軒家だった

洗濯物の暖簾を潜り抜け、湿っぽい空気を吸い込む

空は曇り始めており、どうにも雨が降り出しそうだった

石の塀を横切り、欠けた階段を数段降りれば…目指す目的地に辿り着く

「ありました」

小さな、小さな一軒家

古びた建物に挟まれながら、薄暗い影に覆われたその場所にイナは近付く

「ここが男の離婚した妻と子供が住む家か

一軒家に住めるだけ良いではないか」

「元々奥さんの実家か何かなんでしよう」

イナは玄関隣のインターホンを押し、古臭いベルの音を聞き届ける  
暫くして、家の中から物音が聞こえてくる

ひとまず人がいることに安堵しながらも、警戒を怠らずにイナはその横開きの扉が開く様子を眺めていた

「…あら、どちら様でしょう」

出てきたのは少し老け気味の女性で、困惑した様子でイナを見下ろしている

「こんにちは、突然すみません

私はイナと申します

少しばかり聞きたいことがありました」

「まあ、礼儀正しい子ね

私はコーラルと申します

それで…聞きたいことって何かしら？」

コーラルと名乗った女性はそう言って首を傾げる

何も知らない様子から見るに、自身の元旦那がどうなっているかは

聞かされていないようだった

「はい、実は…貴方の元旦那さんについてなんですけど…」

女性はそれを聞いて、僅かな微笑みを消し去った

離婚の理由はイナの知るところではないが、少なからず良い意味で離婚することは無いだろう

気分を害してしまったことに申し訳なさを感じつつ、イナもイナで試験の為に踏み込んで質問を続ける

「実は貴方の元旦那さんが、行方不明で…」

「…行方不明？」

「はい、それで少しでも情報が欲しくて…突然押しかけたことについてはすみません

お詫びと言ってはなんですが、手土産もあるので…どうかお話を」

「まあ、立ち話もなんですし…中へお入りください」

コーラルは柔らかい微笑みを携え、イナを家の中へ誘う

予想以上の好感触に、イナは驚嘆する  
しかしこれは返ってチャンスだと思い、「お邪魔します」とだけ言い家の中へと入っていく

イナが屋内の敷居を踏みしめた瞬間、玄関の扉はゆるりと閉じた  
「こちらが居間です、ご自由にお寛ぎください」

私はお茶をご用意しますね」

コーラルはイナをとある部屋の前まで案内しては、廊下の奥へと消えていく

家の周りが囲まれており日が差さないこともあり、家の中も薄ら暗い

イナはそのまま居間の扉に手を掛け開く

居間は特徴のない普通の空間で、机と椅子と、お飾りに花瓶がある窓はカーテンにより隔てられ、外の様子も見えない

白熱灯の電気が居間を照らしており、誰かが椅子に腰掛けている

それは体格からして大人の男で、居間の扉が開いたことで広げた新聞から顔を上げる

「おや、お客さんかな」

その顔を見て、イナは固まってしまう

なぜなら…その男は、今現在イナが試験として探している行方不明の男その人だからだ

「…これは、どういう」

「まあまあ、そんなところに立っていないで座るといい」

ヨシユアのガールフレンドかな？アイツも隅に置けないなあ」

数日前から行方不明とされている男は朗らかに微笑み、イナを椅子へと促す

イナは混乱しながらも、こんなに早く対象と接触できたことはラツキーだと思いを切り替える

「あの、突然家に帰らなくなり会社にも行かなくなったのは…」

「家？家ならここじゃないか」

「いや、そうじゃなくて…ここは貴方が離婚した奥さんの住む家で、貴方は4区のマンションに…」

「私がコーラルと離婚？ははは、面白い冗談だ

私達は夫婦生活十五年、一度たりとも喧嘩したことは無いよ」

「…？…？…？」

どうにも会話が噛み合わない

いや、と言うよりも調べた情報や事実と彼本人から聞かされる話が食い違っている

そんな空気に、無二も警戒を強める

「童、こやつ何かおかしい

一旦ここを離れる方が良い」

「そ…うですが、今対象が目の前に」

「あら、どうかしました？」

後退るイナの背後から声がある

咄嗟に振り向くと、トレイに湯呑みと急須を載せて持つコーラルが立っている

「さあさあ、早くお座りになってください

粗茶ですが、お口に合うといいけれど…」

「コーラル、彼女はヨシユアの友人かい？」

「いえ、どうやら貴方について聞きに来たようで…」

「ふむ…会社の知り合いの娘さんかな」

しかしこんな子聞いた事ないな」

今イナの目の前で、離婚したと聞いていた夫婦が普通に会話している

男の性格も聞いていたものよりも柔和で、益々わけがわからなくなる

「…夫婦仲が円満なのは良い事ですが…」

どうして会社に行かなくなったのですか？なんの連絡もせず…」

「会社かい？はは、私は気が付いたんだ」

仕事よりも家族の方が大切だと

家族と過ごす時間は、何者にも変えられない幸福なのだよ」

至極真つ当なことを言っている

愛妻家として人々に評価されるであろうその言葉は、都市の中で生きてきた人とは思えなかった

「だからって、そんな…貴方を心配している人も…」

「そんな人はいないさ」

まあ、突然行かなくなつたから仕事に穴は空いただろうが、それもすぐに埋まることだろう」

彼の言うことは的を得ている

それでも、拭い切れない違和感がイナの背後にまとわりつく

「……あらやだ」

貴方、もうすぐ「お義母さん」が起きる時間よ」

「おお、もうそんな時間か」

ヨシユアも呼ばないとな」

「お客さん、今からお夕飯の準備をするからどうぞ食べていって」

とても優しく迎えられているのに、イナは鳥肌が止まらず冷や汗を流す

この都市に、こんな風に優しく他人を迎え入れる家族がいるのか  
もしかしたらいるのかもしれない、だとしても違和感に不理解が重



なりイナの思考は煩い心臓の音に掻き消される

ふと、イナは壁にかけられたカレンダーを見る

日付こそ今日と同じ日が記されている…が、何か違う

その違和感の正体を探るべく注視すれば、その答えはいとも簡単に導き出せる

日付は今日と同じ日

しかし…年数は、今よりも十数年も昔を記している

先程男が読んでいた新聞を見れば、カレンダーと同じように月日こそ一致しているが年数が昔のものとなっている

普通に考えて、年数の違うカレンダーを飾るものか？

普通に考えて、十何年も昔の新聞を今読むか？

「おかしい」と感じるばかりの子の家の中を「危険」と判断したイナは、咄嗟に居間を飛び出し玄関へと向かう

玄関の扉に手をかけるも、扉は開かない

「な、なぜ…」

「閉じ込められたか」

鍵がかかっているわけでもなければ塞がれているわけでもない

それでもガチャガチャと音を鳴らしながら扉を開こうとイナは精一杯引っ張る

しかし…殴つても蹴つても扉は壊れない

イナの怪力をもってしても、だ

「ダメだよ、ウチにそんな乱暴しないで」

焦っているイナの背後から、そんな声が聞こえる

振り向くとそこには、イナと歳の近そうな男の子の姿があつた

VI Nightmare of the sunset

イナが振り返った視線の先、玄関と廊下の境目には少年が立っている

少年は不思議そうな顔をしながらイナに近付いてくる

「きみ、誰？」

「…わ、私は」

先程男達が話していたことを鑑みるに、この少年は彼らの子供のヨシユアだろう

ヨシユアは警戒心を感じさせない人懐っこい表情でイナの手を掴んでくる

「ほら、席につかなきゃ

もうすぐ「おばあちゃん」が起きるんだよ」

そう言つて彼はイナの手を力任せに引いていく

イナは見た目にそぐわない筋力を誇っているが、そんなイナでも少し抵抗しないと引き摺られてしまうほど彼の力は強かった

(先程から、一体何が……)

これからどう行動するか思考している時、家の玄関扉が力強く叩かれる音がした

「おい、いるんだろ」

ぶつきらぼうな口調の女の子の声に、イナはそちらを振り向く

一体誰が？と疑問に思うのも束の間に、扉が力強い衝撃を伝達させる

それが向こう側の誰かの一蹴りだと理解する

「早く出てこいよーおいー！」

脅迫の言葉に、少年は萎縮する

「だ、誰？きみの友だち？」

「いえ私にあんな粗暴な女の友人はいませんが…」

生真面目に返答している間に扉の向こうの人物は痺れを切らしたのか、扉扉に何か突き立てられた

それは銀色に輝く刃物であり、それは一直線に扉を刻んでいく

扉は瞬く間にその機能を失い、刻まれた木材と化して雪崩落ちていく

家の中と外を隔てる出入口がなくなったことで、先程から荒く怒鳴ってきた人物が家の中へ入ってくる

それは全身を黒い衣服で包み込み、隙間から包帯で肌を隠している少女

「…あ」

一次試験開始前にイナに突っかかってきた、同じ試験参加者の少女だった

「よおお嬢サマ

得物もなくのこのこと入っていったら捕まってるのか？ざまあないね

お前みたいない日和ってる女はいいカモだぜ」

少女は先日持っていたナイフとは違い、小さな手頃の鎖鎌を手に刻んだ扉だったものを蹴り飛ばす

「ああ！人のものを勝手に壊しちゃダメなんだよ！」

「あ？知るかよ、こっちは試験合格の為に必死なんだ

ここに、ターゲットの女の家なんだろう？」

「…それが」

「なんだ、なんの騒ぎだ」

玄関での悶着を聞きつけた男とコーラルが居間から飛び出してくる

そして、当然といえば当然の反応ではあるが、玄関の惨状を見ては啞然とする

「な…なんだこれは！」

「貴方どちら様？まさか、貴方がこんなことを？」

夫婦も少女を見ては怯えと怒りをその顔に滲ませる

「フン、だとしたらなんだ？」

…ってというか、ターゲットいるじゃん、ラッキー」  
「どうするつもりですか？」

「どうするもこうするも、捕まえて試験官の前に突き出せば良いだろう？」

道案内サンキュー、あとは邪魔だから下がってろ」

どうやら少女は自分の跡をつけてここに辿り着いたらしいなるほど、他の参加者を潰そうとする者もいれば他の参加者を利用する者もいるのは道理である

一次試験を通過したこともあり、頭は回るようでイナは静かに感嘆した

最も、そんな悠長にしている余裕はないのだが

「こんなことをして…」「母さん」が怒るぞ」

「さつきからなにをぐちやぐちやと…」

「ああ…きた…起きてしまった…」「お義母さん」が

薄暗い廊下の奥

その先から、何やら生暖かい風が吹いてくる

イナと少女は本能的に嫌悪を覚える

そして、廊下の奥から誰かが姿を現す

簡易的な車椅子に腰を下ろした、小さな老婆

その姿を見て、イナは昔の記憶を呼び覚ます

「…あなた、は」

「何やら騒々しいお客さんだねえ」

朗らかな微笑みを携え、老婆は眼鏡の奥の瞳を細める

その声色は全てを抱擁するような暖かさを持ちながら、何かが根底に潜む恐怖を感じ取れる

単純な言葉で言い表すのなら、「気持ち悪い」の一言に尽きる

「おやまあ、玄関をこんなに散らかして…駄目じゃないか」

「ごめんなさい」「お義母さん」、今すぐ片付けますから…」

「いいのよコーラルさん」

それよりもまず、お客さんをおもてなししないといけないでしょう？」

お客さん、と呼ばれたイナと少女はじりじりと後退する  
後ろの玄関に扉はない為、走り出せば直ぐに家から逃げ出せるはず  
だ

イナは少女の方を向き、逃げるようアイコンタクトしようとするが  
：

「…気色悪いババアだな…！」

少女は鎖鎌を握り締め、老婆へと向かってその刃を振るう

「ま、待ちなさ…！」

制止の声も虚しく、少女は飛び出す

しかし、老婆は自信に凶器が向けられているにも関わらず絶えず微笑みを浮かべ…その背後から無数の黒い何かを溢れさせる

それを理解するのは、イナとしては避けたいものだった

なせならそれは…複数の足、不規則に動く触角、がむしやりに動かす羽…なぜならそれは、無数の「虫」であるからだ

老婆の背後から飛び出してきた無数の虫は瞬く間に少女を飲み込み、次いでイナをもその姿を覆い隠した

次にイナが意識を取り戻したのは、冷たい木の床の上だった

「ん…んん…」

身を振ると、手足の自由が利かないことがわかった

拘束されているのは瞬時に理解出来たが、イナはその「拘束具」に違和感を覚える

縄でも鎖でもなく、何かチクチクしている

しかも、拘束具がひとりでに動いているような気もする

手は後ろに回されているので確認できないが、暗い空間の中で辛うじて足の拘束具は見る事が出来た

イナの手足を縛っている拘束具の正体は、長い体に節々に鋭い足を生やした…百足だった

「ツツツ!!」

イナは声にならない悲鳴を上げ、全身を粟立たせる  
すぐさま意識を失う前のことを思い出す

廊下の奥から現れた老婆により放たれた大量の虫  
その虫達の影に飲み込まれ、意識を手放したのだ  
身の毛もよだつような光景と感触に、イナは首を振る  
そして：飲み込まれたもう一人の人物を探す  
暗い部屋を見渡せばそんなに離れていない場所に少女は横たわっ  
ていた

近付いて伺つてみると、息はしているし目立った外傷も見当たらない

同じように手足を百足で縛られている

「…なんだか、ただの人探しの試験が面倒な事件に巻き込まれた気がします」

「難儀なことになってきたなあ」

イナの首元から姿を見せた無二は、やれやれと言ったように首を横に振る

「ちよつと無二、貴方蛇でしょう」

蛇なら虫くらい食べてくださいよ、ほらこの百足」

「……………正気か？」

「出来れば私も虫を磨り潰して拘束具を取り払ったりしたくはありません…」

「ふ…ふざけるなよ貴様！妾は虫など食わん！食むのは星屑の砂糖菓  
子だ！」

「食べなくてもちよつと頭噛み砕く程度でいいですから」

「程度とな!?それが程度というのか貴様は！」

そんな言い合いをしていると、少女が呻き声を零して目を覚ます

「う…あ…」

「おや、起きましたか」

少女はむくりと上半身を起こしては、イナの方を見る

その目つきの悪さはより一層増されており、舌打ちをしながら視線を逸らした

「ど…ど…」

「ど…ど…でしよう、私にもわかりません」

「あたしら、捕まったってことなんだよな」

「そうですね、そう考えるのが妥当でしょう」

「殺されていないということは生かすことにメリットがあるということですね」

「メリット…?」

「…どうやらこの事件、そう単純なものではありませんね」

「ここを脱出する為にも…:うん、私達は協力すべきです」

「イナが力強くそう説くと、少女はあからさまに嫌そうな顔をする」

「はあ?あたしがお前と?ぜつてー嫌だ、お前みたいなお嬢サマ身なの野郎と協力なんて…」

「私はお嬢様でもなければ冷やかしに参加したわけでも、貴方を憐れんでるわけでもありません」

「私はフィクサーになりたくて試験に参加したんです」

「その為には、ここを脱し試験課題をクリアしなければなりませんだからどうか、力を貸してください」

「縋るような想いを滲ませ、イナは頭を下げる」

「誠実な姿勢を見せることで、相手の警戒心を解き協力関係を結ぶ利用されるのではなく、対等に純粋な協力相手として」

「そんなイナの様子を見た少女は驚愕しながら、少しばかり沈黙し…息を吐いた」

「…はあ…わかったよ」

「生きてここから出るためだ、せいぜい上手く使われるよ」

「変わらぶつきらぼうな言い草ではあるが、少女はイナと協力することを約束する」

「ありがとうございます!」

「名前がまだでしたね、私はイナといいます」

「自己紹介をして笑いかけたイナを少女は睨みながら口を開く」

「…ゲルダ」

「あたしはゲルダだ」

## VII Nightmare of the sunset

協力関係を結んだイナとゲルダは、謎の家から脱出するべく行動を開始する

問答無用で百足の拘束具を引きちぎったゲルダはそのままイナの百足も潰し、晴れて自由の身となった二人は暗くて湿っぽい空間を探索する

木材製の床はどこどころ黒ずんでおり、カビか生えている

壁はコンクリート性なのか硬く、しかし建築から何十年も経っているせいか風化して脆く崩れそうであった

「それにしても暗いですね…なにか灯りでもあればいいのですが」

イナがそう零すと、不意に隣から仄かな光が現れる

それはゲルダが手に持つ小さなライターの火であり、光源のない空間はその光で一気に明るく照らされる

照らされた空間は質素な四方形を型取り、物置のように乱雑に物が積まれている

「何故ライターを？」

「必要だからだよ」

「何故必要なのですか？」

「うるせえ」

ゲルダがライターに火をつけた途端、部屋の隅から微かな物音がした

そちらに視線を向けると、小さな虫達が壁や床の隙間から逃げ出していく様子が伺えた

「言っておくがオイルはそう多くない

照らし続けたらせいぜい一時間、二時間が限度だ」

「それまでに外へ出ないとすね…」

唯一、コンクリートの壁には木製の扉が設置されており、そのドア



ノブを固定するように百足が絡み付いている

「なんなんだこの虫共は…」

「あの、ドアまで燃やさないでくださいよ…?」

ゲルダはライターで百足を燃やし、百足は消し炭となって朽ちていく

そもそも百足程度で人間の手足や扉を拘束することは難しいはずなのに、何故こういった虫を使役するのだろうか

イナは考える、あの老人は…何者なのか

「おい、ブーツとしてんな

置いていくぞ」

「ああ…すみません」

扉は鈍い音をたてながら開いていく

埃臭い物置から、黴臭い廊下へと出た二人は周囲を警戒しながら歩みを進める

「ゲルダは知っていますか?あのご老人を」

「…あたしはあのババアのことは知らねー

でも、この状況から見るに…恐らく、都市伝説の「家取り」なんじゃないかと思うが」

家取り

ここ最近、世間を騒がせている都市伝説であり、その事件は全て「一家惨殺」と報道されている

しかしそれは表向きの情報であり、裏では事件に巻き込まれた一家は不気味な程に満面の笑みを浮かべ並んで息絶えているのだ

惨殺と呼ぶにはあまりにも平穩に、薄気味悪い惨状なのだとか

(しかし…まさか、あのお婆さんが「家取り」だとは思いませんでした無二は事件自体は二年前から存在していると言っていましたか…)

二年前、バスに乗り込んだ際に席を譲った記憶を嫌に覚えている裏路地であそこまで高齢になってまで生き残る人間は珍しいからだ

あの老婆は十年前程の日付の写真を「一ヶ月前に撮った」と語っていた

書籍によれば人間は老いると記憶力が低下し忘れやすい、記憶が混濁しやすいのだと読んだことがある

恐らく老婆もその類なのだろうが

老婆の家族はこの一家ではないことは確かであった

(あのお婆さんは「孫娘がいる」と言っていました)

しかし、この一家の子どものヨシユアは男の子です

過去の事件もそうですが…何故関係の無い家に入り込み、自分を一家の祖母として地位を得ているのでしょうか…

一家の様子は正に洗脳ですが、一体どうやって？

そして、何故最後は笑顔にさせて殺してしまうのでしょうか…)

イナが思考している最中、不意にゲルダが立ち止まる

「…どうしました？」

「静かに」

イナは黙って耳を澄ませる

すると、行先の廊下の奥から足音が聞こえてくる

「だ、ただダメじゃないか、客間で寝ていないと」

やけにふらふらとした足取りで、大きな影が姿を現す

それは今回の実技課題のターゲット、この一家の亭主

彼は異色の笑みを顔に貼り付け、手には木こり用の斧が握られている

頬を無理矢理釣り上げているように頬の筋肉は微かに痙攣し、手と足は左右同時に動き不自然な動作で二人へと近付いてくる

「ハッ、あそこが客間ならいい布団でも用意してもらいたいな」

「ゲルダ、少し確認したいことがあります、耳を貸してください」

「あ？」

イナがゲルダに耳打ちをしている間にも、男は斧を引き摺りながら一歩、また一歩と歩み寄る

「…あたしは別に構わないが、いいのか？アイツは試験のターゲットだぞ」

「ええ、きつともう…手遅れですから」

「このまま苦しませ続けるより、楽にしてさしあげましょう」

懊惱呻吟という言葉の通り、イナは苦しみを滲ませる表情をしながらも男へと視線を向ける

男はゆらりと斧を振りかざし、それは勢い良く二人へと降ろされる  
「責任はお前が取れよ」

ゲルダは口の中から小ぶりのナイフを取り出し、男の手首を切りつける

男は変わらず笑顔のまま…手に握っていた斧を床に落とし、刃が突き刺さる

ゲルダは刃渡りの短いナイフで的確に男の手の靭帯を損傷させた  
「チツ、得物殆ど盗られたせいでこんなもんしかねえ」

ゲルダはそのまま男の首にナイフを突き刺し、抜き、突き刺してまた抜いた

男は倒れ、その喉に複数の風穴が生まれる  
「…動かないな」

「いえ、きつと衝撃で混乱し停止しているだけでしよう  
今のうちに引き抜きます」

ゲルダとイナは男を俯せにさせ、イナは取り出したナイフで男の項から襟足部分にかけて切り開く

頸椎部分が開かれ、イナは指を差し入れる  
冷たい肉と血の感触と骨の硬さ、そこに張り付いている神経から…

蠢くモノを引き摺り出す  
血に染まり赤黒い体を動かすそれは、蛆のような形をしている細長い虫だった

「気持ち悪い…」

「これは恐らく条虫の類でしょう、私もできれば素手で触りたくありませんでした」

条虫は寄生虫の一種で、血流に乗り脳や神経にまで寄生すると言われています

「脳や神経…ってことは、こいつは寄生虫に操られてたつてことかよ」  
「恐らくは、家取りの能力でしょう」

あの老婆はどうやら虫を扱うようですし、より高知能の寄生虫を使

い一家を操る…」

イナはそのまま男の頭も切開する

頭皮の下には頭蓋骨があるのだが、男の頭蓋骨は小さな穴が幾つも開いていた

「骨すら噛み砕く程の虫…きつと中の脳もめちやくちやに食い荒らされているかもしれません」

もしくは、寄生虫の卵が大量に植え付けられているか」

イナは手に持った条虫を握り潰す

既に手遅れ、と言うのは…とつくに男は脳も体の中も寄生虫により食い散らかされ支配されていたということ

だから、イナは男を寄生虫から解放することを選んだ

「この様子じゃ、他の人間もババアの虫に操られているってことだよな」

「その可能性が高いです」

…卵が孵化する前に、燃やしてしまいたいのですが」

倒れ解剖された遺体には、何千…何万と知れない卵が体内に存在しているはず

それはいつ孵化するかもわからない為、処分したいのだが…

この家は基本木造建築であり、家そのものを燃やしてしまう可能性が高い

脱出経路を確保していない段階で家ごと燃やすのは愚策である

「跡形もなく潰すか？」

「労力がかかりすぎますし、寄生虫の卵など肉眼で確認しきれません万が一潰しきれなければ面倒なことになると思います」

「…じゃあ、薬につけるか」

なにを言っているのかと疑問に思ったが、イナは直ぐに「妙案だ」と気がつく

ゲルダは先程の物置から持ってきた薬用漂白剤…中濃度のアルカリ性液体塩素を取り出した

「ゲルダ…貴方有能ですね！」

「ふん、褒めてもなにも出ねーぞ」

イナは液体塩素が浸透しやすいよう男の全身を開き、ゲルダは解体された男の肉体に振り掛ける

全身が液体塩素漬けになったところで、イナは虫に体内を侵食された男の苦しみに同情し、せめて男の魂が安らかに逝けるよう祈りを捧げた

「おい、先進むぞ」

「はい」

そしてゲルダに呼ばれるまま、再び二人は薄暗い廊下を歩いていく

# VIII Nightmare of the sunset

廊下を歩き進めると、程なくして上へと上がる階段に辿り着いたイナとゲルダは、階段の上を見上げる

暗く狭い階段は数段先から足場に虫が蠢いており、それは黒く艶めいており長い触覚がふわふわと揺れている

「…あれは」

その姿は、イナの短い人生の中で数度見たことがある

裏路地では見かける頻度は少なくないし、チャールズ事務所の掃除の時にも遭遇したことはある

事務所のフィクサーの誰もが恐れる、都市でも最も最恐の虫…

それに対する恐怖は、イナも同様に持ち合わせていた

「……………」

「何してんだ、早く行くぞ」

イナが足踏みしている様子を気にもとめず、ゲルダは階段を登っていく

その様子を見てイナは悲鳴をあげそうになるのを必死で堪えた

黒い虫はゲルダに踏み潰されつつも何十匹も一斉に飛び回りゲルダの体にまとわりつく

ゲルダはそれに対して何ともない様子で階段を昇っていく

「げ、げげげ、ゲルダ、待ってください…」

「はあ？この程度のゴキブリ、裏路地ではよくいるだろ」

ゲルダが片手のライターを振り回すと黒い虫達は一斉に散っていき、再び足元に集まってくる

進むしかないこの道、イナは吐きそうな程の嫌悪感を腹の奥に押し留め、目を瞑り足を踏み出そうとしたその時…

目を閉じる瞬間に見えた、こちらを見守るゲルダの背後から伸びた

刃







「無二、マグナム54番!」

『妾は四次元ポケットではないぞ!』

光がなく影の生まれないこの空間だが、イナは構わず自身の足元の床に手を伸ばす

すると手は床の暗がりには吸い込まれ、確かな重量が手に握られた素早くそれを取り出しては構え、狙うはコーラルの鎌

それが蠍の腕ならば、関節は存在する

イナはコーラルの鎌がゲルダを突き刺すより早く照準を定め、引き金に指をかけ、弾を撃ち出す

放たれた弾丸は見事、コーラルの片鎌の関節に命中し関節は破壊される

威力の高いマグナム弾はその関節を吹き飛ばし、その先の鎌が床へと落ちる

「あ……ああああアアア!!」

わた、わたし、私の腕があああアアア!!」

片腕となる鎌を飛ばされた衝撃から、美しかったコーラルの顔は恐ろしい形相に変わり果て、蠍の腕の生えた背中が瞬く間に膨れ上がる

背中 of 皮膚、肉、血管が破れる音と骨の碎ける音に混じり、木の葉のような茶色の体が姿を現す

コーラルという蛹から片腕を無くした巨大な蠍が孵化し、イナを一直線に見つめる

既にコーラルの殻から抜けた為発声はしないが、劈くような悲鳴を轟かせイナ目掛けて突進してくる

「……ふう」

二年間の銃火器の特訓を元に、イナは精神を静かに安定させる

風のような心を持ち、力を込めずゆるりと拳銃を構える

蠍のもう片方の鎌がイナに向けられる、その距離僅か30cm

しかし、それが届くよりも早く、イナはその弾丸を蠍の頭を中心点へと撃ち抜いた

その衝撃から頭は破裂四散し、鎌はイナの鼻先10cmの距離で止

まり、巨体は床に倒れ伏した

「……はあ……」

実践で使うのは初めてだったのだ、イナは多大な集中力と緊張感から解放され思わず膝に手をついた

『ナイスショットだぞ、童』

「ありがとうございます、無二……」

ゲルダに聞こえないよう小さな声で会話しながら拳銃を再び影を通して無二の腹の中へと戻す

少しばかり息を整えては、イナはゲルダの元へと駆け寄った

「ゲルダ、大丈夫ですか？」

「げほっ……なんとかな……」

背中を強く壁に打ち付けられたが、ゲルダは無事な様子だった

「良かった……」

「……あんまり見てなかったけどよ……お前、銃持ってたのかよ

やっぱいいところのお嬢様なんじゃねーの？」

「それに関しては秘密ですが、ひとつ訂正させてもらいますと私は決してお嬢様なんかじゃないので」

ゲルダの手を掴み、イナはゲルダを引き上げ立ち上がらせる

そんな他愛のない会話をしながら黒い虫もいなくなった階段を登ろうと足を踏み出した

「ッ……」

「ん？ゲルダ、どうしました？やはりどこか怪我を……」

「……いや、なんでもないよ」

小さく声を漏らしたゲルダをイナは心配そうに伺うが、ゲルダは首を横に振り階段を昇っていく

今はそんなゲルダを引き止めるわけにもいかず、イナは彼女の後を続いて階段を駆け上がっていった